

豊 後 府 内 4

中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

(第3分冊)

2006

豊 後 府 内 4

中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

(第3分冊)

2006

大分県教育庁埋蔵文化財センター



中世大友府内町跡 第22次・第18次調査区（東から）

総目次

第1分冊	第1章	はじめに (坂本嘉弘)
	第2章	中世大友府内町跡第12次調査区 (坂本嘉弘・吉田寛)
	第3章	中世大友府内町跡第48次調査区 (後藤晃一)
第2分冊	第4章	中世大友府内町跡第18次西調査区 (原田昭一)
	第5章	中世大友府内町跡第18次東調査区 (友岡信彦)
	第6章	中世大友府内町跡第28次調査区 (吉田寛)
第3分冊	第7章	中世大友府内町跡第22次調査区 (槇島隆二)
	第8章	中世大友府内町跡第9次調査区 (原田昭一)
	第9章	自然科学的分析 (魯継球・平尾良光)
	第10章	総括 (坂本嘉弘・後藤晃一)
		付 図

目 次

第7章	中世大友府内町跡第22次調査区 (槇島隆二)	1
第1節	調査の概要	1
第2節	遺構と遺物	1
1.	遺構の概要と基本順序	1
2.	道路状遺構と溝状遺構	9
3.	土坑	16
4.	井戸	34
5.	その他の遺構	52
6.	包含層・整地層・ピット出土遺物	65
第3節	小 結	85
第8章	中世大友府内町跡第9次調査区 (原田昭一)	89
第1節	調査の概要	89
第2節	遺構と遺物	89
1.	Ⅱ区	89
a.	溝	97
b.	土坑	100
c.	井戸	121
d.	その他の遺構	122
e.	ピット	130
f.	包含層	131
2.	Ⅲ区	139
a.	溝	139
b.	土坑	150
c.	井戸	166
d.	その他の遺構	176

e. ビット	178
f. 包含層	187
第3節 小結	204
第9章 自然科学的分析	205
中世大友府内町跡出土金属製品・ガラス玉の鉛同位体比分析 (魯慶球・平尾良光)	205
第10章 総括	213
第1節 中世大友府内町跡出土のメダイ様金属製品及びガラス玉について (後藤晃一)	213
第2節 豊後「府内」桜町の変遷 (坂本嘉弘)	220
遺物観察表	227
写真図版	257
付 図	

図 版 目 次

第7章 中世大友府内町跡第22次調査区

第1図 第22次調査区の位置	1	第2図 第22次調査区道構配置図	2
第3図 第22次調査区北壁土層図	5-6	第4図 第22次調査区東壁土層図	7-8
第5図 第22次調査区西壁土層図	7-8	第6図 SF230変遷	10
第7図 SF230出土遺物実測図	11	第8図 SD009出土遺物実測図	12
第9図 SD017出土遺物実測図	13	第10図 SD019出土遺物実測図	14
第11図 SD020出土遺物実測図	14	第12図 SD202実測図	15
第13図 SD202出土遺物実測図	15	第14図 SK008実測図	16
第15図 SK008出土遺物実測図①	17	第16図 SK008出土遺物実測図②	18
第17図 SK011実測図	18	第18図 SK013実測図	18
第19図 SK013出土遺物実測図	18	第20図 SK015・SK016実測図	19
第21図 SK016出土遺物実測図	19	第22図 SK018・SK028実測図	19
第23図 SK018出土遺物実測図	20	第24図 SK022実測図	21
第25図 SK022出土遺物実測図	21	第26図 SK024実測図	22
第27図 SK024出土遺物実測図	22	第28図 SK025実測図	23
第29図 SK025出土遺物実測図	23	第30図 SK029実測図	23
第31図 SK029出土遺物実測図	23	第32図 SK040実測図	24
第33図 SK040出土遺物実測図	24	第34図 SK069実測図	25
第35図 SK069出土遺物実測図	25	第36図 SK078実測図	25
第37図 SK078出土遺物実測図	26	第38図 SK101実測図	26
第39図 SK101出土遺物実測図	26	第40図 SK109実測図	26
第41図 SK109出土遺物実測図	27	第42図 SK136実測図	27
第43図 SK136出土遺物実測図	27	第44図 SK175実測図	28
第45図 SK175出土遺物実測図	28	第46図 SK200実測図	28
第47図 SK200出土遺物実測図	29	第48図 SK213実測図	29
第49図 SK213出土遺物実測図	30	第50図 SK214実測図	30

第51図	SK214出土遺物実測図	30	第52図	SK243実測図	30
第53図	SK243出土遺物実測図	31	第54図	SK244実測図	31
第55図	SK244出土遺物実測図	31	第56図	SK100実測図	31
第57図	SK125実測図	32	第58図	SK135実測図	32
第59図	SK233実測図	32	第60図	SK030実測図	33
第61図	SK031実測図	33	第62図	SK087実測図	33
第63図	井戸	34	第64図	SE007実測図	35
第65図	SE007出土遺物実測図	36	第66図	SE010実測図	37
第67図	SE010出土遺物実測図①	38	第68図	SE010出土遺物実測図②	39
第69図	SE010出土遺物実測図③	40	第70図	SE010出土遺物実測図④	41
第71図	SE012実測図	42	第72図	SE012出土遺物実測図	43
第73図	SE021実測図	44	第74図	SE021出土遺物実測図①	46
第75図	SE021出土遺物実測図②	47	第76図	SE021出土遺物実測図③	48
第77図	SE021出土遺物実測図④	49	第78図	SE201実測図	50
第79図	SE201出土遺物実測図	50	第80図	SE242実測図	51
第81図	SX041出土遺物実測図①	53	第82図	SX041出土遺物実測図②	54
第83図	SX041出土遺物実測図③	55	第84図	SX01出土遺物実測図①	56
第85図	SX01出土遺物実測図②	57	第86図	SX01出土遺物実測図③	58
第87図	SX004出土遺物実測図	59	第88図	SX005出土遺物実測図	59
第89図	SX006出土遺物実測図	61	第90図	SP160実測図	62
第91図	SP160出土遺物実測図	62	第92図	SB01実測図	62
第93図	SB02実測図	63	第94図	SB03実測図	63
第95図	SB04実測図	63	第96図	SB05実測図	64
第97図	SB06実測図	64	第98図	SB07実測図	64
第99図	SB08実測図	64	第100図	包含層・整地層出土遺物実測図①	66
第101図	包含層・整地層出土遺物実測図②	67	第102図	包含層・整地層出土遺物実測図③	68
第103図	包含層・整地層出土遺物実測図④	69	第104図	包含層・整地層出土遺物実測図⑤	70
第105図	包含層・整地層出土遺物実測図⑥	71	第106図	包含層・整地層出土遺物実測図⑦	72
第107図	包含層・整地層出土遺物実測図⑧	73	第108図	包含層・整地層出土遺物実測図⑨	75
第109図	包含層・整地層出土遺物実測図⑩	76	第110図	包含層・整地層出土遺物実測図⑪	77
第111図	包含層・整地層出土遺物実測図⑫	79	第112図	柱穴・ピット出土遺物実測図①	80
第113図	柱穴・ピット出土遺物実測図②	81	第114図	柱穴・ピット出土遺物実測図③	82
第115図	包含層・整地層出土遺物実測図(銭貨①)	83	第116図	包含層・整地層出土遺物実測図(銭貨②)	84
第117図	トレンチ出土遺物実測図	84	第118図	第22次調査区遺構変遷図①	86
第119図	第22次調査区遺構変遷図②	87			

第8章 中世大友府内町跡第9次調査区の調査

第120図	第9次調査区Ⅱ・Ⅲ区の位置(1/800)	89	第121図	第9次調査区Ⅱ区遺構配置図 (第1段階 16世紀前葉)	90
第122図	第9次調査区Ⅱ区遺構配置図 (第2段階 16世紀後葉～末葉(1))	91	第123図	第9次調査区Ⅱ区遺構配置図 (第2段階 16世紀後葉～末葉(2))	92

第124図	第9次調査区Ⅱ区 トレンチ土層断面図(1/50) …… 95・96	第125図	Ⅱ区SD001-1・2・3土層断面図(1/20) …… 97
第126図	Ⅱ区SD001-1・2出土遺物実測図(1/3) …… 97	第127図	Ⅱ区SD001-3出土遺物実測図(1/3) …… 98
第128図	Ⅱ区SD001-1・2出土土銭貨(1/1) …… 98	第129図	Ⅱ区SD002出土遺物実測図(1/3) …… 99
第130図	Ⅱ区SD002下層出土土銭貨(1/1) …… 99	第131図	Ⅱ区SK003実測図(1/30) …… 100
第132図	Ⅱ区SK003出土遺物実測図(1/3) …… 101	第133図	Ⅱ区SK004実測図(1/30) …… 102
第134図	Ⅱ区SK004出土遺物実測図①(1/3) …… 103	第135図	Ⅱ区SK004出土遺物実測図②(1/4) …… 103
第136図	Ⅱ区SK004出土遺物実測図③(1/3) …… 104	第137図	Ⅱ区SK005実測図(1/30) …… 105
第138図	Ⅱ区SK005出土遺物実測図(1/3) …… 105	第139図	Ⅱ区SK006出土遺物実測図(1/3) …… 106
第140図	Ⅱ区SK007実測図(1/30) …… 106	第141図	Ⅱ区SK007出土遺物実測図(1/3) …… 106
第142図	Ⅱ区SK008実測図(1/30) …… 107	第143図	Ⅱ区SK008出土遺物実測図(1/3) …… 107
第144図	Ⅱ区SK009実測図(1/30) …… 108	第145図	Ⅱ区SK009出土遺物実測図(1/3) …… 108
第146図	Ⅱ区SK010実測図(1/30) …… 108	第147図	Ⅱ区SK010出土遺物実測図(1/3) …… 109
第148図	Ⅱ区SK011実測図(1/30) …… 110	第149図	Ⅱ区SK011出土遺物実測図(1/3) …… 110
第150図	Ⅱ区SK012実測図(1/30) …… 111	第151図	Ⅱ区SK012出土遺物実測図(1/3) …… 111
第152図	Ⅱ区SK013実測図(1/30) …… 112	第153図	Ⅱ区SK013出土遺物実測図(1/3) …… 112
第154図	Ⅱ区SK014実測図(1/30) …… 112	第155図	Ⅱ区SK014出土遺物実測図(1/3) …… 112
第156図	Ⅱ区SK017出土遺物実測図(1/3) …… 113	第157図	Ⅱ区SK018出土遺物実測図(1/3) …… 114
第158図	Ⅱ区SK019出土遺物実測図(1/3) …… 114	第159図	Ⅱ区SK022・023実測図(1/30) …… 115
第160図	Ⅱ区SK022出土遺物実測図(1/3) …… 116	第161図	Ⅱ区SK023出土遺物実測図(1/3) …… 116
第162図	Ⅱ区SK023出土土銭貨(1/1) …… 116	第163図	Ⅱ区SK024実測図(1/30) …… 117
第164図	Ⅱ区SK024出土遺物実測図(1/3) …… 117	第165図	Ⅱ区SK025出土遺物実測図(1/3) …… 118
第166図	Ⅱ区SK026出土遺物実測図(1/3) …… 118	第167図	Ⅱ区SK027実測図(1/10) …… 118
第168図	Ⅱ区SK027出土遺物実測図(1/3) …… 119	第169図	Ⅱ区SE028土層断面実測図(1/30) …… 119
第170図	Ⅱ区SE028出土遺物実測図①(1/3) …… 120	第171図	Ⅱ区SE028出土遺物実測図②(1/8) …… 121
第172図	Ⅱ区SE028出土土銭貨(1/1) …… 122	第173図	Ⅱ区SE029出土遺物実測図(1/3) …… 122
第174図	Ⅱ区SX030出土遺物実測図①(1/3) …… 123	第175図	Ⅱ区SX030出土遺物実測図②(1/3) …… 124
第176図	Ⅱ区SX030出土遺物実測図③(1/6) …… 125	第177図	Ⅱ区SX030出土遺物実測図④(1/3) …… 125
第178図	Ⅱ区SX031出土遺物実測図(1/3) …… 126	第179図	Ⅱ区SX032下層出土遺物実測図(1/3) …… 126
第180図	Ⅱ区SX032出土遺物実測図(1/3) …… 127	第181図	Ⅱ区SX033実測図(1/50) …… 127
第182図	Ⅱ区SX033出土遺物実測図(1/3) …… 128	第183図	Ⅱ区SX033出土土銭貨(1/1) …… 129
第184図	Ⅱ区SX034実測図(1/30) …… 129	第185図	Ⅱ区ビット出土遺物実測図①(1/3) …… 130
第186図	Ⅱ区ビット出土遺物実測図②(1/5) …… 130	第187図	Ⅱ区47層出土遺物実測図(1/3) …… 131
第188図	Ⅱ区45層出土遺物実測図(1/3) …… 132	第189図	Ⅱ区9・10・14・42層出土遺物実測図①(1/3) …… 132
第190図	Ⅱ区9・10・14・42層出土遺物実測図②(1/6) …… 133	第191図	Ⅱ区7層出土遺物実測図①(1/3) …… 134
第192図	Ⅱ区7層出土遺物実測図②(1/3) …… 135	第193図	Ⅱ区出土遺物実測図①(1/3) …… 136
第194図	Ⅱ区出土遺物実測図②(1/3) …… 137	第195図	Ⅱ区出土土銭貨(1/1) …… 138
第196図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第1段階 14世紀) …… 140	第197図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第2段階 15世紀末葉～16世紀前葉) …… 141
第198図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第3段階 16世紀中葉～後葉) …… 142	第199図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第4段階 16世紀後葉～末葉) …… 143

第200図	第9次調査区Ⅲ区道構配置図 (第5段階 近世以降)	144	第201図	第9次調査区Ⅲ区トレンチ 土層断面図 (1/80)	147-148
第202	Ⅲ区SD001出土遺物実測図 (1/3)	149	第203図	Ⅲ区SD002出土遺物実測図 (1/3)	149
第204図	Ⅲ区SD004実測図 (1/30)	150	第206図	Ⅲ区SD004出土遺物実測図 (1/3)	150
第206図	Ⅲ区SD005出土遺物実測図 (1/3)	151	第207図	Ⅲ区SD006出土遺物実測図 (1/3)	151
第208図	Ⅲ区SK009出土遺物実測図 (1/3)	151	第209図	Ⅲ区SK010出土遺物実測図 (1/3)	152
第210図	Ⅲ区SK011実測図 (1/30)	152	第211図	Ⅲ区SK011出土遺物実測図 (1/3)	153
第212図	Ⅲ区SK012実測図 (1/30)	153	第213図	Ⅲ区SK012出土遺物実測図 (1/3)	153
第214図	Ⅲ区SK013実測図 (1/30)	154	第215図	Ⅲ区SK013出土遺物実測図 (1/3)	154
第216図	Ⅲ区SK014出土遺物実測図 (1/3)	155	第217図	Ⅲ区SK015実測図 (1/30)	155
第218図	Ⅲ区SK016出土遺物実測図 (1/3)	155	第219図	Ⅲ区SK017出土遺物実測図① (1/3) ..	156
第220図	Ⅲ区SK017出土遺物実測図 (1/4)	156	第221図	Ⅲ区SK019・SK020実測図 (1/30)	156
第222図	Ⅲ区SK019出土遺物実測図 (1/3)	157	第223図	Ⅲ区SK020出土遺物実測図 (1/3)	158
第224図	Ⅲ区SK021実測図 (1/30)	158	第225図	Ⅲ区SK021出土遺物実測図① (1/3) ..	159
第226図	Ⅲ区SK021出土遺物実測図② (1/3) ..	160	第227図	Ⅲ区SK022出土遺物実測図 (1/3)	161
第228図	Ⅲ区SK023実測図 (1/30)	161	第229図	Ⅲ区SK023出土遺物実測図 (1/3)	162
第230図	Ⅲ区SK024実測図 (1/30)	163	第231図	Ⅲ区SK024出土遺物実測図 (1/3)	163
第232図	Ⅲ区SK025出土遺物実測図 (1/3)	163	第233図	Ⅲ区SK026実測図 (1/30)	164
第234図	Ⅲ区SK026出土遺物実測図 (1/3)	164	第235図	Ⅲ区SK027実測図 (1/30)	164
第236図	Ⅲ区SK027出土遺物実測図 (1/3)	165	第237図	Ⅲ区SK028実測図 (1/30)	165
第238図	Ⅲ区SK028出土遺物実測図 (1/3)	166	第239図	Ⅲ区SK029実測図 (1/30)	167-168
第240図	Ⅲ区SK029出土遺物実測図① (1/3) ..	169	第241図	Ⅲ区SK029出土遺物実測図② (1/6) ..	170
第242図	Ⅲ区SK029出土遺物実測図③ (1/3) ..	171	第243図	Ⅲ区SK030実測図 (1/30)	172
第244図	Ⅲ区SK030出土遺物実測図 (1/3)	173	第245図	Ⅲ区SE031実測図 (1/30)	174
第246図	Ⅲ区SE031井戸枠復元図	175	第247図	Ⅲ区SE031出土遺物実測図 (1/3)	175
第248図	Ⅲ区SE032実測図 (1/30)	176	第249図	Ⅲ区SE032出土遺物実測図 (1/3)	177
第250図	Ⅲ区SE033井筒内出土遺物実測図 (1/3) ..	177	第251図	Ⅲ区SE033掘方出土遺物実測図 (1/3) ..	178
第252図	Ⅲ区SE033実測図 (1/30)	179-180	第253図	Ⅲ区SE033出土遺物実測図① (1/3) ..	181
第254図	Ⅲ区SE033出土遺物実測図② (1/3) ..	182	第255図	Ⅲ区SE033出土遺物実測図③ (1/3) ..	183
第256図	Ⅲ区SX034実測図 (1/30)	183	第257図	Ⅲ区SX034出土遺物実測図 (1/3)	184
第258図	Ⅲ区SX035実測図 (1/60)	185	第259図	Ⅲ区SX035出土遺物実測図 (1/3)	186
第260図	Ⅲ区SX035下層出土遺物実測図 (1/3) ..	187	第261図	Ⅲ区SX035出土銭貨 (1/1)	188
第262図	Ⅲ区ピット出土遺物実測図① (1/3) ..	188	第263図	Ⅲ区ピット出土遺物実測図② (1/3) ..	189
第264図	Ⅲ区SP044出土遺物実測図 (1/1)	190	第265図	Ⅲ区51層出土遺物実測図 (1/3)	190
第266図	Ⅲ区48層出土遺物実測図 (1/3)	190	第267図	Ⅲ区36~39層出土遺物実測図 (1/3) ..	191
第268図	Ⅲ区34層出土遺物実測図 (1/3)	192	第269図	Ⅲ区19~21層出土遺物実測図 (1/3) ..	192
第270図	Ⅲ区25層出土遺物実測図① (1/3)	193	第271図	Ⅲ区25層出土遺物実測図② (1/3)	194
第272図	Ⅲ区25層出土遺物実測図③ (1/1)	195	第273図	Ⅲ区10~25層出土遺物実測図① (1/3) ..	196
第274図	Ⅲ区10~25層出土遺物実測図② (1/3)	197	第275図	Ⅲ区7~25層出土遺物実測図 (1/3)	198
第276図	Ⅲ区7層出土遺物実測図① (1/3)	199	第277図	Ⅲ区7層出土遺物実測図② (1/3)	200
第278図	Ⅲ区出土遺物実測図① (1/3)	201	第279図	Ⅲ区出土遺物実測図② (1/3)	202

第280図	Ⅲ区出土銭貨(1/1)	203	第281図	大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位対比 (²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁷ Pb- ²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb)	208
第282図	大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位対比 (²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁷ Pb- ²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb)	208	第283図	大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位対比 (²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁷ Pb- ²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb)-図1の拡大図	209
第284図	大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位対比 (²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁷ Pb- ²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb)-図2の拡大図	209	第285図	蛍光X線スペクトルと化学組成①	210
第286図	蛍光X線スペクトルと化学組成②	211	第287図	蛍光X線スペクトルと化学組成③	212
第288図	分析リスト	212	第289図	メダイ様金属製品・ガラス玉実測図(1/1)	218
第290図	メダイ様金属製品・出土分布図	219	第291図	「府内」桜町遺構配置図(1/600)	221

目 次

第7章 中世大友府内町跡第22次調査区

第1表	遺構一覧表①	3	第2表	遺構一覧表②	4
-----	--------------	---	-----	--------------	---

第8章 中世大友府内町跡第9次調査区

第3表	Ⅱ区遺構一覧表	93	第4表	Ⅲ区遺構一覧表①	145
第5表	Ⅲ区遺構一覧表②	146			

第9章 自然科学的分析

第6表	大分市の中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの記載	205	第7表	大分市の中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの化学組成	206
第8表	大分市の中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの鉛同位対比値	207			

遺物観察表目次

遺物観察表1

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類①)	227
遺物観察表3	
第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類③)	229
遺物観察表5	
第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑤)	231
遺物観察表7	
第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑦)	233
遺物観察表9	
第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑨)	235

遺物観察表2

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類②)	228
遺物観察表4	
第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類④)	230
遺物観察表6	
第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑥)	232
遺物観察表8	
第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑧)	234
遺物観察表10	
第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑩)	236

遺物観察表11	
第22次調査区遺物観察表（土器・陶磁器類①）	
第22次調査区遺物観察表（土製品）	
第22次調査区遺物観察表（石製品）	237
遺物観察表13	
第22次調査区遺物観察表（銭貨）	239
遺物観察表15	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類②）	241
遺物観察表17	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類③）	243
遺物観察表19	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類④）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土製品）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（石製品）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（金属製品）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（瓦）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（銭貨）	245
遺物観察表21	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑤）	247
遺物観察表23	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑥）	249
遺物観察表25	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑦）	251
遺物観察表27	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（石製品）	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（金属製品）	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（瓦）	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（その他）	253

遺物観察表12	
第22次調査区遺物観察表（金属製品）	
第22次調査区遺物観察表（瓦）	
第22次調査区遺物観察表（その他）	238
遺物観察表14	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類①）	240
遺物観察表16	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類③）	242
遺物観察表18	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑤）	244
遺物観察表20	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類①）	246
遺物観察表22	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類③）	248
遺物観察表24	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑤）	250
遺物観察表26	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑦）	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土製品）	252
遺物観察表28	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（銭貨）	254

写真図版目次

写真図版 1

第22次調査区 北から	
第22次調査区 東から	
SD202 SD202土層	
SK008 SK013	
SK018 SK024	257

写真図版 2

SK029 SK040	
SK069 SK100	
SK109 SK175	
SK200 SK243	258

写真図版 3

SE007 (増埜 (取瓶) 出土状況	
SE007	
SE010 SE012	
SE021・SE242 SE021・SE242完掘	
SE242井筒 SE201	259

写真図版 5

SK008出土銅製柙約	
SK040出土布	
SE007出土埜埜 (取瓶)	
SE012出土鉛製品	
SX006出土油煙墨	261

写真図版 7

包含層出土銅製品	
包含層出土ガラス・水晶	
トレンチ出土遺物	263

写真図版 9

Ⅱ区SD001-1 (西から)、Ⅱ区SK003	
Ⅱ区SK003完掘状態、Ⅱ区SK004	
Ⅱ区SK004完掘状態、Ⅱ区SK005	265

写真図版11

Ⅱ区SK013・SK014、Ⅱ区SK013	
Ⅱ区SK014、Ⅱ区SK022	
Ⅱ区SK023、Ⅱ区SK022・SK023完掘状態	
Ⅱ区SK024、Ⅱ区SE028	267

写真図版13

Ⅲ区完掘状態全景 (東から)	
Ⅲ区SK011	
Ⅲ区SK012、Ⅲ区SK013	
Ⅲ区SK015、Ⅲ区SK019・SK020	269

写真図版15

Ⅲ区SK029 (西から)	
Ⅲ区SK029完掘状態 (北から)	
Ⅲ区SK030、Ⅲ区SE031	
Ⅲ区SE032	
Ⅲ区SE033集石検出状態 (北西から)	
Ⅲ区SE033集石検出状態 (北から)	
Ⅲ区SE033井筒内遺物出土状態	271

写真図版 4

SE201 SP160	
SX004 SX005	
SX006 SX006近景	
SX041 SX01	260

写真図版 6

分銅	
包含層出土埜埜	262

写真図版 8

Ⅱ区全景 (北から)、Ⅱ区全景 (西から)	
Ⅱ区完掘状態全景 (東から)	
Ⅱ区完掘状態全景 (西から)	
Ⅱ区完掘状態全景 (北から)	
Ⅱ区SD001-3 (西から)	264

写真図版10

Ⅱ区SK005完掘状態、Ⅱ区SK007	
Ⅱ区SK008、Ⅱ区SK009	
Ⅱ区SK010、Ⅱ区SK011	266

写真図版12

Ⅱ区SE028、Ⅱ区SE029	
Ⅱ区SX030、Ⅱ区SX033	
Ⅱ区SX033、Ⅱ区SX033完掘状態	
Ⅲ区全景 (東から)、Ⅲ区完掘状態全景 (東から)	268

写真図版14

Ⅲ区SK021、Ⅲ区SK021完掘状態	
Ⅲ区SK023、Ⅲ区SK023完掘状態	
Ⅲ区SK024、Ⅲ区SK026	
Ⅲ区SK027、Ⅲ区SK029 (北から)	270

写真図版16

Ⅲ区SE033半葬状態 (南から)	
Ⅲ区SE033完掘状態 (北から)	
Ⅲ区SX034、Ⅲ区SX035	
Ⅱ区SD001-1・2出土遺物	
Ⅱ区SD002出土遺物、Ⅱ区SK004出土遺物	
Ⅱ区SK005出土遺物、Ⅱ区SK006出土遺物	272

写真图版17

- Ⅱ区SK013出土遗物、Ⅱ区SK018出土遗物
- Ⅱ区SE028出土遗物、Ⅱ区SX030出土遗物
- Ⅱ区47层出土遗物、Ⅱ区45层出土遗物 …… 273

写真图版19

- Ⅲ区SK021出土遗物、Ⅲ区SK023出土遗物
- Ⅲ区SX034出土遗物、Ⅲ区SK029出土遗物
- Ⅲ区SP044出土遗物、Ⅲ区19~21层出土遗物 …… 275

写真图版21

- Ⅲ区7层出土遗物、Ⅲ区出土遗物 …… 277

写真图版18

- Ⅱ区7层出土遗物、Ⅱ区出土遗物 …… 274

写真图版20

- Ⅲ区25层出土遗物
- Ⅲ区10~25层出土遗物
- Ⅲ区7层出土遗物 …… 276

第7章 中世大友府内町跡第22次調査区

第1節 調査の概要

大友氏館
府内古園

中世大友府内町跡第22次調査区は、大分県大分市錦町3丁目に所在し、標高約4.0mの沖積低地上に立地する。1987年に大分市史編纂委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は「大友氏館跡」の東側に第2南北街路を挟んで隣接しており、名ヶ小路と御所小路に挟まれた「桜町」の一角に相当する地点である。

本章で報告する第22次調査区については1993年発行の『大分県遺跡地図』において、「中世大友城下町」の名称で登録されていたことや平成12(2000)年度以降継続されている一般国道10号古国府拡幅事業に伴う周辺地域の発掘調査で、戦国時代の遺構・遺物の存在が確認されていたことから、平成14(2002)年度に発掘調査(本調査)を行った。本調査区は南に位置する9次調査区と隣接し、北側の28次調査区とは道路を挟んで隣接する(第1図)。調査期間は2002(平成14)年7月から2003(平成15)年3月まで8ヶ月間実施し、調査面積は約476㎡である。

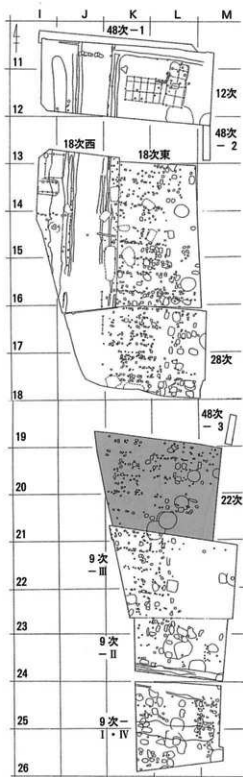
第2節 遺構と遺物

1. 遺構の概要と基本層序

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へI～M、北から南へ1～78の番号を付し、数字とアルファベットの組み合わせで、各々の区画を呼称することにした(J19区、M21区など)。本章で報告する第22次調査区は東西J～M区、南北19～21区に相当する(第2図)。

本調査区では弥生時代から近世にいたる各時代の遺物が出土しているが、遺構が主体的に検出される時期は16世紀後半の戦国時代である。

本調査区では旧表土上に近年の造成による置土が0.6～0.9mほど堆積しており、この造成土の下位には近世から現代の所産と思われる水田層が0.5mほど堆積する。発掘調査ではこの水田層より上位を大型重機によって除去し、それより下位の遺物包含層については、発掘作業員を投入して



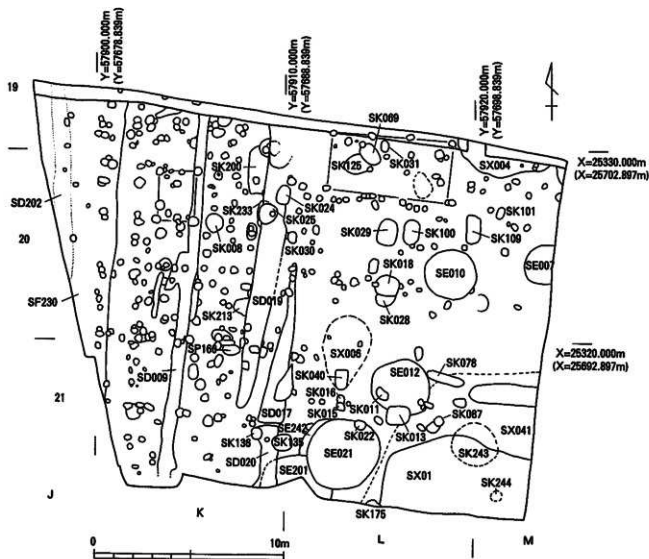
第1図 第22次調査区の位置(1/800)

手掘りによる掘り下げを行った。

本章で検討する第22次調査区の北側では平成13年11月～平成14年3月、平成14年4月～平成15年3月に第18次調査、平成15年5月～12月に第28次調査が行われているが、そこでは「大友氏館」の東を走る第2南北街路が検出されている。当調査区でもそれに続く道路状遺構を調査区西側で検出している。さらに、道路状遺構の下層には道路構築以前に存在した溝状遺構を検出した。また、道路状遺構の東側には、掘立柱建物・土坑・井戸・土器溜まり・柱穴等があり、その大半が16世紀代の戦国時代に比定される。また、調査区南東部では第9次調査区にもみられる16世紀後葉代と思われる掘り込み遺構を検出している。

各々の遺構の配置と土層の堆積状況については第2～5図を参照されたい。また、本報告書で使用する遺構番号と発掘調査時に使用した遺構名称が異なるため、第1・2表で提示した遺構一覧表で整理を行っている。

以下、遺構と出土遺物の詳細を報告する。



第2図 大友22次調査区遺構配置図 (1/200)

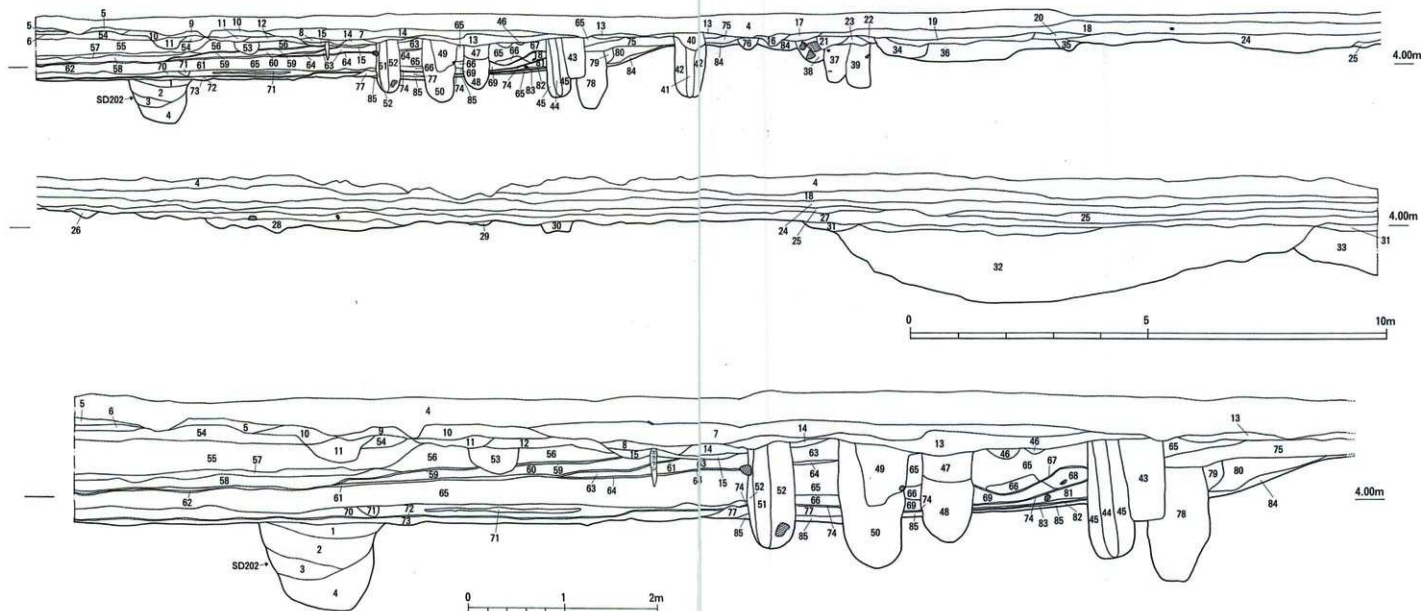
第1表 遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項	掲載頁
SF230	S230	道路状遺構	K19-J21	16世紀中葉～末葉	第二南北街路	9
SD009	S009	溝状遺構	K20-K21	16世紀末		11
SD017	S017	溝状遺構	L20-K21	近世		13
SD019	S019	溝状遺構	K20-21	近世		14
SD020	S020	溝状遺構	K21	近世		13
SD202	S202	溝状遺構	J19-J20	16中葉以前	遺跡・第1南北街路の溝跡(図 貝土壇から左・番(中世))	15
SK008	S008	土坑	K20	16世紀後葉		16
SK011	S011	土坑	L21	16世紀末葉	S012を切る	18
SK013	S013	土坑	L21	16世紀末葉以降	S012を切る	18
SK015	S015	土坑	L21	16世紀後葉以降	S016を切る	19
SK016	S016	土坑	L21	16世紀後葉以降		19
SK018	S018	土坑	L20	16世紀末葉	SK028を切る	19
SK022	S022	土坑	L21	16世紀末葉?	S021を切る	21
SK024	S024	土坑	K20-L20	16世紀後葉?		22
SK025	S025	土坑	K20	16世紀後葉?		23
SK028	S028	土坑	L20	不明		19
SK029	S029	土坑	L20	16世紀後葉～末葉		23
SK030	S030	土坑	L20	不明		33
SK031	S031	土坑	L19	不明		33
SK040	S040	土坑	L21	16世紀後葉～末葉	二つの土坑が重複・SX006の上位遺構 布状の遺物	24
SK069	S069	土坑	L19-L20	16世紀後葉	SK125を切る	25
SK078	S078	土坑	L21	16世紀後葉		25
SK087	S087	土坑	L20	不明		30
SK100	S100	土坑	L20	不明		31
SK101	S101	土坑	M20	不明		26
SK109	S109	土坑	L20-M20	16世紀後葉		26
SK125	S125	土坑	L20北	16世紀後葉以前	SK069やSP033に切られる	31
SK135	S135	土坑	K21-L21	近世		32
SK136	S136	土坑	K21	近世		27
SK175	S175	土坑	L21	16世紀後葉		28
SK200	S200	土坑	K20	16世紀後葉～末葉		28
SK213	S213	土坑	K20	16世紀後葉		29
SK214	S214	土坑	K20	16世紀後葉～末葉		30
SK233	S233	土坑	K20	不明		32
SK243	S243	土坑	L21	16世紀中葉～後葉		30
SK244	S244	土坑	L21	16世紀中葉～後葉		31
SE007	S007	井戸	M20	16世紀中葉～後葉	埴塙・漆器椀	35
SE010	S010	井戸	L20	16世紀後葉～末葉		36
SE012	S012	井戸	L21	16世紀後葉～末葉	小柄・鉛製品	42
SE021	S021	井戸	L21	16世紀中葉～末葉	二つ以上の井戸が重複	43
SE201	S201	井戸	K21-L21	14～15世紀?	方形枠	78
SE242	S242	井戸	L21	14世紀代?	SE021とSE201に切られる(範囲不明)	79
SX041	S041	掘込遺構	L21-M21	16世紀後葉		52
SX01	SX01	整地層	M20-M21	16世紀中葉～後葉	調査区東南部・SX041と重複・常滑	52
SX004	S004	土師器溜まり	L19-M20	16世紀中葉～後葉	土師器溜まり	58
SX005	S005	土師器溜まり	L20	16世紀中葉～後葉	土師器溜まり	59
SX006	S006	土師器溜まり	L20-L21	16世紀中葉～後葉	油煙墨	60
SX236	S236	土師器溜まり	M20	16世紀中葉～後葉	土師器溜まり	60
SP160	S160	ビット	K21	16世紀代	大型ビット・円盤による根柢(異型分層(長軸&))	62
SP001	S001	ビット	L19	16世紀末葉?	SB01 礎盤をもつ柱穴	62
SP064	S064	ビット	L19	16世紀末葉?	SB01	62
SP066	S066	ビット	L19	16世紀末葉?	SB01	62
SP117	S117	ビット	L19	16世紀末葉?	SB01	62
SP052	S052	ビット	L20	16世紀末葉?	SB01	62
SP046	S046	ビット	L20	16世紀末葉?	SB01	62
SP047	S047	ビット	L20	16世紀末葉?	SB01	62
SP060	S060	ビット	L20	16世紀末葉?	SB01	62
SP079	S079	ビット	L21	16世紀末葉?	SB01	62

第2節 遺構と遺物

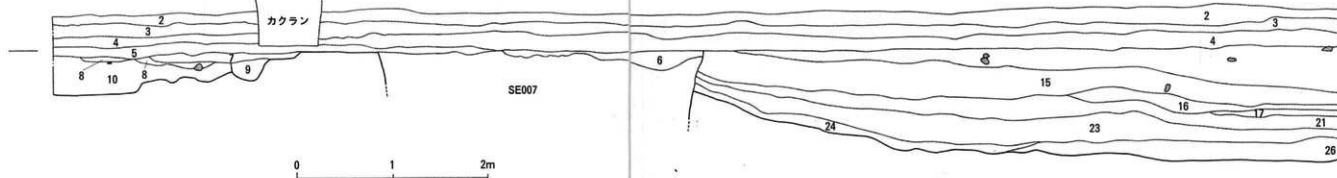
第2表 遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項	掲載頁
SP099	S099	ビット	K20	16世紀末葉?	SB02	63
SP106	S106	ビット	K20	16世紀末葉?	SB02	63
SP096	S096	ビット	K20	16世紀末葉?	SB02	63
SP023	S023	ビット	K20	16世紀末葉?	SB02	63
SP145	S145	ビット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP146	S146	ビット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP147	S147	ビット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP179	S179	ビット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP192	S192	ビット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP193	S193	ビット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP144	S144	ビット	K19	16世紀末葉?	SB04	63
SP194	S194	ビット	K19	16世紀末葉?	SB04	63
SP172	S172	ビット	K19	16世紀末葉?	SB04	63
SP173	S173	ビット	K19	16世紀末葉?	SB04	63
SP196	S196	ビット	K20	16世紀末葉?	SB05	63
SP073	S073	ビット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP134	S134	ビット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP107	S107	ビット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP133	S133	ビット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP115	S115	ビット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP089	S089	ビット	K20	16世紀末葉?	SB06	64
SP219	S219	ビット	K20	16世紀末葉?	SB06	64
SP095	S095	ビット	K20-21	16世紀末葉?	SB07	64
SP140	S140	ビット	K20-21	16世紀末葉?	SB07	64
SP155	S155	ビット	K21	16世紀末葉?	SB07	64
SP210	S210	ビット	K21	16世紀末葉?	SB07	64
SP191	S191	ビット	K21	16世紀末葉?	SB07	64
SP150	S150	ビット	K21	16世紀末葉?	SB08	64
SP162	S162	ビット	K21	16世紀末葉?	SB08	64
SP223	S223	ビット	K20	16世紀末葉?	SB08	64
SP239	S239	ビット	K21	16世紀末葉?	SB08	64
SP039	S039	ビット	L20	16世紀末葉?	遺物のみ	64
SP043	S043	ビット	L20		遺物のみ	64
SP086	S086	ビット	L20		遺物のみ	64
SP110	S110	ビット	K20		遺物のみ	64
SP112	S112	ビット	K20		遺物のみ	64
SP113	S113	ビット	K20		遺物のみ	64
SP118	S118	ビット	K20		遺物のみ	64
SP120	S120	ビット	K20		遺物のみ	64
SP121	S121	ビット	K20		遺物のみ	64
SP129	S129	ビット	M20		遺物のみ	64
SP137	S137	ビット	L21		遺物のみ	64
SP141	S141	ビット	K20		遺物のみ	64
SP142	S142	ビット	K20		遺物のみ	64
SP152	S152	ビット	L21		遺物のみ	64
SP154	S154	ビット	K20		遺物のみ	64
SP181	S181	ビット	K20		遺物のみ	64
SP186	S186	ビット	K・L21		遺物のみ	64
SP199	S199	ビット	K21		遺物のみ	64
SP240	S240	ビット	K21		遺物のみ	64
SP241	S241	ビット	K20-21	16世紀末葉?	遺物のみ	64
SP245	S245	ビット	K20		遺物のみ	64
SP247	S247	ビット	K19		遺物のみ	64
SP248	S248	ビット	K19		遺物のみ	64
SP251	S251	ビット	K19		遺物のみ	64
SP254	S254	ビット	K20		遺物のみ	64
SP258	S258	ビット	K20		遺物のみ	64
SP260	S260	ビット	K21		遺物のみ	64
SP271	S271	ビット	K21		遺物のみ	64
SP277	S277	ビット	K19		遺物のみ	64
SP278	S278	ビット	J19		遺物のみ	64
SP284	S284	ビット	K21		遺物のみ	64
SP290	S290	ビット	K20		遺物のみ	64
SP002	S002	ビット	L20		遺物のみ	64



- | | | | |
|---|---|--|---|
| <p>4 暗褐色シルト質土 焼土・白色粒を含み、やや締まる</p> <p>5 灰黄色シルト質土 炭分が沈着し、よじりまる</p> <p>6 灰黄色シルト質土 わずかに炭化物や焼土を含み、よじりまる</p> <p>7 灰褐色シルト質土 炭土を少量含む</p> <p>8 暗灰色粘質土 焼土や炭化物を多く含む、ややしまりない、わずかに砂が混ざる</p> <p>9 灰黄色シルト質土 わずかに焼土を含む</p> <p>10 灰褐色シルト質土 少量の礫や白色粒を含む</p> <p>11 灰黄色シルト質土 ややしまる</p> <p>12 暗灰色シルト質土 焼土・炭化物を多く含む、ややしまりなし</p> <p>13 褐色シルト質土 少量のマンガン粒や炭化物を含む</p> <p>14 褐色砂質土 炭を多く含む、しまりなし</p> <p>15 暗灰色シルト質土 炭化物・焼土を少量含む</p> <p>16 暗灰色粘質土 わずかに焼土・白色粒を含む</p> <p>17 灰黄色粘質土 焼土・炭化物を多く含む</p> <p>18 暗黄色砂質土 焼土・炭化物・白色粒を多く含む、ややしまる</p> <p>19 暗褐色粘質土 焼土片を含む、しまる</p> <p>20 暗褐色粘質土 少量の焼土片・土層片・炭化物を含む、ややしまる</p> <p>21 暗褐色粘質土 焼土片・土層片を少量含む、ややしまる</p> <p>22 暗褐色粘質土 わずかに炭分を含む(低位部)</p> | <p>26 黒褐色シルト質土 ややしまり、微細な焼土片・白色粒を含む</p> <p>27 灰黄色粘質土 炭分沈着、ややしまる</p> <p>28 黒褐色シルト質土 5cm以下の焼土片・炭化物を含む</p> <p>29 暗褐色シルト質土 1cm以下の焼土片・微細な炭化物をわずかに含む、ややしまる</p> <p>30 灰黄色シルト質土 土より微細なシルト質土</p> <p>31 灰黄色粘質土 炭分がしまる、遺物を含む</p> <p>32 褐色シルト質土 SX004</p> <p>33 暗褐色シルト質土 SX236</p> <p>34 暗灰色シルト質土 少量の焼土片や炭化物を含む、ややしまる SD009</p> <p>35 褐色砂質土 焼土片・炭化物を多く含む</p> <p>36 褐色シルト質土 焼土塊・炭化物を多量に含む</p> <p>37 黒褐色粘質土 焼土塊・炭化物を多く含む、ややしまりなし</p> <p>38 暗褐色粘質土 礫や炭化物を多く含む、ややしまる</p> <p>39 黒褐色粘質土 焼土・炭化物を多く含む、しまりなし</p> <p>40 暗褐色粘質土 やや太粒の焼土と微細な炭化物を多く含む。SP306</p> <p>41 灰黄色シルト質土 礫・焼土片・炭化物を多く含む</p> <p>42 灰黄色粘質土 ややしまる</p> <p>43 黒褐色粘質土 焼土片・白粒を少量含む、しまりが強い、硬質で締まる</p> <p>44 黒褐色粘質土 太粒の炭化物や焼土を大量に含む、ややしまる(低位部)</p> <p>45 灰褐色シルト質土 ややしまる</p> <p>46 灰オレンジ色砂質土 少量の黄褐色ブロック・土層片・礫を含む、ややしまりなし</p> <p>47 暗褐色粘質土 少量の土層片・焼土・炭化物等を含む、ややしまる</p> | <p>48 暗褐色粘質土 礫・焼土・炭化物を多く含む、ややしまりなし</p> <p>49 暗褐色シルト質土 少量の白色粒・炭化物・焼土・遺物を含む、ややしまりなし</p> <p>50 暗褐色シルト質土 少量の白色粒・焼土を含む、ややしまる(注1)</p> <p>51 黒褐色粘質土 微細な焼土片を多く含む。しまりなし</p> <p>52 黒褐色粘質土 微細な焼土片を少量含む。ややしまる</p> <p>53 土に灰黄色シルト質土</p> <p>54 暗黄色粘質土 固くしまる。硬化面</p> <p>55 黒褐色シルト質土 焼土片・炭化物・土層片・礫等を多く含む、ややしまる</p> <p>56 灰黄色粘質土 土層片・砂利を含む</p> <p>57 灰色砂質土 ややしまる</p> <p>58 灰色シルト質土 ややしまり、礫・白色粒をわずかに含む</p> <p>59 灰色砂質土 50mmの塊が固くしまる</p> <p>60 黒褐色粘質土 焼土片・白色粒・炭化物をわずかに含む</p> <p>61 暗褐色粘質土 黄褐色ブロックを少量含む</p> <p>62 暗褐色シルト質土 ややしまる</p> <p>63 褐色シルト質土 ややしまり、土層片・焼土片・炭化物をわずかに含む</p> <p>64 灰色シルト質土 65mmの塊でよくしまる</p> <p>65 黒褐色粘質土 焼土片・白色粒をわずかに含む 炭層よりきめが粗くしまる</p> <p>66 褐色砂質土 ややしまり(注2)</p> <p>67 灰色シルト質土 ややしまる。厚さ1~3mm</p> <p>68 暗黄色粘質土 少量の微細な焼土や白色粒を含む</p> <p>69 暗褐色砂質土 ややしまりなし。礫・白色粒をわずかに含む</p> | <p>70 灰色粘質土 小砂利や黄褐色ブロックを多く含む</p> <p>71 黒褐色粘質土 黄褐色ブロックを含む</p> <p>72 褐色粘質土 均質でややしまる</p> <p>73 黒褐色粘質土 わずかに白色粒と炭化物を含む、よくしまる</p> <p>74 灰色シルト質土 固くしまる。厚さ5mm程度</p> <p>75 黒褐色砂質土 ややしまる。部分的に炭分沈着</p> <p>76 灰黄色シルト質土 ややしまりなし。焼土片・白色粒をわずかに含む</p> <p>77 暗褐色シルト質土 固くしまる</p> <p>78 土に灰黄色粘質土 焼土片・白色粒をわずかに含む(注4)</p> <p>79 土に灰黄色粘質土 土層片を含む。70mmとほぼ同じ</p> <p>80 暗黄色砂質土 ややしまる。微細な焼土片と炭化物をわずかに含む</p> <p>81 暗黄色シルト質土 50mmの塊が固くしまる</p> <p>82 灰黄色シルト質土 ややしまる</p> <p>83 灰色粘質土 この層の下部がよじりまる</p> <p>84 暗褐色粘質土 焼土片・マンガン粒をわずかに含む</p> <p>85 暗褐色粘質土 きめが細かく、固くしまる</p> |
|---|---|--|---|

第3図 第22次調査区 北壁土層(上)1/40



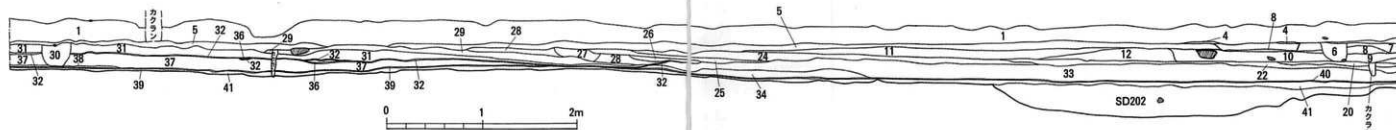
調査区東壁土層

- | | | |
|----|--------------|---------------------------|
| 1 | にぶい 橙 色 土 | マンガン質を若干含む。 |
| 2 | 橙 色 土 | マンガン沈着。少量の赤褐色粒とわずかな遺物を含む。 |
| 3 | にぶい 橙 色 土 | マンガン質を若干含む。赤褐色粒と土器片を少量含む。 |
| 4 | 橙 色 土 | |
| 5 | 灰 褐色 土 | |
| 6 | にぶい 灰 褐色 土 | |
| 7 | にぶい 黄 褐色 土 | |
| 8 | 暗褐色シルト質土 | ややしめる。焼土・白色粒を少量含む。 |
| 9 | 暗オリーブ褐色シルト質土 | ややしめる。焼土・炭化物・白色粒を多く含む。 |
| 10 | 暗褐色シルト質土 | ややしめる。SX236 |

- | | | |
|----|--------------|-----------------------------|
| 11 | にぶい 黄 褐色 土 | 砂質土を含む。 |
| 12 | 浅黄褐色砂質土 | |
| 13 | にぶい 黄 褐色 粘質土 | |
| 14 | 暗褐色シルト質土 | 土器片や礫(4mm大)を少量含む。ややしまりがない。 |
| 15 | 浅黄褐色土 | 少量の炭化物と礫(5mm大)を含む。セラセラしている。 |
| 16 | 黒褐色粘質土 | 少量の白色粒を含む。ややしめる。 |
| 17 | 黒褐色粘質土 | ややしまりなし。 |
| 18 | 暗褐色シルト質土 | 少量の白色粒を含む。 |
| 19 | 黒褐色粘質土 | ややしめる。部分的に鉄分沈着。遺物を含む。 |
| 20 | 褐色粘質土 | ややしまりがない。 |

- | | | |
|----|--------------|----------|
| 21 | にぶい 黄 褐色 粘質土 | |
| 22 | 黒褐色シルト質土 | ややしめる。 |
| 23 | 暗褐色粘質土 | ややしめる。 |
| 24 | 暗灰黄色粘質土 | ややしめる。少量 |
| 25 | 黄灰色粘質土 | しめる。焼土片・ |
| 26 | 黒褐色シルト質土 | しまりがない。 |
| 27 | 暗褐色シルト質土 | ややしまりがない |

第4図 第22次調査区東壁土層図 (1/40)



調査区西壁土層

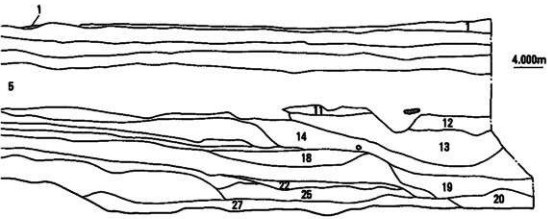
- | | | |
|----|--------------|---------------------------|
| 1 | 暗褐色シルト質土 | ややしめる。白色粒・焼土片を多く含む |
| 2 | 灰オリーブ色シルト質土 | 鉄分沈着。よくしめる。 |
| 3 | 灰黄褐色シルト質土 | 炭化物や焼土片をわずかに含む。 |
| 4 | 褐色粘質土 | ややしまりなし。白色粒・礫・焼土・炭化物を多く含む |
| 5 | 暗灰黄色砂質土 | かたくなる。土器片・小礫を多く含む |
| 6 | 黄灰色粘質土 | 礫の礫が下部に入る。ややしまりなし。 |
| 7 | 暗褐色シルト質土 | ややしまりなし。白色粒や焼土を少量含む。 |
| 8 | 黄灰色粘質土 | ややしまりなし。上面にマンガン沈着。 |
| 9 | 暗オリーブ褐色シルト質土 | ややしまりなし。少量の白色粒・礫を含む。 |
| 10 | 黄灰色砂質土 | ややしまりなし。礫・焼土・炭化物を多く含む。 |

- | | | |
|----|----------|----------------------------------|
| 11 | 暗灰黄色砂質土 | よくしめる。焼土・礫を多く含む。 |
| 12 | 灰黄色砂質土 | 砂利や礫を多く含む。 |
| 13 | 黒褐色シルト質土 | ややしまりなし。焼土・炭化物・礫を多く含む |
| 14 | 灰黄色粘質土 | 焼土を少量含む |
| 15 | 褐色粘質土 | 炭化物・小礫を多く含む |
| 16 | 褐色粘質土 | ややしまりなし。 |
| 17 | 暗灰黄色粘質土 | ややしめる。北側に礫が密に入る。 |
| 18 | 灰黄色砂質土 | ややしめる。わずかに小礫を含む。 |
| 19 | 灰黄色粘質土 | ややしめる。礫や白色粒をわずかに含む。 |
| 20 | 灰黄色シルト質土 | よくしめる。焼土・白色粒を多く含む。上面の地層がガチガチで固い。 |

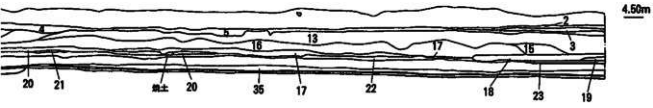
- | | | |
|----|----------|---|
| 21 | 褐色粘質土 | 灰が入る。少量の炭や焼土を含む。 |
| 22 | 褐色粘質土 | 黄褐色ブロックを少量含む。 |
| 23 | 暗褐色シルト質土 | ややしめる。 |
| 24 | 灰黄褐色粘質土 | しめる。上面にマンガン沈着。 |
| 25 | 暗褐色砂質土 | ややしまりなし。砂利・土器片を少量含む。 |
| 26 | 暗褐色シルト質土 | 少量の焼土・白色粒を含む。 |
| 27 | 褐色粘質土 | 少量の白色粒を含む。 |
| 28 | 灰黄褐色粘質土 | ややしめる。少量の焼土・砂利を含み、黄褐色ブロックが入る。上面にマンガン沈着。 |
| 29 | 灰黄色砂質土 | しまりなし。土器片をわずかに含む。北側に灰が密にはいる。 |
| 30 | 褐色粘質土 | ややしまりなし。まめが固い。焼土や炭化物を多く含む。 |

- | | | |
|----|----------|-------------------------|
| 31 | 暗褐色粘質土 | ややしまりなし。少量の均質でややしめる。 |
| 32 | 黄灰色砂質土 | 均質でややしめる。上面の地層がガチガチで固い。 |
| 33 | 暗褐色シルト質土 | ややしめる。黄褐色 |
| 34 | 灰黄褐色粘質土 | 砂利と黄褐色粘質土 |
| 35 | 褐色粘質土 | 砂利と黄褐色粘質土 |
| 36 | 灰黄褐色粘質土 | ややしめる。少量の |
| 37 | 灰黄褐色粘質土 | ややしめる。黄褐色 |
| 38 | 黄灰色粘質土 | まめが固く、ややし |
| 39 | 黄灰色砂質土 | ややしまりなし。 |
| 40 | 暗褐色粘質土 | 均質でややしめる。 |

第5図 第22次調査区西壁土層図 (1/40)



り白色粒を含む。
 土層片を少量含む。
 わずかに遺物を含む。



黄土・土層片・黄褐色ブロックを含む。
 41 黒褐色粘質土 よくしまる。わずかに白色粒や炭化物を含む。部分的に灰色の砂が混ざる。
 しまる。黄土・白色粒をわずかに含む。
 粘質ブロックが入る。
 ロックを多く含む。
 砂が混ざる。
 ブロックが入る。
 まりがない。

2. 道路状遺構と溝状遺構

概要 中世大友府内町跡22次調査区では、南北に構築された道路状遺構1基と溝状遺構5基検出している。道路状遺構（SF230）は「府内古図」に描かれた「大友氏館」の東側を走る第2南北街路に比定される。また、溝状遺構のうち4基は上層で確認され、残る1基は道路状遺構（SF230）の下位に構築されたものである。

上層の溝で中世段階と推定されるものがSD009で、埋土中から小野編年のF群に比定される銅皿が出土している。また、SD202は第2南北街路に比定される道路状遺構（SF230）の下位に構築された溝で、第2南北街路が構築される以前に何らかの区画のために構築された可能性が高い。

SF230（第6図）

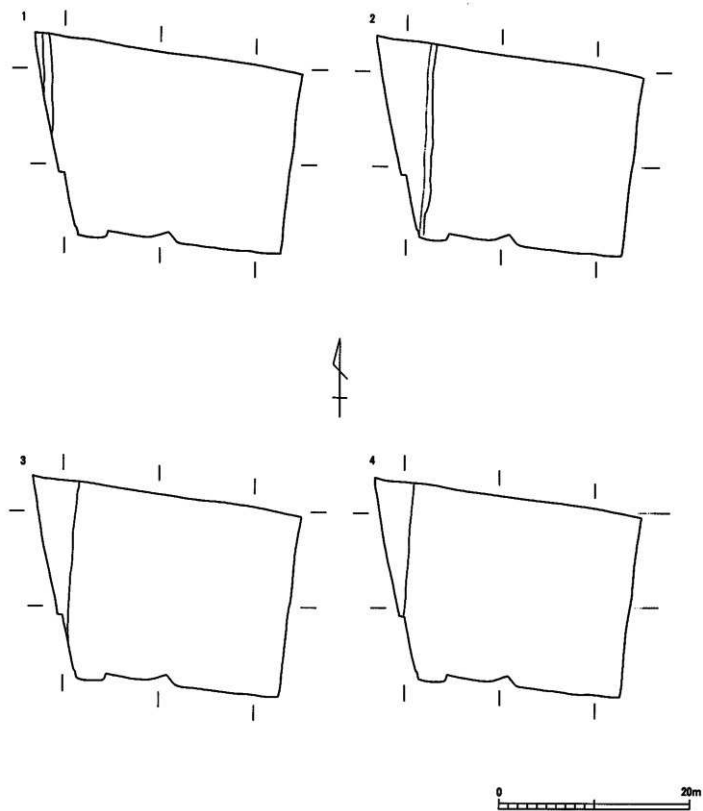
第2南北街路 SF230は調査区西端で検出された道路状遺構で、K19～J21区に位置する。「府内古図」に描かれた第2南北街路の一部に相当する遺構である。調査区内で検出されたSF230の規模は、東西最大幅約4.0m、南北最大長約16.0mを測る。この道路状遺構に伴う側溝等は明確に確認できなかったが、道路状遺構の東側で浅い溝状のものを確認しており、これが側溝に比定される。しかし、大部分が削平を受けており明確には検出できなかった。調査区北側に設定したトレンチによる土層観察や路面上に構築されたピットなどから、道路は3～4段階（道路構築時～近世段階）にわたり西側に縮小していることが確認できる。この道路幅の縮小については、道路の東側に展開していた屋根が道路側に張り出す形で進出してきたことによるものと考えられ、これは古い段階の路面上にピットが形成されていることから窺える。

SF230を構成する土層群から出土する遺物を観察すると、最上層の土層群やそれに続く東側の整地層には唐津系陶器などの17世紀初頭から前葉の遺物が含まれており、当該道路が近世初頭から前葉にかけて、中世から引き続き使用されていた可能性が高いと考えられる。中位から下位にかけての整地層には近世初頭以降の遺物がまったく含まれない。また、出土遺物にやや薄手の京都系土師器が含まれることから、少なくとも16世紀中葉までは遡ると推定される。

掘り込み事業 道路は粘土や砂を交互に敷き詰める版築状の土層となっているが、中世段階の土層断面を観察すると、道路の構築にあたって、その土層を形成する以前に掘り込み事業を行っている可能性が高い。（第3図土層図参照）。この掘り込み事業を伴う道路状遺構は、中世大友府内町跡第2・3次調査の東西道路や同4次調査⁽¹⁾の東西道路（名ヶ小路）、同5次調査A区⁽²⁾の南北道路（第4南北街路）でも確認されており中世府内では極めて一般的な道路構築法であったといえる。

また、当遺構の下位で溝状遺構（SD202）を検出している。時期を特定できる遺物は検出できなかったが、道路状遺構が構築される以前に、この溝が構築されていることが土層断面の観察から推定される。溝の性格は不明であるが、道路構築以前にこの溝によって区画される何らかの空間が存在した可能性が考えられる。

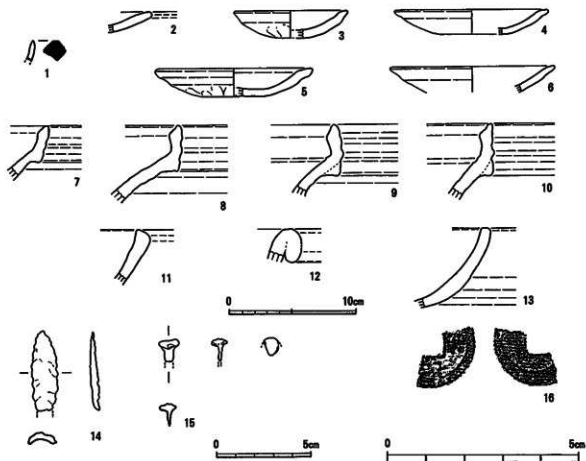
-
- (1) 大分市教育委員会『大友府内～中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書～』（2002年）
 (2) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1』中世大友府内町跡第5次・8次調査区〔大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』（2005年）



第6圖 SF230 変遷圖 (1/40)

SF230出土遺物 (第7図)

第7図1は中国産天目茶碗の口縁部破片である。2～6は京都系土師器皿である。4・6は2期に比定される資料である。3・5はやや器壁が厚くなり、3期に比定される。7～10は備前系陶器播鉢の口縁部破片である。9・10の口縁帯の形態を見ると、断面が「く」字になっており、口端は上角を強くなでて尖り気味として、口端からやや下がった内面に稜線をもつもので、中世6期に比定される資料である。11は備前系陶器鉢、12は備前系陶器壺の口縁部破片である。13は瓦質土器鉢の口縁部破片である。14・15は銅製品である。いずれも何らかの金具と推定されるが用途は不明である。16は銅銭である。4分の3が欠損しており、銭貨名は不明である。



第7図 SF230出土遺物実測図 (1～13は1/3, 14・15は1/2, 16は1/1)

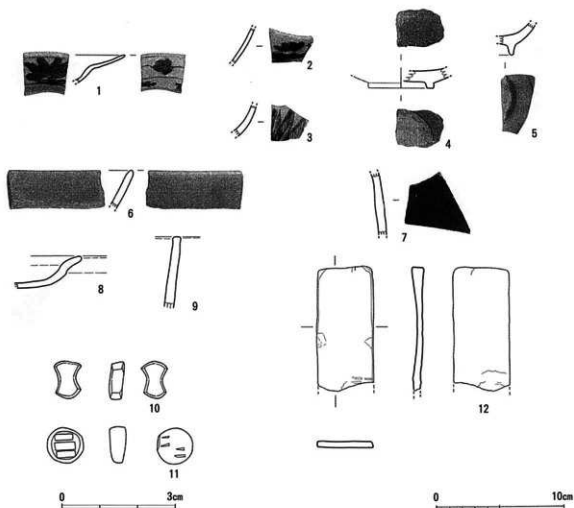
SD009 (第2図参照)

SD009はK19～K21区に位置する溝状遺構である。本調査区で検出された規模は、長さ約18.0m、幅0.5～0.7m、深さ約0.1mを測る。埋土中からは小野分類のF群に比定される銅皿の口縁部や太鼓型分銅1・扇型分銅1などが出土している。南側に隣接する大友9次調査区でも検出されており (SD1)、水田耕作等による区面溝の可能性が高い。遺構の時期は埋土や出土遺物から16世紀末葉から17世紀初頭に比定される。

SD009出土遺物（第8図）

第8図1～3・5は中国景徳鎮窯系青花である。1はF群の皿である。2・3は碗の胴部破片である。2の外面の文様は如意雲と推定され、碗E群に比定される。3は外面に芭蕉葉文を描き、碗C群に比定される。5は碗の底部破片である。4は瀬戸美濃系陶器碗の底部破片である。6は中国龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。へら先による細線の連弁文をもつ。7は中国産褐釉陶器壺の胴部破片である。8は京都系土師器皿の口縁部破片である。9は備前系陶器瓶の口縁部破片である。10・11は銅製の分銅である。10は菌型分銅で、重さ0.8gと小形のものである。表面は緑青で脆くなっている。11は太鼓型分銅である。重さは1.0gで、表面には三木文⁽³⁾を表現し、裏面にはタガネ形りによる4条の記号が認められる。当該資料のような片面に三木文、片面に4条の記号を有する太鼓型分銅の出土が増加しており、大小様々なサイズの製品が存在していることが明らかになってきている。また、第18次調査西地区では、三連の太鼓型分銅⁽⁴⁾が出土しており、その製作が当該調査区周辺で行われていた可能性が考えられるようになってきている。12は砥石である。

菌型分銅
太鼓型分銅
三木文



第8図 SD009出土遺物実測図（1～9・12は1/3、10・11は1/1）

(3) 秦政博「守護大名から戦国大名へ」（『大分市史』中 1987年）228頁

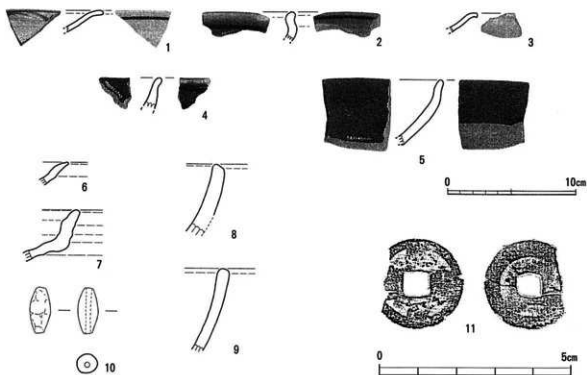
(4) 本書第2分冊第8章第8図※（※頁）参照

SD017 (第2図参照)

SD017はL20~K21区に位置する遺構である。L20区では削平を受けており、遺構の全容は把握できなかったが、検出された規模は長さ約8.5m、幅約1.4m、深さ約0.1mを測る。遺構の時期は周辺の状況や出土遺物から近世初頭以降と推定される。

SD017出土遺物 (第9図)

第9図1は中国景德鎮窯系青花皿の口縁部破片である。皿F群に比定される。2は中国龍泉窯系青磁皿の口縁部破片である。3は白磁皿の口縁部破片である。4・5は天目茶碗の口縁部破片である。4は瀬戸美濃系、5は中国産である。6は京都系土師器皿の口縁部破片である。7は備前系陶器播鉢である。8・9は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。10は土錘である。11は中国北宋代の銅錢で、「熙寧元寶」である。書体は篆書体で、初铸年代は1068年である。



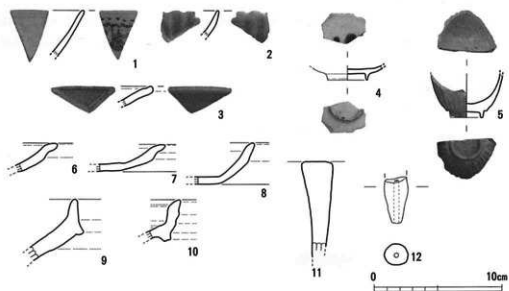
第9図 SD017出土遺物実測図 (1~10は1/3、11は1/1)

SD020 (第2図参照)

SD020はK21区に位置する溝状遺構である。検出された規模は長さ約3m、幅約0.9m、深さ0.1mを測る。SD017との連続性が考えられるが、関連は不明である。遺構の時期はSD017との関連や出土遺物から近世初頭以降に比定される。

SD020出土遺物 (第10図)

第10図1は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部破片である。2は青磁稜花皿の口縁部破片である。3は唐津系陶器皿の口縁部破片である。口縁部内面に沈線がめぐる。4は中国景德鎮窯系青花小杯である。5は肥前系磁器小杯である。外面に鎊文を施す。6~8は京都系土師器皿の口縁部破片である。9・10は備前系陶器播鉢の口縁部破片である。9は中世4期、10は近世1期に比定される資料である。11は瓦質土器火鉢の口縁部破片で、口縁端部が肥厚する。12は土錘である。



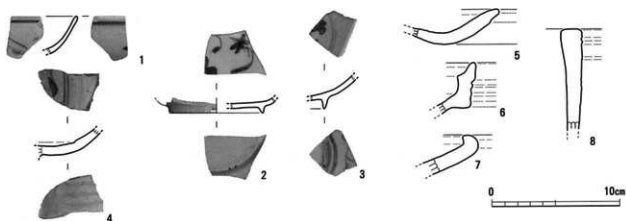
第10図 SD020出土遺物実測図 (1/3)

SD019 (第2図参照)

SD019はL19～K21区に位置する遺構である。検出された規模は長さ約15m、幅約1.4～0.5m、深さ0.1mを測る。水田耕作等の区画溝と考えられる。遺構の時期はSD017やSD020とはほぼ同時期と考えられ、近世初頭以降と推定される。

SD019出土遺物 (第11図)

第11図1～3は中国景德鎮窯系青花である。1・2はE群に比定される皿、3は碗である。4は中国漳州窯系青花盤である。5は京都系土師器皿の口縁部破片である。6は備前系陶器播鉢で、近世1期に比定される。7・8は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。7は口縁端部を上方につまみ上げ、浅鉢形になるものと推定される。8は口縁端部が肥厚するタイプである。



第11図 SD019出土遺物実測図 (1/3)

SD202 (第12図)

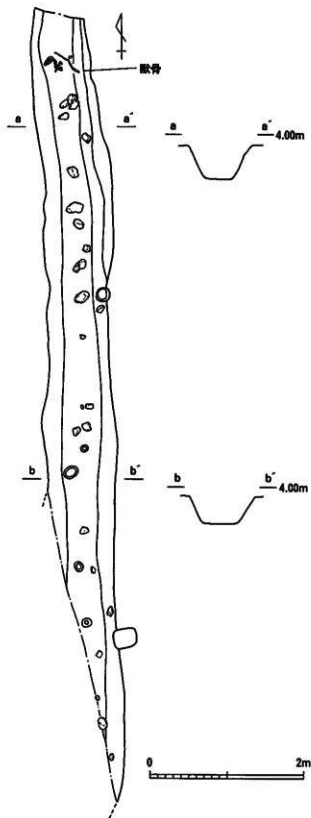
SD202はJ19～J20区に位置する遺構である。断面形状は逆台形状を呈し、検出された規模は長さ約7.8m、幅0.5～0.7m、深さ0.4mを測る。検出範囲が狭いため、溝の性格等は断定できないが、当遺構の上位には道路状遺構(SF230)が構築されており、「府内」の区画が整備される以前に何らかの区画される空間が存在していた可能性が考えられる。遺構埋土中からは、獣骨(犬もしくは猫)や土玉などが出土しているが、明確な時期を特定できる遺物は検出できなかった。

SD202出土遺物 (第13図)

第13図はSD202出土の土玉である。径約2.1cm、重さ8.9gである。用途は不明である。



第13図 SD202出土遺物実測図 (1/3)



第12図 SD202実測図 (1/50)

3. 土坑

概要 中世大友府内町跡22次調査区では、30基の土坑を検出している。検出された土坑はほぼ16世紀中葉以降から末葉にかけての時期に比定できる。大半が廃棄土坑（ゴミ捨て穴）と推定される。良好な一括資料を出土するものもあるが、土坑の詳細な性格が判明するものは少ない。このような中で比較的良好的一括資料が出土したSK008やSK018などは注目される。

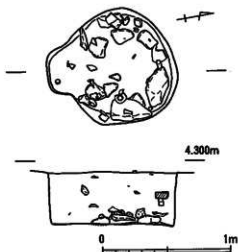
SK008（第14図）

SK008はK20区のほぼ中央に位置する遺構である。平面プランはほぼ円形を呈し、規模は直径約1.0m、深さ約0.4mを測る。当遺構からは京都系土師器皿や青花碗の破片、青銅製の柄杓などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉に比定される。

SK008出土遺物（第15～16図）

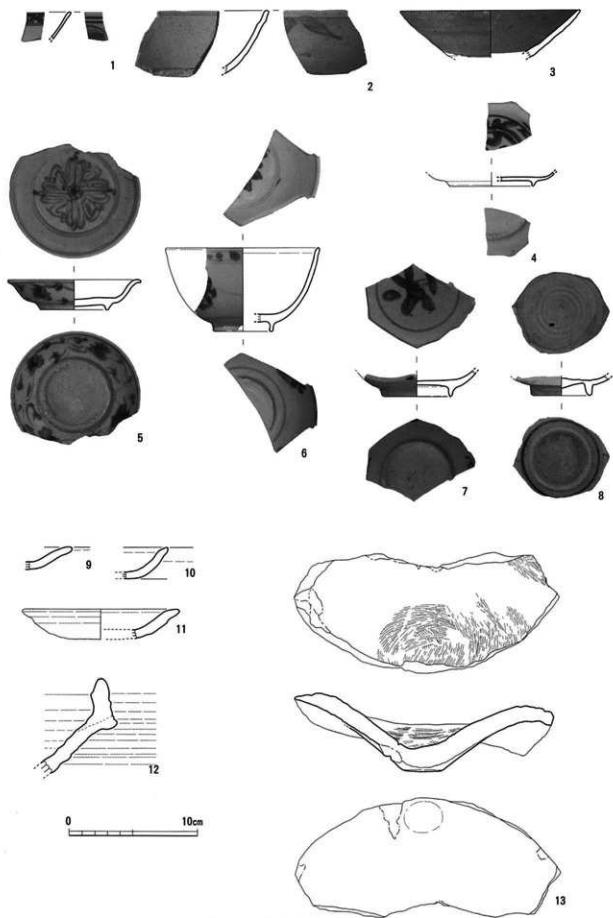
第15図1は五彩碗の口縁部破片である。口縁部内面には四方標文を青花で描き、外面には五彩を施す。2は中国漳州窯系青花碗の口縁部破片である。3は朝鮮王朝系雑軸陶器碗である。4・5は中国景德鎮窯系青花皿である。4は底部破片でE群に比定される資料である。5はほぼ完形で出土しており、口径10.2cm、底径5.2cm、器高2.3cmを測る。口縁部は端反りとなり、見込みに十字花文を描き、外面に牡丹唐草文を描く。高台内に字款が見られないことから皿B1群に比定される資料である。时期的にやや古い様相を呈するものであり、伝世品の可能性が高い。6・7は碗F群に比定される中国景德鎮窯系青花碗である。見込みに花文が描かれる。8は中国漳州窯系青花碗の底部破片である。9～11は京都系土師器皿である。器壁が厚く3期に比定される資料である。12は近世1期に比定される備前系陶器播鉢の口縁部破片である。13は瓦質土器である。出土した当初は何かの蓋の一部の可能性も考えられたが、検討の結果、火鉢の脚部と推定する。全体の器形は不明であるが、三脚以上をもつ火鉢と推定される。

第16図1は青銅製柄杓の頭部分である。柄の部分は欠損している。径約4.5cm、高さ1.8cmである。類似品が第13次調査区のSE377¹⁾の結構中から出土している。2は磁石である。

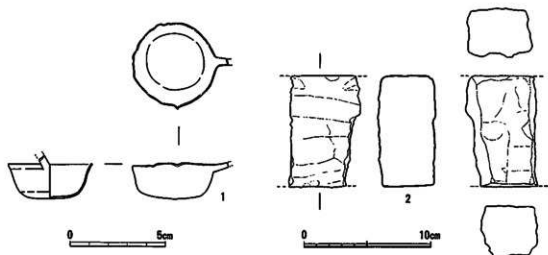


第14図 SK008実測図 (1/30)

(5) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「豊後府内2」中世大友府内町跡第9次・13次・21次調査区
〔一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)〕(2005年) 219頁 第357図
2参照



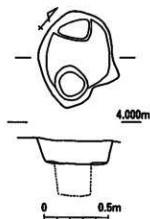
第15図 SK008出土遺物実測図① (1/3)



第16図 SK008出土遺物実測図② (1は1/2、2は1/3)

SK011 (第17図)

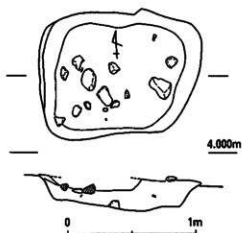
SK011はL21区に位置する遺構で、井戸状遺構(SE012)の上位に構築されている。平面プランは不整形円形を呈し、規模は長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約0.1mを測る。時期を特定できる遺物や図示可能な遺物の出土はなかったが、SE012との切り合い関係から当遺構の時期は16世紀末葉に比定される。



第17図 SK011実測図 (1/30)

SK013 (第18図)

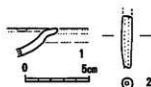
SK013はL21区に位置する遺構で、井戸状遺構(SE012)の上位に構築されている。平面プランは長方形を呈し、規模は長径約1.2m、短径約1.0m、深さ約0.3mを測る。当遺構からは京都系土師器皿が出土しているが、遺構の時期の時期を特定できるものではない。しかし、遺構の切り合い関係から16世紀末葉以降に比定される。



第18図 SK013実測図 (1/30)

SK013出土遺物 (第19図)

第19図1は京都系土師器皿の口縁部破片である。内面に煤が付着している。2は管状土甕である。上部は欠損している。



第19図 SK013出土遺物実測図 (1/3)

SK015・SK016 (第20図)

SK015はL21区に位置する切り合いを有する2基の土坑である。構築順序はSK016→SK015となる。SK015は平面プランが長方形を呈し、その規模は長径約0.6m、短径約0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。SK016は平面プランが略隅丸方形を呈するが、南側はSK015の構築によって破壊されている。検出した規模は長径約0.6m、短径約0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土下位より備前系播鉢の口縁部破片が出土している。

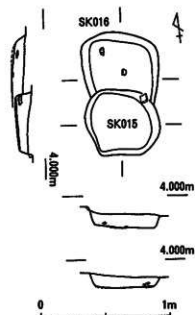
遺構の時期は周辺の遺構から16世紀後葉以降に比定される。

SK016出土遺物 (第21図)

第21図は備前系陶器播鉢である。口縁のナゲが狭むように強く先細りとなり、口端から下がった口縁内に段をもつことから、近世1期に比定される。



第21図 SK016出土遺物実測図 (1/3)



第20図 SK015・SK016実測図 (1/30)

SK018・SK028 (第22図)

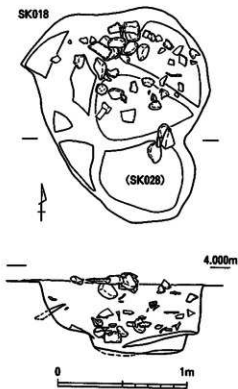
SK018はL20区に位置し、SK028を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.3m、短径約1.0m、深さ約55cmを測る。当遺構からは3期に比定される京都系土師器皿や備前系陶器甕などが出土している。出土遺物から遺構の時期は、出土遺物から16世紀末葉に比定される。

SK028の平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約30cmを測る。SK018が構築される際にほとんど破壊されており、詳細な遺構図は記録していない。また、図示可能な遺物の出土もなかった。

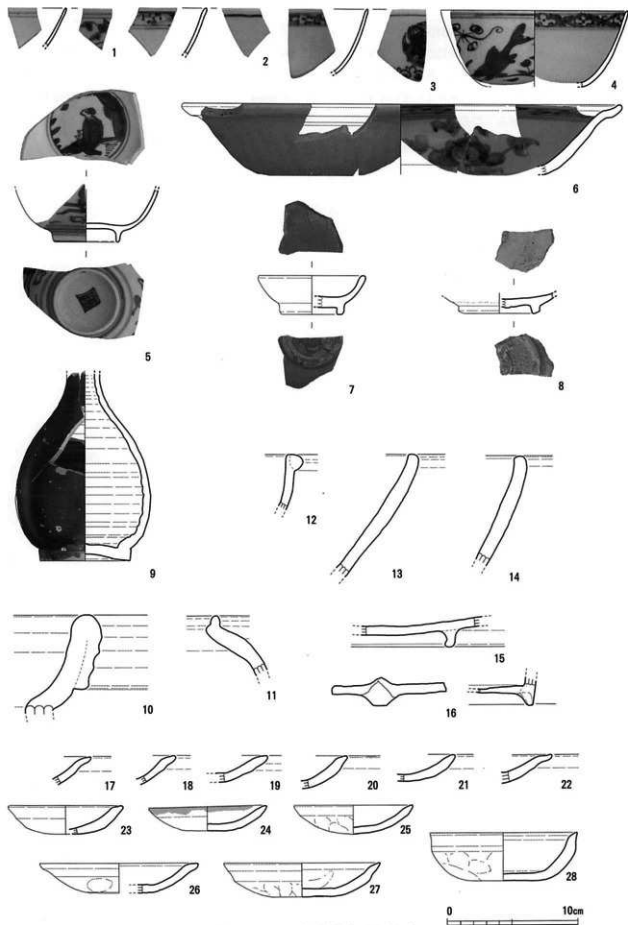
SK018出土遺物 (第23図)

第23図1～5には中国景德鎮窯系青花碗を図示した。1～3は口縁部破片で、碗C群に比定される。

4・5は碗E群に比定される資料である。4は口縁部内面に四方博文を描き、外面には狸の文様を描く。5は見込みが緩やかに盛り上がり、いわゆる饅頭心碗である。見込みには人物、高台内には四角の枠取りした「福」字を書く。



第22図 SK018・SK028実測図 (1/30)



第23図 SK018出土遺物実測図 (1/3)

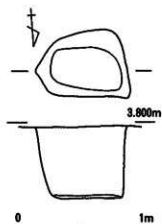
高台径は5.0cmを測る。6はF群に比定される中国涪州窯系青花盤である。復元口径33.2cmを測る。7は中国龍泉窯系青磁小碗である。復元口径8.2cm、復元底径4.9cm、器高2.9cmを測る。8は白磁皿である。見込み部分は蛇の目軸刺ぎとなり、底部外面は露胎となる。9は黒軸陶器瓶である。内外面に鉄軸が掛かり、外面は黒褐色に発色するが、内面の軸は薄く茶褐色に発色する。高台部分は貼り付けられており、やや上げ底状となり、露胎である。口縁部は欠損しているが、底径6.8cmを測る。中国南部産か。10・11は備前系陶器壺(甕)の口縁部破片である。10は中世6期以降に比定される資料である。11は水屋甕であろうか。口縁部内面には蓋受けとなるようにつまみ出されている。12~14は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。12は玉縁状となるものである。15・16は瓦質土器火鉢の脚部破片である。17~27は京都系土師器皿で、28は京都系土師器環である。器壁がやや厚く、3期の様相を呈する資料である。京都系土師器皿の口径に注目すると23が8.4cm、24・25が約9cm、26・27が11.8cmと3法量に細分される可能性がある。なお、24の口縁部内外面には煤がべっとり付着しており、灯明皿として使用されていた可能性がある。また、28の環の口縁部には一部被熱した痕跡が観察される。

SK022 (第24図)

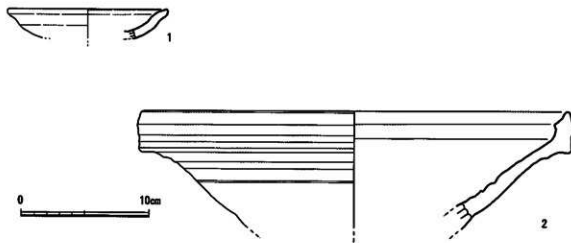
SK022はL21区に位置し、SE021を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約0.7m、短径約0.5m、深さ約58cmを測る。当遺構からは3期に比定される京都系土師器皿や近世1期に比定される備前系陶器摺鉢などが出土している。遺構の時期は、SE021との切り合い関係や出土遺物から16世紀末葉に比定される。

SK022出土遺物 (第25図)

第25図1は京都系土師器皿である復元口径12.4cmを測り、器壁が8mmと厚めになり、京都系の3期に比定される。2は備前系陶器摺鉢である。放射状スリメに加えて、斜め方向のスリメも付加される。また、口縁のナデが揃むように強く先細りとなり、口端から下がった口縁内に稜をもつことから近世1期に比定される。



第24図 SK022実測図 (1/30)



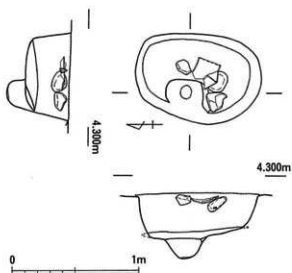
第25図 SK022出土遺物実測図 (1/3)

SK024 (第26図)

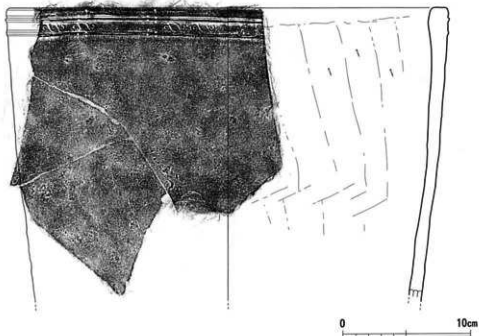
SK024はK20～L20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約95cm、短径約70cm、深さ約34cmを測る。遺構の時期を特定できる良好な出土遺物は認められないが、土坑上部の埋土中から出土した瓦質土器火鉢から、遺構の時期を16世紀後葉代に比定しておきたい。

SK024出土遺物 (第27図)

第27図は瓦質土器火鉢である。三角突帯の間に2個一対の双頭蕨手流雲文が間隔を開けて押捺されるもので、復元口径は34.3cmを測り、黒灰色を呈する。器形は深鉢型となり脚が付くと推定される。双頭蕨手流雲文を押捺された瓦質土器火鉢は豊後府内で多くの出土例があり、豊後府内に主体的に分布するものである。



第26図 SK024実測図 (1/30)



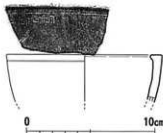
第27図 SK024出土遺物実測図 (1/3)

SK025 (第28図)

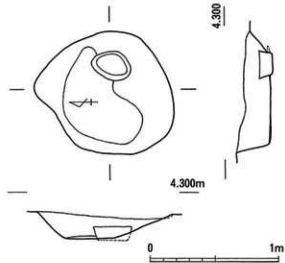
SK025はK20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.1m、短径約1.0m、深さ約30cmを測る。時期を特定できる遺物の出土はなかったが、瓦質土器香炉が1点出土している。

SK025出土遺物 (第29図)

第29図は瓦質土器香炉である。復元口径は12.2cmを測る。口縁端部は内側にやや屈曲する。外面には一条の沈線を施し、その下に間隔を開けて2個1単位の雷文を押捺する。



第29図 SK025出土遺物実測図 (1/3)



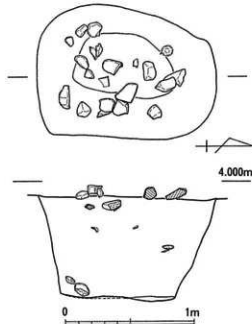
第28図 SK025実測図 (1/30)

SK029 (第30図)

SK029はL20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.4m、短径約1.0m、深さ約80cmを測る。当遺構からは3期に比定される京都系土師器皿が出土していることから、遺構の時期は16世紀後葉から末葉に比定される。

SK029出土遺物 (第31図)

第31図1～3は3期に比定される京都系土師器皿である。2はやや歪みがあるが口径は8.8cmを測る。3の復元口径は10.5cmを測る。



第30図 SK029実測図 (1/30)



第31図 SK029出土遺物実測図 (1/3)

SK040 (第32図)

SK040はL21区に位置し、土師器の大量廃棄遺構(SX006)の上位遺構で、二つの土坑が切り合って存在する。遺物の出土状況は南北で明確に分かれるが、調査当初、不定形の一つの遺構として掘り下げており、掘り下げの最終段階で遺構の切り合いが判明したため、遺物の取上も選別できていない。また、切り合い関係も不明である。埋土はいずれも炭を含む黒褐色土であり、時期差なく掘られてすぐに埋められたと考えられる。

遺構全体の平面プランはひょうたん形を呈し、規模は長径約1.4m、短径約0.8m、深さ約0.2mを測る。出土遺物には京都系土師器皿が含まれるが下位遺構であるSX006からの混ざり込みの可能性もあるため、ここでは図示していない。遺構の時期は、SX006との切り合い関係と出土遺物から16世紀後葉から末葉に比定される。

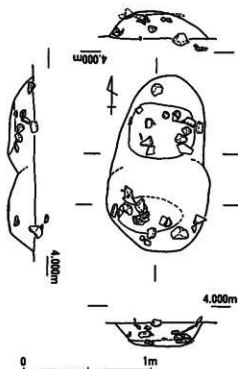
SK040出土遺物 (第33図)

第33図1は備前系陶器鉢である。

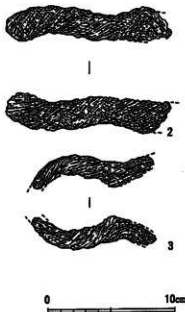
復元口径18.7cmを測る。外面はにぶい赤褐色、内面は灰褐色を呈する。外面にはカメラ印が認められる。

布状遺物

2・3は撻った布状のものである。



第32図 SK040実測図 (1/30)



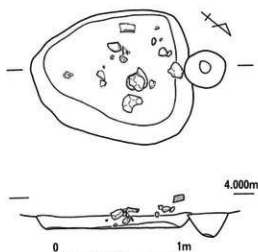
第33図 SK040出土遺物実測図 (1/3)

SK069 (第34図)

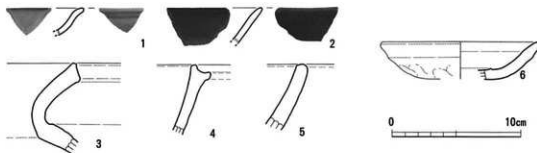
SK069はL19～L20区に位置し、SE125を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.2m、短径約1.0m、深さ約10cmを測る。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉に比定される。

SK069出土遺物 (第35図)

第35図1は中国漳州窯系青花皿で端反りとなるものである。2は中国龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。横田・森田編年のI-4・aに比定される資料である。混入か。3は焼締陶器壺である。亀山産か。4・5は瓦質土器で、それぞれ4は火鉢、5は鍋の口縁部破片である。6は3期に比定される京都系土師器皿である。復元口径は11.6cmを測る。



第34図 SK069実測図 (1/30)



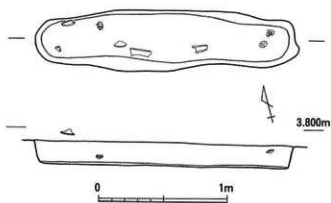
第35図 SK069出土遺物実測図 (1/3)

SK078 (第36図)

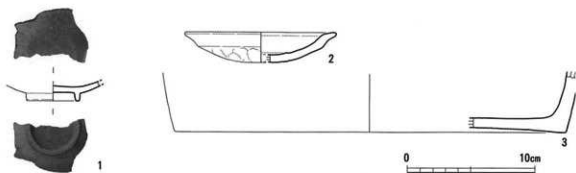
SK078はL21区に位置する遺構である。平面プランは長円形を呈し、規模は長径約2.05m、短径約0.5m、深さ約18cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や瓦質土器火鉢などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉に比定される。

SK078出土遺物 (第37図)

第37図1は白磁皿である。高台部分は露胎となる。菊皿(E-4群)と推定される。2は2期に比定される京都系土師器皿である。復元口径11.4cm、器高2.3cmを測る。3は瓦質土器火鉢の底部破片である。



第36図 SK078実測図 (1/30)



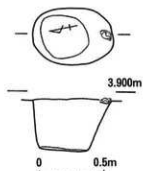
第37図 SK078出土遺物実測図 (1/3)

SK101 (第38図)

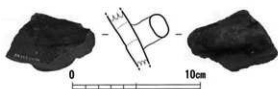
SK101はM20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約63cm、短径約45cm、深さ約40cmを測る。当遺構からは青磁壺の耳部のはか少量の土師器破片が出土しているが、遺構の時期を特定する良好な資料の出土はない。

SK101出土遺物 (第39図)

第39図は産地不明の陶器壺の耳部である。外面に灰釉が掛かる。



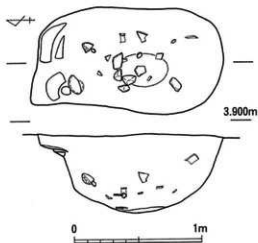
第38図 SK101実測図 (1/30)



第39図 SK101出土遺物実測図 (1/3)

SK109 (第40図)

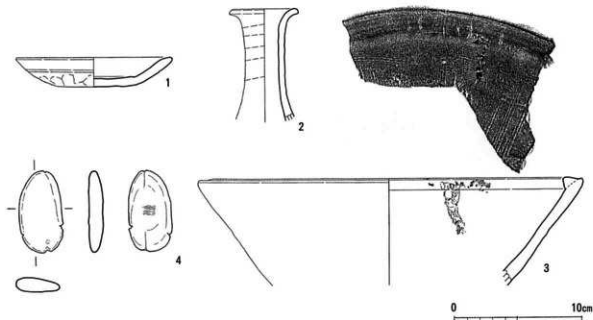
SK109はL20～M20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.5m、短径約0.8m、深さ約60cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や内面に漆が付着した瓦質土器播鉢が出土している。遺構の時期は、出土物から16世紀後葉に比定される。



第40図 SK109実測図 (1/30)

SK109出土遺物 (第41図)

第41図 1は3期に比定される京都系土師器皿で、口径12.0cmを測る。2は備前系陶器瓶である。3は瓦質土器播鉢である。口径縁部内面に三角形の突帯を貼り付ける防長系播鉢と呼称されているタイプである。内面には漆が付着している。復元口径30.3cmを測る。4は石錘である。



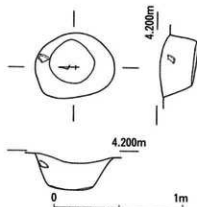
第41図 SK109出土遺物実測図 (1/3)

SK136 (第42図)

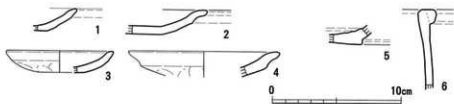
SK136はK21区に位置し、SD020を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約64cm、短径約50cm、深さ約28cmを測る。出土物には京都系土師器皿や在地系土師質土器皿などが認められるが、SD020との切り合い関係から、遺構の時期は近世と推定される。

SK136出土遺物 (第43図)

第43図 1～4は京都系土師器皿である。4は器壁が厚く3期の様相を呈する。5は在地系土師質土器皿の底部破片である。6は瓦質土器火鉢である。



第42図 SK136実測図 (1/30)



第43図 SK136出土遺物実測図 (1/3)

SK175 (第44図)

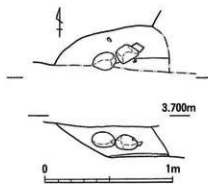
SK175はL21区に位置する遺構である。9次調査区との境に位置し、遺構の半分は検出できなかった。平面プランは楕円形を呈すると思われる。検出した規模は、最長90cm、深さ約25cmを測る。遺構内からは丸罐二つが並ぶように遺棄され、その下部から天目茶碗の破片が出土している。遺構の時期は、出土遺物や周辺の状況から16世紀後葉代に比定される。

SK175出土遺物 (第45図)

第45図は瀬戸美濃系天目茶碗である。復元口径13.1cmを測る。



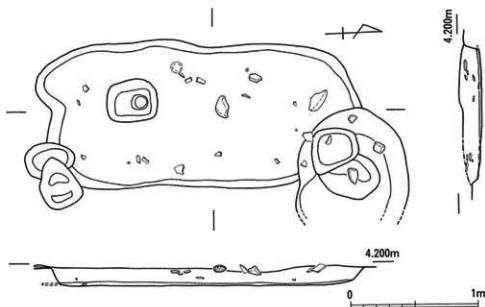
第45図 SK175出土遺物実測図 (1/3)



第44図 SK175実測図 (1/30)

SK200 (第46図)

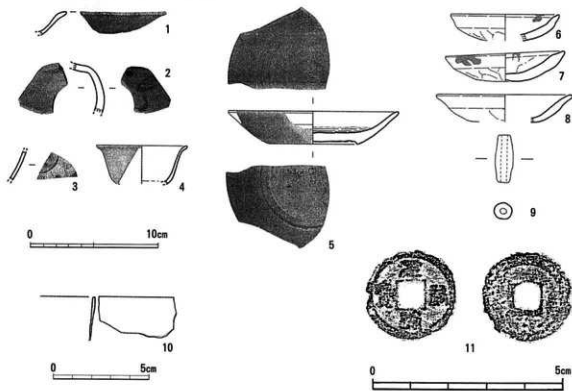
SK200はK20区に位置する不定形の浅い遺構である。SD019や周辺のビットなどに切られ遺構の全容はつかめなかった。規模は長径約2.6m、短径約1.1m、深さ約18cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や青銅製品などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉から末葉に比定される。



第46図 SK200実測図 (1/30)

SK200出土遺物（第47図）

第47図1は中国産白磁椀花皿の口縁部破片である。2は青花瓶の肩部である。3は五彩碗の胴部破片である。4は口縁部が端反りとなる、朝鮮王朝産の白磁小杯である。復元口径7.1cmを測る。5は蒜筒底となる中国産白磁皿である。見込み部分には工具痕が残り、高台部分とともに露胎となる。復元口径13.5cm、底径7.0cm、器高2.5cmを測る。6～8は3期に比定される京都系土師器皿である。6・7には口縁部内外面に煤が付着し、灯明皿として使用されていた可能性がある。9は土師質の管状土鍾である。10は銅碗の口縁部破片と推定する。11は中国北宋代の「元祐通寶」である。初銜年代は1086年で、書体は篆書である。



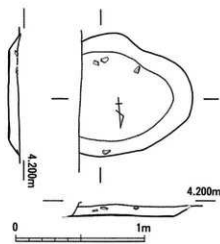
第47図 SK200出土遺物実測図（1～9は1/3、10は1/2、11は1/1）

SK213（第48図）

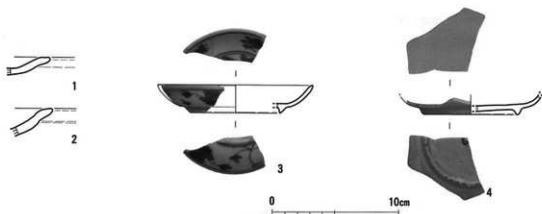
SK213はK20区に位置する遺構で、SD019に切られる。平面プランは楕円形を呈すると思われる。検出した規模は長径約1.0m、短径約0.9m、深さ約10cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や青花皿などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉代に比定される。

SK213出土遺物（第49図）

第49図1・2は京都系土師器皿の口縁部破片である。3は中国景德鎮窯系青花皿である。口縁部が内湾し、内外面に花文を施す。E群に比定される。4は中国産白磁である。高台内に青花で字款（「福」字か）を描き、高台畳付きには砂が付着する。



第48図 SK213実測図（1/30）



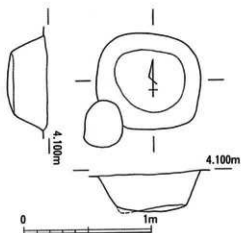
第49図 SK213出土遺物実測図 (1/3)

SK214 (第50図)

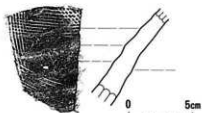
SK214はK20区に位置する遺構である。平面プランはほぼ円形を呈し、規模は直径約80cm、深さ約30cmを測る。当遺構からは土器片のほか備前系陶器播鉢が出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉から末葉に比定される。

SK214出土遺物 (第51図)

第51図1は備前系陶器播鉢である。近世1期bに比定される資料で内面の播目は放射状播目に斜め播目を重ねる特徴をもち、1570年代以降に出現するタイプである。



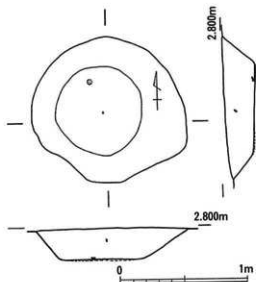
第50図 SK214実測図 (1/30)



第51図 SK214出土遺物実測図 (1/3)

SK243 (第52図)

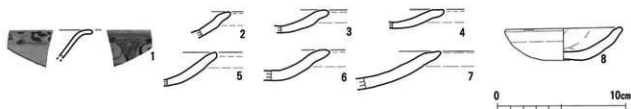
SK243はL21～M21区に位置する遺構で、SX001内に構築されている。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約2.6m、短径約2.3m、深さ約40cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や青花などが出土している。遺構の時期は、16世紀中葉から後葉に比定される。



第52図 SK243実測図 (1/30)

SK243出土遺物 (第53図)

第53図1は中国景德鎮窯系青花皿である。口縁部が端反りとなり、内面には四方禪文を描く。B2群に比定される資料である。2～8は2期に比定される京都系土師器皿である。8は復元口径8.2cm、器高2.3cmを測る。

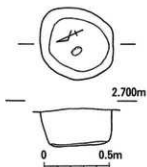


第53図 SK243出土遺物実測図 (1/3)

SK244 (第54図)

SK244はM21区に位置する遺構で、SX001内に構築されている。

平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約65cm、短径約58cm、深さ約30cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿の口縁部破片が出土しているほかは図示可能な遺物の出土はない。遺構の時期は、SX01内に構築されていることや、SK243との関連から16世紀中葉から後葉代に比定したい。



第54図 SK244実測図 (1/30)

SK244出土遺物 (第55図)

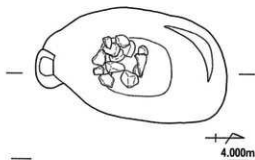
第55図は京都系土師器皿の口縁部破片である。



第55図 SK244出土遺物実測図 (1/3)

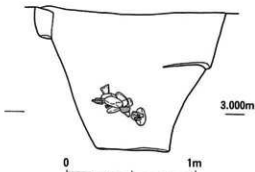
SK100 (第56図)

SK100はL20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.5m、短径約0.9m、深さ約1.1mを測る。埋土下位に人頭大の丸礫が集中して廃棄されていた。遺物は少量の土器片が出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。



SK125 (第57図)

SK125はL20区に位置する遺構でSK069やSP033に切られる。平面プランは楕円形を呈するものと思われ、検出した規模は長径約1.2m、短径約1.1m、深さ約10cmを測る。図示可能な遺物の出土はなかった。遺構の時期は、遺構の切り合い関係から16世紀後葉以前に比定される。



第56図 SK100実測図 (1/30)

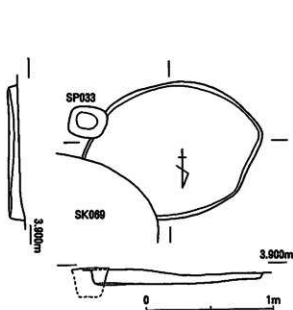
第2節 遺構と遺物

SK135 (第58図)

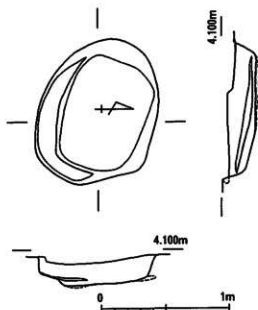
SK135はK21~L21区に位置し、SD020を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.1m、短径約0.9m、深さ約20mを測る。図示可能な遺物の出土はなかった。遺構の時期は、遺構の切り合い関係から17世紀に比定される。

SK233 (第59図)

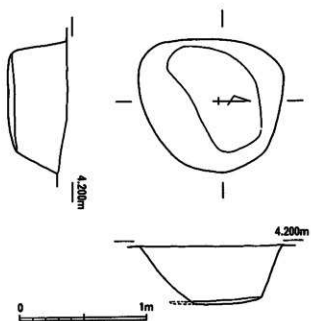
SK233はK20区に位置する遺構で、SP216に切られる。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.1m、短径約1.0m、深さ約50cmを測る。遺物は少量の土器片が出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。



第57図 SK125実測図 (1/30)



第58図 SK135実測図 (1/30)



第59図 SK233実測図 (1/30)

SK030 (第60図)

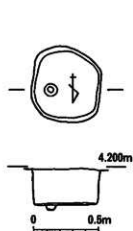
SK030はL20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約60cm、短径約50cm、深さ約30cmを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。土坑として報告するがビット（柱穴）の可能性が高い。

SK031 (第61図)

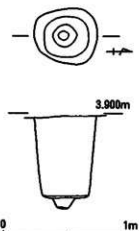
SK031はL19区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約50cm、短径約45cm、深さ74cmを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。土坑として報告するがビット（柱穴）の可能性が高い。

SK087 (第62図)

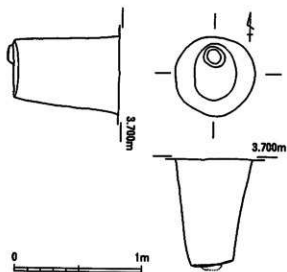
SK087はL21区に位置する遺構である。平面プランはほぼ円形を呈し、規模は直径約0.6m、深さ約0.9mを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。土坑として報告するがビット（柱穴）の可能性が高い。



第60図 SK030実測図 (1/30)



第61図 SK031実測図 (1/30)



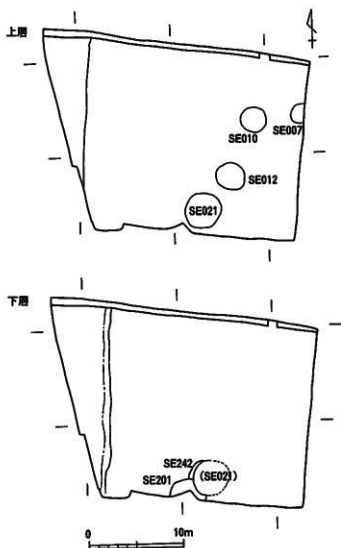
第62図 SK087実測図 (1/30)

4. 井戸

概要 中世大友府内町跡22次調査区では、6基の井戸を検出している。上層遺構群に属するものが4基、下層遺構群に属するものが2基である。上層遺構群に属するものは、16世紀末葉に比定される井戸が主体をなし、当調査区の最盛期に属する。道路伏遺構（SF230）の第Ⅱ期に相当すると考えられる時期である。またこれらの井戸とSF230との位置関係を観察するとSF230が調査区の西側を南北に走っているのに対し、井戸は調査区の東側に構築されていることがみられる。また、道路伏遺構と井戸の間にはピット類が多数構築されていることも観察できる。このことから、「府内古園」にみられる「桜町」（「大友氏館」に東面する町屋）が東西を軸とする短冊状に区画されていたことがみとれる。

下層遺構に属するものは2基で、うち1基は僅かに堀方の痕跡が認められるものの、ほぼ同じ位置にSE021が構築されており、全体の規模は不明である。しかし、2つの井戸とも方形の井形をもち、井筒には曲げ物または桶を使用している。このことから、これらの井戸は14～15世紀代にかけて構築及び埋没したものと考えられる。

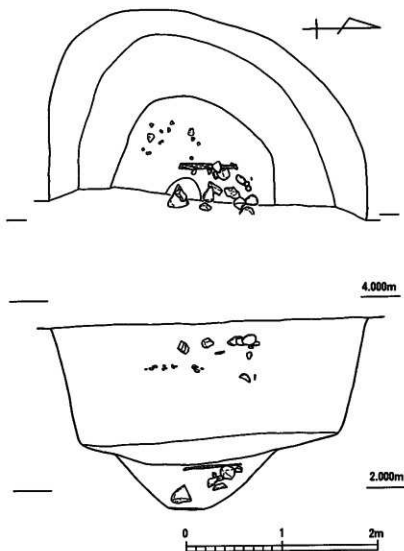
本調査区で検出した井戸のすべては素掘りのものであり、上層遺構の井戸の井戸側には結桶が使用されており、下層遺構の井戸には方形の井戸側が使用されている。



第03図 井戸 (1/400)

SE007 (第64図)

SE007はM20区
の東端に位置する
井戸で、上層遺構
群に属する遺構で
ある。井戸の掘方
は径約2.0mの円
形を呈すると思わ
れ、東半分は調査
区の制限で未発掘
である。井戸側及
び井筒部は完全に
抜き取られており、
平面及び断面でも
確認できなかった
が、床面で井筒に
使用されたと考え
られる結桶の桶材を
検出しており、結
桶を井戸側及び井
筒として使用して
いたものと推定さ
れる。検出面から
約0.5m掘り下げ
たところで増場
(取瓶)が一括廃
棄された状況を確認した。土層の堆
積状況などから井

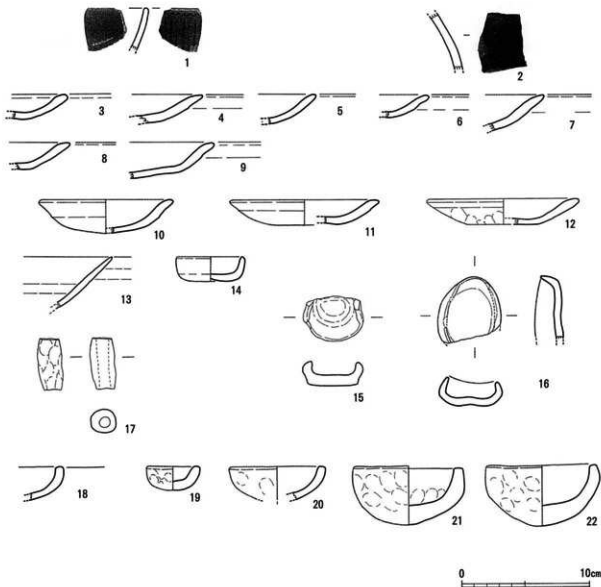


第64図 SE007実測図 (1/40)

戸が廃棄された後に増場類の廃棄のために再度土坑が構築された可能性が高い。なお、井戸底面で漆器碗が出土したが、残りが非常に悪く取上は困難であった。出土した京都系土師器皿の年代観から、当該井戸の廃棄は16世紀中葉から後葉に比定される。

SE007出土遺物 (第65図)

第65図1は中国産青磁碗の口縁部破片である。2は中国産と思われる黒陶陶器蓋の胴部破片である。3~12は京都系土師器皿である。13は在地系土師質土器皿の口縁部破片である。14は焼塩壺の蓋を盛塩用の皿に転用したと思われる。15~16は耳皿である。15は底部に回転糸切り痕が残り、赤褐色系の色調を呈する。16は京都系土師器皿と同じ胎土を用いて手捏ねで作られたもので、浅黄色系の色調を呈する。17は土鏝である。18~22は増場もしくは取瓶である。これらはSE007の中位の土坑状の掘り込みに廃棄された状態で出土しており、図示可能なものを挙げている。



第65図 SE007出土遺物実測図 (1/3)

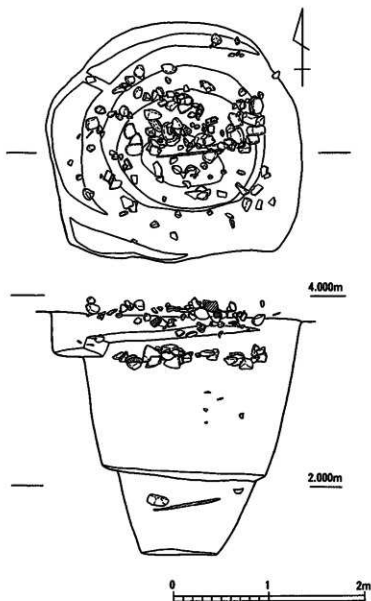
SE010 (第66図)

SE010はL20区東に位置する井戸で上層遺構群に属する遺構である。井戸の掘方は径約2.6mの不整円形を呈し、深さは検出面から約2.1mを測る。掘方の底面には長径約0.9m、短径約0.54m、深さ45cmの水溜部がある。掘方を検出した面では10~20cm大の礫が多数確認され、検出面から約50cm掘り下げた所でも同じような礫の水平堆積が確認された。それより下位には目立った礫の堆積はなく、井戸を埋める際に緩んだ地盤を補強するために礫を敷き詰めたと推定される。なお、水溜部と推定される底面で井戸の廃棄時に伴う祭祀に使用されたと推定される竹が出土している。土層観察からは井戸側の痕跡は確認できなかったが、井戸を廃棄する際にすべて抜き取られたものと推測される。

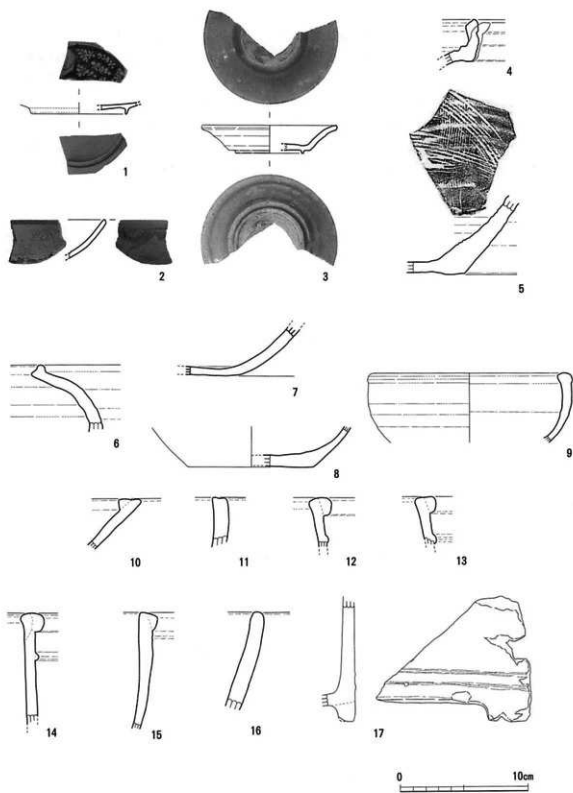
出土遺物には3期に比定される京都系土師器があり、当遺構の廃棄時期は16世紀後葉から末葉に比定される。

SE010出土遺物 (第67~70図)

第67図1は中国景德鎮窯系青花皿で、E群に比定される資料である。2は中国漳州窯系青花碗である。3は瀬戸美濃系陶器灰釉皿である。見込みと高台部は露胎となる。4は備前系陶器擂鉢の口縁部破片である。5は備前系陶器擂鉢の底部破片である。内面の擂目は、放射状の擂目に斜めの擂目が付加されているのが観察できる。近世1期bに比定される資料である。6は備前系陶器甕の口縁部破片である。7~9は備前系陶器鉢である。8・9は同一個体と思われるもので、9の復元口径は16.4cmを測る。10は瓦質土器擂鉢の口縁部破片で7条の擂目が認められる。11~16は瓦質火鉢の口縁部破片である。17は瓦質火鉢の脚部である。第68図1は瓦質土器風炉である。復元口径41.6cm、復元高台径30.4cm、器高9.4cmを測る。2~8は京都系土師器皿である。やや器壁が厚くなっており、3期に比定される。6には墨帯が認められるが残存状況が悪く判読し難い。9~12は京都系土師器杯である。

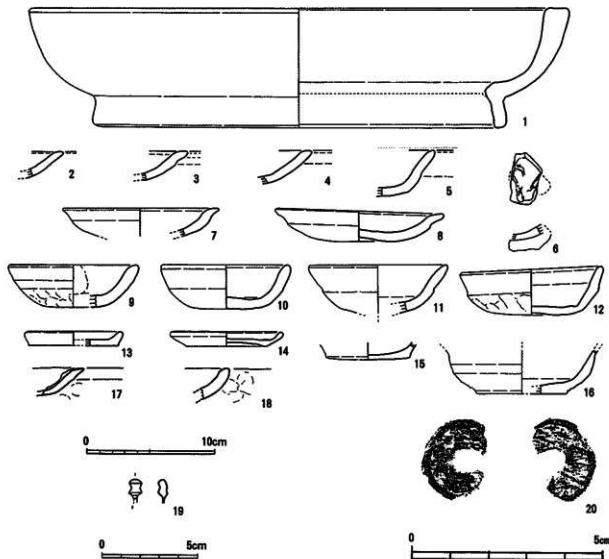


第66図 SE010実測図 (1/40)

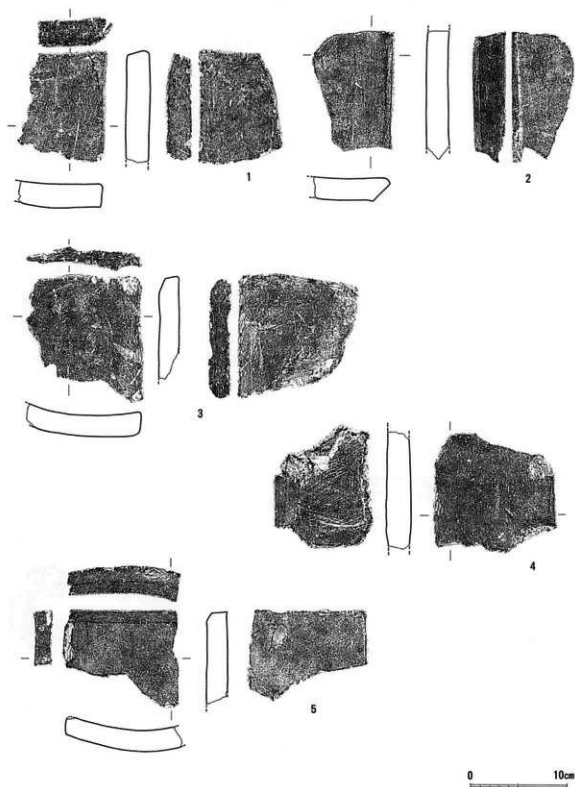


第67図 SE010出土遺物実測図① (1/3)

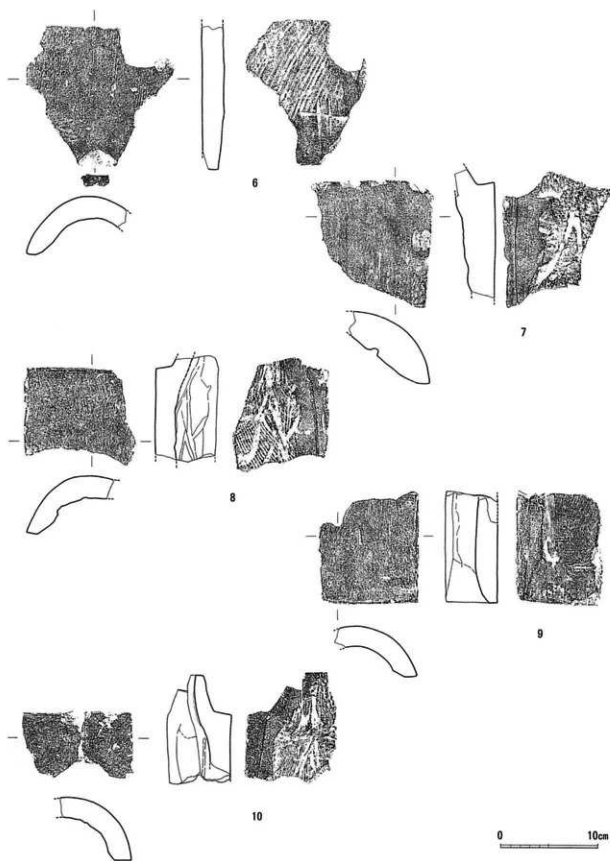
やはり3期に比定されよう。13～16は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕が認められる在り系土師質土器皿である。17・18は取瓶（増埴）の口縁部破片である。17は京都系土師器皿を転用したものである。19は銅製金具である。ピン状になると推定されるが、用途は不明である。20は銅銭である。錆が付着しており銭種は不明である。第69～70図には瓦を図示した。1～4は平瓦である。5～10は丸瓦である。



第68図 SE010出土遺物実測図② (1～18は1/3, 19は1/2, 20は1/1)



第69図 SE010出土遺物実測図③ (1/4)



第70図 SE010出土遺物実測図④ (1/4)

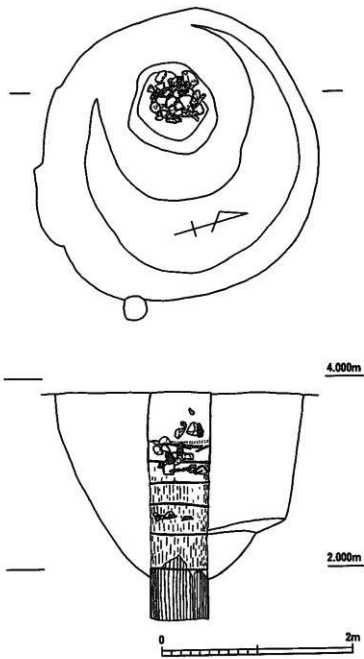
SE012 (第71図)

SE012はL21区東に位置する井戸で上層遺構群に属する遺構である。調査当初、井筒の平面プランを先に検出しており、土坑状の遺構であると認識していた。しかし、掘り下げるうちに底面になかなか達せず、再度周囲を精査した結果、井戸の掘方ラインを検出できた。井戸の掘方は径約3.0mの不整形円形を呈し、深さは検出面から約2.0mを測る。井筒の平面プランは径0.6mの円形である。井戸の土層断面を確認すると、井筒の桶は2段ないし3段以上が重ねられて使用されており、上から1段目及び2段目の結桶は抜き取られている。井筒内からは京都系土師器皿や青銅製小柄・用途不明の鉛製品などが出土している。出土遺物から遺構の時期は16世紀後葉から末葉に比定される。

SE012出土遺物 (第72図)

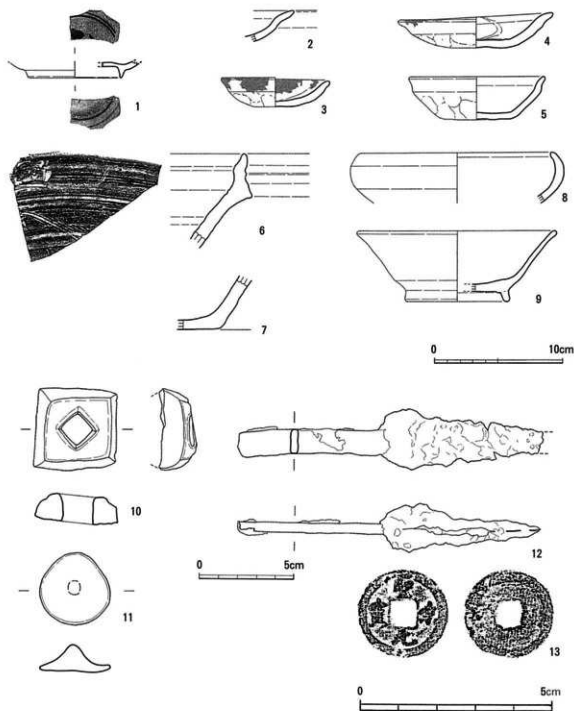
第72図1は碗E群に比定される中国景徳鎮窯系青花碗である。2～5は京都系土師器の皿と坏である。6～8は備前系陶器で6・7

は播鉢、8は鉢である。9は高台付きの土師質土器碗である。10は石臼のフルギアナの部分である。意図的に石臼から削り取られた可能性がある。11は鉛製の製品である。インゴットか。類似品が長崎市「万才町遺跡」⁽⁶⁾の溝状石列3から2例出土している。12は小柄である。13は中国北宋代の「聖宋元寶」で、初鋳年代は1101年である。書体は行書である。



第71図 SE012実測図 (1/40)

(6) 長崎市埋蔵文化財調査協議会『万才町遺跡』- 朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - (1996年) 69頁 第47図24・25



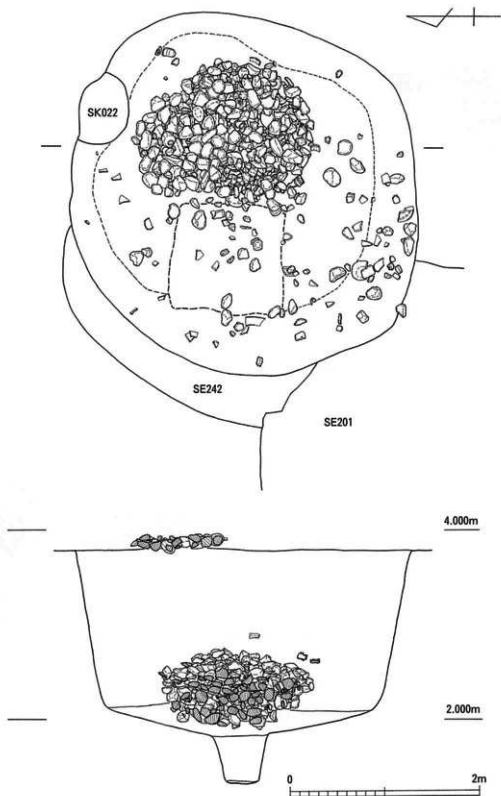
第72図 SE012出土遺物実測図 (1~9は1/3、10~12は1/2、13は1/1)

SE021 (第73図)

SE021はL21区に位置する井戸で上層遺構群に属する遺構である。次項以下で記述するSE201・SE242と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE242→SE201→SE021である。井戸の掘方は径約3.7mの不整円形を呈し、深さは検出面から約2.0mを測る。掘方の埋土上位には大型の河原礫や拳大の礫が集中して投棄されている部位があり、当該部位を井筒と想定し断ち割り調査を行った。その結果、井筒は井戸廃棄時に完全に抜き取られており、井戸側は観察できなかった。また、水溜部直上に大型の河原礫や拳大の礫を投棄している状況が観察された。井戸廃棄時に大量の礫を投棄する状況は他の

第2節 遺構と遺物

調査区でも多々観察されており、井戸廃棄に関わる祭祀的な行為である可能性が高い。また、井戸の掘方底面、SE021の井筒の西側で方形の井形をもつSE242の井筒部を検出した。SE242が廃棄されたのち、SE201がすぐ近くで掘り直され、それが廃棄されるとSE242とほぼ同じ位置にSE021を構築し



第73図 SE021実測図 (1/40)

直している状況がうかがえる。SE021の掘方からの出土物には2期に比定される京都系土師器皿の口縁部破片が出土し、井筒の抜き取りのために掘られた部位からは3期に比定される京都系土師器皿や近世1期に比定される備前系陶器播鉢が出土している。このことから当遺構の構築年代を16世紀中葉、廃棄年代を16世紀後葉から末葉に比定しておきたい。

SE021出土遺物（第74～77図）

第74図1は中国涇州窯系青花皿の口縁部破片である。口縁部が端反りとなるタイプである。

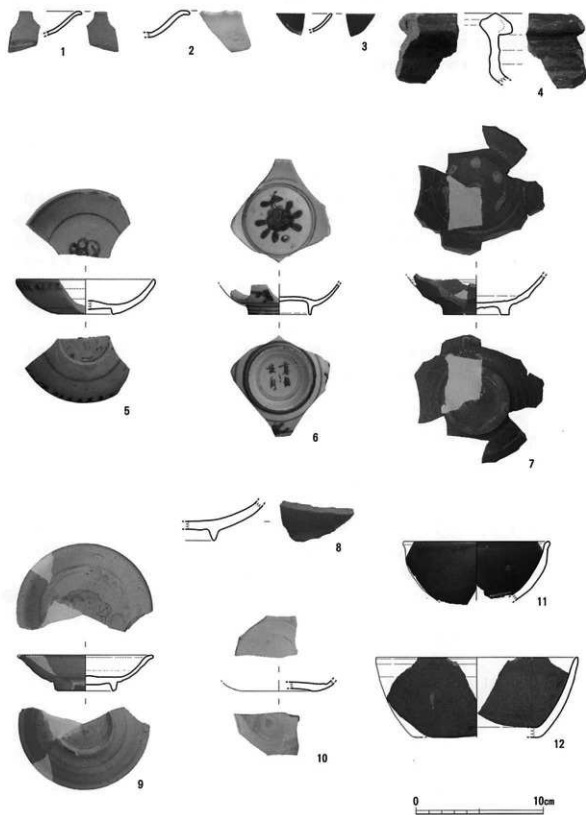
2は中国産白磁皿の口縁部破片である。口縁部が稜花を呈する。3は褐彩磁器皿の口縁部破片である。4は褐釉陶器壺の口縁部破片である。口縁部は折り返しており、断面形状が方形を呈する。5は中国景德鎮窯系青花皿である。いわゆる「蕃菊底」をもち、高台内は露胎となる。口縁はかるく内湾気味におさまる。見込みには捻花を描く。復元口径10.9cm、底径4.4cm、器高2.8cmを測る。皿C群に比定される資料である。6は中国景德鎮窯系青花碗である。見込み部分がゆるやかに盛り上がる特徴をもち、いわゆる「饅頭心」碗である。見込みには折菊を描き、高台内の字款は「萬福収同」である。底径は5.1cmを測る。碗E群に比定される資料である。7は朝鮮王朝系雑釉陶器碗である。内外面に釉が掛かり、見込みと高台登付きには目跡が5カ所確認できる。胴部は大きく開くが、腰部で外反気味に立ち上がる。底径5.2cmを測る。8は青磁皿の底部破片である。9・10は中国産白磁皿である。9は見込み部分は蛇の目軸刺ぎ、底部は腰部から露胎となる。口縁部は端反りとなる。焼きが非常に悪く、露胎部分は淡黄色に発色している。口径10.7cm、底径4.8cm、器高2.8cmを測る。10は口壳の皿で、横田・森田編年のIX類に比定される資料である。混入か。11・12は瀬戸美濃系陶器碗である。11は天目茶碗である。12は丸碗で、灰オリーブ色の釉が掛かる。大窯3期（16世紀後葉）⁽¹⁾に比定される資料である。

第75図1～15は浅黄色の色調を呈する京都系土師器皿である。1～5は掘方出土のものである。器壁が薄く2期に比定される。6～15は器壁が8mmを超え、厚くなっており、3期に比定される資料である。口径に注目すると8cm以内のもの（6）、8～9cmのもの（7～9）、11cm大のもの（10）、12cmのもの（11～14）、13cmを超えるもの（15）と5法量に細分される可能性がある。6の内面は被熱し、銅などが付着しており増埴に転用されたものである。7の口縁部には煤が付着し灯明皿として使用されたものである。9は内外面全体が煤で黒くなっている。16～25は在地系土師質土器皿である。26は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。27・28は土師質土器鍋の口縁部破片である。29は東播系の瓦質土器である。妻の胴部か。30は防長系鍋の脚部である。31～34・39は備前系陶器播鉢である。いずれも近世1期に比定される資料である。35・36は備前系陶器壺の口縁部破片である。37は備前系陶器壺の肩部破片である。38は龜山系焼締陶器壺の胴部破片である。40・41は備前系陶器壺の底部破片である。42は備前系陶器鉢である。口縁部はやや内湾気味となる。口径は21.4cmを測る。

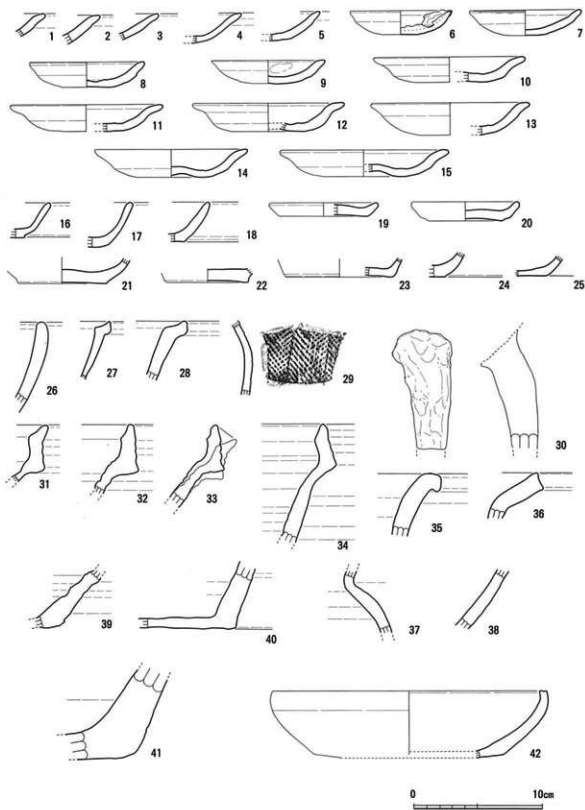
第76図には瓦を図示している。1～2は平瓦である。3～6は丸瓦である。

第77図1はガラス小片である。2は石臼（上臼）である。

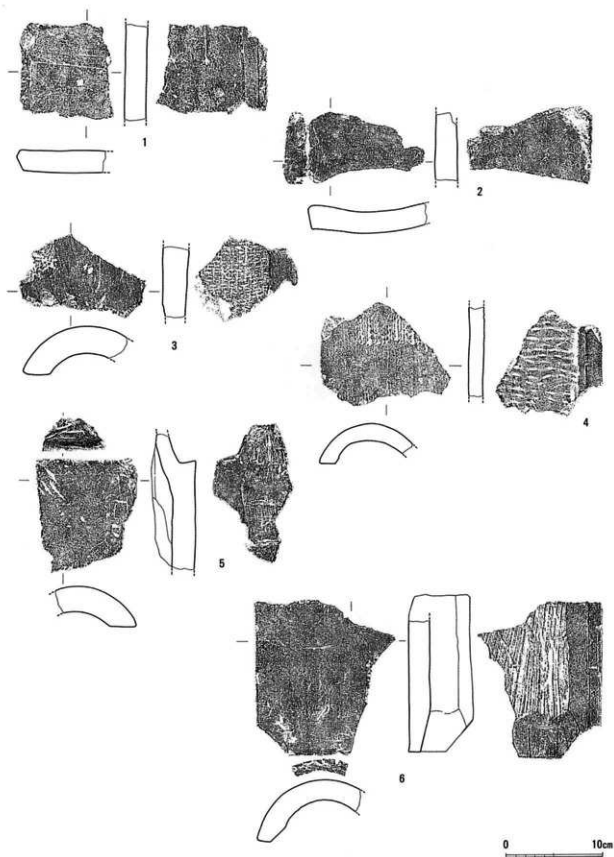
(1) 藤沢良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市文化財センター研究紀要』第10輯（2002年）



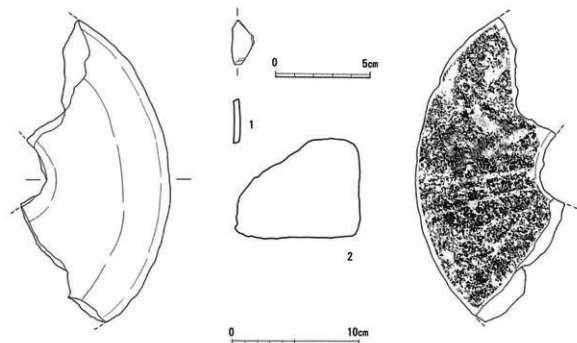
第74図 SE021出土遺物実測図① (1/3)



第75図 SE021出土遺物実測図② (1/3)



第76図 SE021出土遺物実測図③ (1/4)



第77図 SE021出土遺物実測図④（1は1/2、2は1/3）

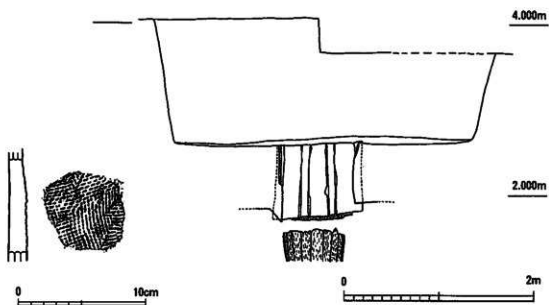
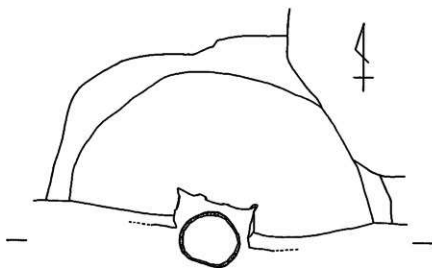
SE201（第78図）

SE201はL21区に位置する井戸で下層遺構群に属する遺構である。前項で記述したSE021、次項で記述するSE242と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE242→SE201→SE021である。平成13年度に当調査区の南で調査された9次調査の際にほぼ半分が検出された、方形の井戸側を有する井戸であることが判明している。当調査区ではその北半分が検出された。検出した井戸の掘方は径約3.8mの不整形円形を呈すると推定される。調査区の制限と壁の崩落の危険性があるため掘方全体を掘り進め、井筒部分の確認を行った。検出面（標高約4.00m）から1.2mほど掘り下げたところで方形の井戸側約2分の1を検出した。井戸側は隅柱を有し、その間に2本の縦板を配置しているもので、おそらくこの縦板に横板を渡していたものと推定される。草戸千軒遺跡でなされた井戸の形態変遷¹⁾によれば「方形隅柱横板型」に相当するものと思われる。また、水溜部には径約60cmの桶が据えられている。図示可能な遺物の出土はなかったが、遺構の時期は9次調査の調査結果と井戸の形態や切り合い関係から14～15世紀代に比定しておきたい。

SE201出土遺物（第79図）

第79図はSE201の井筒から出土した資料である。表面に矢羽状の平行タタキが施される。東播系の須恵質土器である。甕の胴部か。

(8) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ—中世瀬戸の集落遺跡—』(1996年)

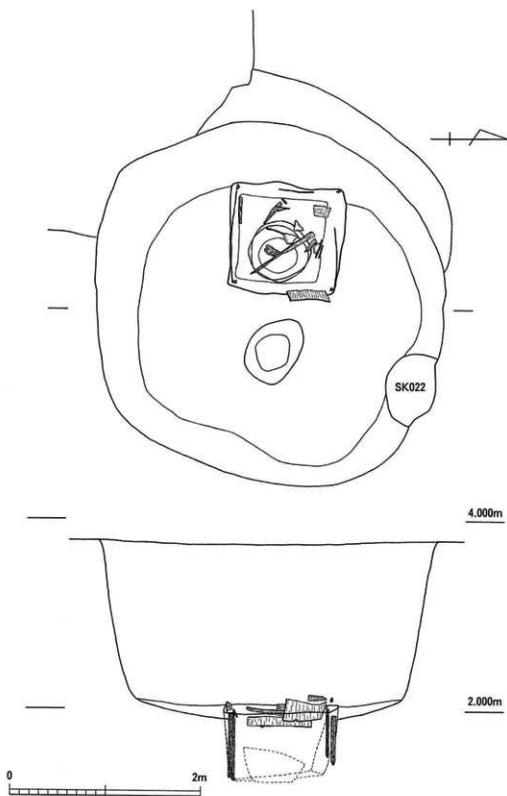


第79図 SE201出土遺物実測図 (1/3)

第78図 SE201実測図 (1/40)

SE242 (第79図)

SE242はL21区に位置する井戸で下層遺構群に属する遺構である。前項で記述したSE021・SE242と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE242→SE201→SE021である。SE021の調査中に検出した井戸である。井戸の掘方はSE021がほぼ同じ位置に構築されており、また、SE201にも切られることからSE021の西側に僅かに認められるのみで、その全体像は不明である。SE021の底面では水溜部に方形の井戸側が認められる。井戸側の残りは非常に悪いが、隅柱を有し、その間に横板が観察され、SE210で前述の「方形隅柱横板型」と推定される。また、水溜部には径約60cmの曲物が掘えられている。井戸の形態や遺構の切り合い関係から遺構の時期は14世紀代に比定しておきたい。



第80図 SE242実測図 (1/40)

5. その他の遺構

概要 本項目では土取痕と考えられる大規模な落ち込み遺構（整地層）と京都系土師器皿が主体となる土器の大量廃棄遺構5について記述を行いたい。本調査区南東部で確認された落ち込み遺構（SX041・SX01）は、南に隣接する9次調査区で確認されたものと一連のものである。調査当初は土層の判別が困難で、上面の部分をSX041とし掘り下げた。その後、SX041の下層に整地層を確認しSX01とした。上面のSX041と下層のSX01では若干の時期差があるものと思われるが、さほど大きなものではないと考えられる。このような落ち込みは12次調査区や18次調査区などでも確認されている。当調査区の落ち込み遺構の埋土中からは16世紀後葉に比定される遺物が出土しており、16世紀の後葉代に土取や整地（埋め立て）などの大型事業が行われたことが推測させられる。また、これらの落ち込み遺構は後に整地され、その上面に町屋遺構が展開するが、そこから出土する遺物も16世紀後葉代のものであり、時期差を感じさせない。つまり、16世紀中葉代に「大友氏館」の前面で大規模な土取等の事業が行われ、後葉代には土取によって落ち込んだ場所を埋め戻し、整地しているわけである。この一連の事業は何を意味するものかについては、宗廟や義統が支持した「土井廻廊」に関わるものとも想定できるが、詳細については今後の調査・研究を待ちたい。

土器の大量廃棄遺構については5カ所で確認している。僅かに在地系土師質皿や陶磁器類・その他の遺物が混ざるものの、いずれも京都系土師器皿がその主体をなしている。これら土器の大量廃棄遺構は「大友氏館」の前面および「大友氏館」内で顕著にみられ、一般的な町屋跡跡ではみられないことから、「大友氏館」に関連する何らかの行事によるものと推測される。また、地盤が緩くなった所に土器を敷き詰め、地固めに利用したことも考えられる。

また、2基の掘立柱建物と6基の欄列状の柱穴の並びが確認された。これらの欄列は当調査区内の町屋の1単位と考えることも可能で、隣接する欄列の間は路地と捉えることができよう。

SX041・SX01（第2図参照）

SX041及びSX01はL21～M21区に位置する掘り込み遺構である。南側は9次調査区に延びることが確認されているが、東側は調査区の制限から確認できていない。調査当初の認識では上層のSX041とした落ち込み状の遺構で中世面の最下層に達したと思われたが、サプトレをいれ、土層の確認をした結果、一層遺物を包含する層があることが確認された。そのため、下層をSX01として再度掘り下げ、遺物の取上を行った。SX01には2期に比定される京都系土師器皿など、SX041から出土する遺物に比べ、やや古い様相を呈する遺物が認められる。また、SX01上に土坑（SK243・SK244）などが構築されていることから、16世紀中葉にはこの落ち込みは存在していたといえよう。そして、SX041には16世紀後葉代の遺物が認められるため、この時期にSX041は埋め立てられたと推定される。さらに、この上に大友館前面の町屋が構成されていたと考えられる。なお、この落ち込みに関しては12次調査区においては人為的なものであることが確認されているが、当該調査区のものについては、人為的なものか否かについては確認できなかった。以下、上層（SX041）出土遺物と下層（SX01）出土遺物とを分けて報告する。

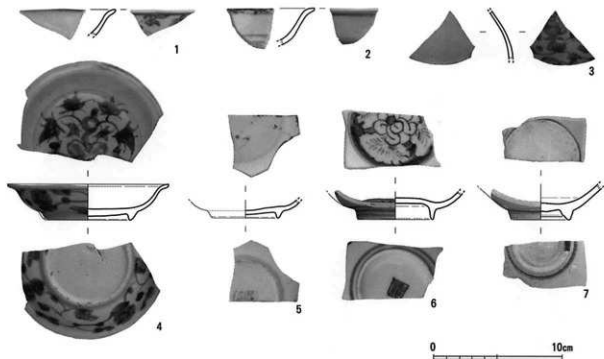
SX041出土遺物（第81～83図）

第81図1～2は口縁部が端反りとなる中国産青花皿の口縁部破片である。1は中国景德鎮窯系で、2は中国漳州窯系である。3は中国景德鎮窯系青花皿の胴部破片である。4は口縁部が端反りとなる中国景德鎮窯系青花皿である。復元口径12.2cm、底径6.8cm、器高2.7cmを測る。高台はへう削りで、斜めに面がとられ砂敷きで焼成されているため、高台皿付きは露胎となる。見込みと外面に花樹を描く。高台内に字款はなく、皿B1群に比定される資料である。5も中国景德鎮窯系青花皿である。内外面に文様は認められないが、高台内に字款（「福」字か）が認められることから、皿B2群に比定

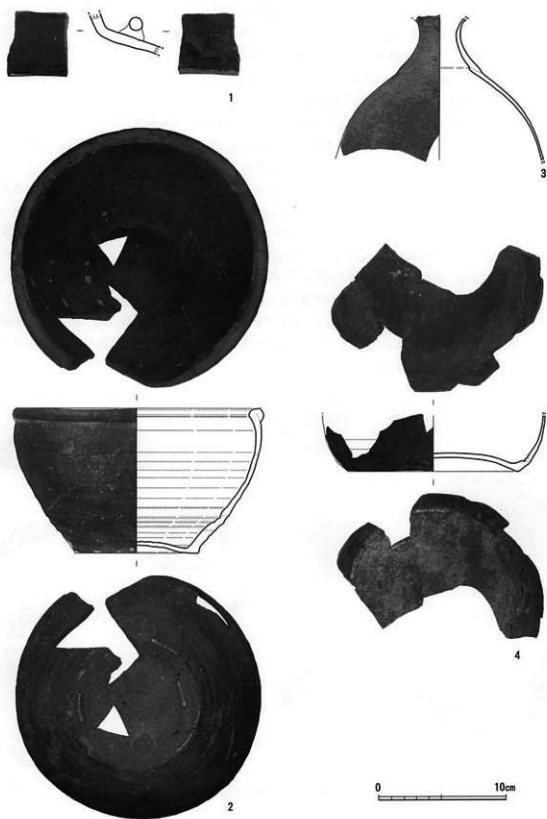
される資料である。6は見込み部分がゆるやかに盛り上がる特徴をもつ、いわゆる「餛飩心」碗の底部破片である。底径5.7cmを測る。見込みには折菊が描かれ、高台内には四角の枠取りした「福」字が置かれる。碗E群に比定される資料である。7は中国産白磁碗の底部破片である。見込み部分と底部は露胎となり、外面腰部と見込みに青花による界線がめぐる。

第82図1は褐釉陶器壺の耳部である。2は中国南部産焼締陶器鉢である。口縁部がやや内側に張り出し、玉縁状になるもので、鉢B類に比定される資料である。底部は薄造りで上げ底状の形態を呈し、貼り付けられている。口縁部上端には目跡と思われる痕跡が6カ所観察される。体部内外面には薄い褐釉が掛かり、底部内外面は露胎となる。口径19.5cm、底径9.6cm、器高11.2cmを測る。3・4は同一個体と思われる朝鮮王朝産陶器で舟徳利と呼称される瓶である。

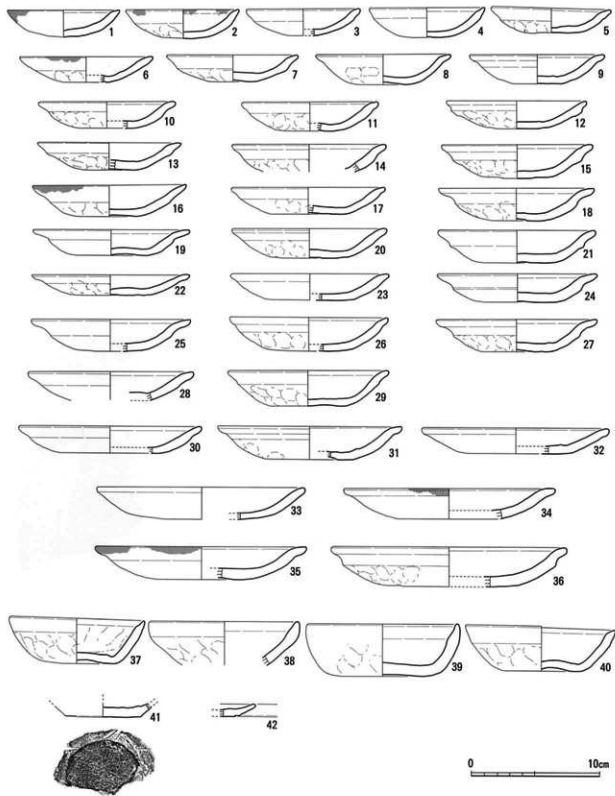
第83図1～36は浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿である。2期を主体とする資料であるが、36は口径18.3cmを測り、器壁が厚く、器高3.1cmと高いことから、新しい様相を示す可能性がある。1～35の口径に注目すると、9cm前後のもの(1～5)、10～11cm前半のもの(6～13)、11cm後半～12cm大のもの(14～29)、14cm大のもの(30～32)、16cm大のもの(33～35)と5法量に細分される可能性がある。また、内外面に煤が付着しているもの(1・2・6・16・34・35)が認められることから、本遺構出土の京都系土師器皿は食器(カワラケ)として使用されたものと、灯明皿として転用されたものが混在して出土していることが観察できる。37～40は京都系土師器坏である。41は底部に糸切り痕が残り、赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。42は白色系の胎土を使用し、薄手の器壁をもつ土師質土器皿の口縁部破片である。



第81図 SX041出土遺物実測図①(1/3)



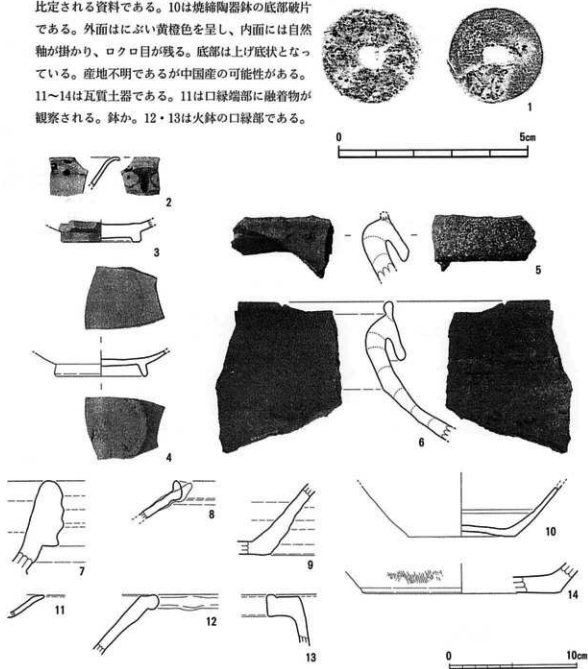
第82図 SX041出土遺物実測図② (1/3)



第83図 SX041出土遺物実測図③ (1/3)

SX01出土遺物 (第84~86図)

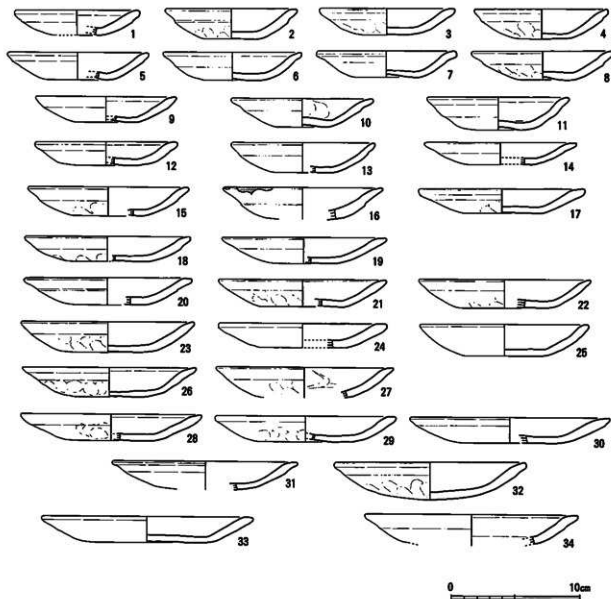
第84図1は銅銭である。錯のため銭貨名等は不明である。2は中国景德鎮窯系青花皿である。口縁部は端反りとなり、B群に比定される資料である。3は青磁碗の底部である。4は皿の底部破片である。内外面は露胎となるが高台部分には一部緑色の釉が掛かるが意図的なものではない。白磁か。5・6は常滑系陶器甕の口縁部破片である。口縁部の緑帯幅から5は14世紀後半代、6は14世紀終末から15世紀前半代に比定される資料である。7は備前系陶器甕の口縁部破片で中世6期に比定される資料である。8は東播系の須恵質土器捏鉢の口縁部破片である。9は備前系陶器搥鉢で、中世6期以前に比定される資料である。10は焼締陶器鉢の底部破片である。外面にはふい黄橙色を呈し、内面には自然釉が掛かり、ロクロ目が残る。底部は上げ底状となっている。産地不明であるが中国産の可能性もある。11~14は瓦質土器である。11は口縁端部に融着物が観察される。鉢か。12・13は火鉢の口縁部である。



第84図 SX01出土遺物実測図① (1(銭)は1/1、2~14は1/3)

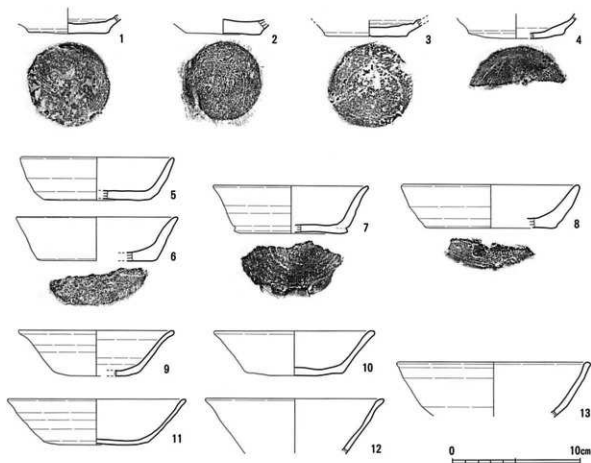
13は口縁部を折り倒したように外に張り出し、端部を上方につまみ上げている。方形の浅鉢型の器形を呈するものと思われる。14は東播系の須恵質土器鉢鉢である。内面に5条の撞目が認められ、外面にはハケ目がわずかに残る。

第85図1～34には浅黄色系の色調を呈する京部系土師器皿を提示した。2期に比定される資料であるが、上層のSX041出土のものより器壁が薄く、やや古い様相を呈するものである。口徑を観察すると、9cm大のもの(1)、10～11cm大のもの(2～14)、12～13cm大のもの(15～27)、14cm大のもの(28～32)、16cm大のもの(33・34)と5法量に細分される可能性がある。10・27には「の」字状のナデあげ跡が認められる。16の口縁部には煤の付着が認められ、灯明皿と使用されたものであろう。



第85図 SX01出土遺物実測図② (1/3)

第86図1～4は赤褐色器の色調を呈し、底部に糸切り痕が残る在地産の土師質土器皿である。内外面にはロクロ目を有するものである。5～8は断面箱形を呈し、底面に糸切り痕が残る在地系土師質土器杯である。14世紀代に位置付けられる資料である。9～13はへら切りによる製作技法で作られた土師質土器杯である。9世紀代の所産である。



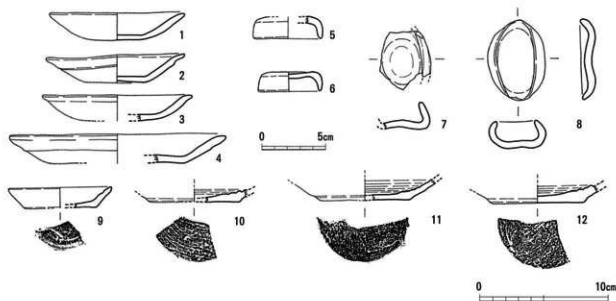
第86図 SX01出土遺物実測図③ (1/3)

SX004 (第2図参照)

SX004はL19～M20区に位置する遺構である。北側は調査区の制限から確認できていないため、詳細な実測図はない。検出した規模は、東西約5.0m、南北約1.5m、深さ約1.0mである。遺構内からは大量の京都系土師器皿が出土し、一時期に大量に廃棄された様子がうかがわれる。出土した京都系土師器皿は完形のものほとんどなく、いずれも打ち割られた状態で廃棄されている。現時点では土坑状になるものと考えられるが、前述のSX001同様、落ち込み(掘り込み)遺構になることも考えられ、今後北側の現道部分の調査を待ちたい。

SX004出土遺物 (第87図)

第87図1～4はSX004出土の京都系土師器皿の中で比較的残りがよく、実測に耐えられるものを図示した。2期に比定される資料である。5・6は焼塩壺の蓋である。7・8は耳皿である。9～12は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕が残る在地系土師質土器皿である。内面にはロクロ目が残る。なお、当該遺構から出土した資料の破片数は、京都系土師器皿2318個（口縁部11617個・胴部ほか854個）、耳皿3個、在地系土師器皿7個、陶磁器7個、瓦7個を数え、圧倒的に京都系土師器皿の個数が多い。



第87図 SX004出土遺物実測図 (1/3)

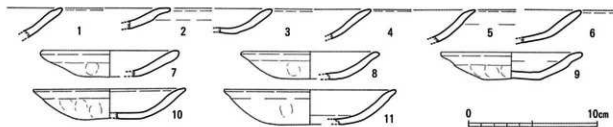
SX005 (第2図参照)

SX005はL20区に位置する土師器の大量廃棄遺構である。明確な掘り込みは認められなかったが、東西約1.0m、南北約1.5mの範囲に大量の京都系土師器皿が打ち割られた状態で廃棄されていた。

土坑や掘り込みを伴わないことから、やや窪んだ土地もしくは雨等で緩んだ地盤を補強するために土器を敷き詰めたとも考えられる。

SX005出土遺物 (第88図)

第88図1～11はSX005出土の京都系土師器皿の中で比較的残りがよく、実測に耐えられるものを図示した。2期に比定される資料である。当該遺構から出土した遺物の破片数は、京都系土師器皿870個（口縁部471個、胴部399個）、在地系土師質土器皿8個、陶磁器1個であり、ほとんどが京都系土師器皿で占められる。



第88図 SX005出土遺物実測図 (1/3)

SX006 (第2図参照)

SX006はL20～L21区に位置する土師器の大量廃棄遺構である。明確な掘り込みは認められなかったが、東西約2.5m、南北約4.0mの範囲に大量の京都系土師器皿が打ち割られた状態で廃棄されていた。SX005同様、土坑や掘り込みを伴わないことから、やや窪んだ土地もしくは雨等で緩んだ地盤を補強するために土器を敷き詰めたとも考えられる。また、当遺構の上位には土坑(SK040)やピットが構築されている。

SX006出土遺物 (第89図)

SX006として取り上げた遺物の破片数は、京都系土師器皿6876個(口縁部4218個、胴部ほか2658個)在地系土師質土器皿52個、瓦3個、陶磁器14個、その他14個である。その内、図示可能な代表的なものを第90図に提示した。1～44は京都系土師器皿である。2期に比定される資料を主体とするが、35～38・40・43はやや器壁が薄く、古い様相を呈する可能性がある。また、口径を比較すると、10cm以下のもの(1)、10～12cmのもの(2～20)、12～15cmのもの(21～38)、15cm大のもの(39～42)、16cm大のもの(43・44)(グラフC参照)と5法量に細分される可能性がある。45～49は焼塩壺の蓋である。50・51は耳皿である。52は在地系土師質土器坏である。53は油煙壺である。表面に蚊龍文、裏面に「李家因」の文字があり、奈良興福寺二階坊で作られた製品である。共存遺物から、16世紀代の所産と推定される。類似品が中世大友府内町跡第28次調査区K-18区の擾乱部分⁽⁹⁾から出土している。他に福井県一乗谷朝倉氏遺跡第40次・44次調査区⁽¹⁰⁾で出土事例がある。

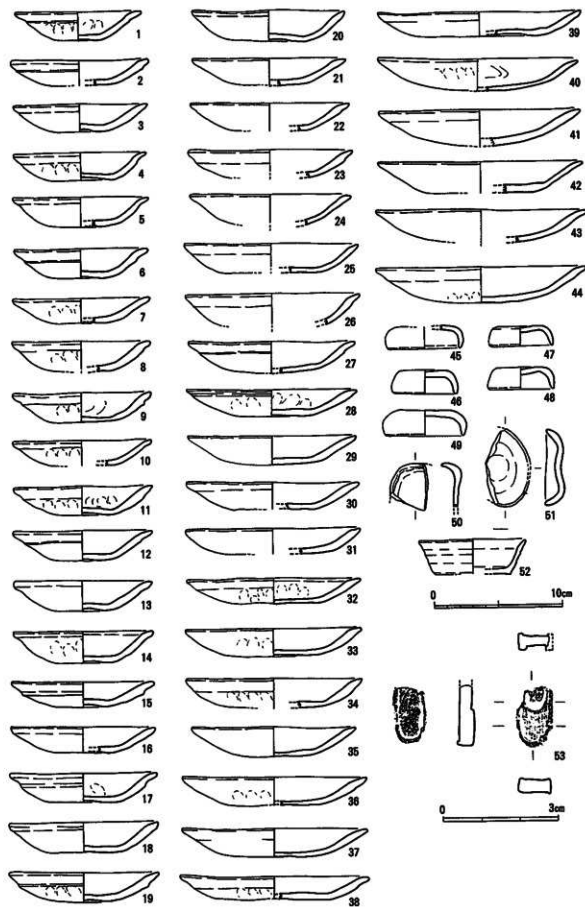
油煙壺

SX236 (第2図参照)

SX236はM20区に位置する土師器の廃棄遺構である。遺構検出が困難なため北側にサブトレを入れたことと、東側は調査区の制限があることにより、遺構の全体像ははっきりしない。そのため詳細な実測図とはとれていない。埋土中からは京都系土師器皿の破片が大量に出土しているが、いずれも小破片のみで図示可能なものはない。しかし、すぐ西のSX004や周辺の状況から16世紀後半～末葉にかけての時期に比定される。

(9) 本書第2分冊第6章、第301図2参照

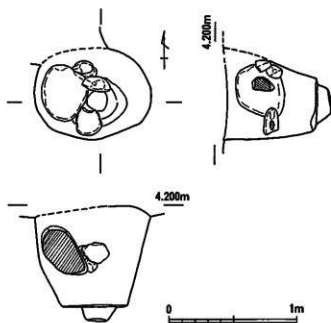
(10) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅶ 第44次 第17次調査』(2000年)28頁第20図818参照



第89図 SX006出土遺物実測図 (1~52は1/3、53は1/1)

SP160 (第90図)

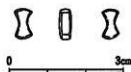
SP160はK20区に位置する柱穴遺構である。平面プランは楕円形を呈し、長径約90cm、短径約70cm、深さ約90cmを測る。遺構中位には柱痕を圍繞するように、40cmを超える大形の丸礎や小形の礎が検出されている。本来、比較的大形の柱が建っていたと推定される遺構である。しかし、当遺構に対応するような柱穴はほかに確認できておらず、轆などを立てた柱など、単独で利用された可能性も考えられるが、遺構の性格は不明である。年代を特定できるような遺物の出土はなかったが、周辺の状況から16世紀代の遺構と推定される。



第90図 SP160実測図 (1/30)

SP160出土遺物 (第91図)

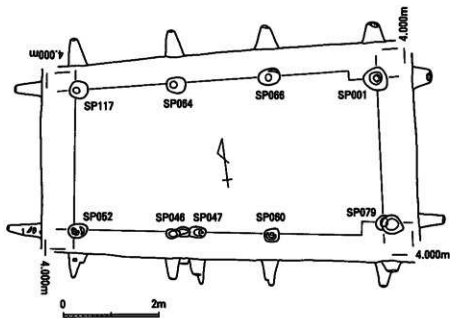
第91図は崩型分銅である。柱穴中位から出土したもので、長さ7mm、厚さ3mm、重さ0.4gと小形のものである。



第91図 SP160出土遺物実測図 (1/1)

SB01 (第92図)

SB01はL19~20区に位置する掘立柱建物である。柱間は東西約2.0m、南北約2.9~3.0mを測る。

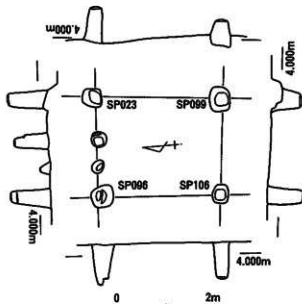


第92図 SB01実測図 (1/80)

北側は調査区の制限により確認できていないが、現状で1×4間の建物が復元できる。町屋の裏手に位置し、倉庫的な建物と推定される。

SB02 (第93図)

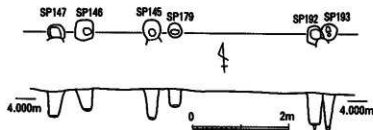
SB02はK20区に位置する掘立柱建物である。柱間は東西約2.0m、南北約2.5mを測る。道路状遺構(SF230)に面するように1×1間の建物が復元できる。また、SB04とSB05のほぼ中央にあり、町屋の裏に位置することから、SB04とSB05とで区画される町屋の入り口(門など)の建物が推定される。



第93図 SB02実測図 (1/80)

SB03 (第94図)

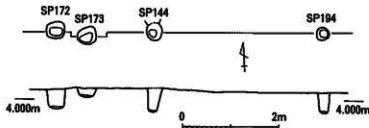
SB03はK19区に位置する柱穴列で隣接する柱穴が2基ずつ3組あり、計6基の柱穴の並びが確認された。隣接する柱穴は立て直しの可能性が考えられる。また、SB04を構成する柱穴と切り合い関係があるものもみられ、その構築順はSB03→SB04である。柱間は2.0mと3.4mを測り、SB04とほぼ同じ間隔で建てられている。このことから、SB04をSB03に建て替えたものと推定される。



第94図 SB03実測図 (1/80)

SB04 (第95図)

SB04はK19区に位置する柱穴列で、4基の柱穴が確認された。SB03との切り合い関係があり、その構築順はSB03→SB04である。柱間はSB03とほぼ同じ間隔で建てられている。

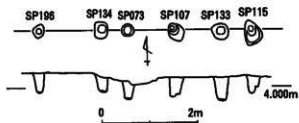


第95図 SB04実測図 (1/80)

SB05 (第96図)

SB05はK20区に位置する柱穴列で、6基の柱穴が確認された。

柱間を検討すると、約1.5mと2.0mの間隔で建てられていることが看取でき、建て替えが行われた可能性がある。



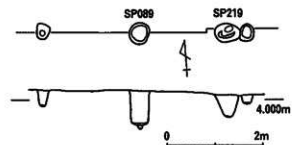
第96図 SB05実測図 (1/80)

SB06 (第97図)

SB06はK20区に位置する柱穴列で、3基の柱穴が確認された。

柱間はほぼ2.0mである。

SB05とは80~90cmの空間があり、二つの柱穴列の間は路地的な空間が推定される。



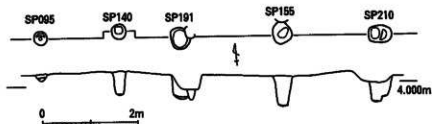
第97図 SB06実測図 (1/80)

SB07 (第98図)

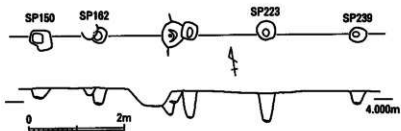
SB07はK20~K21区に位置する柱穴列で、5基の柱穴が確認された。柱間は1.2~2.0mの間隔である。

SB08 (第99図)

SB08はK21区に位置する柱穴列で、5基の柱穴が確認された。柱間は1.2~2.0mの間隔である。



第98図 SB07実測図 (1/80)



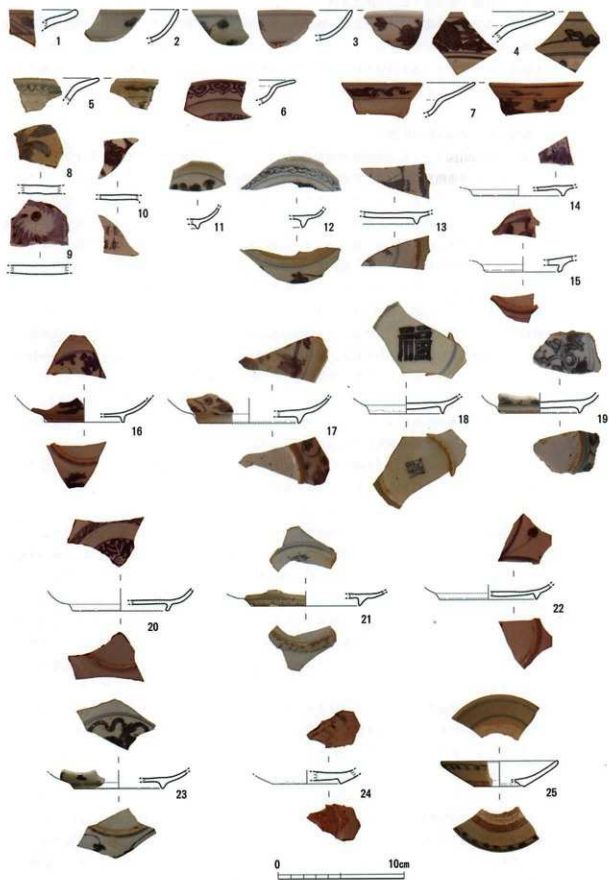
第99図 SB08実測図 (1/80)

6. 包含層・整地層・ピット出土遺物

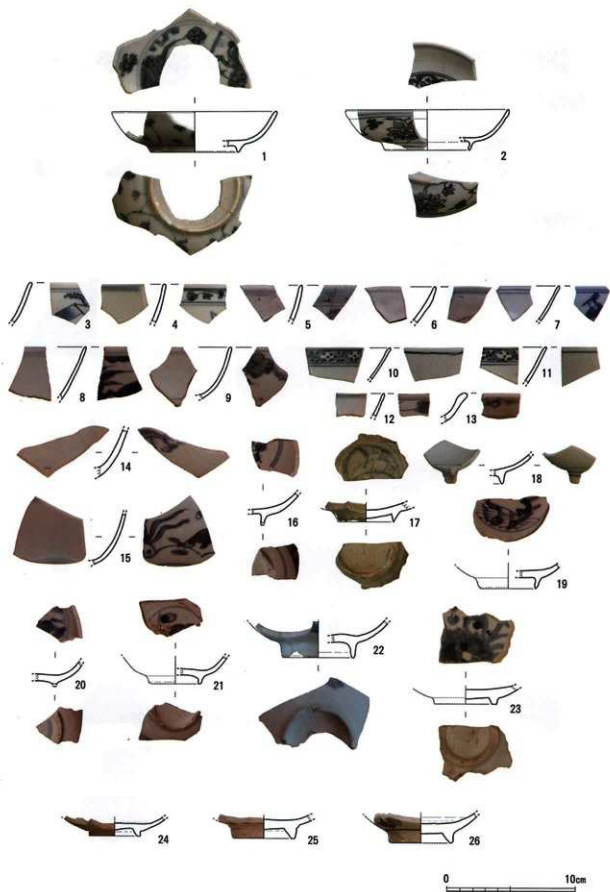
概要 本項目では遺構以外の包含層・整地層などから出土した遺物の内、残存状況の良いものや注目すべき物を選別して報告する。また、柱穴やピットから出土した遺物の中で注目すべき物についても便宜上、本項目で記述を行いたい。報告すべき資料は多数におよぶが、紙幅の関係から、報告者が特に重要と判断した少数の資料に留まる。

陶磁器類 (第100図～107図)

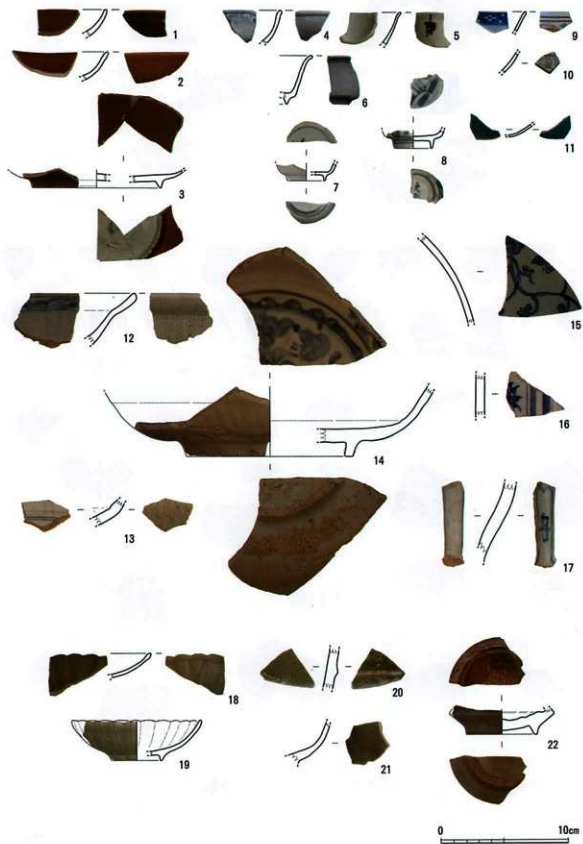
第100図～101図1～2には中国産青花皿を提示した。このうち第100図1・8・9は中国涿洲窯系で、他は中国景德鎮窯系である。第100図1～7は口縁部破片である2・3は皿E群、4～7は皿F群に比定される資料である。8～10は見込み部分の破片である。10はE群に比定され、高台内には「長春佳器」の字款が認められる。11～23、第101図1～2はE群に比定される底部破片である。13の見込み部分には人物画、高台内には「宣」「年」(「宣徳年製」か)の字款が見られる。18の見込みに「福」字、高台内に四角の枠取りをした「福」字が置かれる。21の見込みに「世」字が認められる。20・21の高台内には僅かに文様認められる。23の見込みの文様は玉取獅子か。24・25は底部が「暮間底」となり、C群に比定される資料である。第101図3～26は中国産青花碗である。このうち3～23は景德鎮窯系、24～26は涿洲窯系である。3～13は口縁部破片、14・15は胴部破片、16～26は底部破片である。7の外面には人物が認められる。10・11の外面には方彫りによる花文が施される。16～19はいわゆる蓮子碗で、碗C群に比定される資料である。19の見込みに水鳥の脚が認められる。20～22は見込み部分が緩やかに盛り上がり、饅頭心碗の形状を示す。碗E群に比定される資料である。第102図1～3は中国産褐彩磁器皿である。3の高台内には二重の界線の中に文様(文字か)が置かれている。4～8は中国景德鎮窯系青花小杯である。7の見込み部分には僅かであるが文様(文字か)が認められる。8の高台内部には「大明」の文字が認められる。9・10は五彩である。9の外表面は五彩、口縁部内面は青花で文様を描く。11は中国産翡翠釉小皿で、青色の色調を呈する。12～14は中国涿洲窯系青花盤である。口縁部は端反りとなり、見込みに花文を描く。外面は銘文を施し、底部～高台内には砂が付着する。15・16は中国景德鎮窯系青花瓶の胴部破片である。17は青花瓶の把手部分である。八宝文の一つである「書卷」が描かれている。18～21は中国龍泉窯系青磁である。18・19は輪花皿である。20は香炉か。21は碗か。23は肥前系青磁香炉である。見込み部分と高台畳付きは露胎となり、高台には砂が付着する。第103図1～8は中国産白磁碗の底部破片である。1～3の見込みと底部は露胎となる。4の見込みは蛇の目軸刺ぎとなり、底部は露胎となる。5は見込みが蛇の目軸刺ぎとなり、高台外面から内面にかけて軸が掛かるが、高台内は露胎となる。6の内面には全体に軸が掛かり、底部は露胎である。7・8は口縁部が端反りとなる白磁皿である。7の見込みと底部は露胎となる。8は全面施釉されるが、高台畳付きは露胎となる。高台内には「福」字が置かれる。9はベトナム産白磁碗の口縁部破片である。口縁部外面下にやや段をもち、僅かに外反気味となる。内面には印花文が認められる。10・11は朝鮮王朝産白磁碗である。12～15は白磁小杯である。14の高台内には文様(文字か)が認められる。16は白磁角杯である。17・18は褐釉陶器である。19～22は華南三彩である。器種不明品がほとんどだが、20は鶴形水注の破片と推定される。22は形合わせによって作られている。第104図1～9は瀬戸美濃系陶器である。1は志野の皿の口縁部破片である。3は小鉢か。4は折縁菊皿の口縁部破片である。5は瓶の底部か。7は卍皿である。8は皿で内外面に鉄軸が掛かり、見込みに輪ドチの跡が残る。9は丸皿で、大窯3期に比定される。見込み部分は露胎となり、全体が被熱している。10～13・15～19は唐津系陶器である。11～13・17・18は鉄絵が施され、絵唐津と呼称される製品である。15は搦鉢である。胴部外面には鉄軸が掛かり、内面には棒状工具による掻目が6条認められる。16の見込み部分には砂が付着し、底部は露胎となる。19の口縁部はハの字状に大



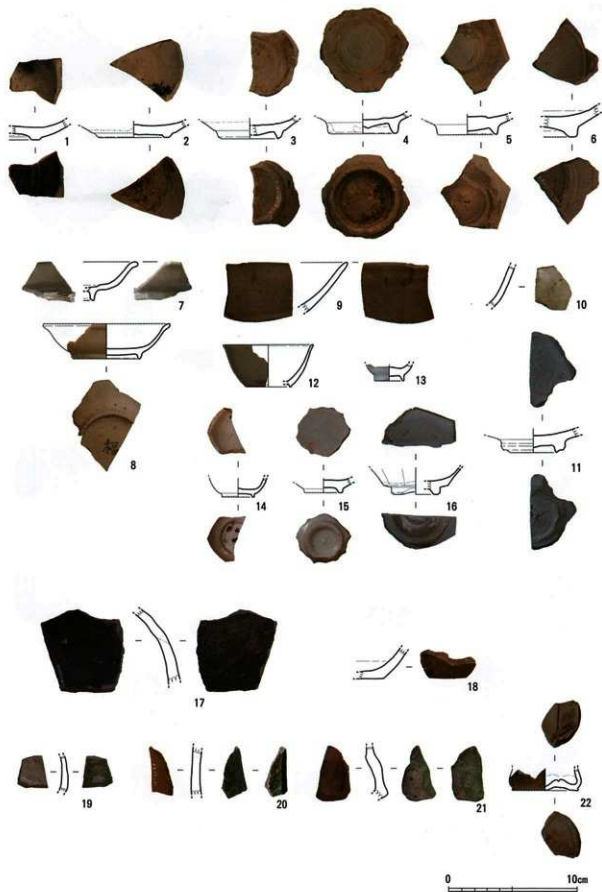
第100図 包含層・整地層出土遺物実測図① (1/3)



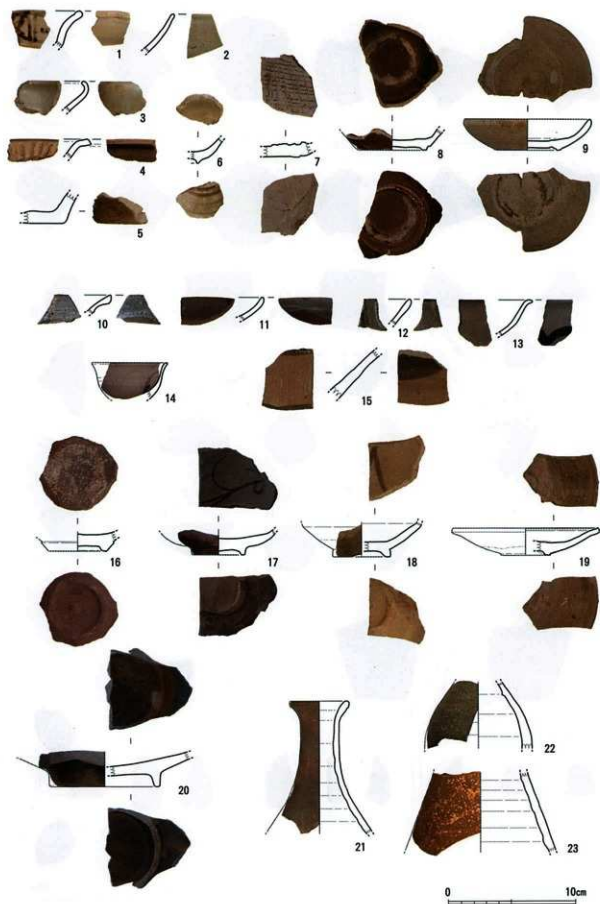
第101図 包含層・整地層出土遺物実測図② (1/3)



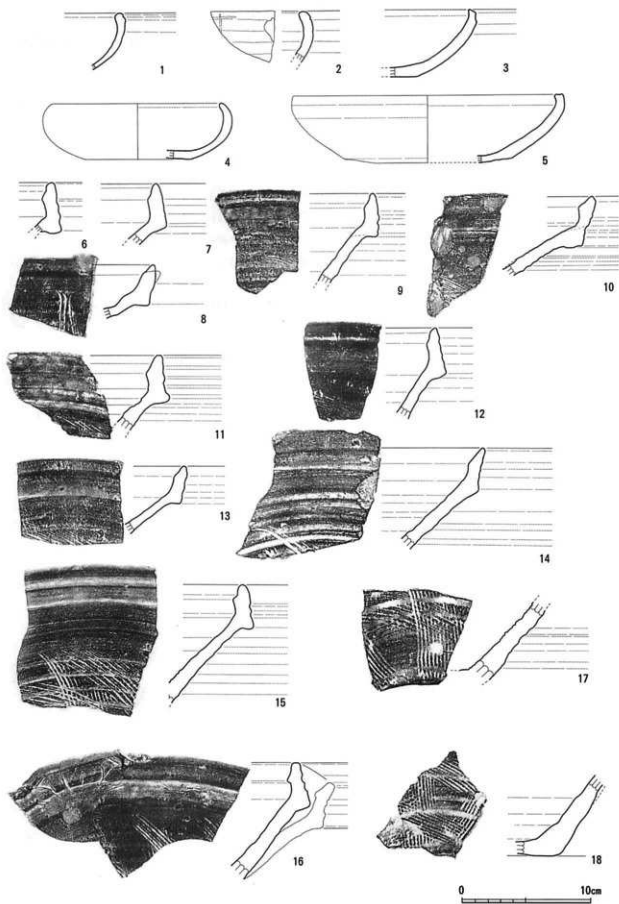
第102図 包含層・整地層出土遺物実測図③ (1/3)



第103図 包含層・整地層出土遺物実測図④ (1/3)



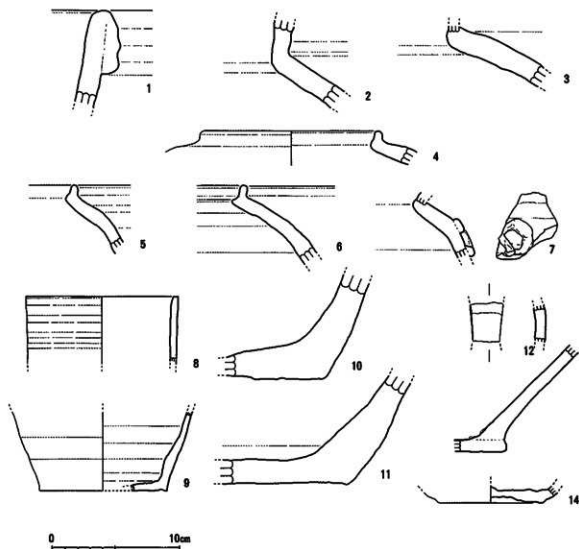
第104図 包含層・整地層出土遺物実測図⑤ (1/3)



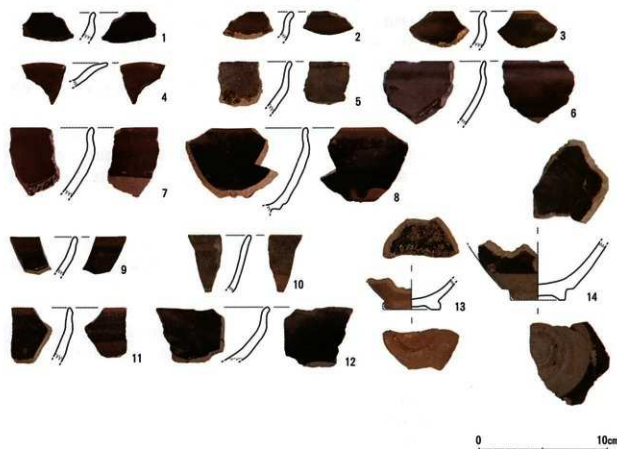
第105図 包含層・整地層出土遺物実測図⑥ (1/3)

きく開き、内面に段をもつ。全面に灰釉が掛かるが、底部は露胎となり、見込み部分と高台周辺には砂目による目跡が残る。14は肥前系磁器染付小杯である。外面には草花文を描く。20は肥前系陶器大皿の底部破片である。見込みと高台皿付きには目跡が残る。17世紀後半の所産である。第104図21～23・第105図・第106図には備前系陶器を提示した。第104図21～23は同一個体と思われる備前系陶器瓶である。第105図1～5は鉢である。1は小鉢である。2の口縁部外面にはへら記号が認められる。6～18は近世1期に比定される備前系陶器楕鉢である。第106図1は甕の口縁部破片で、近世1期に比定される資料である。2・3は甕の胴部破片である。2の外面には灰釉が掛かり、黄灰色を呈する。3は暗赤褐色を呈する。4～7は水屋甕である。6の口縁部内面には蓋受けのための張り出しが顕著に見られる。7は輪状の耳を貼り付けている。8は瓶もしくは鉢の口縁部破片である。復元口径約12.0cmを測る。9は甕もしくは蓋の底部である。10・11は大甕の底部破片である。12は全面に釉が掛かることから瓶などの把手と推定されるが、器種の詳細は不明である。13の外面は暗赤褐色を呈し、内面には灰釉が掛かる。常滑系の可能性も否定できない。14は被熱して器壁が剥落しているが蓋等の底部と思われる。

第107図には天目茶碗を図示した。1～8は瀬戸美濃系の天目碗、9～14は中国産の天目碗である。



第106図 包含層・整地層出土遺物実測図①(1/3)



第107図 包含層・整地層出土遺物実測図⑧ (1/3)

土師質土器・瓦質土器 (第108・109・110図1~30)

第108図1~30は包含層出土の京都系土師器皿である。器壁が厚く、口径に比べ器高が高くなるものが多く、3期に比定される資料である。3・5・7・10の口縁部内外面には煤が付着し、灯明皿として転用されたものである。16・19・20・24・25の内面には「ノ」字状のナデあげ痕が残る。31~33は京都系土師器環である。これらの資料も器壁が厚く3期に比定される。34・35は土師質土器蓋である。34は焼塩壺の蓋である。京都系土師器と同じ胎土を用い、浅黄色系の色調を呈する。35は天井部にツマミが付いたタイプである。手捏ねによって比較的丁寧な作られており、ツマミ部分は一方の側面を押さえつけやや扁平気味に仕上げ、貼り付けられている。胎土は京都系土師器と同じものを使用し、浅黄色系の色調を呈する。口径6.8cm、器高4.0cmを測る。包含層出土であるが同じ層位から3期に比定される京都系土師器が出土しており、16世紀後葉代に位置付けられる資料である。この蓋とセットになる製品は今のところ不明である。焼塩壺の蓋とも考えられるが、周辺の遺構や包含層から取瓶(増埴)などが出土しており、それらの蓋として利用された可能性も否定できない。ただし、器面には融着物等は観察できない。36・37は土師質土器燗台である。36は中央の穿孔が貫通し、脚をもつタイプである。38は耳皿である。39~46は胎土が赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。底部に糸切り痕が残る、内外面にクロロ目が残る。47は在地系土師質土器碗の底部破片である。第109図には瓦質土器を図示した。1~4は双頭蕨手流雲文を有する在地産の火鉢である。口縁部は資料はいずれも端部が肥厚し、外面に二条の突帯を巡らす。1は突帯の間に双頭蕨手流雲文を連続的

に押捺し、2・3は二個1単位で押捺する。4は底部の資料である。底部外面に二条の突帯を巡らせ、その間に双頭康手流雲文を押捺する。文様はいずれも左上がりの方向を向き、右上がりの方向を向く文様をもつSK024出土の資料(第27図参照)よりは新相を呈する。また、文様中央に注目すると、中央に分割線をもつもの(1・3・4)ともたないもの(2)が観察される。5は口縁部が肥厚する火鉢である。被熱が激しいが、外面の口縁下には幅約1cmのベルト状に変色した部分が観察され、糖等を巡らせていた可能性が考えられる。6は器種不明の製品である。口縁端部は外側に突出し、上面は平坦となる。口縁上面には径5mmほどの孔が上方から下方に向けて穿孔される。この穿孔は蓋等を固定するためのものとも推定されるが詳細は不明である。7・8は瓦質土器火鉢の脚部破片である。9は甕か。口縁部は直立し、端部は外側に肥厚する。口縁上面は面をなす。胎土には径3mm程度の石英や砂粒を含む。10は鉢か。口縁端部は外側に肥厚し、上面は面をなす。外面は横方向のハケ目調整が施される。11~15は鉢である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内外面ともに橙色の色調を呈する。16は播鉢の口縁部破片である。口縁端部は断面三角形となり、内側に肥厚する。播目は縦方向と横方向のものが観察されるが、縦方向のものの方が顕著である。胎土には砂粒が多く含まれ、径2mmほどの石英が認められる。17は播鉢の底部破片である。櫛状工具によるものと推定される3条ずつの播目が中心から外方向に向けて放射状に施される。18・19は香炉である。18の口縁部外面下には2個1単位の雷文を連続的に押捺する。復元口径は12.2cmを測る。19は器高6.8cmを測り、底部に断面三角形の脚を貼り付ける。口縁部外面には丸に菱形文を連続的に施し、その下に一条の沈線を施す。

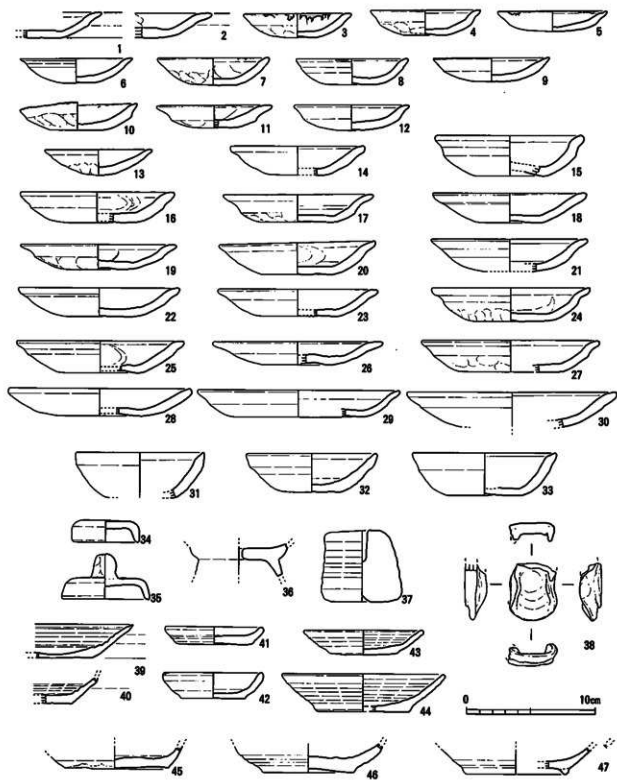
第110図1~30には包含層出土の取瓶(増埴)のうち、図示可能なものを提示した。内面に金属滓や煤が付着する。部分的に緑青が認められることから、溶かされた金属には銅が含まれていたことがわかる。胎土は灰黒色で大粒の白色粒が混じる。外面は指で押して調整しており、内部は高温溶解液に接するため、溶けて細かく軽石状に穴があく。口縁部のみの資料には京都系土師器皿を転用したものの(4・5)も見受けられる。口径に注目すると5cm大(13~16)、6cm大(17~23)、7cm大(24~30)のものの3法量に細分される可能性がある。これらの資料のほかにSE007などからも取瓶(増埴)が出土している。当調査区周辺からは鋳造関係の遺物が顕著に見られ、特に18次調査区西区では3連につながった八角形を呈する太鼓型分銅の未製品⁽¹¹⁾が出土している。これらのことから当調査区周辺(桜町)で銅製品などの鋳造が行われていた可能性が考えられる。

土製品(第110図31~38)

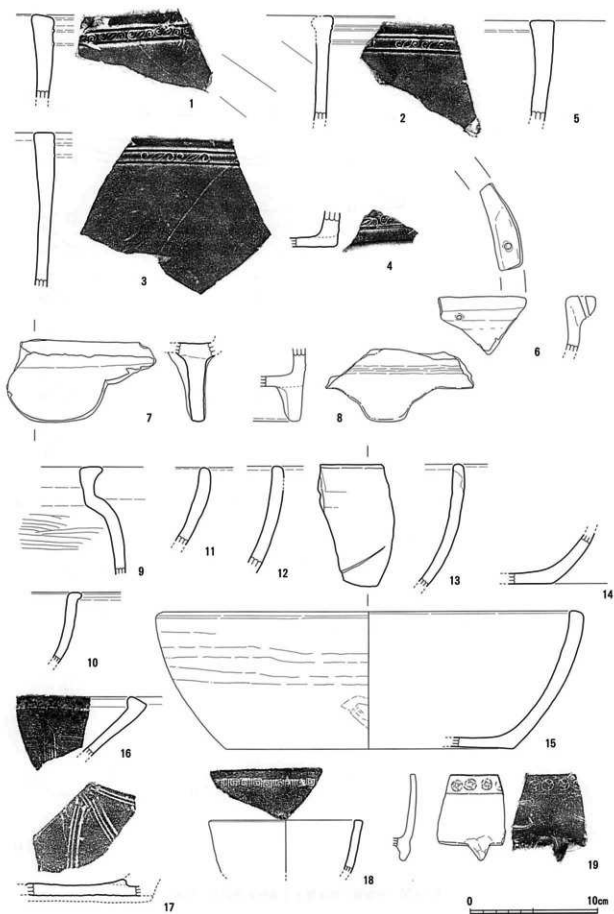
第110図31~37は土器片を円盤状に加工した製品である。31は京都系土師器の口縁部、32・33は土師質土器、34~36は瓦質土器、37は備前系陶器播鉢をそれぞれ加工したものである。大きさは径2.2cmのもの(34)から径6.6cmのもの(33)まで様々で規格性は感じられない。おはじきや双六の駒等の遊具として使用された可能性も考えられるが詳細は不明である。なお、同様の資料は府内町一帯で一様出土しており、特に5次調査B区では在地系土師質土器を加工した製品が一括出土⁽¹²⁾している。38は犬形土製品で、脚部から胴部の資料である。犬形土製品についても、大友府内城下町跡では近年多くの出土例が認められる。

(11) 本書第2分冊 第5章 第184図301参照

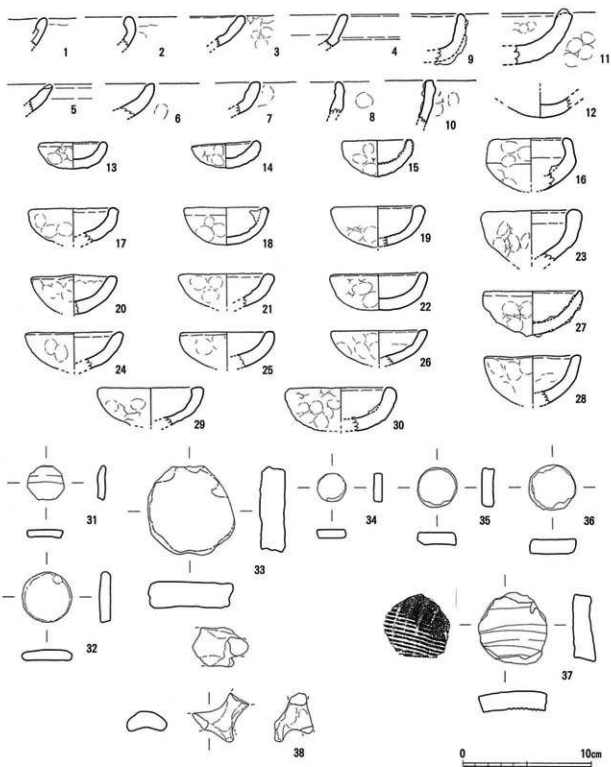
(12) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1』(2005年)



第108図 包含層・整地層出土遺物実測図⑨ (1/3)



第100図 包含層・整地層出土遺物実測図⑩ (1/3)



第110図 包含層・整地層出土遺物実測図⑪ (1/3)

金属製品 (第111図1~22)

第111図1~22では金属(銅)製品を図示した。1~3は銅製板である。1は厚さ0.6mm、2は緑青が付着しており、厚さは0.9mm前後を測る。3は厚さ0.2mm程度の薄い銅板が折れ曲がり重なった状態で出土した。いずれも用途不明である。4は銅製で、ドーム状の製品である。飾り金具か。5は銅製で、留め金具か。6は銅釘である。7は円錐状の銅製品である。8は断面が長方形を呈し、両端が尖る。釘の一種か。9は丸い頭部をもち、待ち針状の形態を呈する製品である。10の頭部は六角形にそれぞれの面が面取りされている。頭部表面にはメッキが施された跡がうかがえる、さらに、頭部には同じく銅製の棒状のものが差し込まれている。留め金具の類か。11は一部折れているが、原形は鍵状を呈すると推定される。12は留め金具か。13は管状の把手が付いており、小軍筒の引出等の引き手金具に推定される。14は直径4ミリ程度の環状金具で、取り付け部にあたる部分は欠損している。15は鎖の一部もしくは留め金具と推定する。16・17は銅線状の製品である。18は幅5mm程度、厚さ2mm程度の板状の製品で、飾り金具か。19は鍵である。20は太鼓型分銅である。緑青で腐食が激しいが、現状で径6mm、幅2mm、重さ0.3gを測り、当調査区最小・最軽量の分銅である。21は扇型分銅である。長さ2cm、厚さ1cm、重さ12.2gを測る。表面には「四禾(四匁)」と読める刻印が認められる。22は小柄である。長さ8.5cmを測る。

ガラス製品等 (第111図23~26)

第111図23~25はガラス製品である。23はガラス玉の破片である。24はやや透明な淡緑色を呈する破片である。25はやや濃い淡緑色を呈する。26は水晶である。

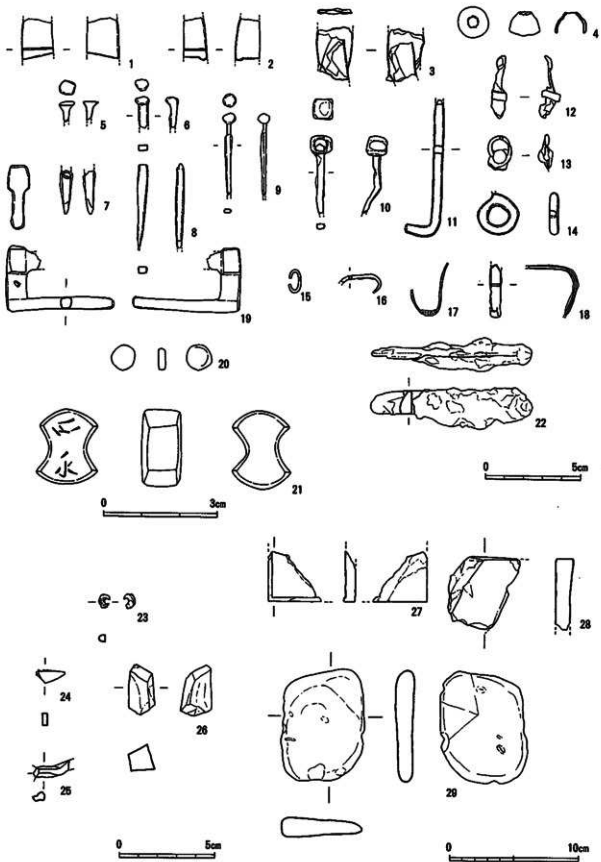
石製品 (第111図27~29)

第111図27は輝緑凝灰岩を使用した硯で、いわゆる赤間硯である。28は磁石の残欠である。29は石籠である。

ピット・柱穴出土遺物 (第112~114図)

第112~114図には柱穴・ピット等から出土した遺物を提示した。第112図1は中国涿州窯系青花皿の口縁部破片である(SP043出土)。2は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部破片である。碗E群に比定される(SP248出土)。3は皿F群に比定される中国涿州窯系青花皿の口縁部破片である(SP074出土)。4は中国景德鎮窯系青花碗の胴部破片である(SP146出土)。5は中国景德鎮窯系青花碗の胴部破片である(SP251出土)。E群か。6は青花の小破片である(SP039出土)。7は中国産白磁小壺である。胴接ぎにより製作されている。外面には印花による文様が施され、胴部下半には蓮弁を表現する。口縁部内面と底部周辺は露胎となる(SP086出土)。8・9はSP144出土である。8はE群に比定される中国景德鎮窯系青花皿である。高台部分には砂が付着する。9はE群に比定される中国産白磁皿である。二次被熱を受けており、器面は焼けただれている。10は中国景德鎮窯系青花皿の底部である(SP145出土)。11はE群に比定される中国産白磁菊皿である。内外面に篋文を施す(SP145出土)。12はF群に比定される中国景德鎮窯系青花皿で、丸く内湾する胴から斜めにつばが付く(J20区北壁出土)。13は常滑系陶器製の口縁部破片である。流れ込みか(SP152出土)。14は焼締陶器小壺の胴部破片である。外面にはロクロ目が求められる。中国産か(SP278出土)。15は瀬戸美濃系陶器である。(SP141出土)。

第113図16~28は京都系土師器皿である。順にSP112・SP241・SP137・SP240・SP245・SP271・SP142・SP141・SP129・SP284・SP120・SP110・SP254からの出土である。29・30はSP154出土である。29は京都系土師器皿、30は備前系陶器壺である。31~33はSP146出土である。31・32は京都系土師器皿、33は備前系陶器壺である。34~36はSP199出土である。34・35は3期に比定される京都系土師器皿である。口径が7.2cm・8.6cmと小形のものである。36は備前系陶器擂鉢である。内面に斜め方向の樋目が観察でき、近世1期に比定される資料である。37・38はそれぞれSP247・SP118出土の備前系陶器擂鉢の口縁部破片である。

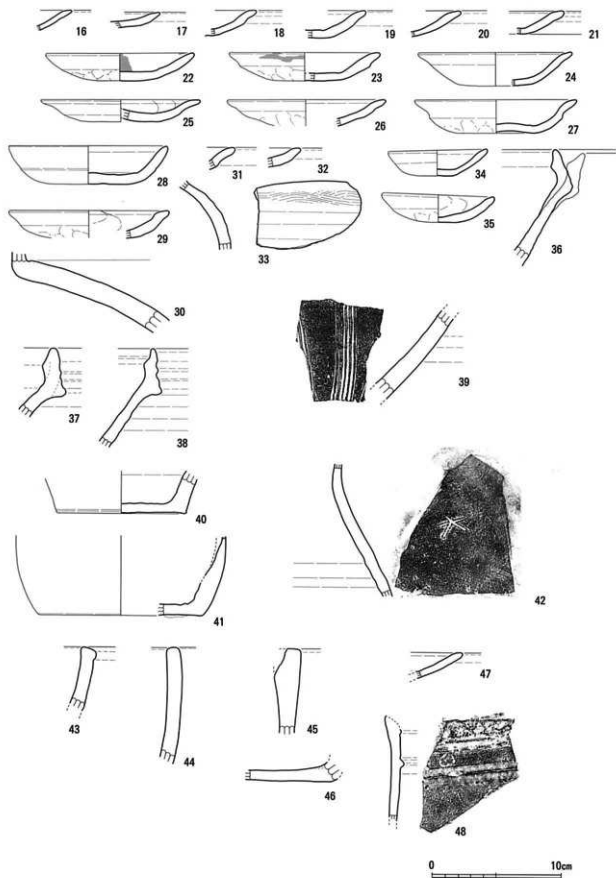


第111図 包含層・整地層出土遺物実測図① (20、21は1/1、27~29は1/3、他は1/2)

39はSP290出土の備前系陶器播鉢の胴部破片である。40・41はそれぞれSP144・SP121出土の備前系陶器壺の底部破片である。42はSP191出土の備前系陶器瓶の胴部破片である。外面に「大」字状のヘラ記号が認められる。43はSP277出土の瓦質土器播鉢の口縁部である。44はSP260出土の瓦質土器鉢の口縁部破片である。45・46はSP113出土の瓦質土器火鉢である。47・48はSP258出土である。47は京都系土師器皿の口縁部破片である。48は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。外面には二条の突帯を付け、その間に梅花文状のスタンプを押捺している。第114図49・50はSP181出土である。49は土師質製品で土鈴等の破片と推定する。50は瓦質土器火鉢である。51・52はSP186出土である。51は3期に比定される京都系土師器皿である。52は瓦質土器播鉢である。胴部内面には櫛状工具による播目が



第112図 柱穴・ピット出土遺物実測図① (1/3)



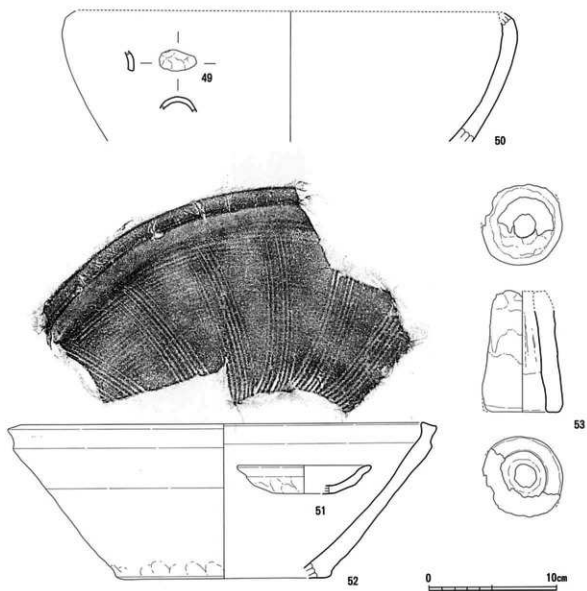
第113図 柱穴・ピット出土遺物実測図② (1/3)

第2節 遺構と遺物

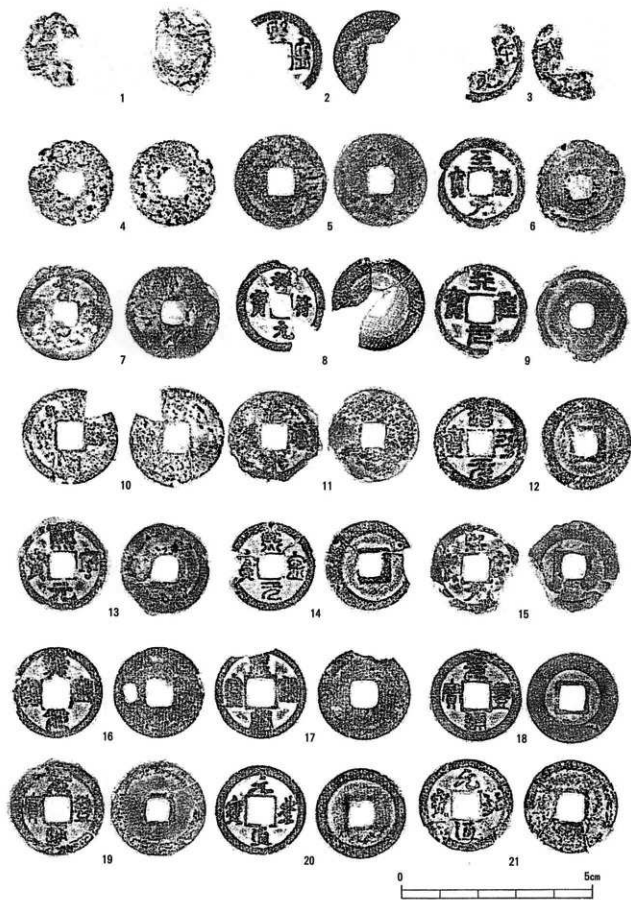
放射状に7条ずつ施される。口縁部は強くナデを施し、口縁下でくの字に折れ、外傾しながら開く。口縁端部は肥厚し、上面は面をなす。内外面とも黄白色の色調を呈する。53はフィゴの羽口である。

銅銭 (第115~116図)

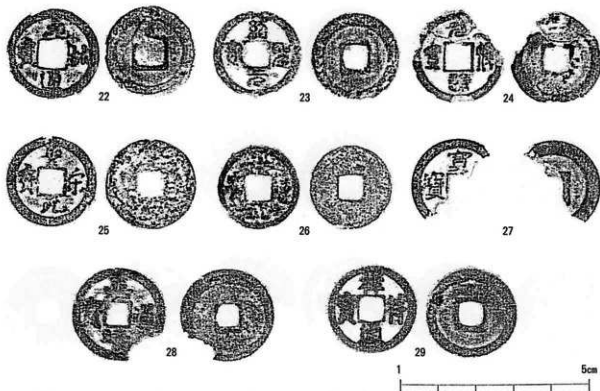
第115~116図には銅銭を図示している。1~27は包含層出土の銅銭である。28はSP150、29はSP219出土のものである。紙幅の関係上、詳細は一覧表を参照されたい。



第114図 柱穴・ピット出土遺物実測図③ (1/3)



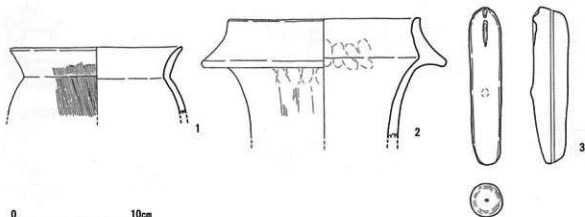
第115図 包含層・整地層出土遺物実測図(錢貨① 1/1)



第116図 包含層・整地層柱穴出土遺物実測図（銭貨② 1/1）

トレンチ内出土遺物（第117図）

第117図には中世以前の遺構等の有無を確認するために設定した東西・南北の各トレンチ内から出土した遺物を挙げている。第117図1は弥生土器甕である。復元口径は13.2cmを測る。外面には縦方向のハケ目が見られ、淡黄褐色を呈する。2は弥生土器複合口縁壺である。復元口径は14.8cmを測る。3は器種・材質ともに不明である。高師小僧の可能性も考えられるが、中心に糸通しと考えられる孔が貫通し、外面の突起にも穿孔された部分もち、上部は人工的な面をもつことから、遺物として報告する。



第117図 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

第3節 小結

1. 遺構の変遷

中世大友府内町跡第22次調査区は、『大分市史』に掲載されている「戦国時代の府内復元想定図」では国指定史跡大友氏館跡の東に展開する町屋部分にあたり、「府内古区」にみられる桜町周辺にあたる。当調査区では大友氏館跡の東を走る第2南北街路の一部（SF230）とその東に展開する町屋遺構が検出された。第2南北街路については第2節IIで触れたように、少なくとも3～4段階の変遷がみられ、時代を追う毎に大友氏館側に道幅が縮小していることが観察された（第6図参照）。また、第2南北街路の下層には、道路構築以前に溝状遺構（SD202）が存在することも明らかとなった。道路の東側に展開する町屋遺構については、16世紀後葉から末葉に比定される遺構が主体をなすが、14～15世紀代とみられる井戸も検出されており、大友氏館前の町屋群が建設される前の姿を垣間見ることができる。遺跡の最盛期は、町屋が建設される16世紀後葉代であり、1587（天正15）年の島津侵攻以降、近世城下町が建設されるにあたり衰退していく。以下、各時期の遺構について説明を加えながら本調査区を概観していきたい。

14～15世紀代の遺構

14～15世紀代の遺構は2基あるが、いずれもK・L21区の井戸遺構（SE201・SE242）である。この2基の井戸は切り合い関係を有し、その構築順序はSE242→SE201である。隣接した位置に構築されており、16世紀にはSE242とほぼ同じ位置にSE012が構築されている点特徴的である。

この地区が地下水の汲み上げに非常に適した場所であったことが推測される。しかし、14～15世紀代に比定される遺構は、前述の2基のみであり、柱穴や土坑などの遺構は皆無である。このことから当調査区に限って言えば、大友館に東面する町屋の形成は16世紀を待たなければ為されないといえることができるであろう。

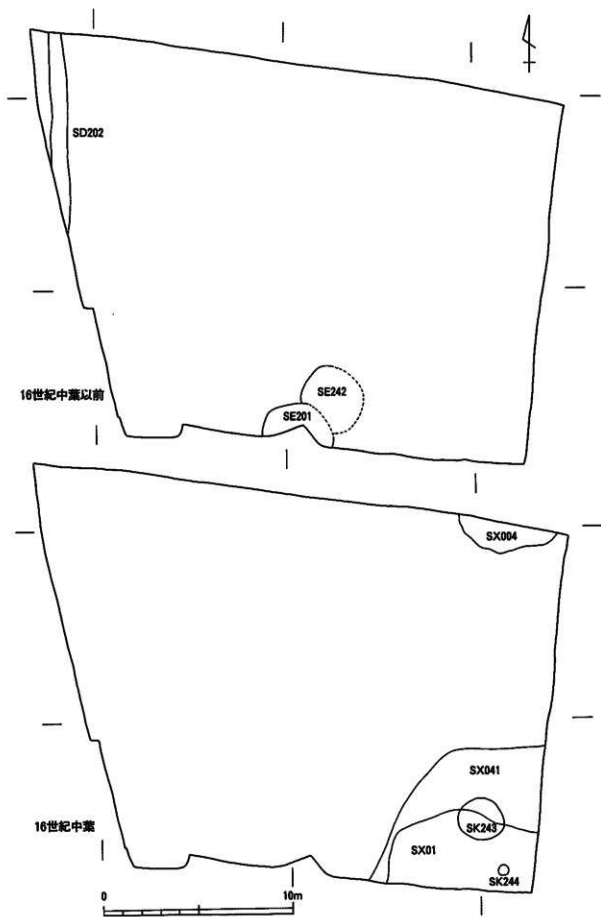
16世紀代の遺構

16世紀代になっても、初頭から中葉までの遺構は確実には確認できていない。僅かに第2南北街路の下位遺構となる溝状遺構（SD202）が中葉以前であると想定できるのみである。SD202については、調査区の制限から検出範囲が狭く、時期を特定できる遺物の出土もないため、確実な時期は特定できない。しかし、土層断面からは明らかに第2南北街路が構築される以前に掘削されていることが観察できる。中世の府内が街路によって区画される以前に、溝によって区画された空間が存在したことが推定できる遺構である。

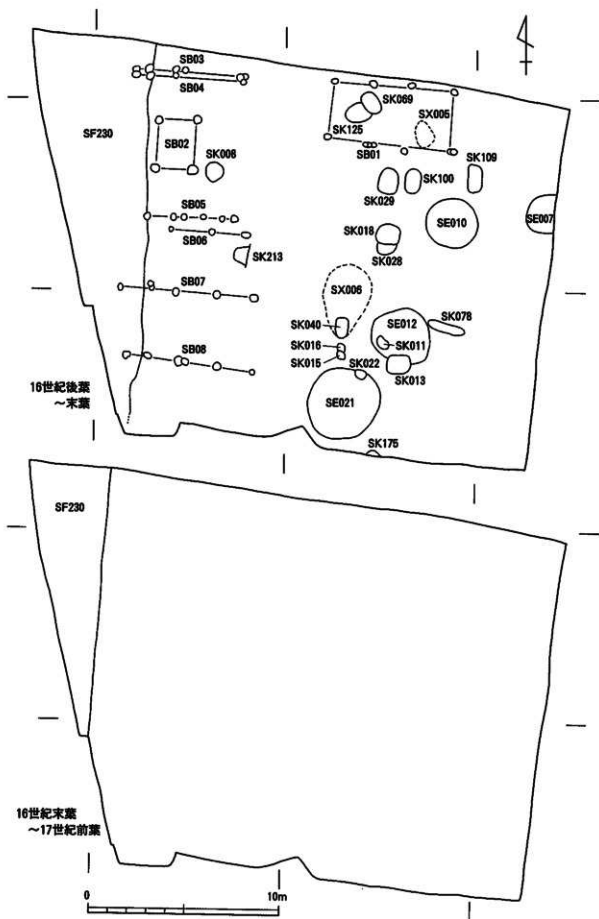
SD202上に構築された第2南北街路（SF230）については、前述したように数回の変遷が確認できる。構築時期については、最下層の出土遺物から16世紀中葉に比定できる。その後は、道路の東に建設された町屋の侵食によって随時西側に狭まっていくことが確認できている。また、道路上層の火災処理の状況から、島津侵攻以後、町屋は一時的復興され、SF230は道路として機能していたことがうかがえる。

町屋遺構については、道路に面して東西に並ぶ柱穴列が確認でき、欄状の境界が存在したことが推定できる。そして、町屋は道路に沿って腰の寝床状に町割り形成されていたことが推定される。東西に並ぶ柱穴列の間隔は広いところで8m、狭いところで4mの間隔である。SB03とSB04は切り合い関係がある柱穴も観察でき、欄列の立て替えの可能性が考えられる。SB05とSB06には切り合い関係は認められず、間隔も約80cmあり、この2本欄列の間は路地として使用されていた可能性が考えられる。SB03（SB04）とSB05との間隔は約8mと広く、この間にはSB01やSB02などの掘立柱建物が確認できる。SB01については町屋の裏手にあたる場所に存在することから、小屋等の可能性が考

第3節 小結



第118圖 第22次調査区遺構変遷圖① (1/200)



第119図 第22次調査区遺構変遷図② (1/200)

えられる。SB02については、SB01と併存していたか否かについては明確な遺物が出土しておらず不明である。

柱穴群の裏手にあたる調査区東側には井戸や廃棄土坑などの遺構がみられ、町屋遺構の典型的な姿が確認された。井戸については、IV項で述べたように6基確認している。特に上層の井戸については前項で述べた町割りに対応するように配置されている。

調査区南東で確認された落ち込み遺構や整地層（SX041・SX01）については、南面する9次調査区や北側の18次調査区および12次調査区などでも確認されているものである。時期については出土遺物などから16世紀中葉から後葉にかけての年代が推定されるが、当調査区の遺構については人工的なものか自然のものかについての検証はできていない。しかしながら、16世紀後葉にはこの落ち込み状の遺構は埋め立てられ、その上に町屋が形成されていることは確かである。従って、大友氏館前の「桜町」などの町屋の形成がされるのは16世紀後葉になってからと推定される。

第8章 中世大友府内町跡第9次調査区

第1節 調査の概要

第9次調査区は大分市錦町3丁目に所在するが、国道10号建設予定地と、J R日豊本線が交差する地点のJ R日豊本線北側に位置する。調査区は大友氏館跡の東側に位置し、I～IV区の4調査区に分けて発掘調査を実施した。今回の報告は第9次調査区の北側に位置するII・III調査区の成果であるが、このII・III区とI・IV区との間には「府内古図」にみられる「御所小路」を踏襲したと考えられる里道が存在しており、大友館跡中央付近で大友館の東側に南北方向に走る街路から東に延びる「御所小路」に面する遺構群の実態が発掘調査によって明らかとなった。

発掘調査は、II区を平成12年6月から平成13年6月まで13ヶ月間、III区を平成12年12月から平成13年6月まで7ヶ月間、実施した。

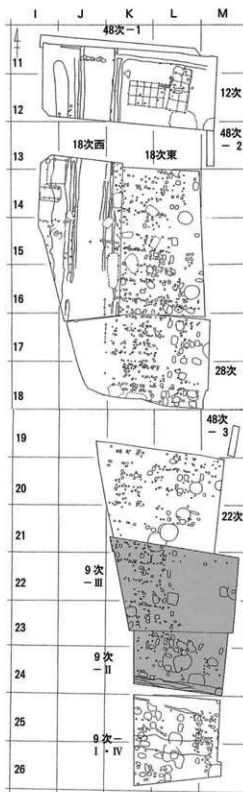
第2節 遺構と遺物

1. II区 (第120～123図)

II区の遺構群は16世紀前葉から営まはしめる。それ以前の遺物はきわめて貧弱であり、遺構に關してはほとんど確認できない。

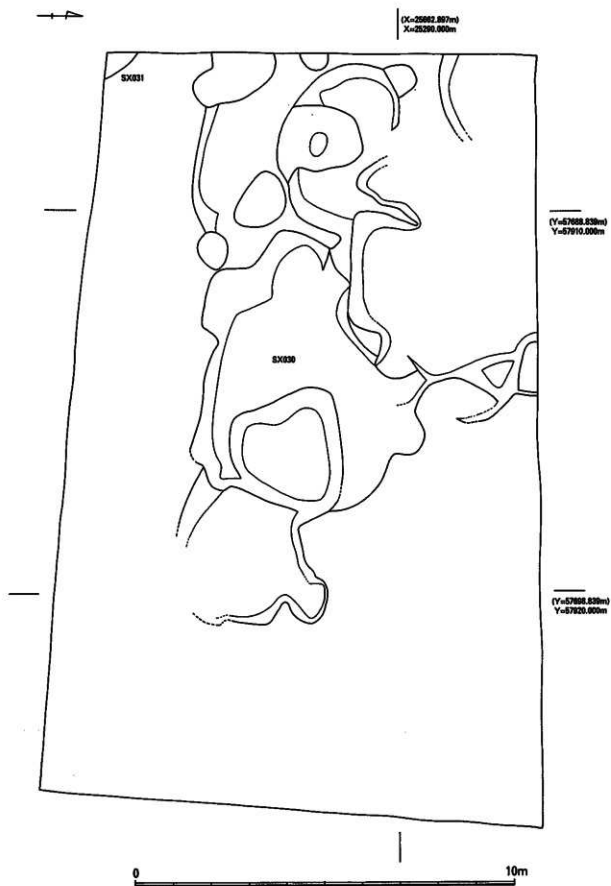
16世紀前葉にはSX030やSX031などの浅い不定形な地形の落ち込みが調査区の中央から西側をしめる。土取りによるものと考えられるが、これらの遺構は調査区外北西南側に延びており、埋土中には水性堆積土が確認できるため、掘削後、一時期、放置され、滞水期間があったものかもしれない。しかし、SX030やSX031は、後に埋め戻され、遺構群が形成されていく。

明確に遺構群の存在が確認できるのは、16世紀後葉～末葉に至ってからである。第122・123図に当該時期の遺構群をあらわしたが、それぞれの挿図は必ずしも同時併存の遺構をあらわしたのではなく、様々な遺構群が時間差をもちながら16世紀後葉～末葉に営まれていた。調査区の北東側では地形の落ちが確認でき、これは調査区外にもびる。これが自然地形によるものか、土取り坑の名残であるかは明らかでないが、III区ではこの地形上に遺構が営まれているため、当時もこの地形

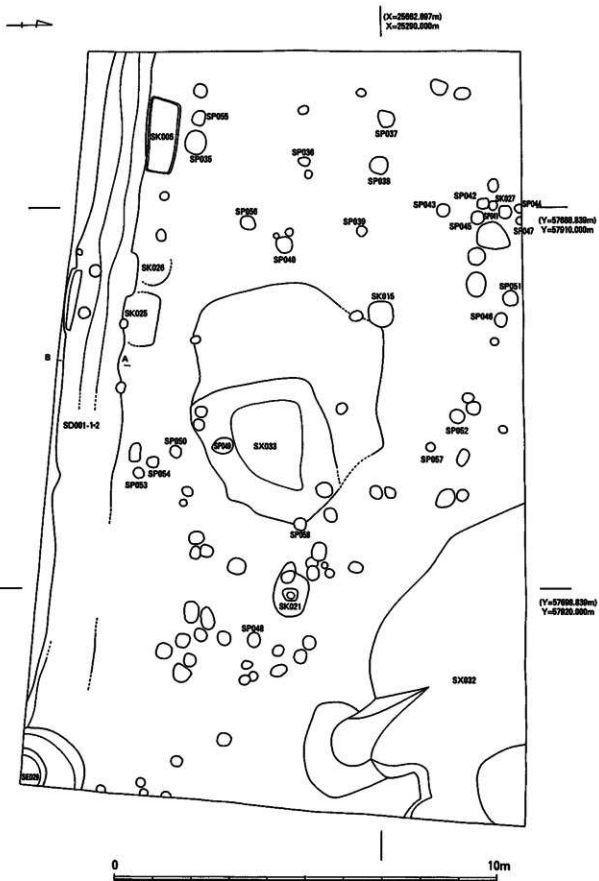


第120図 第9次調査区II・III区的位置 (1/800)

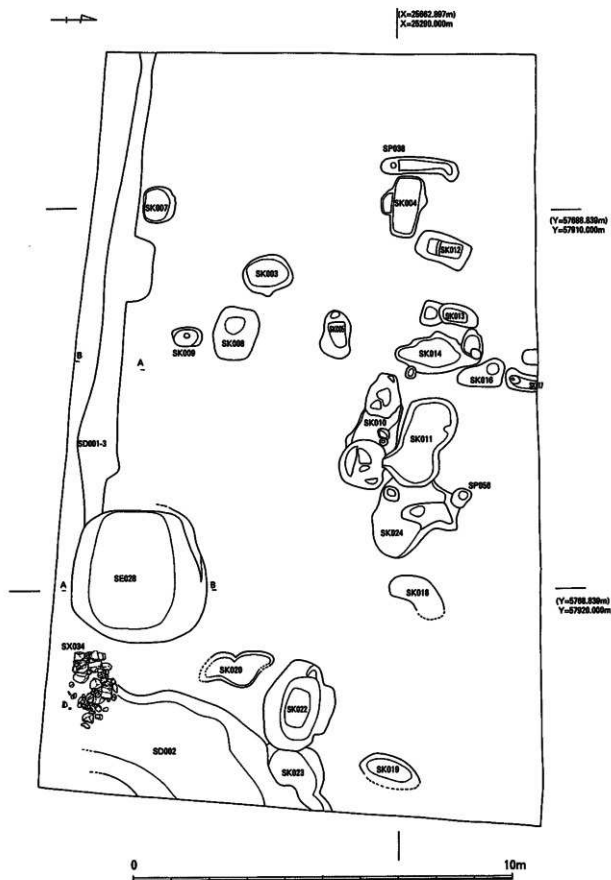
第2節 遺構と遺物



第121図 第9次調査区Ⅱ区遺構配置図(第1段階 16世紀前葉)



第122図 第9次調査区Ⅱ区遺構配置図(第2段階 16世紀後半～末葉(1))



第123図 第9次調査区II区遺構配置図(第2段階 16世紀後葉~末葉(2))

第3表 II区遺構一覧表

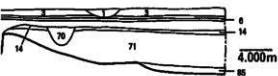
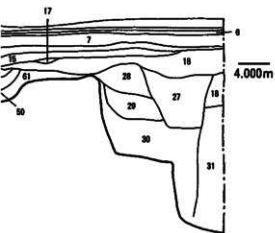
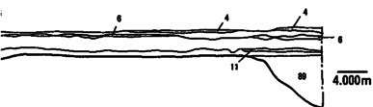
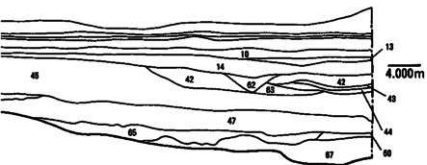
本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD001-1	SD1	溝	K2区-L2区-M2区	16世紀後葉～末葉		97
SD001-2	SD1	溝	K2区-L2区-M2区	16世紀後葉～末葉		97
SD001-3	SD1	溝	K2区-L2区	16世紀後葉～末葉		97
SD002	SD2	溝	M2区	16世紀後葉～末葉		98
SK003	SK1	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		100
SK004	SK2	土坑	K2区-L2区	16世紀後葉～末葉		100
SK005	SK3	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		101
SK006	SK4	土坑	K2区	16世紀後葉～末葉		102
SK007	SK5	土坑	K2区-L2区	16世紀後葉～末葉		106
SK008	SK6	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		106
SK009	SK7	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		107
SK010	SK8	土坑	L2区-L3区	16世紀後葉～末葉		107
SK011	SK9	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		111
SK012	SK10	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		111
SK013	SK11	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		112
SK014	SK12	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		113
SK015	SK13	土坑	L2区-L3区	16世紀後葉～末葉		113
SK016	SK14	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		113
SK017	SK15	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		113
SK018	SK18	土坑	L2区-M2区	16世紀後葉～末葉		113
SK019	SK19	土坑	M2区-M3区	16世紀後葉～末葉		114
SK020	SK20	土坑	M2区	16世紀後葉～末葉		
SK021	SK21	土坑	L2区-M2区	16世紀後葉～末葉		
SK022	SK22	土坑	M2区	16世紀後葉～末葉		114
SK023	SK23	土坑	M2区	16世紀後葉～末葉		117
SK024	SK24	土坑	L2区-L3区	16世紀後葉～末葉		118
SK025	SK25	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		118
SK026	SK26	土坑	L2区	16世紀後葉～末葉		118
SK027	埋襲状遺構 1	埋襲状遺構	K2区-L2区	16世紀後葉～末葉		118
SE028	SX1	井戸	L2区-M2区	16世紀後葉～末葉		121
SE029	SX2	井戸	M2区	16世紀後葉～末葉		122
SX030	SX5+6+7	落ち込み	K2区-K3区-L2区-L3区	16世紀前期		122
SX031	SX4	落ち込み	K2区	16世紀前期		126
SX032	SX3/SD3	落ち込み	L2区-L3区-M2区-M3区	16世紀後葉～末葉	当初、SD3として認識した遺構がSX3の一部と判明	128
SX033	土器溜遺構	土器溜遺構	L2区	16世紀後葉～末葉		128
SX034	SU1	集石遺構	M2区	16世紀後葉～末葉		130
SP035	SP1	ピット	K2区	16世紀後葉～末葉		130
SP036	SP2	ピット	K2区	16世紀後葉～末葉		130
SP037	SP3	ピット	K2区	16世紀後葉～末葉		130
SP038	SP4	ピット	K2区	16世紀後葉～末葉		130
SP039	SP5	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP040	SP6	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP041	SP7	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP042	SP8	ピット	K2区	16世紀後葉～末葉		130
SP043	SP9	ピット	K2区	16世紀後葉～末葉		130
SP044	SP10	ピット	K2区	16世紀後葉～末葉		130
SP045	SP11	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP046	SP12	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP047	SP13	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP048	SP14	ピット	M2区	16世紀後葉～末葉		130
SP049	SP15	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP050	SP16	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP051	SP17	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP052	SP18	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP053	SP19	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP054	SP20	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP055	SP21	ピット	K2区	16世紀後葉～末葉		130
SP056	SP22	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP057	SP23	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130
SP058	SP24	ピット	L2区	16世紀後葉～末葉		130

第2節 遺構と遺物

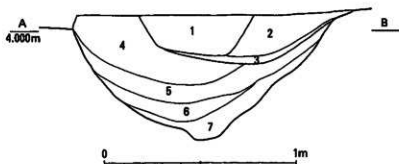
第9次調査区Ⅱ区トレンチ土層断面観察表

1	根乱土	47	にぶい黄褐色粘質土 (SX032 42層と近似するが、まわめて均質で焼土粒・炭・遺物はきわめて少ない)
2	青灰色粘質土 (昭和期水田耕作土)	48	褐灰色土 (炭・小石が混入する)
3	にぶい黄褐色土 (昭和期水田床土)	49	灰褐色土
4	にぶい黄褐色土 (酸化鉄沈着層)	50	褐色粘質土 (ひじょうに均質な土)
5	灰褐色土 (焼土・炭を含む 7層に近似)	51	褐灰色土
6	にぶい黄褐色土 (マンガン沈着層)	52	褐灰色粘質土 (砂を若干含む)
7	褐色土 (遺物包含層 小さな焼土粒をわずかに含む)	53	褐灰色砂 (SD002 炭を少量含む)
8	7・9・10層の漸移層	54	褐灰色砂 (SD002 粒子が細かく均質である)
9	褐色土 (7層と近似するが、7層よりもマンガンを多く含む)	55	褐灰色土 (SD002)
10	褐色土 (7・9層と近似するが、上面にマンガンが固まっている)	56	明褐色砂 (SD002 薄い砂層が互層にみられる 炭を若干含む)
11	褐色土 (10層と近似するが、下面にマンガンが著しく沈着する)	57	褐灰色土 (SD002 砂・小石の層と褐色土の層が互層に堆積する)
12	灰褐色土	58	褐灰色土 (SD002 砂・小石の層と褐色土の層が互層に堆積する)
13	にぶい黄褐色粘質土	59	褐灰色土 (SD002 砂層と褐色土の層が互層に堆積する)
14	褐色土 (7層と近似)	60	褐灰色粘質土 (1cm内外の黄褐色粒を含む)
15	褐色土 (14層より遺物・炭・焼土が少なく均質である)	61	にぶい褐色土
16	砂層 (小石が混じる)	62	褐色土 (42層と近似するが、粘性に乏しい)
17	褐色砂質土 (15層と18層の漸移層)	63	褐色土 (62層と近似するが、やや暗い)
18	褐色砂層 (薄い砂層が互層にみられ、径1~2cmの小石を含む)	64	褐色砂質土 (SX032 45層と近似するが、砂・小石を多く含む)
19	にぶい褐色土	65	褐色砂 (SX032 薄い砂層が互層に堆積し、中には小石も含む)
20	黄灰色土 (均質な土)	66	にぶい黄褐色粘質土 (SX032 47層と近似する)
21	褐色砂質土	67	褐灰色粘質土 (地山か)
22	褐色砂質土 (21層と近似する)	68	褐色砂層 (地山か)
23	褐色砂層 (部分的に1~2cmの小石が含まれる)	69	淡褐色土 (14層に近似するが、シルト質の均質な土からなる)
24	黄灰色土 (均質な土)	70	褐色土 (炭・焼土粒をひじょうに多く含む)
25	灰褐色粘質土 (SD002埋土)	71	暗褐色土 (80・83・84層に近似する)
26	灰褐色粘質土 (SD002埋土 マンガンの薄い層が何層も入る)	72	灰褐色土
27	にぶい褐色土 (SE029掘方埋土 若干の炭・焼土が混じる 1~3cmの黄褐色土・褐色土粒が混じる)	73	褐灰色土 (粗い礫や土器を含む)
28	黄褐色土 (SE029掘方埋土 褐灰色土が混入 特に下面に厚く堆積している)	74	にぶい褐色土 (しまりのよくない砂質土)
29	黄褐色土 (SE029掘方埋土)	75	にぶい黄褐色土
30	にぶい褐色土 (SE029掘方埋土 砂や褐灰色土が混入)	76	灰黄褐色土
31	にぶい黄褐色土 (SE029井筒内埋土 炭・遺物・石が混入 3~6cmの褐色土粒を含む 掘方との境目に腐食した木質痕が残る)	77	にぶい褐色土
32	淡褐色土 (14層と近似するが、マンガンの沈着が著しい)	78	にぶい褐色土
33	淡褐色土 (14層と近似するが、シルト質の均質な土からなる)	79	褐色土
34	褐色土 (SD001-3 京都系土師器が大量に廃棄されている炭・焼土粒を含む)	80	褐色土 (71・83・84層に近似する)
35	褐灰色砂質土 (SD001-2)	81	にぶい褐色土
36	にぶい褐色シルト (SD001-1)	82	褐色土 (遺物を大量に含む)
37	にぶい褐色シルト (SD001-1 36層よりやや暗い)	83	灰黄褐色土 (71・80・84層に近似する)
38	褐灰色粘質土 (SD001-3)	84	褐色土 (71・80・83層に近似する)
39	黒褐色土 (遺物包含層 45層と近似)	85	灰褐色土 (87層と近似する)
40	褐色土 (SK023 47層の小さいブロックが比較的多く認められる)	86	灰褐色土
41	灰褐色土 (横および1~3cmのにぶい黄褐色土粒が混入する)	87	灰褐色土 (地山か)
42	にぶい黄褐色粘質土	88	黒褐色粘質土 (地山か)
43	褐色土	89	褐色粘質土 (SX031 褐色粘質土の小さいブロックや炭・焼土を含む)
44	にぶい黄褐色粘質土 (42層に近似する)	90	灰褐色土 (地山か)
45	黒褐色土 (遺物包含層)		
46	褐色土 (47層に近似 遺物・焼土が少量混じる均質な土 下面に砂・小石が認められる)		

第 8 章 中世大友府内町跡第 9 次調査区



が存在し続けていたことがわかる。また、「御所小路」に並行して東西に走るSD001をはじめ、SE028・SE029などの井戸や、井戸横の軟弱地盤を改良するためか、大皿の土師質土器を廃棄したSX033や人頭大の石を組んだSX034が検出されている。また、明確に建物跡は確認できていないが、ピット群が100基前後検出されている。さらに、16世紀後葉～末葉でも最終段階には炭・焼土を含まない埋土をもつ火災処理土坑が数多く含まれている特徴をもつ。



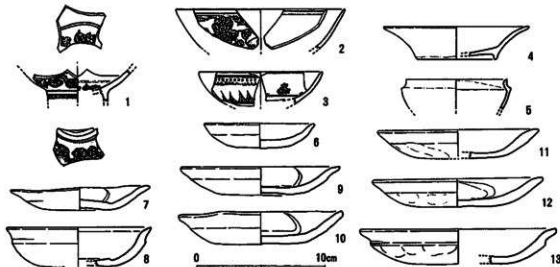
第125図 II区SD001-1・2・3土層断面図(1/20)

- 1 褐色土 (S001-3 京都系土師器をはじめ多くの遺物を含む炭・焼土も多く含む、粘質で硬い土)
- 2 褐灰色砂質土(S001-2)
- 3 褐色シルト (S001-2 滞水状態をあらわす)
- 4 灰褐色シルト (S001-1 滞水状態をあらわす)
- 5 におい褐色シルト (S001-1)
- 6 におい褐色シルト (S001-1 5層よりやや暗い)
- 7 褐灰色粘質土 (S001-1)

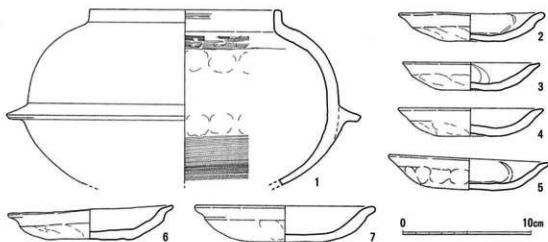
a. 溝

SD001 (第122・123・125図)

調査区南端のK24区・L24区・M24区に位置する。第9次調査区II区の南端に東西方向に走り、大友9次I・IV区に検出された道路遺構(I区SF14・IV区SF47)の北側につく側溝であると考えられる。幾段階の掘り返しが確認でき、古いものからSD001-1、SD001-2、SD001-3と3段階の溝が確認できている。幅25～100cm、深さ約20cmを測る最新のSD001-3は粘質で固い褐色土からなり、炭・焼土粒が含まれている。埋土中には埴地編年3期(16世紀後葉～末葉)に属する大量の京都系土師器皿の破片が含まれる。SD001-2は、断面U字状の溝である。褐灰色砂質土の埋土であり、下層にうすく褐色シルトが堆積しており、開溝時は一時、滞水状態にあったことがわかる。SD001-1は幅140～160cm、深さ70cmを測る断面V字状の溝である。褐灰色～におい褐色土の埋土であり、粘性がつよいため、



第126図 II区SD001-1・2出土遺物実測図(1/3)



第127図 II区SD001-3出土遺物実測図(1/3)

開溝時は一時、滞水状態にあったことがわかる。

これらの3時期の溝は、16世紀後葉～末葉に営まれている2基の井戸(SE028・SE029)により切られているが、出土遺物から16世紀後葉～末葉に存在していたことがわかる。

SD001出土遺物(第126～128図)

出土遺物は第126～128図に示した。第126図はSD001-1・2出土のものであり、第127図はSD001-3出土のものである。SD001-1とSD001-2との遺物はどちらから出土したかは明確に判別できなかったが、明らかにSD001-1出土の遺物でも16世紀後葉～末葉におさまるものがみられるため、両者間に土器の型式差が認められるだけの時間差は確認できていない。

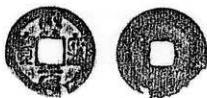
第126図1は中国漳州窯系青花碗である。小野分類C群の蓮子碗に分類できる。2は中国景德鎮窯系青花碗であり、外面に花文がみられる。3は中国景德鎮窯系青花皿であり、小野分類C群の碁笥底タイプの皿であり、外面に芭蕉文がみられる。4は白磁皿である。碁笥底を呈し、体部が外反して口縁に至る。5は蓋をもつ中国南方産褐釉陶器鉢である。外面に濃緑色、内面に褐色の釉がかけられ、蓋と合わせる部位は露胎のままである。6・7、9～13は京都系土器器皿である。その特徴から埴地編年1～3期に属するものが混在すると考えられる。8は京都系土器器環である。その特徴から埴地編年3期に属する。

第127図1は瓦質土器羽釜である。底部にはススの付着が認められる。2～7は京都系土器器皿である。その特徴から埴地編年1～3期に属するものが混在すると考えられる。

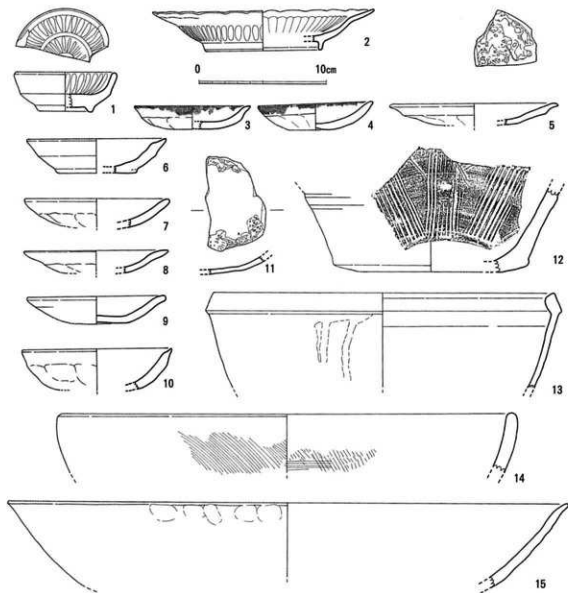
第128図は銅銭である。「熙寧元寶」(1068年初鑄)である。

SD002(第123・124図)

調査区南東端のM24区に検出された緩やかにカーブする上幅2m以上、床幅1m以上、深さ0.8m程度の溝である。SD001を切るSE029を切っているため、これらより新しく、また、SD002埋没後にSK023が営まれており、これらの出土遺物がいずれも16世紀後葉～末葉に帰属するため、短期間での遺構群の消長が考えられよう。埋土中には砂層が互層に重なり確認でき、水流を伴う滞水状態にあった溝であることがわかる。このSD002は両端とも調査区東側に延びている。



第128図 II区SD001-1・2出土銭貨(1/1)



第129図 II区SD002出土遺物実測図(1/3)

SD002出土遺物(第129・130図)

出土遺物は第129・130図に示した。1は中国龍泉窯系青磁小碗である。内面には丸ノミ状施文具で蓮弁を表現している。2は白磁皿であり、口縁部を幅広く折り、端部は稜花状に仕上げている菊花皿である。3・4、7～9は京都系土師器皿であり、3・4に関しては内外面に多量のススが附着している。5・11は京都系土師器皿であり、取瓶として再利用されており、内面に付着物が大量に認められ、また、器壁の色調も青灰色に変色している。6は土師質土器皿であるが、体部から口縁部にかけての形態は、京都系土師器皿の影響をうけており、折衷形といえるものである。12は備前系陶器搦鉢であり、放射状スリメのみがみられ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。13



第130図 II区SD002下層出土銭貨(1/1)

は中国南部産焼締陶器鉢である。器壁は薄く、口縁は幅広い台形状の縁帯を設けている。14は瓦質土器鉢であり、体部内外面にはナメ方向の粗いハケ目がみられる。外面には粗クスが付着している。15は土師質土器編であり、内面にはナデ調整がみられるが、外面には指オサエや粗いナデがみられる。外面にはススが付着する。

第10図は銅銭である。「皇宋通寶」(1038年初鋳)である。

b. 土坑

SK003 (第131図)

調査区中央より、やや南西側のL24区に位置する。長径1.3m、短径0.9m、深さ0.25mを測る楕円形の浅い皿状を呈する土坑である。埋土は上層が炭・焼土が多く混入する褐色土からなり、また、下層には灰を非常に多く含む灰褐色土が厚く堆積し、火災処理を目的として掘削された土坑であることがわかる。埋土中には土器類の他に拳大～人頭大の川原石がみられ、遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかる。

SK003出土遺物 (第132図)

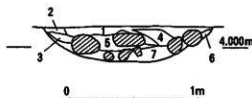
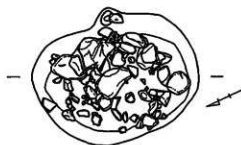
出土遺物は第132図に示した。1～3は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。4は埴であり、一面にコビキ痕が残る。5は丸瓦であり、凸面には長軸方向にナデが、また、内面には布目痕が残されている。6は結晶片岩製の磁石であり、扁平な両面に使用痕が残されている。

SK004 (第133図)

調査区中央より、やや西側のK23区・L23区に位置する。長径1.6m、短径0.7m最深約0.65mを測る隅丸長方形土坑である。埋土は焼土・炭を非常に多く含む褐色土であり、中には焼土塊もみられる。土器類とともに拳大～人頭大の川原石が出土している。炭・焼土がきわめて大量であることや、埋土中の川原石が焼成により赤変していることなど、火災処理を目的として掘削された廃棄土坑であることがわかる。遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかり、中でも特筆すべき事は、焼土化した壁土塊や完形の石臼が川原石に混じってみられることである。

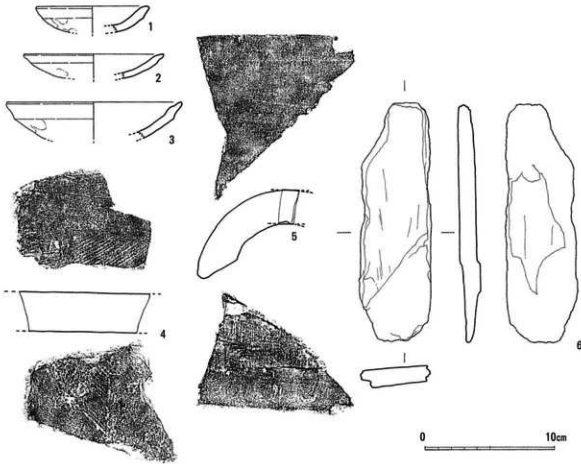
SK004出土遺物 (第134～136図)

出土遺物は第134～136図に示した。第134図1は中国景德鎮窯系青花碗である。小野分類E群の盤頭心腕に分類できる。見込みには花文が、また、高台内には字款が描かれている。2・3は中国景德鎮窯系青花皿である。小野分類B群におさまり、口縁反りの形態をもつ。4は白磁小杯である。5は備前系陶器皿である。6は土師器香炉である。18は土師質土器の取瓶であるが、高温によるため灰黒色の色調を呈する。内面には緑青をはじめとした付着物が認められる。7～17は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。19・20は京都系土師器坏であり、その



第131図 II区SK003実測図 (1/30)

- 1 褐色土 (炭・焼土を含む)
- 2 褐色土 (焼土・炭を少量含む)
- 3 淡褐色土 (わずかに粘性を帯びる)
- 4 灰
- 5 灰褐色土 (灰を非常に多く含む)
- 6 灰褐色土 (灰を非常に多く含む)
- 7 褐色土



第132図 II区SK003出土遺物実測図(1/3)

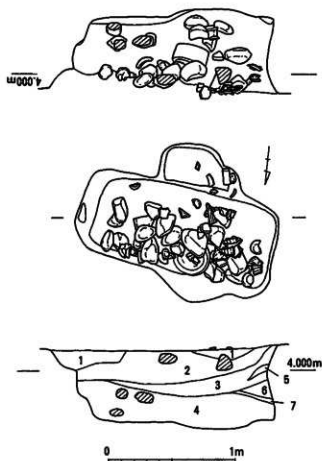
特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。

第136図1はタイ産メナムノイ窯系焼締陶器であり、頸部の耳が欠失しているが、四耳壺になるものと考えられる。2は備前系陶器水屋甕である。3は丸瓦片であり、凸面に縄目叩き痕が、また、凹面に布目痕がみられる。

第135図は安山岩製石臼の上臼である。完存で挽き手孔・軸受孔・ものくばり穴すべて良好な形態で残る。磨面は摩滅が著しく、多くの溝が消滅している。かろうじて残った溝から、分画数は8分画で副溝は3条存在していたものと考えられる。

SK005 (第137図)

調査区中央より、やや北西側のL24区に位置する。長径1.3m、短径0.8m、最深約0.35mを測る瓢箪形の不定円形土坑である。埋土は微細な焼土・炭を非常に多く含む褐色土であり、中には径3cm程度の焼土塊もみられる。土器類とともに拳大～人頭大の川原石が出土しており、火災処理を目的として掘削された廃棄土坑であることがわかる。遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかる。遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかる。



第133図 II区SK004実測図(1/30)

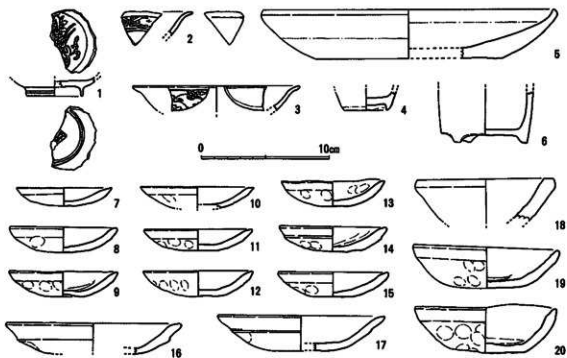
- 1 褐色土(小さい炭・焼土をわずかに含む)
- 2 焼土・炭(焼土・炭ともブロックが大きい)
- 3 褐色土(小さい炭・焼土をわずかに含む)
- 4 焼土・炭(2層よりも焼土・炭ともブロックが小さい)
- 5 焼土・炭(4層よりも焼土・炭ともブロックが小さい)
- 6 焼土・炭(4層に近似する)
- 7 炭・灰

SK005出土遺物(第138図)

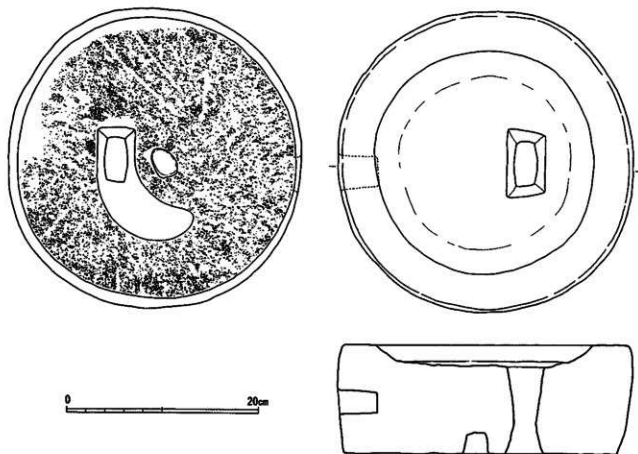
出土遺物は第138図に示した。1は中国景徳鎮高系青花碗である。2は中国産青花碗である。3は白磁皿であり、口縁端反りの形態をもつ。4と同一個体と考えられ、いずれも、火災により2次焼成を受けている。4の高台内には字款が描かれている。5～7は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。8はベトナム産焼締陶器長胴壺である。青灰色の色調を帯び湾曲して立ち上がる口縁をもち、口唇部外面を肥厚させている。肩部に2条、胴部に1条の細い沈線が確認できる。

SK006(第122図)

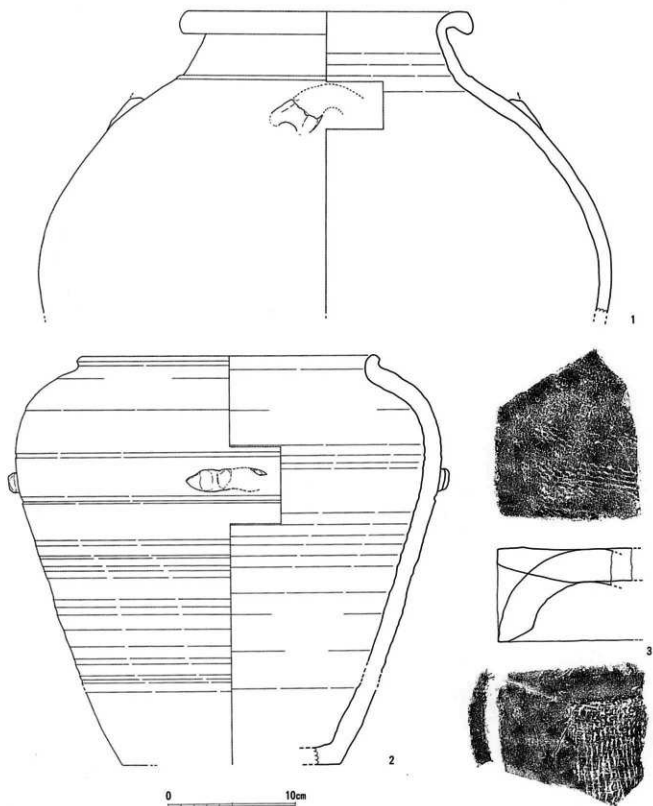
調査区中央より、やや南西側のK24区に位置する。長径0.95m、短径0.4m、最深約0.6mを測る長方形土坑である。ほぼ垂直に掘り下げられ、上層に褐色土がみられるが、中下層はにぶい黄褐～褐色を呈する軟質な砂質土のみの均質な埋土であり、当遺跡中、きわめて異質な遺構埋土であり、礫は含まれない。SK006はSD001と肩がほぼ接しているが、切り合い関係が確認できるものではなかった。



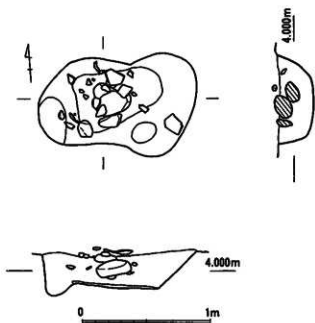
第134图 II区SK004出土遺物実測図① (1/3)



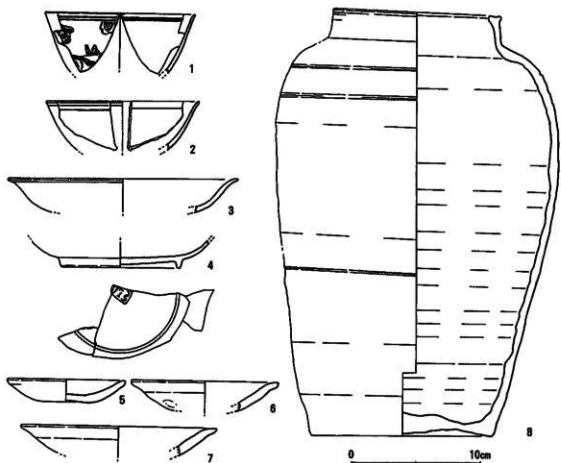
第135图 II区SK004出土遺物実測図② (1/4)



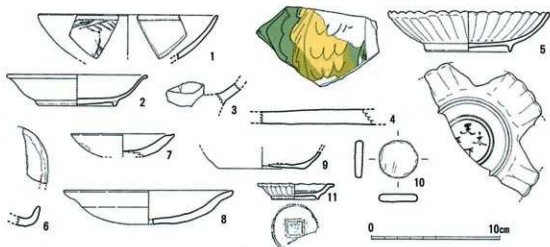
第136図 II区SK004出土遺物実測図③ (1/3)



第137图 II区SK005实测图(1/30)



第138图 II区SK005出土物实测图(1/3)



第139図 II区SK006出土遺物実測図(1/3)

SK006出土遺物(第139図)

出土遺物は第139図に示した。1は中国漳州窯系青花碗である。2は口縁端反りの形態をもつ白磁皿である。3・4は華南三彩盤の破片であり、同一個体である可能性が高い。内面に刻花が認められ、黄釉・緑釉が施されている。外面は露胎のままである。5は中国景德鎮窯系白磁の菊皿である。高台内には2重線内に「天下太平」の吉祥句がみえる。6は京都系土師器小皿の体部両側に内に押し込んで成形した耳皿である。7・8は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。9は在地系土師質土器坏であろうが、器壁が薄い特徴をもつ。10は土師質土器片を円盤状に加工したものである。11は中国産翡翠釉菊花小皿であり、高台内には型押しした2重の方形輪郭がみられる。

SK007(第140図)

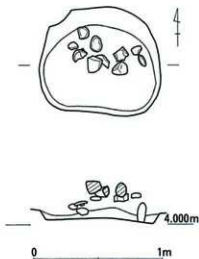
調査区中央より、やや南側のK24区・L24区に位置する。長径0.95m、短径0.85m、深さ約0.15mを測る浅い皿状の円形土坑である。出土遺物は比較的少なく、わずかな土器類とともに拳大の礫が少量出土している。

SK007出土遺物(第141図)

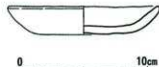
出土遺物は第141図に示した。京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。

SK008(第142図)

調査区中央より、やや西南側のL24区に位置する。長径1.35m、短径1.1m、深さ約0.25mを測る浅い皿状の隅丸方形土坑である。出土遺物は比較的少なく、わずかな土器類とともに拳大の礫が少量出土している。



第140図 II区SK007実測図(1/30)



第141図 II区SK007出土遺物実測図(1/3)

SK008出土遺物 (第143図)

出土遺物は第143図に示した。1は中国産青花皿であり、内外面の口縁付近および見込み付近にそれぞれ圈線がみられる。2は白磁皿であり、口縁端反りの形態をもち、見込みには輪状の軸剥ぎが認められる。3は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、削り出し輪高台を呈し、高台周辺には銷軸が施されている。4は備前系陶器鉢である。5～10は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。

SK009 (第144図)

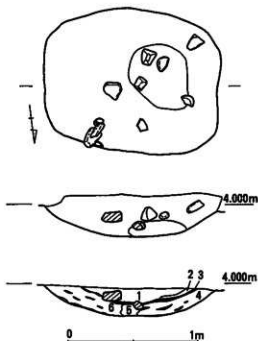
調査区中央より、やや南側のL24区に位置する。長径1.35m、短径1.1m、深さ約0.25mを測る浅い皿状の長楕円形土坑である。出土遺物は比較的少なく、わずかな土器類とともに拳大の礫が少量出土している。

SK009出土遺物 (第145図)

出土遺物は第145図に示した。1は中国景德鎮窯系青花皿であり、高台に大量に砂が付着している。2は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。

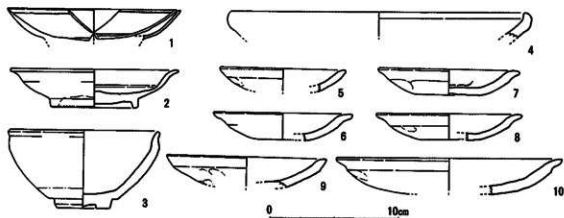
SK010 (第146図)

調査区中央より、やや北側のL23区・L24区に



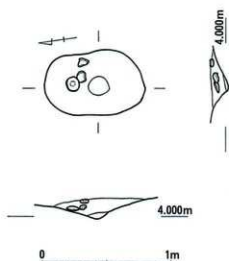
第142図 II区SK008実測図 (1/30)

- 1 褐灰色粘質土
- 2 におい褐色粘質土
- 3 黒色粘質土
- 4 明褐色粘質土
- 5 におい黄褐色粘質土
- 6 褐灰色粘質土

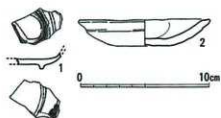


第143図 II区SK008出土遺物実測図 (1/3)

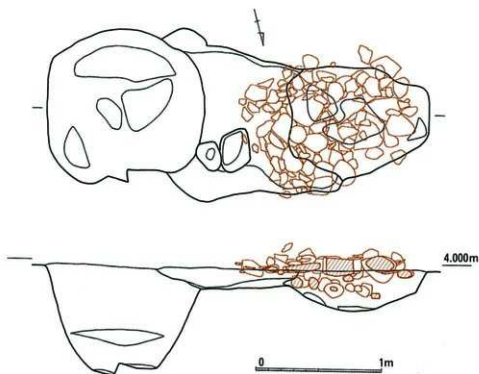
位置する。長径3.1m、短径1.2m、最深約0.8mを測る不定形の土坑である。数基の土坑が切り合っているものと考えられるが、埋土からそれぞれの土坑単位が確認できず、近接した時期に廃棄土坑として掘り返されたものと考えられる。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、土坑西側部分からは土器類とともに拳大～人頭大の川原石がきわめて大量に出土しているが、東側の深い土坑部分からは、川原石の出土はほとんど確認できなかった。



第144図 II区SK009実測図 (1/30)



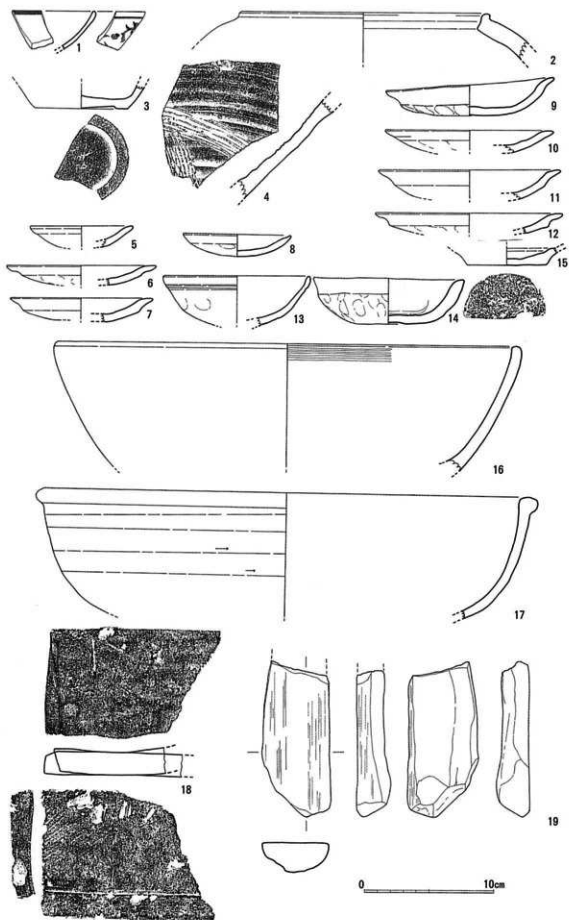
第145図 II区SK009出土遺物実測図 (1/3)



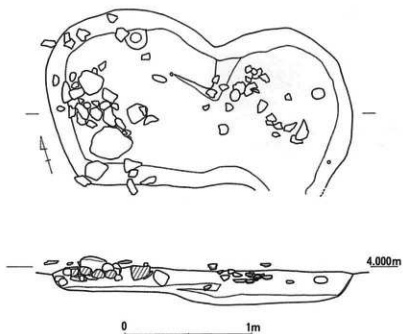
第146図 II区SK010実測図 (1/30)

SK010出土遺物 (第147図)

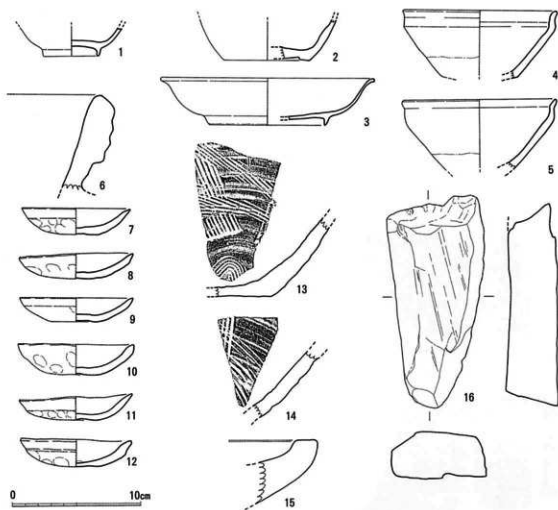
出土遺物は第147図に示した。1は中国産青花皿であり、内外面の口縁付近にそれぞれ圏線がみられ、外面には唐草文がみえる。2は備前系陶器壺である。無頸であり、口縁部に蓋受けを設ける形態をもつ。3は焼締陶器壺であり、幅広い高台を削り出し、削り出し後、ナデ調整されている。高台内中央には小さくヘラ記号が見られる。4は備前系焼締陶器擋鉢である。放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。5～12は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。13は土師質土器壺であると考えら



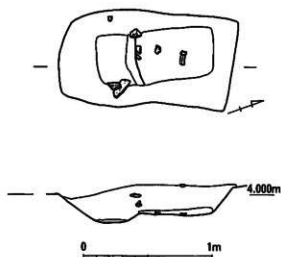
第147图 II区SK010出土遺物実測図(1/3)



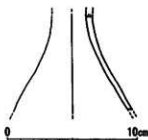
第148図 II区SK011実測図(1/30)



第149図 II区SK011出土遺物実測図(1/3)



第150図 II区SK012実測図(1/30)



第151図 II区SK012出土遺物実測図(1/3)

れる。体部が丸い形態をもち、口縁付近外面は丸く彫らませてナデにより仕上げられており、それ以下は指オサエにより整形されている。14は京都系土師器環であり、器壁が厚い。15は土師質土器皿片であるが、先行した遺構から混入したものであろう。16は土師質土器鉢であり、体部を丸く仕上げ、内外面に丁寧なナデを施し、口縁部内面には横方向の刷毛を施している。17は瓦質土器鍋であり、体部を丸く仕上げ、口縁部外面を丸く肥厚している。調整は内面に丁寧なナデを、外面に横方向のケズリを施している。18は平瓦であり、内面には縦弧線が残る。19は結晶片岩製砥石であり、4面とも砥面として使用痕が認められる。

SK011 (第148図)

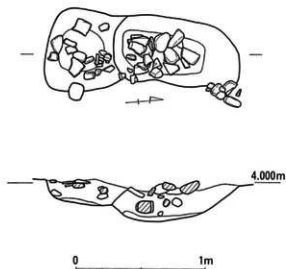
調査区中央より、やや北側のL23区に位置し、SK010の北に接続する。長径2.3m、短径1.4m、最深約0.27mを測る長楕円形の土坑である。SK010・024と様相がほぼ同じであるため、近接した時期に廃棄土坑として存在していたものと考えられ、同一遺構として把握すべきものかもしれない。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、土坑西側部分からは土器類とともに拳大～人頭大の川原石がきわめて大量に出土しているが、東側の深い土坑部分からは、川原石の出土はほとんど確認できず、土器類の出土が主体であった。

SK011出土遺物(第149図)

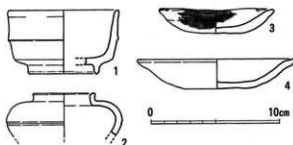
出土遺物は第149図に示した。1は磁器碗の底部片であり、鋭頭心の形態をもつ。2は備前系焼締陶器徳利である。3は白磁皿であり、口縁端反りの形態をもつ。4・5は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、体部が直線的に開く形態をもつ。6は備前系焼締陶器製の口縁部片である。7～12は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。13・14は備前系焼締陶器播鉢である。放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、桑阿編年近世1期に帰属するものである。15は石臼の下臼である。16は結晶片岩製砥石であり、1面のみ砥面として使用している。

SK012 (第150図)

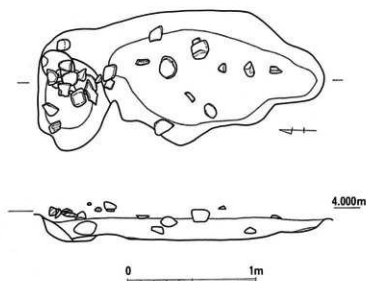
調査区中央より、やや北西側のL23区に位置する。長径1.4m、短径0.75m、最深約0.3mを測る長方形土坑である。SK010・011と様相がほぼ同じであるため、近接した時期に廃棄土坑として存在していたものと考えられる。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であるが、SK010・011に比較すれば川原石の出土がほとんどみられなく、土器類の出土が主体であった。図化できた遺物は1点のみであるが、細片の遺物を観察した場合、16世紀後葉～末葉に帰属する遺構であることがわかる。



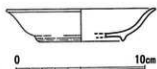
第152図 II区SK013実測図 (1/30)



第153図 II区SK013出土遺物実測図 (1/3)



第154図 II区SK014実測図 (1/30)



第155図 II区SK014出土遺物実測図 (1/3)

SK012出土遺物 (第151図)

出土遺物は第151図に示した。備前系統焼締陶器徳利の胴部上半から頸部にかけての破片である。

SK013 (第152図)

調査区中央より、やや北西側のL23区に位置する。長径1.5m、短径0.65m、最深約0.3mを測る長楕円形の土坑である。SK014に隣接し、SK010・011・012と様相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられる。しかも、SK013内には2基とも捉えられる土坑単位が存在するものの、埋土等から別遺構として把握できなかった。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、土器類とともに拳大よりやや大きな川原石がSK013北側部分より出土しているが、これは、土坑単位を示しているものかもしれない。

SK013出土遺物 (第153図)

出土遺物は第153図に示した。1は白磁の香炉である。高台皿付以外には全面に白濁した釉がかけられている。直立した体部中央には小さい突帯が見られる。2は備前系統焼締陶器小壺である。横に広く膨らみ、口縁は小さく直立する形態をもつ。3・4は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。3には内外面にスガが厚く付着している。

SK014 (第154図)

調査区中央より、やや北西側のL23区に位置する。長径2.3m、短径1.05m、最深約0.25mを測る長楕円形の不定形土坑である。SK013に隣接し、SK010・011・012と楢相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられ、同一遺構として把握すべきものかもしれない。しかも、SK014内には2基とも捉えられる土坑単位が存在するものの、埋土等から別遺構として把握できなかった。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、土器類とともに単大よりやや大きな川原石がSK014北側部分に集中して出土しているが、これは、土坑単位を示しているものかもしれない。図化できた遺物は1点のみであるが、細片の遺物を観察した場合、16世紀後葉～末葉に帰属する遺構であることがわかる。

SK014出土遺物 (第155図)

出土遺物は第155図に示した。白磁皿であり、口縁端反りの形態をもつ。

SK015 (第122図)

調査区中央より、やや北西側のL23区・L24区に位置する。長径0.66m、短径0.62m、最深約0.24mを測る隅丸方形の土坑である。SK013に隣接し楢相がほぼ同じであるため、上半部が削平された同一遺構か、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられる。遺物は2点の瓦質土器が出土したのみで、図化しうるものは見られなかった。

SK016 (第123図)

調査区中央より、やや北西側のL23区に位置する。長径1.24m、短径0.75m、最深約0.20mを測る長楕円形の不定形土坑である。SK011・014・017に隣接し楢相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられ、同一遺構として把握すべきものかもしれない。遺物は確認できていない。

SK017 (第123図)

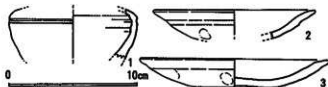
調査区中央より、北西側のL23区に位置する。最深約0.30mを測る長楕円形の不定形土坑であり、北側は調査区外のⅢ区SK029に延びる。SK016に隣接し、楢相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられ、同一遺構として把握すべきものかもしれない。

SK017出土遺物 (第156図)

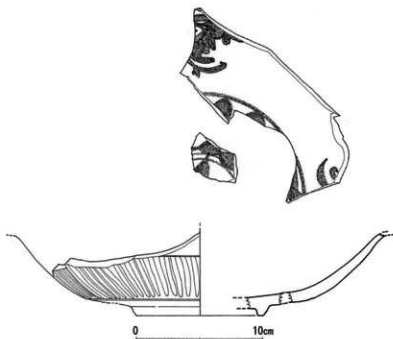
出土遺物は第156図に示した。1は備前系統焼締陶器小壺であり、胴部最大径部に沈線を描かせている。2・3は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。

SK018 (第123図)

調査区中央より、東北側のL23区・M23区に位置する。最深約0.07mを測る長楕円形の不定形土坑である。SK024に隣接し、楢相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられるが、出土遺物は極めて乏しい。



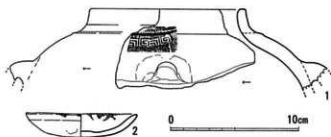
第156図 II区SK017出土遺物実測図(1/3)



第157図 II区SK018出土遺物実測図(1/3)

SK018出土遺物(第157図)

出土遺物は第157図に示した。中国漳州窯系青花の大型の皿である。口縁は外反し、外面には胴部の上下に沈線を廻らし、その間に縦方向の筋を連続させる。高台及び高台内面にも施釉しており、高台畳付けには大量の砂が付着している。



第158図 II区SK019出土遺物実測図(1/3)

SK019(第123図)

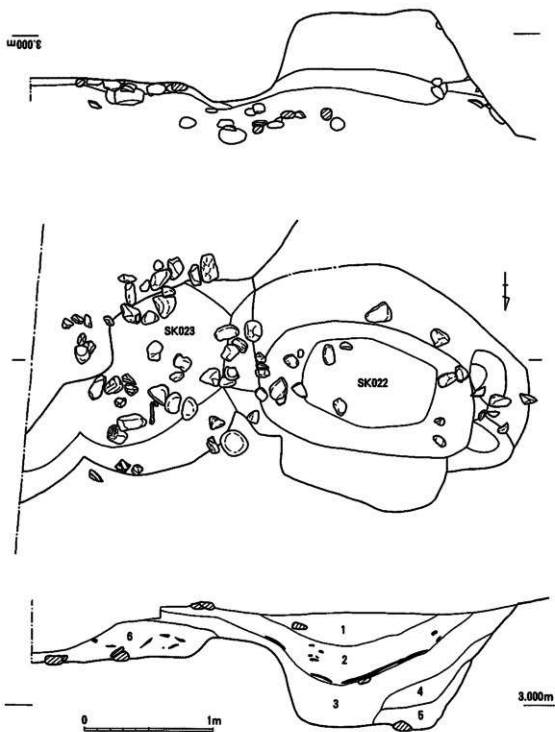
調査区中央より、東北側のM23区・M24区に位置する。長径0.8m、短径0.4m、最深約0.3mを測る長楕円形の土坑である。出土遺物は乏しい。

SK019出土遺物(第158図)

出土遺物は第158図に示した。1は瓦質土器釜である。外面口縁下に連続する雷文のスタンプが見られる。また、肩部には縦方向の把手が付けられている。2は京都系土師器皿であり、口縁部にススが厚く付着している。

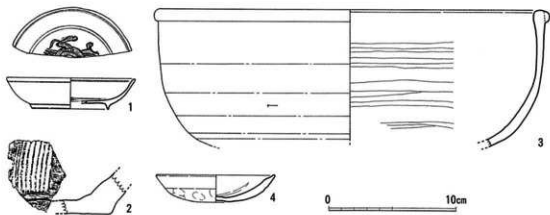
SK022(第159図)

調査区中央より、やや西側のM24区に位置する。長径2.2m、短径1.8m、最深約1.1mを測る長楕円形の土坑である。土層観察からSK23を切っていることが分かる。下層には灰色系の粘質土が堆積しており、埋没前には滞水状態であったことがうかがえるが、SK23を切るSD002の埋土に延びるため、SD002が営まれていた時期に水溜状の遺構として存在していたことが分かる。中層以上の埋土には大量の炭が混じり、出土遺物もほとんど中層以上から出土している。埋土中には拳大～人頭大に川原石も含まれていた。

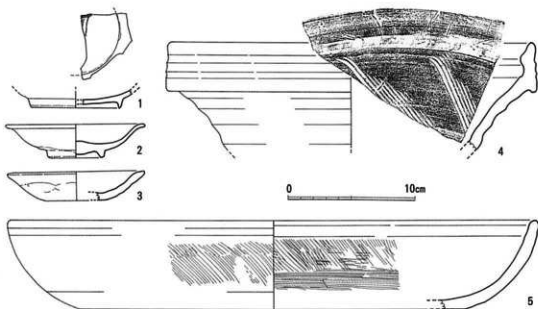


第159図 II区SK022・023実測図 (1/30)

- 1 灰褐色土 (わずかに炭・焼土を含む)
- 2 におい褐色土 (多量の炭が混じる)
- 3 褐灰色粘質土 (わずかに炭を含む)
- 4 褐灰色粘質土 (わずかに炭を含む)
- 5 灰色土
- 6 におい褐色土 (小さな褐色土ブロックや炭・焼土を含む)



第160図 II区SK022出土遺物実測図(1/3)



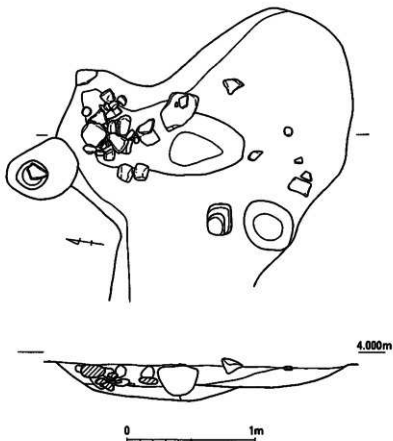
第161図 II区SK023出土遺物実測図(1/3)

SK022出土遺物(第160図)

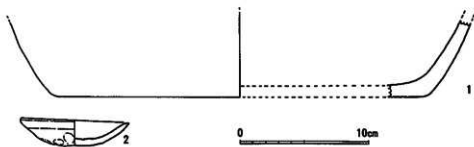
出土遺物は第160図に示した。1は中国景徳鎮窯系青花皿である。小野分類染付皿E群に分類できる。全面に軸葉をかけ、高台壘付部には砂が付着している。内外面の口縁付近と高台付付近に圈線がみられ、見込み部にみられる文様は獅子文であろうか。2は備前系統埴輪陶器挿鉢である。放射状スリメのみがみられ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。混入品であろう。3は瓦質土器鍋である。内面には細かい横方向のミガキが施され、外面には細かい横方向のケズリがみられ



第162図 II区SK023出土銭貨(1/1)



第163図 II区SK024実測図 (1/30)



第164図 II区SK024出土遺物実測図 (1/3)

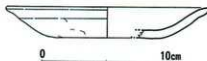
る。4は京都系土師器である。

SK023 (第161図)

調査区東側のM24区に位置する。西側をSK022から切られており、北側のみプランを確認した遺構であり、落ち込み状地形を整地した単位とも受け取れるが、ここでは土坑として捉えておく。埋土には炭・焼土をはじめ1～3cmの褐色土ブロックが混じり、人為的に埋められたことが分かる。埋土には拳大より大きな隙を含むが、遺物はさほど多くはない。

SK023出土遺物 (第161図)

出土遺物は第161図に示した。1は磁器皿であり、高台を含めて内外面に軸葉が全面にかけられている。高台内中央に字款がみられる。2は白磁皿であり、口縁は端反りの形態をもつ。高台及び高台



第165図 II区SK025出土遺物実測図(1/3)



第166図 II区SK026出土遺物実測図(1/3)

内は露胎を呈する。釉薬が2度掛けされており、1度目は白色釉であるが、その上にうすく緑色を呈する釉薬がかけられている。3は京都系土師器皿である。4は備前系焼締陶器鉢である。ナメ方向のスリメが確認でき、乗岡編年近世1期に帰属するものである。5は瓦質土器鉢である。内外面に粗いナメ方向の刷毛目がみられ、外面はその上下を丁寧に横ナデし、内面はナメナデの下に細かい横方向の刷毛目を施している。

第162図は銅銭である。「元豊通寶」(1078年初鑄)である。

SK024 (第163図)

調査区中央のやや北側のL23区・L24区に位置する。長径2.3m、最深約0.3mを測る長楕円形の土坑である。SK011に接し、様相がほぼ同じであるため、近接した時期に同様な目的で掘り返されたもので、埋土からそれぞれの土坑単位が確認できたものであり、SK010と様相が似ている。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、一部深い部分には拳大～人頭大の川原石が多くみられる。

SK024出土遺物(第164図)

出土遺物は第164図に示した。1は瓦質土器鉢である。内外面には丁寧なナデが施されている。2は京都系土師器皿である。

SK025 (第122図)

調査区中央のやや西南側のL24区に位置する。長径0.7m、最深約0.07mを測る長方形の土坑であり、北側のみ残存する。SK026に近接し、様相がほぼ同じであるため、類似遺構と考えられる。

SK025出土遺物(第165図)

出土遺物は第165図に示した。京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年2期に属するものと考えられる。

SK026 (第122図)

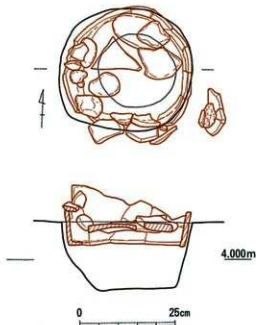
調査区中央のやや西南側のL24区に位置する。最深約0.1mを測る円形の土坑の一部のみ残存する。SK025に近接し、様相がほぼ同じであるため、類似遺構と考えられる。

SK026出土遺物(第166図)

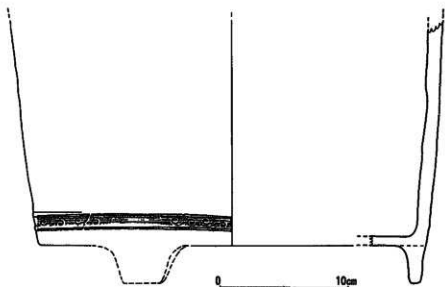
出土遺物は第166図に示した。白磁皿であり、焼成は軟質で淡黄色を呈する。見込みおよび高台をのぞき、体部上半にのみ釉薬がかけられている。高台は低くケズリ出されて成形されている。

SK027 (第167図)

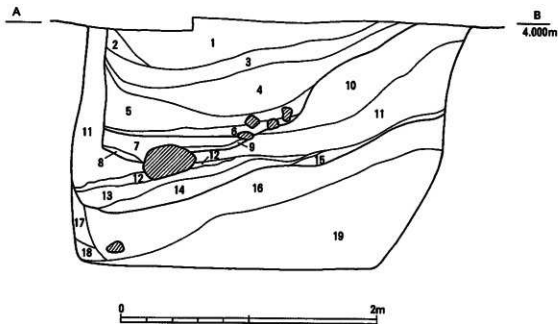
調査区中央より、北西側のK23区・L23区に位置する。瓦質土器火鉢を小土坑に埋置した遺構である。瓦質土器は上半部が欠失



第167図 II区SK027実測図(1/10)



第168図 II区SK027出土遺物実測図 (1/3)



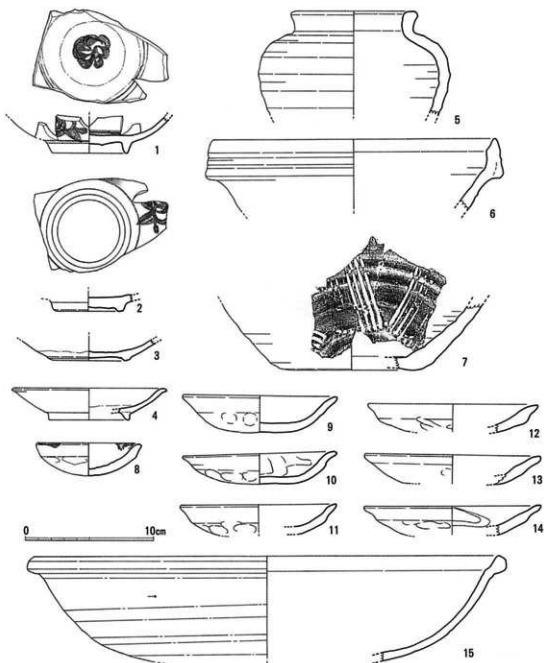
第169図 II区SE028土層断面実測図 (1/30)

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1 におい褐色土 (径1~5cmの地山ブロック) | 11 明褐色土 |
| 2 灰褐色土 | 12 褐灰色砂粘質土 (潜水状態をあらわす) |
| 3 におい褐色土 (1層とほぼ同じだが若干暗い) | 13 明褐色土 (11層と同じ) |
| 4 におい褐色土 (1・3層とほとんど同じ) | 14 褐灰色砂粘質土 (潜水状態をあらわす 銅銭3枚出土) |
| 5 におい褐色土 | 15 灰褐色土 |
| 6 褐灰色砂粘質土 (潜水状態をあらわす) | 16 褐灰色土 |
| 7 におい褐色土 | 17 褐灰色砂粘質土 |
| 8 褐灰色砂粘質土 (潜水状態をあらわす) | 18 褐灰色砂土 |
| 9 褐灰色砂粘質土 (潜水状態をあらわす 8層と同一層) | 19 雜岩 |
| 10 褐灰色砂粘質土 (潜水状態をあらわす) | |

しているが、状況から本来は、完存に近いものが削平により失なわれたと考えられる。小土坑は径23～35cmを測り、ほぼ瓦質土器の底径に近い数値をもつため、瓦質土器を埋置するために掘削されたものであることが分かり、埋土中には瓦質土器以外の出土遺物は確認できなかった。なお、瓦質土器内には拳大を含め、やや小さな川原石が数点検出されているほかに遺物はみられない。

SK027出土遺物（第168図）

出土遺物は第168図に示した。瓦質土器火鉢であり、胴部下半が残る。脚が付き、底部付近に2条の細い突帯を廻らし、この突帯間に双頭蕨手流雲文のスタンプがみられる。



第170図 II区SE028出土遺物実測図①(1/3)

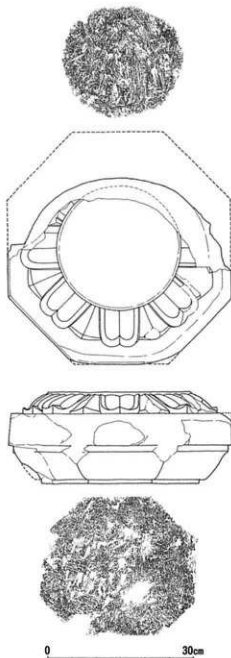
c. 井戸

SE028 (第123・169図)

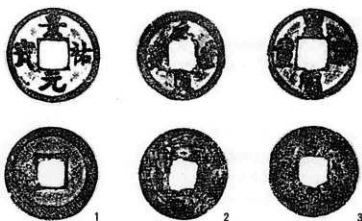
調査区中央より、やや南東側のL24区・M24区に位置する井戸跡である。それぞれの切り合い関係からSD001を切っており溝埋没後に掘削されたことがわかる。堀方は3.4m×3.7m、深さ約1.5mを測る隅丸方形を呈し、床面は砂層にまで達していたため井筒等の掘方が存在したかは確認できなかった。ただ、堀方は掘り返され、井筒は抜き取られて、廃棄土坑として再利用されていた。堀方内埋土は下層に大量の川原石が投げ込まれており、これらの中に遺物が混入していた。土層堆積を観察すると、北から南へ下がる堆積層が確認できるため、北から継続して廃棄した様相が読み取れる。埋め戻しの過程で、3度におよび床面に砂粘質土層の堆積が確認できたため、滞水状態の土坑状を呈する時期があったことがわかり、数回に分けて埋められていったことがわかる。14層からは3枚に合わさった銅銭が出土しているため、第1次の埋没が終了した時点で銭貨を伴う祭祀が行われたのかもしれない。出土遺物は比較的多く、そのほとんどが最下層の礫層に混入したものである。最下層の礫は拳大から一抱えもある川原石を中心とした礫を投げ入れたものである。比熱しているものが多く、無縫塔部材がみられるほか、礫層中から土器片も出土している。

SE028出土遺物 (第170・171・172図)

出土遺物は第170・171・172図に示した。第170図1は中国漳州窯系青花碗である。見込み部を蛇の目状に軸葉を掻き取っている。2は中国龍泉窯系青磁碗であり、見込み部および高台内面は露胎のままである。3は体部が直線的に外方に開く白磁皿であり、見込み部および高台は露胎のままである。4は陶器皿である。5は備前系統締締陶器壺である。6・7は備前系統締締陶器播鉢である。7には放射状スリメのみがみられ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。8～14は京都系土師器皿であり、塩地編年2・3期に属するものであろう。8には口縁部にススが付着している。



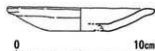
第171図 II区SE028出土遺物実測図②(1/8)



第172図 II区SE028出土銭貨(1/1)

15は土師質土器鍋である。体部外面には横方向の細かいケズリが施されている。

第171図は無縫塔の部材であり、卵塔下の中台である。上面には八角台座の各面に向かう方向に複弁蓮華文の反花を八葉を刻出し、下部は縦形を呈する。肉厚な蓮弁は鎌倉後半～南北朝初期の石造物の特徴をよくあらわすものである。卵塔あるいは蓮華座を置く上面、および八角形の竿と重ね合わせる下面はいずれも調整が粗く、ノミ痕が残る。その他の面はきわめて丁寧に調整されている。全体的に焼成により赤変しており、破損部は同じく焼成により、はじけた破損の様相を示しているため、屋内に安置され、火災によって強い火を受け破損したものと考えられよう。



第173図 II区SE029出土遺物実側図(1/3)

第172図は銅銭である。1は「景祐元寶」(1034年初鑄)、2は「元豊通寶」(1078年初鑄)、3は「皇宋通寶」(1038年初鑄)である。

SE029(第122・124図)

調査区の南東端M24区に位置する井戸跡である。それぞれの切り合い関係からSD001-1・2・3を切っており、SD002から切られている。堀方は深さ約80cmを測る円形土坑を呈し、床面をさらに小さな円形で75cm掘り下げている。堀方内埋土は砂や褐色土が混入するにぶい橙色土からなり、井筒内埋土には遺物をはじめ炭や小石が混じる。井筒は検出できないが井筒部分と堀方の境目に粘土からなる木質の痕跡が確認でき、円形の桶あるいは曲物であった事が分かる。出土遺物はきわめて少なく、図化できるものは1点のみであった。

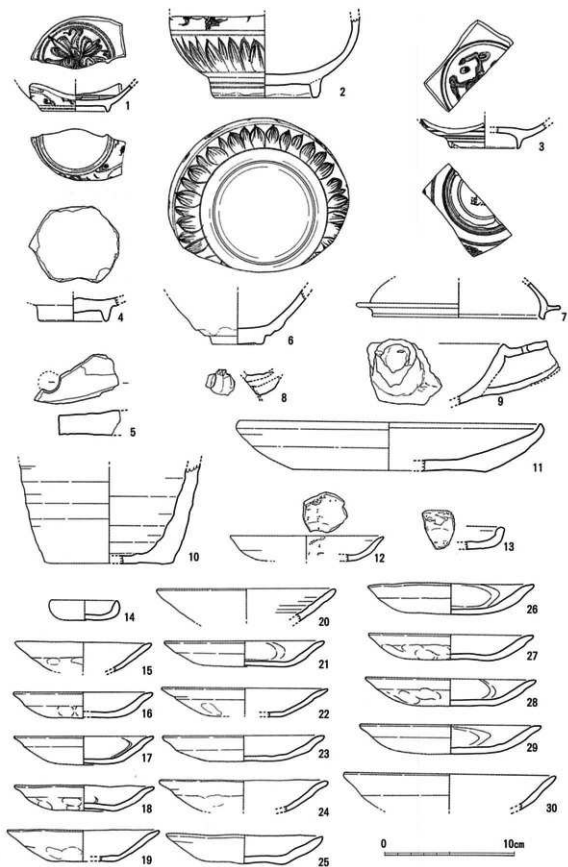
SE029出土遺物(第173図)

出土遺物は第173図に示した。京都系土師器皿であり、塩地編年2期に属するものであろう。

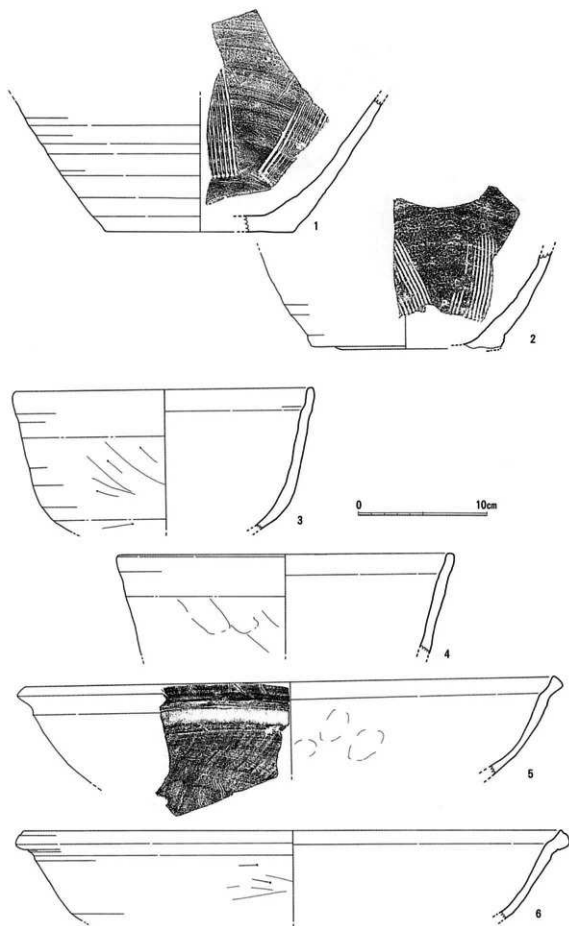
d. その他の遺構

SX030(第121・124図)

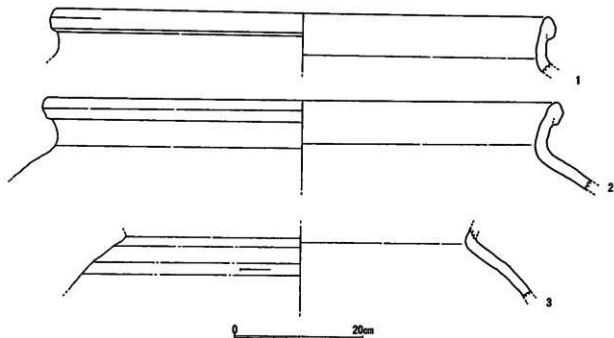
K・L-23・24区に位置し、調査区中央部から西側調査区外及びⅢ区に延びる不定形の大型落ち込み状遺構である。東西・南北とも10mをこえる規模で、最深約0.8mを測り、落ち込み床面には径1～4mの凹凸の単位が認められる。埋土は下層に褐色粘質土層が堆積し、中に拳大の礫や遺物が含まれている。掘削後、一時、水溜まり状を呈し、その際に廃棄されたものと考えられる。遺物中には南河部において完形の京都系土師器皿が数点見られる。中上層は褐色土を主体とするもので、炭・焼土が



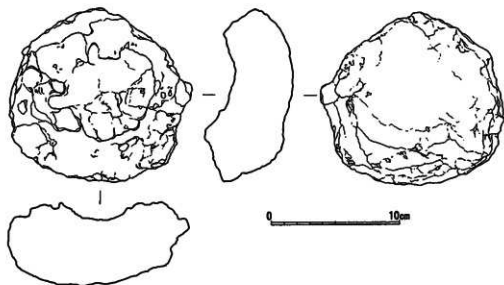
第174图 II区SX030出土遺物実測图①(1/3)



第175図 II区SX030出土遺物実測図② (1/3)



第176図 II区SX030出土遺物実測図③ (1/6)



第177図 II区SX030出土遺物実測図④ (1/3)

わずかに含まれるほか、地山土の径1～3cmの小ブロックが含まれるため、人為的に埋められ整地されたものと考えられる。この大型落ち込みが整地されて後、上に造構が営まれている。

SX030出土遺物 (第174～177図)

出土遺物は第174～177図に示した。第174図1は中国漳州窯系青花皿であり、見込み部に十字花文がみられる。2は中国産青花壺であろうか。高台登付けのみ露胎であり、内外面および高台内に乳濁した釉薬がかけられている。外面胴部下半には圓線を描らし、その下に蓮華葉文を連続させる。3は中国景德鎮窯系青花碗である。小野分類E群の饅頭心碗に分類できる。見込みには花文が、また、高

台内には「□□□造」の年款が描かれている。

4は2次焼成を受けた磁器碗である。5は扁平な磁器製品であり、径1.6cmの円孔がみられる。用途は明らかでない。6は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、削り出し輪高台を呈し、高台周辺には錆釉が施されている。7は焼締陶器蓋である。8は焼締陶器の注口部である。9は瓦質土器焙烙の柄着装部である。棒状の柄を差し込み使用していたものであろう。着装部の上面には釘穴がみられる。10は備前系統焼締陶器壺である。11は備前系統焼締陶器皿である。

12、15～19、21～30は京都系土師器皿である。いずれも埴地編年1期に属するものである。12は取瓶として再利用され、内面に付着物がみられる。13は京都系土師器小皿である。20は内面に強いロクロ痕を残す土師質土器皿である。13は取瓶片であり、内面に付着物が著しく残る。

第175図1・2は備前系統焼締陶器櫛鉢である。放射状スリメのみがみられ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。3・4は土師質土器深鍋である。口縁部内外面には回転ナデが施され、外面にはヘラケズリがみられる。外面にススの付着が認められる。5・6は土師質土器鍋である。受部状に成形された口縁は横ナデが施され、体部には5がタクキ後にヘラケズリ、6にはヘラケズリがそれぞれ施されている。

第176図1・2・3は備前系統焼締陶器甕である。

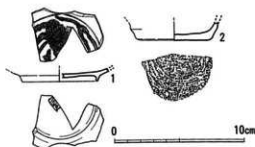
第177図は椀型滓である。

SX031 (第121・124図)

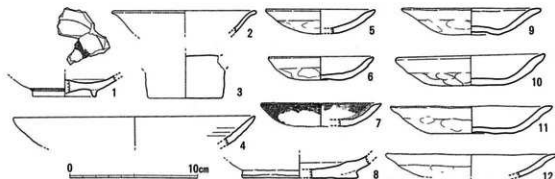
調査区南西端のK24区に位置する。遺構のプランは南側および西側に延びるため、土坑か落ち込み状遺構かは明らかでない。東西、南北とも1mをこえる規模で、最深約0.7mを測る。北側をSD001-1で切られているため、これに先行する遺構であることがわかる。埋土は橙色粘質土の小さなブロックや炭・焼土粒を含む褐色粘質土であり、遺物の出土は非常に少なく、図化できるものは2点のみであった。

SX031出土遺物 (第178図)

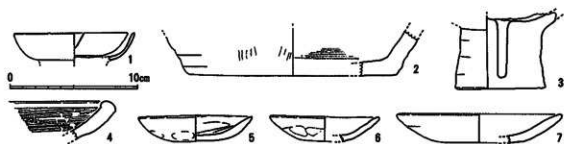
出土遺物は第178図に示した。1は中国景德鎮窯系青花皿であり、高台内に字款がみられる。2は土師質土器坏であり、比較的薄手である。



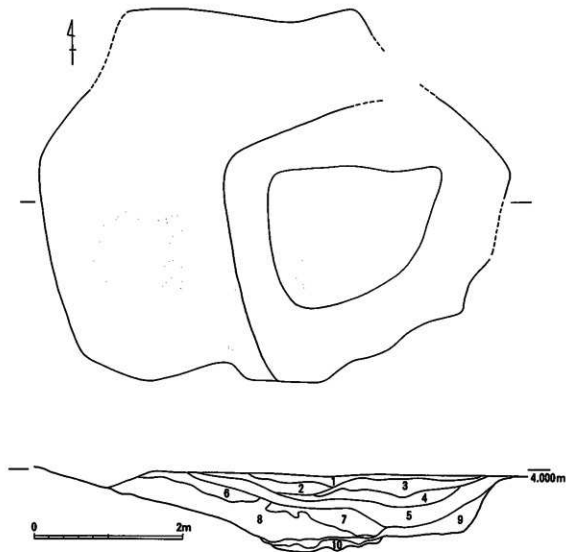
第178図 II区SX031出土遺物実測図(1/3)



第179図 II区SX032下層出土遺物実測図(1/3)



第180図 II区SX032出土遺物実測図(1/3)



第181図 II区SX033実測図(1/50)

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------|
| 1 褐色土（灰や土器片を大量に含む） | 6 暗褐色土（焼土・小石・砂が混じる） |
| 2 暗褐色土（灰や土器片を大量に含む） | 7 暗褐色土（焼土・小石・砂が混じる 6層と同一層か） |
| 3 褐色土（灰や土器片を含む 1cm程度のにぶい褐色土ブロックを含む） | 8 灰黄褐色砂層（礫や3～5cmの褐色土ブロックを含む） |
| 4 灰褐色土（灰や土器片を含む） | 9 褐灰色土層（炭の薄い層を含む） |
| 5 暗褐色土（京都系土器層がきわめて大量に含まれる） | 10 褐黄褐色土 |

SX032 (第122・124図)

調査区北東端のL・M-23・24区に位置する。遺構のプランは北側および西側に延び、不定形の大型落ち込み状遺構である。東西8m、南北4mをこえる規模で、最深約0.8mを測り、床面には凹凸が認められる。埋土にはふい黄褐色粘質土や褐色砂が堆積している。掘削後、一時、水溜まり状を呈していた時期が存在していたものと考えられる。この大型落ち込みが整地されて後、上に遺構が営まれている。

SX032出土遺物 (第179・180図)

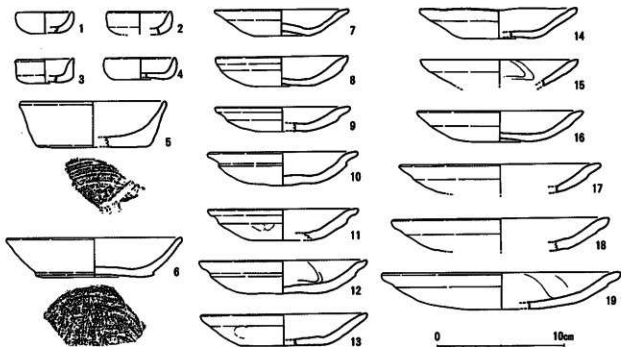
出土遺物は第179・180図に示した。第179図は下層から、第180図は上層からそれぞれ出土している。

第179図1は中国漳州窯系青花碗である。2は白磁皿であり、口縁部が端反りしている。3は瓦質土器風炉の脚である。筒状の形態をもち、器面は丁寧に磨かれている。4は土師質土器皿であり、内外面に強いロク口痕を残す。5～7、9～12は京都系土師器皿であり、埴地編年1～2期に属するものであろう。7にはススの付着が認められる。

第180図1は中国産青花皿であり、小野分類B群におさまる。2は瓦質土器蓋の底破片である。3は土製燗台であり、上部に穿孔がみられる。4は瓦質土器鍋であろうか。内面に横方向のハケ目が著しく残されている。5～7は京都系土師器皿であり、埴地編年1～2期に属するものであろう。5にはススの付着が認められる。

SX033 (第181図)

調査区中央のL24区に位置する。長径6.2m、短径4.8m、最深約0.95mを測る不定形の土坑である。この土坑内には、ほとんど京都系土師器に限定できる土師質土器皿の破片がきわめて大量に出土しており、土器溜り遺構として把握した。炭や灰が混入する褐色土からなる埋土はわずかであり、ほとんど土師質土器皿からなり、土師質土器皿に限定された廃棄土坑といえるが、9次調査区における同様の土器溜まり遺構に共通する様相として、軟弱地盤箇所にも営まれていること、遺物の堆積状況から時



第182図 II区SX033出土遺物実測図 (1/3)

期差が追えるものではなく、新旧の土器片が混在して存在することなどからして、他所に廃棄されていたものを、軟弱地盤克服のために大量に持ち込まれて敷かれたものと解釈すべきであろう。この土器溜まり遺構上には非常に硬質な堆積土が長径3.6m、短径2mの範囲（第181図トーン部分）でみられ、土器片敷設後にさらに硬質土を叩き締め地面の硬化を図ったことがうかがえる。この土器溜まり遺構に隣接して南東側に井戸跡であるSE028が存在し、出土遺物からSE028が営まれた時期と土器溜まり遺構が整地された時期と重なるため、この土器溜まり遺構にみられる整地作業は井戸を意識したものかもしれない。

SX033出土遺物（第182・183図）

出土遺物は径1cm程度以上の大きさと取り上げが可能であった遺物の総数が17,000点にもおよび、うち在地系土師質土器1,300点、若干数の大内系土師質土器・瓦質土器・焼締陶器・磁器類以外はすべて京都系土師器であり、90%以上が京都系土師器で占められているという特徴をもつ。実測図化できる資料のうち、土坑の様相がわかる資料の一部のみ第182図に表した。

第182図1～4は京都系土師器小皿である。5・6は土師質土器皿であり、15世紀後葉に属するものであろうか。7～19は京都系土師器皿である。7・14・15のようにうす手のものや、9～12・17のように口縁外面を強く横ナデし反外させるものや8・18・19のようにやや厚手のものもみられる。埴地編年1～3期に属するものが混在しており、SX033は他所から京都系土師器細片を選び、持ち込んで埋めたものと考えられる。

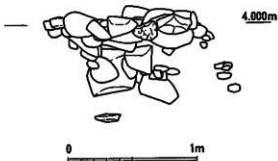
第183図は銅銭である。風化が著しく、判読は困難である。「皇宋通寶」（1038年初鑄）であろうか。

SX034（第184図）

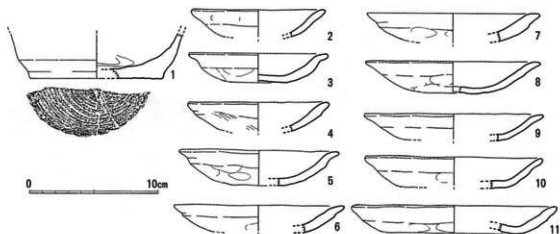
調査区南東隅のM24区に位置する。短辺約1.0m、長辺約2.0mの範囲に残る石組遺構であり、西辺および南西コーナーのみの石組みが残る。人頭大の石を利用し、上面が水平になるように組んでいる。集石内からの出土遺物はみられないが、SD001・SD002埋没後に営まれているため、16世紀後葉～末葉のものであること



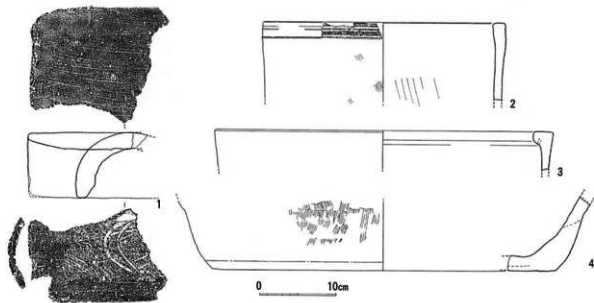
第183図 II区SX033出土銅貨（1/1）



第184図 II区SX034実測図（1/30）



第185図 II区ピット出土遺物実測図① (1/3)



第186図 II区ピット出土遺物実測図② (1/5)

がわかる。SE028が営まれていた時期と重なるため、井戸周辺の足場を安定させるために組まれた施設であろう。

e. ピット (第122・123図)

ピットは調査区ほぼ全域から出土している。これらのピットは明確に掘立柱建物や櫓列となる並びで確認できたものはない。出土遺物も極めて乏しく、図化したものは、在地系土師質土器や京都系土師器皿等、数点に過ぎない。しかも、これらの出土土器が各ピットの時期を決めるだけの資料になりえず、出土遺物が4世紀や16世紀中葉にさかのぼるものもみられるが、ほとんどのピットは検出面や遺構の切り合いを考えると、16世紀後葉から末葉に営まれたものと思われる。

ピット出土遺物 (第185・186図)

出土遺物は第185・186図に示した。第185図1は在地系土師質土器環である。底部に回転糸切り痕が確認できる。2～11は京都系土師器皿である。1はSP058、2・9はSP035、3・11はSP049、4・8がSP055、5がSP047、6がSP048、7がSP044、10がSP040からそれぞれ出土している。

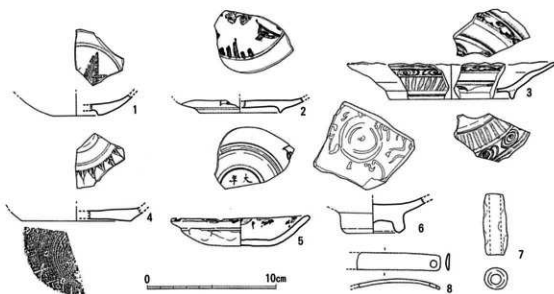
第186図1は丸瓦である。凸面には縦方向の工具による調整痕が残り、凹面には切り離し痕や吊り紐痕が認められる。2は瓦質土器火鉢である。内外面とも丁寧なナデが施され、外面口縁付近に2条の細い突帯に挟まれ、雷文帯のスタンプがみられる。3は瓦質土器火鉢である。内外面とも丁寧なミガキが施され、口縁端部をし字状に内側に突出させている。4は備前系統締締陶器甕の底部片であり、外面に縦方向のハケ目を施している。1がSP042、2がSP041、3・4がSP056からそれぞれ出土している。

f. 包含層

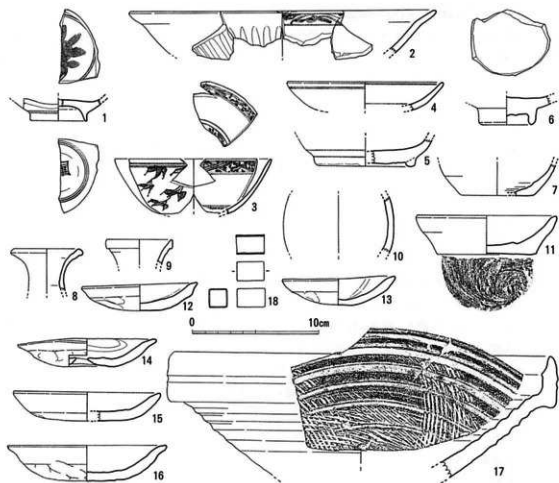
包含層出土遺物 (第187～195図)

47層の出土遺物は第187図に示した。1は中国産青花皿であり、小野分類C群の蕃菊底タイプの皿であり、外面に芭蕉文、内面にねじ花文がみられる。2は中国景德鎮窯系青花皿であり、底部高台内に「大□年□」の年款を描く。3は中国漳州窯系青花皿である。丸く内湾する胴から口縁を外反させるツバをもつ小野分類F群のツバ皿であり、外面には丸彫りの篋文がみられる。4は瀬戸美濃系陶器皿であり、内面に灰釉がみられる。5は京都系土師器皿であり、口縁内外面に煤が付着し、灯明皿であったことがわかる。6は中国龍泉窯系青磁碗であり、見込み部に文様を丸彫りしている。7は土師である。8は用途不明の金属製品である。鉛を含む合金の表面に銅を付着させたものであろうか。長い金属板の表面を緩やかに曲げ、端に円孔を穿っている。鍍金具であろうか。

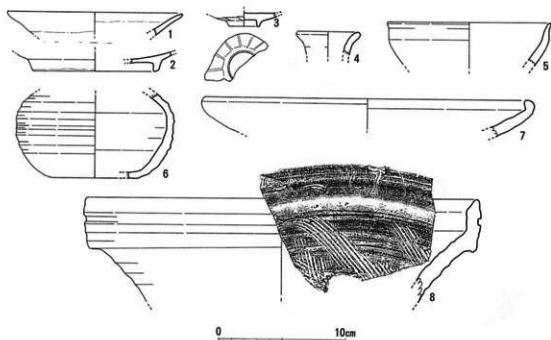
45層の出土遺物は第188図に示した。1は中国産青花碗であり、小野分類E群の饅頭心碗である。2次焼成を受けており、文様が明確でないが、高台内に字款が認められる。2は中国漳州窯系青花皿である。丸く内湾する胴から口縁を外反させるツバをもつ小野分類F群のツバ皿であり、外面には丸彫りの篋文がみられる。3は中国景德鎮窯系青花碗であり、内面口縁付近に四方禪文帯を描いている。



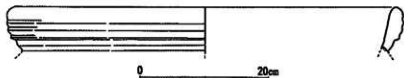
第187図 II区47層出土遺物実測図 (1/3)



第188図 II区45層出土遺物実測図(1/3)



第189図 II区9・10・14・42層出土遺物実測図①(1/3)



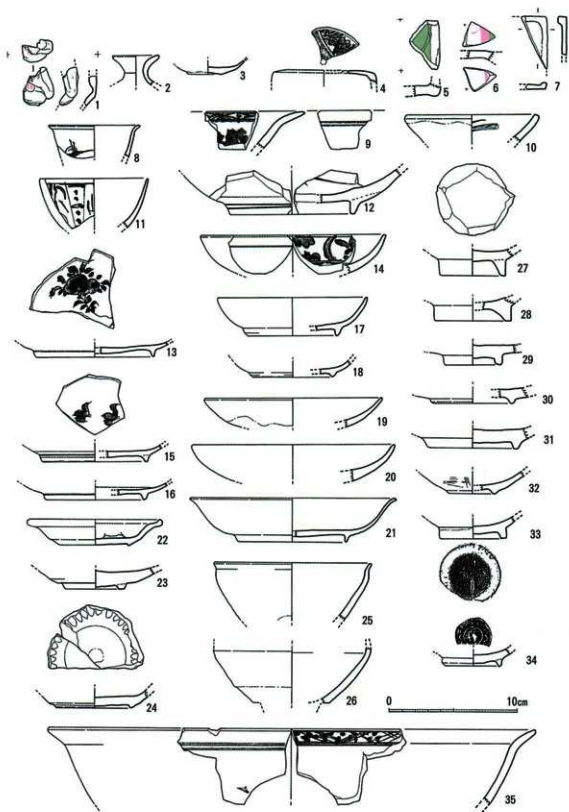
第190図 II区9・10・14・42層出土遺物実測図②(1/6)

4は中国漳州窯系青花皿であり、小野分類E群に属する。5は中国漳州窯系青花である。碗であろうか。6は中国龍泉窯系青磁碗であり、高台周辺を円形に成形したものと判断したい。7は備前系統締締陶器小壺である。8は備前系統締締陶器瓶である。9・10は備前系統締締陶器瓶であり、同一個体であろうか。11は在地系土師質土器環である。12~16は京都系土師器皿である。14には底部中央に穿孔が認められる。17は備前系統締締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、栗岡編年近世1期に帰属するものである。18は用途不明の銅製品である。方柱状の中を空洞にした製品であり、木製品の飾り金具的な用途をもつものかもしれない。

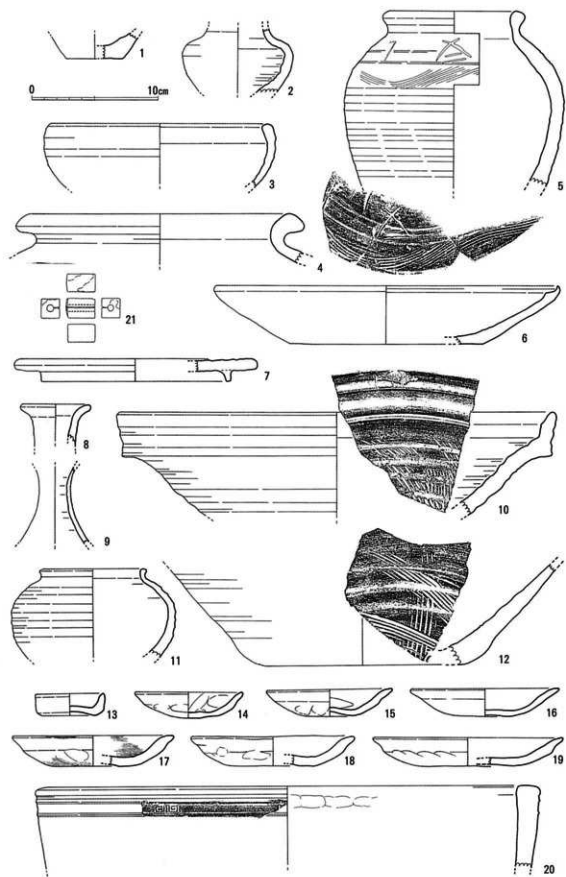
9・10・14・42層の出土遺物は第189・190図に示した。第189図1~3は白磁であり、1は体内外面上半にのみ施釉されている。3には外面に線彫りがみられる。4は備前系統締締陶器瓶の口縁である。5は瀬戸美濃系陶器天目碗である。6は備前系統締締陶器小壺であり、7は備前系統締締陶器皿である。8は備前系統締締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加され、栗岡編年近世1期に帰属するものである。第190図は備前系統締締陶器壺である。

7層の出土遺物は第191・192図に示した。第191図1は磁器人形である。右手を胸のあたりで折り曲げて手に瓶らしきものをもつ。白磁であるが、赤・緑の彩色がみられる。2は白磁小瓶である。3は白磁皿であり、内面を蛇の目状に軸割ぎしている。4は肥前系統染付の蓋であり、18世紀代の所産であろう。5は華南三彩であり、線刺および緑釉がみられるが器種は明らかでない。6は五彩であり、内外面に赤色の模様が残る。皿であろうか。7は方形の海部をもつ碗であり、破片から推測し、小型に属するものであろう。8は肥前系統染付杯であり、17世紀後半の所産であろう。9は中国漳州窯系青花煎皿であり、口縁内面に四方博文を描く。13~16は中国景德鎮窯系青花皿であり、13には見込部に花文が、15には見込部に鳥文がみられる。17・18・21は中国産白磁皿である。19は唐津産陶器皿であり、1590~1610年頃の所産であろう。20は肥前系統磁器皿であり、18世紀代の所産であろう。22・24は瀬戸美濃系折縁皿である。器高が低く、16世紀末~17世紀初頭の大窯4期末に帰属するものであろう。23は土灰軸唐津系陶器皿であり、1590~1610年頃の所産であろう。25・26は瀬戸美濃系陶器天目碗である。27は肥前系陶器碗の底部片であり、円盤状に加工し、再利用したものである。17世紀中葉~後半の所産であろう。29・31は中国龍泉窯系青磁皿である。29には見込部に軸割ぎがみられ、31には見込部に蛇の目軸割ぎが、高台部に施釉がそれぞれみえる。30は陶器碗であり、見込部に砂目痕がみえる。韓半島産であろうか。33は唐津系陶器碗であり、高台内に「源口」のスタンプがみえる。34は龍泉窯系青磁碗であり、見込部を軸割ぎし、花模様のスタンプを押している。35は中国漳州窯系青花煎皿であり、口縁内面に四方博文を描く。

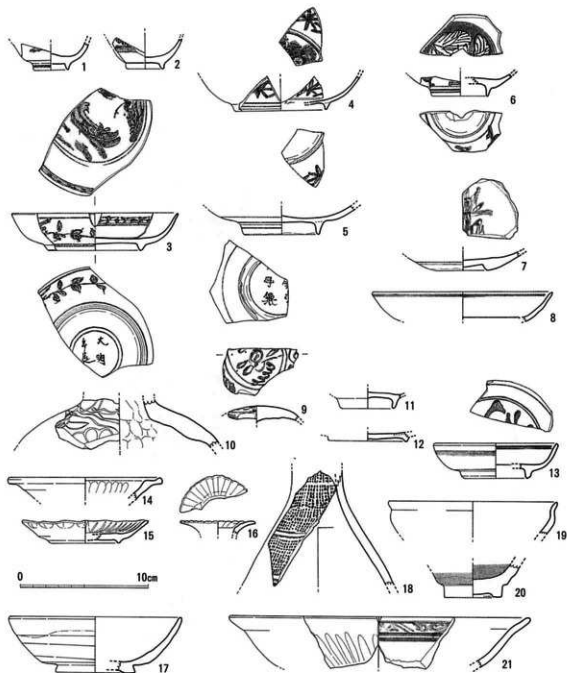
第192図1・2は備前系統締締陶器小壺である。3は備前系統締締陶器鉢である。4・5は備前系統締締陶器蓋であり、口縁部を丸く肥厚させ、肩部に櫛状波状文を施す。肩部に「X」のへら記号がみえる。6は備前系統締締陶器鉢である。7は陶器の蓋であろう。17世紀後半~18世紀前半の所産か。10・12は備前系統締締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、栗岡編年近世1期に帰属するものである。13は体部が立ち上がる京都系土師器小皿であり、焼塩壺の蓋を転用したものである。14~19は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年1~3期に属するものが



第191図 II区7層出土遺物実測図① (1/3)



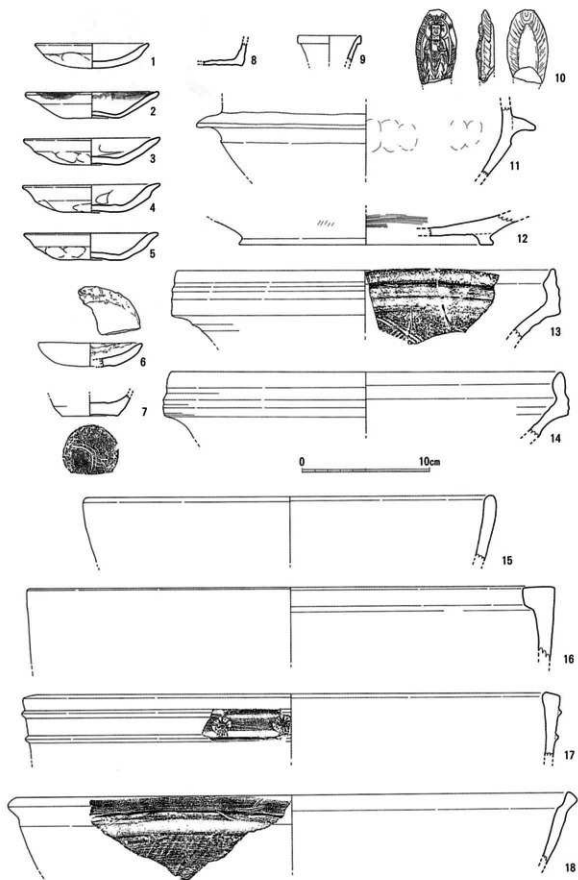
第192図 II区7層出土遺物実測図② (1/3)



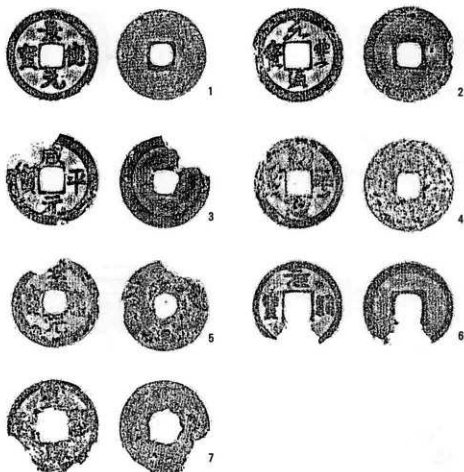
第193図 II区出土遺物実測図①(1/3)

混在したものである。17には内外面に煤の付着がみえる。20は瓦質土器火鉢であり、外面口縁付近に小さな2条の突線を施し、その突線間に雷文帯のスタンプを施している。21は1.5×1.45×2.2cmを測る用途不明銅製方柱状製品である。1面に幅1mmの深い溝をほり、中央に径4.5mmの円形孔を通して

第193・194図はII区から出土した遺物である。第193図1・2は肥前系染付猪口であり、18世紀の所産であろう。3～5は景徳鎮窯系青花皿であり、3には高台内に「大明年造」の字款がみえ、5にも6文字の字款がみえ、「年製」のみ判読できる。6は景徳鎮窯系青花碗であり、小野分類E群の殿頭心碗に分類できる。7・8・13は中国漳州窯系青花皿であり、7は碁筒底タイプのものである。9



第194図 II区出土遺物実測図② (1/3)



第195図 II区出土銭貨(1/1)

は中国漳州窯系青花蓋である。10は古瀬戸瓶子である。11は中国景德鎮窯系碗であり、饅頭心タイプのものである。12は瀬戸美濃系陶器皿である。14・15は瀬戸美濃系陶器であり、14は折縁皿、15は菊皿である。16は中国産白磁瓶の口縁であり、口縁内面を菊文様の型押しで成形している。17は陶器碗である。中国南方あるいは東南アジアの所産であろうか。18は韓半島産陶器瓶であり、外面に象嵌技法による列点文がみられる。19・20は瀬戸美濃系陶器天目碗である。21は中国漳州窯系青花の大型の皿である。口縁は外反し、外面には胴部に縦方向の筋を連続させる。

第194図1～6は京都系土師器皿である。2には口縁内外面にススが付着している。6は取瓶として再利用されており、内面に付着物がみられる。7は備前系統焼締陶器徳利であり、底部外面にへう記号がみられる。8は焼締陶器底部片である。韓半島産の徳利であろうか。9は備前系統焼締陶器瓶である。10は型造りの土製仏像であり、観音立像をあらわしている。11は瓦質土器釜である。12は瓦質土器鉢であり、高台が付く。13・14は備前系統焼締陶器播鉢である。15は瓦質土器鉢であり、内外面を丁寧になでている。16は瓦質土器火鉢であり、口縁内面をL字状に肥厚させ、内外面を丁寧に磨いている。17は瓦質土器火鉢であり、口縁付近に2条の突線がみられ、突線間には花のスタンプ文がみられる。18は瓦質土器鍋である。

第195図は銅銭である。1は「景徳元寶」(1004年初鑄)、2は「元豊通寶」(1078年初鑄)、3は「咸平元寶」(998年初鑄)、4は「治平元寶」(1064年初鑄)、5は「至和元寶」(1054年初鑄)、6は「元祐通寶」(1086年初鑄)、7は「皇宋通寶」(1038年初鑄)である。

2. III区 (第196~200図)

III区の遺構群は14世紀代から営まれはじめる。14世紀にはSE031・SE032の井戸をはじめ不定形土坑であるSK009以外にはほとんどみられない。その後の空白期を経て、16世紀中葉には浅い不定形な落ち込みSX035が調査区の中央から南側をしめる。土取によるものと考えられるが、これらの遺構は調査区外南側に延びており、埋土中には水性堆積土が確認できるため、掘削後、一時期、放置され、滞水期間があったものかもしれない。しかし、SX035は後に埋め戻され、遺構群が形成されていく。

明確に遺構群の存在が確認できるのは、16世紀中葉～後葉に至ってからである。第198図に当該時期の遺構群をあらわしたが、数少ない円形土坑が営まれているのみであり、遺構の絶対数としては前代に引き続き貧弱である。遺構が爆発的増加をみるのは16世紀後葉～末葉に至ってからである。土坑・ピット・井戸等の遺構群が16世紀後葉～末葉の短期間でも切り合いをもちながら営まれているが、これらは必ずしも同時併存の遺構をあらわしたのではなく、様々な遺構群が時間差をもちながら営まれていたものである。調査区の東側では地形の落ちが確認でき、これは調査区外にもおぼろげに自然地形によるものか、土取り坑の名残であるかは本調査区での発掘調査において解決できないが、この地形上に16世紀後葉～末葉、遺構が営まれているため、当時もこの地形が存在し続けていたことがわかる。

さらに、近世以降、ほとんど水田化したためか、南北方向へ走る溝が2条確認されているのみである。

a. 溝

SD001 (第199図)

調査区中央のK23区に位置する。約480cm、最大幅40cm、最大深約15cmの溝が残存していた。溝の方向はN-4°-Eである。SK030と切り合い関係を持つ可能性が高いが、先後関係は確認しえなかった。出土遺物は土師質土器・瓦等がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。

SD001出土遺物 (第202図)

出土遺物は第202図に示した。京都系土師器皿であり、口縁部外面を強くヨコナデしている。

SD002 (第199図)

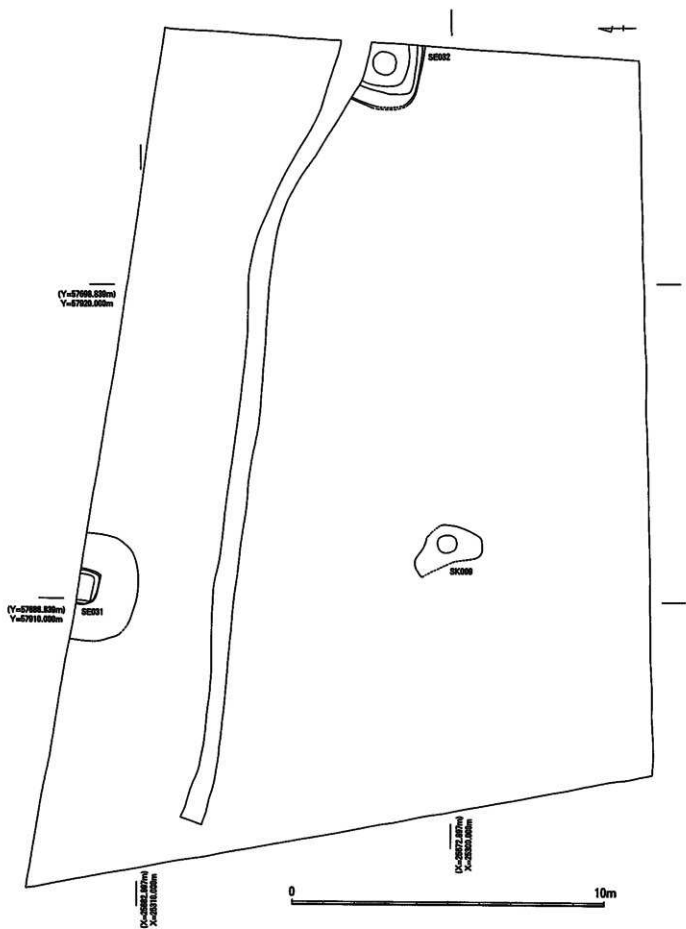
調査区中央のK22区・K23区に位置する。東西に約180cm、最大幅60cm、最大深約10cmの溝が残存していた。溝の方向は東西に近い。SD004と繋がる同一遺構の可能性をもち、また、SK023と切り合い関係を持つ可能性が高いが、先後関係は確認しえなかった。埋土は炭や焼土粒を含む褐色土からなる。出土遺物は土師質土器・備前系統焼締陶器搦鉢等がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。

SD002出土遺物 (第203図)

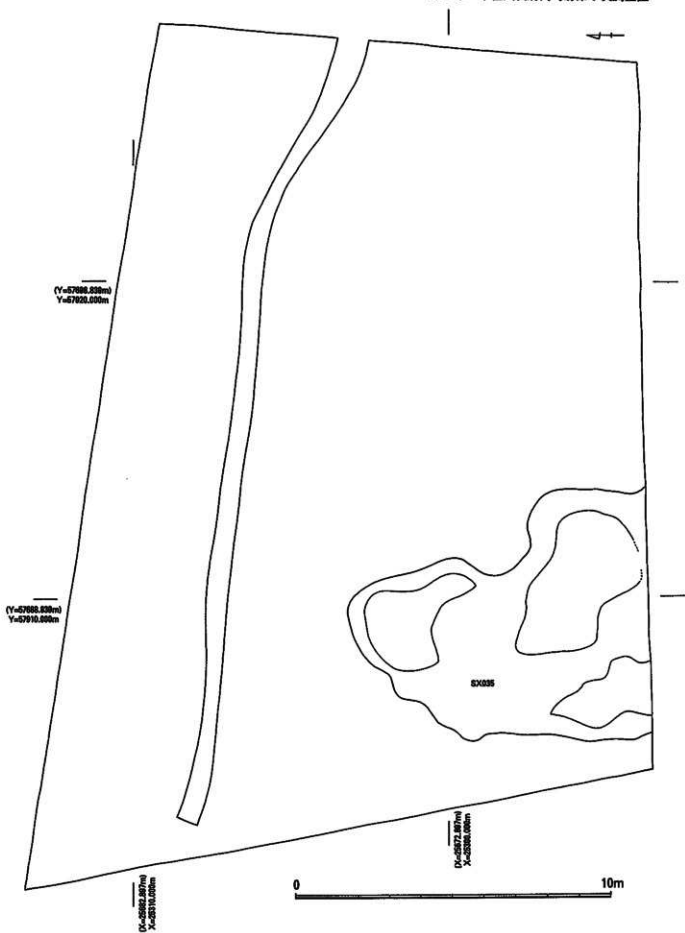
出土遺物は第203図に示した。第203図1は中国白磁皿であり、端反りの口縁をもつタイプである。2は備前系統焼締陶器搦鉢であり、放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。

SD003 (第199図)

調査区中央よりやや南西のK22区・K23区に位置する。南北に約140cm、最大幅20cm、最大深約5cmの溝が残存していた。溝の方向は南北に近い。SP067と切り合い関係を持つ可能性が高いが、先後関係は確認しえなかった。SP067とともに大量の炭や焼土が含まれており、火災処理に伴う遺構であることがわかる。出土遺物は瓦がわずかに出土しているのみで、図化しえるものはなかった。しかし、他に共通する埋土の遺構時期から16世紀後葉～末に属する遺構であることがわかる。

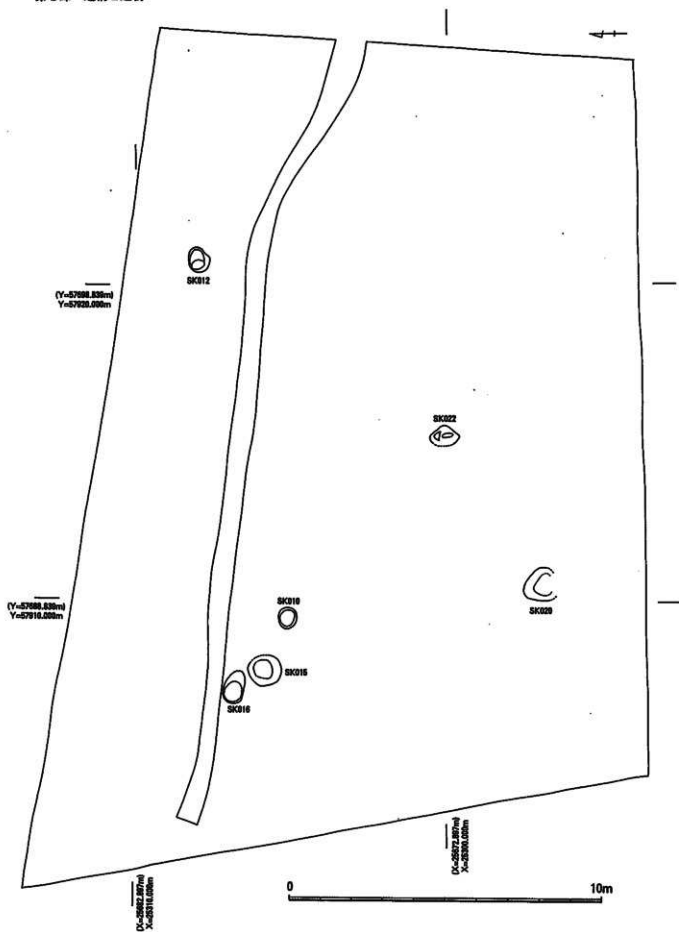


第106図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第1段階 14世紀)

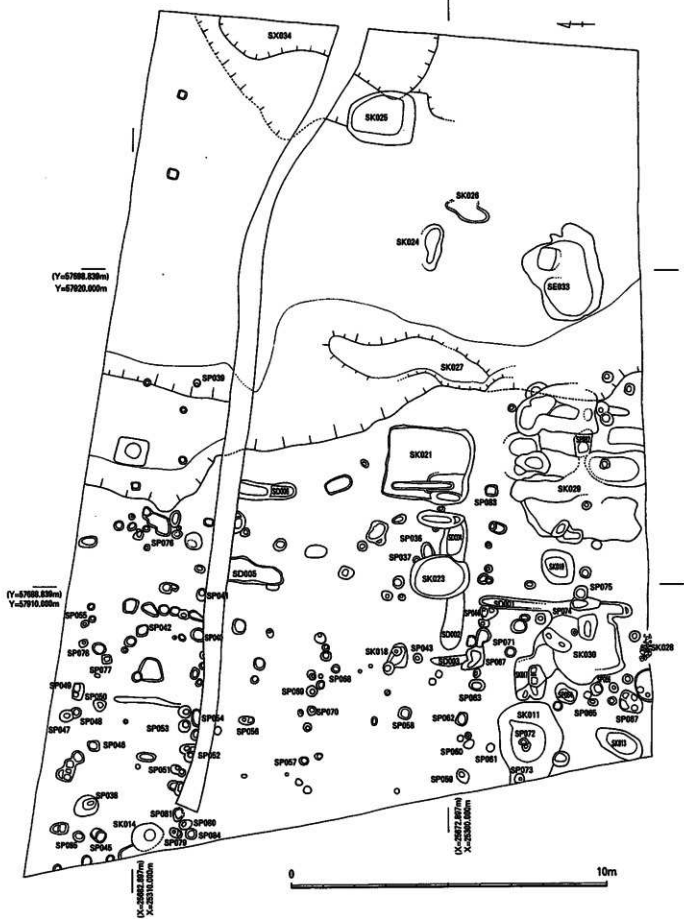


第197図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第2段階 15世紀末葉~16世紀前半)

第2節 遺構と遺物

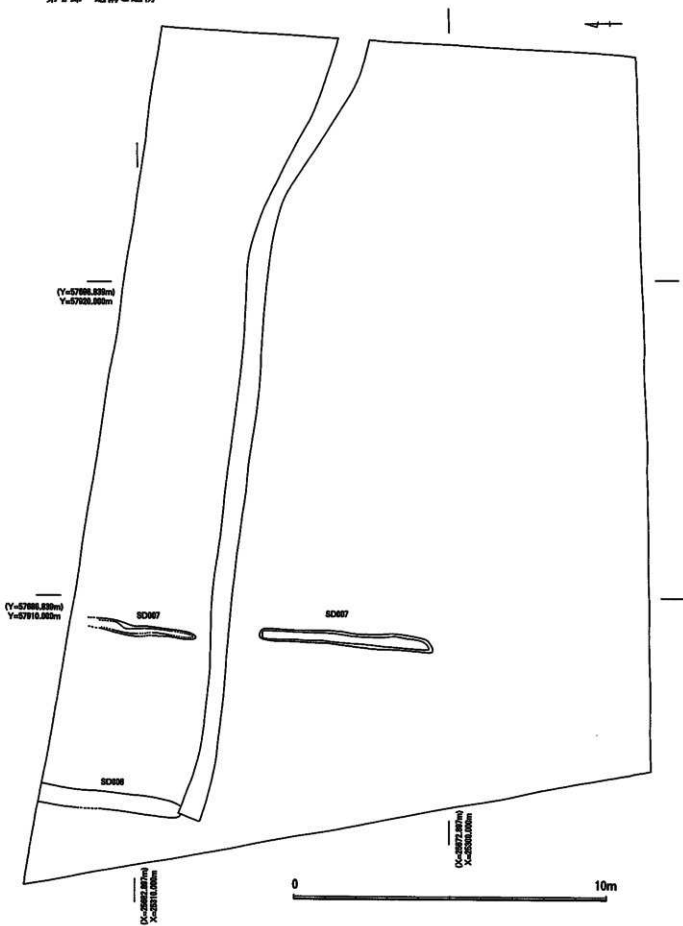


第198図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第3段階 16世紀中葉～後葉)



第190図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第4段階 16世紀後半～末葉)

第2節 遺構と遺物



第200図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第5段階 近世以降)

第4表 III区遺構一覧表①

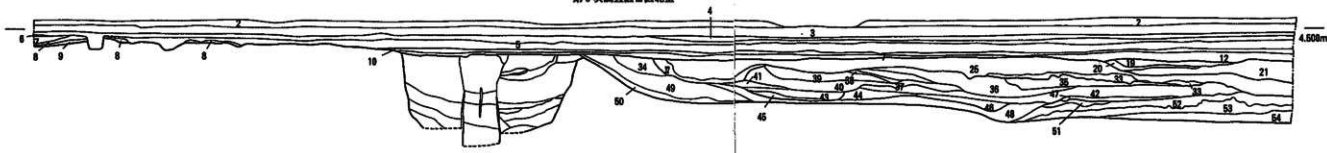
本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD001	SD4	溝	K20区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器廃棄土坑	
SD002	SD5	溝	K20区-K20区	16世紀後葉～末葉		
SD003	SD6	溝	K20区-K20区	16世紀後葉～末葉		
SD004	SD7	溝	L20区	16世紀後葉～末葉		
SD005	SD8	溝	L20区	16世紀後葉～末葉		
SD006	SD9	溝	L20区	16世紀後葉～末葉		
SD007	SD3	溝	K20区-K20区	中世末～近世		
SD008	SD1	溝	K10区-K20区	近世		
SK009	SK21	土坑	L20区-L20区	14世紀前半		
SK010	SK14	土坑	K20区	16世紀後半		
SK011	SK1	土坑	K20区	16世紀後葉～末葉		
SK012	SK2	土坑	M20区	16世紀中葉～後葉		
SK013	SK3	土坑	K20区	16世紀後葉～末葉		
SK014	SK4	土坑	K20区	16世紀後葉～末葉		
SK015	SK5	土坑	K20区	16世紀中葉～後葉?		
SK016	SK6	土坑	K20区	16世紀中葉～後葉		
SK017	SK7	土坑	K20区	16世紀後葉～末葉		
SK018	SK8	土坑	K20区	16世紀後葉～末葉		
SK019	SK9	土坑	K20区	16世紀後葉～末葉		
SK020	SK10	土坑	K20区	16世紀中葉～後葉		
SK021	SK11	土坑	L20区-L20区	16世紀後葉～末葉		
SK022	SK12	土坑	L20区-L20区	16世紀中葉～後葉		
SK023	SK13	土坑	K20区-L20区-L20区-K20区	16世紀後葉～末葉		
SK024	SK17	土坑	M20区	16世紀後葉～末葉		
SK025	SK18	土坑	M20区	16世紀後葉～末葉		
SK026	SK20	土坑	M20区	16世紀後葉～末葉		
SK027	SX7	土坑	L20区-L20区	16世紀後葉～末葉		
SK028	SX8	土坑	K20区	16世紀後葉～末葉		
SK029	SX3	土坑	L20区	16世紀後葉～末葉		
SK030	SX4	土坑	K20区	16世紀後葉～末葉		
SE031	SX1	井戸	K10区-L10区	14世紀前半		
SE032	SE1	井戸	M20区	14世紀中葉～後葉		
SE033	SX5	井戸	L20区-M20区	16世紀後葉～末葉		
SX034	SX2	落ち込み	M20区	16世紀後葉～末葉		
SX035	SX6	落ち込み	K20区-L20区-L20区-K20区	16世紀前半		
SP036	SP53	ビット	L20区	16世紀後葉～末葉		
SP037	SP54	ビット	L20区	16世紀後葉～末葉		
SP038	SP1	ビット	K10区	14世紀～16世紀		
SP039	SP43	ビット	L20区	15世紀末～16世紀前半		
SP040	SP11	ビット	K20区	16世紀後半		
SP041	SP12	ビット	K20区	16世紀後半		
SP042	SP13	ビット	K20区	16世紀後半		
SP043	SP35	ビット	K20区	16世紀後半		
SP044	SP39	ビット	K20区	16世紀後半		
SP045	SP60	ビット	K20区	16世紀後半		
SP046	SP2	ビット	K10区	16世紀後葉～末葉		
SP047	SP3	ビット	K10区	16世紀後葉～末葉		
SP048	SP4	ビット	K10区	16世紀後葉～末葉		
SP049	SP5	ビット	K10区	16世紀後葉～末葉		
SP050	SP6	ビット	K10区	16世紀後葉～末葉		
SP051	SP7	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		
SP052	SP8	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		
SP053	SP9	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		
SP054	SP10	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		
SP055	SP14	ビット	K10区	16世紀後葉～末葉		
SP056	SP21	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		
SP057	SP22	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		
SP058	SP23	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		
SP059	SP24	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		
SP060	SP25	ビット	K20区	16世紀後葉～末葉		

第2節 遺構と遺物

第5表 III区遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SP061	SP26	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP062	SP27	ピット	K25区	16世紀後葉～末葉		
SP063	SP28	ピット	K28区	16世紀後葉～末葉		
SP064	SP30	ピット	K29区	16世紀後葉～末葉		
SP065	SP31	ピット	K29区	16世紀後葉～末葉		
SP066	SP32	ピット	K29区	16世紀後葉～末葉		
SP067	SP33	ピット	K29区	16世紀後葉～末葉		
SP067	SP34	ピット	K29区	16世紀後葉～末葉		
SP068	SP36	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP069	SP37	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP070	SP38	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP071	SP40	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP072	SP41	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP073	SP42	ピット	K28区	16世紀後葉～末葉		
SP074	SP45	ピット	K28区	16世紀後葉～末葉		
SP075	SP46	ピット	K29区	16世紀後葉～末葉		
SP076	SP56	ピット	L29区	16世紀後葉～末葉		
SP077	SP57	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP078	SP59	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP079	SP61	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP080	SP62	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP081	SP63	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP082	SP52	ピット	L29区	16世紀後葉～末葉		
SP083	SP58	ピット	L29区	16世紀後葉～末葉		
SP084	SP20	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP085	SP55	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		

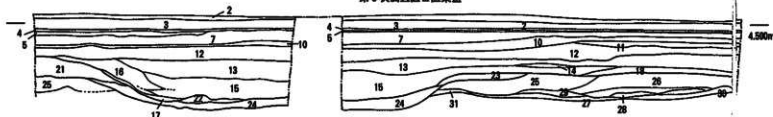
第9次調査区Ⅱ区北壁



第9次調査区Ⅱ区西壁



第9次調査区Ⅱ区東壁



- 1 假乱土
- 2 青灰色粘質土 (昭和期水田耕作土)
- 3 におい黄褐色土 (昭和期水田耕作土 Ⅱ区の3層に相当する)
- 4 におい黄褐色土 (酸化鉄沈着層 Ⅱ区の4層に相当する)
- 5 におい黄褐色土 (焼土塊・焼土粒をひょうに多く含む強い壘地層であり、上部には酸化鉄の沈着がみられる)
- 6 灰色シルト (マンガンとの比がみられる)
- 7 褐色土 (遺物包含層 小さな炭・焼土粒をわずかに含む Ⅱ区の7層に相当する)
- 8 におい褐色土 (遺物包含層 京都系土師器を中心とした土器が多く含まれる 焼土粒もみられる)
- 9 におい黄褐色土 (遺物を若干含む 壘山であるにおい黄褐色土ブロックが若干含まれる 粘質性の均質な壘地層)
- 10 褐色土 (遺物包含層 7層と近似的だが、マンガンの比がみられる Ⅱ区の9層に相当する)
- 11 黄褐色土 (遺物包含層 Ⅱ区の15層に相当する)
- 12 褐色土 (遺物包含層 7・10層と近似的だが、上部にマンガンの比がみられる Ⅱ区の10層に相当する)
- 13 19・20層の層在層 (21層と同一層か 壘山と思われる黄褐色土がブロック状にはいるが、18層より強い)
- 14 におい黄褐色土 (19・15層と近似的だが、焼土粒が多く含まれる)
- 15 におい黄褐色土 (壘山ブロックがわずかに含まれる 炭・焼土が散在に含まれる Ⅱ区の42層に相当するものか)
- 16 におい黄褐色土 (壘山土を覆削してここに盛土したものか ブロック状の塊状土 19層と同一層)

- 17 褐色土 (21層と15層はきわめて近い時期の壘地であると
- 18 褐色土 (Ⅱ区の43・44層に対応するものと考えられる)
- 19 におい黄褐色土
- 20 灰黄褐色土
- 21 19・20層の層在層 (19層と同一層か)
- 22 褐色土 (17層ときわめて近似的)
- 23 におい黄褐色土 (24層と近似的)
- 24 褐色粘質土 (50000焼土 川原石・遺物・炭・焼土粒が
- 25 黒褐色土 (遺物包含層 Ⅱ区の45層と同じか)
- 26 黒褐色土 (遺物包含層 下部にきわめて多くの遺物を含む
- 27 黒褐色土 (26層とひょうに近似的だが、26層下部に比較
- 28 黄褐色土 (26層と同一層か)
- 29 黄褐色土 (28層と同一層か)
- 30 におい黄褐色粘質土 (シルト質で均質 遺物・炭・焼土は
- 31 におい黄褐色粘質土 (均質で遺物・炭・焼土はほとんどみ
- 32 黒褐色土 (遺物包含層 炭・灰を多量に含む)
- 33 灰黄褐色土 (褐色粘質土粒を多く含む)
- 34 灰褐色土 (炭をわずかに含む)

考えられるが、一定期間、放置されていた地層に堆積した土であるものと思われる。

多く含まれる 取皿・鉄押など、特にⅡ区の45層と同じか

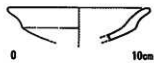
ほとんどみられない

- 35 褐色土 (7層と36層の層在層)
- 36 におい黄褐色粘質土
- 37 におい黄褐色粘質土 (38層よりやや明るい)
- 38 におい黄褐色土 (きわめて多量の炭が含まれる)
- 39 におい黄褐色土 (37層とほとんど同じ 炭・焼土・遺物を含む)
- 40 におい褐色土 (遺物包含層 京都系土師器を中心とした土器が多く含まれる 焼土粒を含む)
- 41 褐色土 (40層と近似的)
- 42 におい褐色土 (遺物を若干含む 壘山であるにおい黄褐色土ブロックがわずかに含まれる 粘質性の均質な壘地層)
- 43 褐色土 (壘山であるにおい黄褐色土ブロックがわずかに含まれる)
- 44 褐色土 (壘山であるにおい黄褐色土ブロックがわずかに含まれる)
- 45 におい黄褐色土 (自然堆積層と考えられる)
- 46 褐色土 (壘山であるにおい黄褐色土ブロックがわずかに含まれる)
- 47 におい黄褐色土 (42層と似ており、基本的に同一層であると思われるが、42層よりやや弱く強い)
- 48 におい黄褐色粘質土
- 49 灰黄褐色土
- 50 褐色土
- 51 におい黄褐色土 (洪水など水流に伴う自然堆積層と考えられる)
- 52 黄灰色粘質土
- 53 黄褐色粘質土
- 54 におい黄褐色粘質土

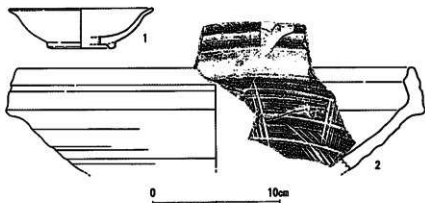
第201図 第9次調査区Ⅱ区トレンチ土層断面図 (1/80)

SD004 (第204図)

調査区中央のL22区・L23区に位置する。東西に約140cm、最大幅80cm、最大深約20cmの溝が残存していた。溝の方向は東西に近い。SD002と繋がる同一遺構の可能性をもち、また、SK023と切り合い関係を持つ可能性が高いが、先後関係は確認しえなかった。埋土は炭や焼土粒を含む褐色土からなる。出土遺物は瓦や土師質土器・備前系統焼締陶器壺がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。



第202図 III区SD001出土遺物実測図 (1/3)



第203図 III区SD002出土遺物実測図 (1/3)

SD004出土遺物 (第205図)

出土遺物は第205図に示した。第205図1は龍泉窯系青磁碗の底部片であり、円盤状に加工して再利用している。2は京都系土師器皿であり、器壁が厚く埴地編年3期に属するものであろう。3は備前系統焼締陶器鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。

SD005 (第199図)

調査区中央よりやや北のL22区に位置する。南北に約1.7m、最大幅80cm、最大深約40cmの溝が残存していた。溝の方向は南北に近いが、真北かどうか判断できるほどの残存ではなかった。出土遺物は瓦や土師質土器がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。

SD005出土遺物 (第206図)

出土遺物は第206図に示した。第206図1・2は京都系土師器皿であり、2は口縁外面につよいヨコナデを施している。3は瓦質土器鉢であり、口縁部を屈曲させて直立させ、体部外面には細かい横方向のケズリを施している。

SD006 (第199図)

調査区中央よりやや北のL22区に位置する。南北に約1.8m、最大幅60cm、最大深約20cmの溝が残存していた。溝の方向は南北に近いが、真北かどうか判断できるほどの残存ではなかった。出土遺物は瓦や土師質土器がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。

SD006出土遺物 (第207図)

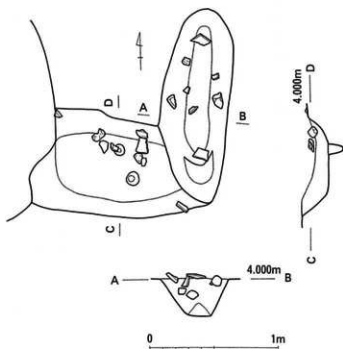
出土遺物は第207図に示した。第207図は京都系土師器環であり、埴地編年3期に属するものである。

SD007 (第200図)

調査区中央のK21区・K22区に位置する。約550cm、最大幅50cm、最大深約25cmの溝が残存していた。溝の方向はN-4°-Eである。出土遺物は瓦等がわずかに出土しているのみで、図化しえるものはなかった。

SD008 (第200図)

調査区中央よりやや北のK21区・K22区に位置する。南北に約4.5m、最大幅60cm、最大深約20cmの溝が残存しており、南側は終息するが北側は22次調査区に延びる。溝の方向はN-7°-Eである。出土遺物は瓦や土師質土器がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかったが、ほとんどは16世紀後半のものであった。しかし、調査区北壁にみられる土層の観察から近世に帰属するものと考えられる。

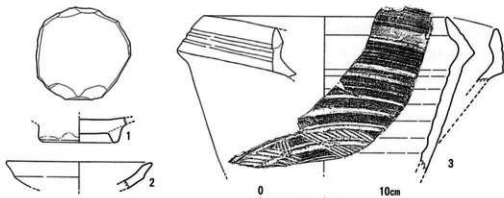


第204図 Ⅲ区SD004実測図 (1/30)

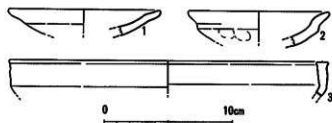
b. 土坑

SK009 (第196図)

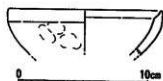
調査区中央東端のL22区・L23区に位置する。SD004・SP036・SP037下から検出され、SX035に切られている。長軸約115cm、最大幅約60cm、最大深約50cmの不定形土坑である。埋土中から少量の土師質土器杯皿類が出土しているが、皿のみ図化できた。



第205図 Ⅲ区SD004出土遺物実測図 (1/3)



第206図 III区SD006出土遺物実測図(1/3)



第207図 III区SD006出土遺物実測図(1/3)

SK009出土遺物(第208図)

出土遺物は第208図に示した。すべて土師質土器小皿であり、底部は回転糸切りにより切り離されている。

SK010(第198図)

調査区中央よりやや北西側のK22区に位置する。長径約70cm、短径約60cm、最大深約35cmの楕円形土坑である。出土遺物は非常に少なく、図化できたものも備前系統埴輪器臺の1点であった。

SK010出土遺物(第209図)

出土遺物は第209図に示した。備前系統埴輪器臺であり、内外面にロクロ痕が残る。

SK011(第210図)

調査区中央より、南西側のK23区に位置する。長径2.4m以上、短径2.0m、深さ0.15mを測る楕円形の浅い皿状を呈する土坑であり、西側の肩は調査区外に延びる。埋土にはほとんどすべてが京都系土師器片からなり、土器廃棄土坑であることがわかる。出土遺物は1000点近くにおよび、そのうち970点あまりは京都系土師器であり、残り10数点は在地系土師質土器である。

SK011出土遺物(第211図)

出土遺物は第211図に示した。ほとんどが京都系土師器皿であり、図化できる資料のごく一部のみ掲載した。6は煤が付着し、灯明皿として使用されたものであろうか。法量・形態とも多様であり、埴地編年1～3期のものが混在する様相をもつ。

SK012(第212図)

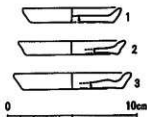
調査区中央より、北西側のM22区に位置する。長径0.75m、短径0.7m、深さ0.5mを測る円形の土坑である。埋土は砂であり、下層には砂質土が堆積していた。遺物は上層から出土しており、凝灰岩の破片を多く含む。遺物は京都系土師器を主体に土師質土器・備前系統埴輪器・瓦などが出土している。中には土壁と思われる焼土塊もみられる。

SK012出土遺物(第213図)

出土遺物は第213図に示した。1～4は京都系土師器皿であり、埴地編年1～2期に属するものであろう。5は土師質土器環であり、底部には回転糸切り痕がみられる。

SK013(第214図)

調査区南西端のK23区に位置する。長径1.55m、短径0.75m、深さ0.25mを測る長楕円形の土坑である。埋土は被熱により赤変した拳大から人頭大よりやや小さい礫が大量に廃棄されていた。埋土中には炭・焼土はあまり含まれておらず、黒褐色土が堆積していた。遺物は京都系土師器や備前系統埴輪器・瓦などが少量出土している。



第208図 III区SK009出土遺物実測図(1/3)

SK013出土遺物（第215図）

出土遺物は第215図に示した。1は京都系土師器皿であり、埴地編年2～3期に属するものであろう。2は備前系焼締陶器壺である。3は方柱体の砥石であるが、表表面の2面を砥面として利用している。



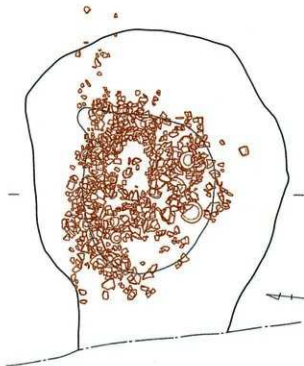
第209図 III区SK010出土遺物実測図（1/3）

SK014（第199図）

調査区北西端のK22区に位置する。南西側部分はプランを明確に確認しえなかったが、長径0.55m、短径0.50m、深さ0.27mを測る円形の土坑であらう。埋土中には大量の炭や焼土が含まれており、火災処理に伴う遺構であることがわかる。遺物は京都系土師器や備前系焼締陶器・褐釉陶器・瓦などが少量出土している。

SK014出土遺物（第216図）

出土遺物は第216図に示した。1～3は京都系土師器皿であり、埴地編年3期に属するものであろう。4は備前系焼締陶器徳利の底部である。5は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。6は褐釉陶器壺であり、内外面に釉薬がかけられている。7は方柱体の砥石であるが、表面のみ砥面として利用している。8は安山岩製石臼の下臼である。



SK015（第217図）

調査区中央よりやや北西のK22区に位置する。長径1.1m、短径0.95m、深さ0.25mを測る円形の土坑である。土坑内において径30

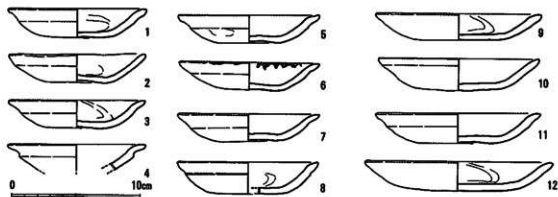


第210図 III区SK011実測図（1/30）

cm、深さ45cmを測るピットが確認されたが、この遺構に伴うものか、切り合い関係にあるものかは確認できなかった。埋土中には比熱により赤変した拳大～人頭大の礫がみられるが、炭や焼土があまり含まれていなかった。時期を確定する遺物はみられなかったが、16世紀中葉～後葉のものであろう。

SK016（第198図）

調査区北西端のK22区に位置する。南西側部分はプランを明確に確認しえなかったが、長径0.55m、短径0.35m、深さ0.35mを測る楕円形の土坑である。京都系土師器をはじめとし遺物が少量出土している。



第211図 III区SK011出土遺物実測図 (1/3)

SK016出土遺物 (第218図)

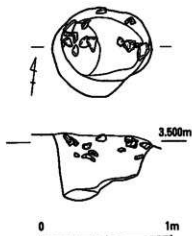
出土遺物は第218図に示した。1～2は京都系土師器皿であり、塩地編年2期に属するものであろう。

SK017 (第199図)

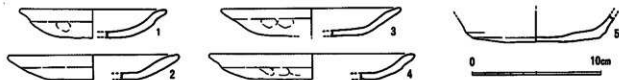
調査区西南のK23区に位置する。SK030と切り合い関係を持つ不定形な土坑が錯綜する遺構である。埋土中には大量の炭や焼土が含まれており、火災処理に伴う遺構であることがわかる。遺物は京都系土師器や瓦質土器・瓦などが少量出土している。

SK017出土遺物 (第219・220図)

出土遺物は第219・220図に示した。第219図1は中国産白磁皿である。2～7は京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。第220図は瓦質土器火鉢であり、器面を丁寧にみがいている。



第212図 III区SK012実測図 (1/30)



第213図 III区SK012出土遺物実測図 (1/3)

SK018 (第199図)

調査区中央西側のK22区に位置する。ピットにより切られているが、長径0.8m、短径0.3m、深さ0.2mを測る不定形の土坑である。遺物が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

SK019 (第221図)

調査区中央より南側のK23区に位置する。長径1.1m、短径1.0m、深さ0.35mを測る隅丸方形の土坑である。SK019と重複してSK020が確認されたが、SK020をSK019が切っていることが確認できた。埋土中には大量の炭や焼土が含まれており、火災処理に伴う遺構であることがわかる。

SK019出土遺物（第222図）

出土遺物は第222図に示した。1は瓦質土器蓋である。厚手の器壁をもち、手づくねで成形している。2は京都系土師器杯であり、埴地編年3期に属するものであろう。3は雁振瓦であり、凹面にコビキ痕と布目痕が残る。



SK020（第221図）

調査区中央より南側のK23区に位置する。SK019と重複してSK020が確認されたが、SK020をSK019が切っていることが確認できた。規模はほぼSK019と同じである。埋土中には炭や焼土がみられず、褐色土により埋められていた。出土遺物は京都系土師器や備前系焼締陶器・瓦などが少量出土している。



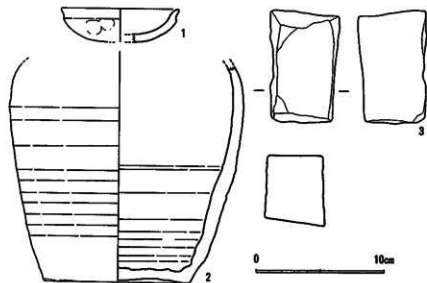
第214図 III区SK013実測図（1/30）

SK020出土遺物（第223図）

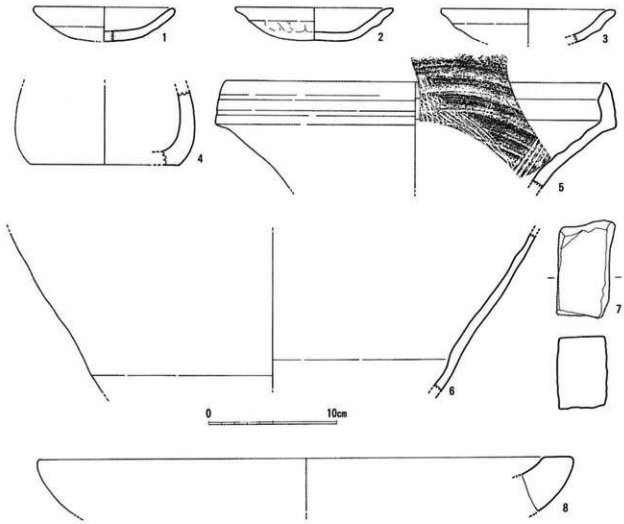
出土遺物は第223図に示した。1～3は京都系土師器皿であり、埴地編年2期に属するものであろう。

SK021（第224図）

調査区中央より、やや南側のL22区・L23区に位置する。南北2.8m、東西2.3m、深さ0.25mを測る方形竪穴状遺構である。遺構内西側に10cm程度の若干、高い部分とともに深さ10cm程度の南北に走る2条の溝が確認できた。埋土中には大量の炭・焼土・灰・地山ブロックなどが含まれており、火災



第215図 III区SK013出土遺物実測図（1/3）



第216図 Ⅲ区SK014出土遺物実測図 (1/3)

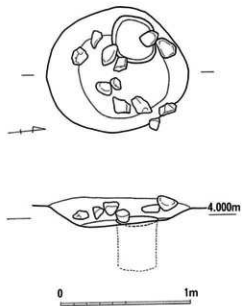
処理に伴う遺構であることがわかる。遺物は拳大からやや大きな礫と瓦・京都系土師器・焼締陶器等の遺物が比較的まとまって出土している。

SK021出土遺物 (第225・226図)

出土遺物は第225・226図に示した。第225図1は中国五彩皿である。2は中国製白磁皿であり、見込み部には蛇の目状に軸刺ぎがみられる。3は瀬戸美濃系陶器丸皿である。4～7は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地福年2～3期に属するものであろう。9・12は備前系焼



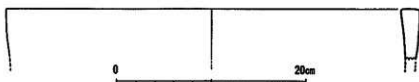
第218図 Ⅲ区SK016出土遺物実測図 (1/3)



第217図 Ⅲ区SK015実測図 (1/30)



第219図 III区SK017出土遺物実測図① (1/3)



第220図 III区SK017出土遺物実測図② (1/4)

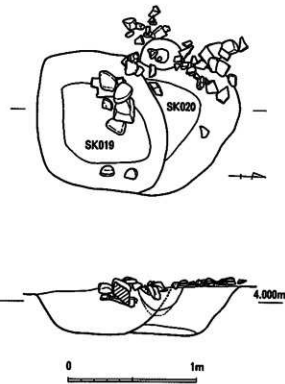
埴輪陶器であり、9の肩部には櫛波波状文が、また、12の肩部には耳がみられる。10は備前系統埴輪陶器指鉢であり、放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、乗間編年近世1期に帰属するものである。11は備前系統埴輪陶器鉢であり、注口が折損している。8は埴輪陶器壺である。中国南方産か。13は扁平な埴輪鉄製品で用途は明らかでない。

第226図1・2は瓦質土器火鉢である。

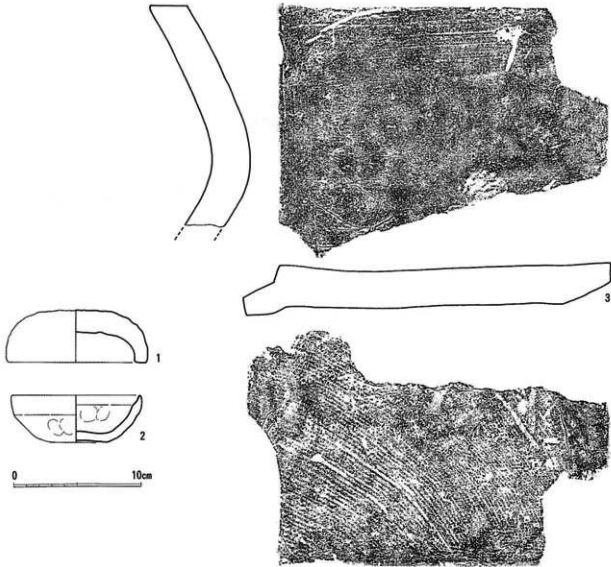
1の口縁はL字状に外方に肥厚させている。2には内面に横方向のハケ目がみられ、口縁内外面と外面には丁寧なミガキが施されている。口縁外面にはへら状工具による縦方向の線刻を連続させている。3は丸瓦の玉縁部であり、釘穴がみえる。内面には布目および吊り紐痕が残る。4は轆羽口であろうか。一部赤変している。

SK022 (第198図)

調査区中央より、やや南側のL22区・L23区に位置する。南北1.0m、東西0.6m、深さ0.35mを測る長楕円形土坑である。SK021の東側に接して、若干の切り合い関係をもち、営まれているが、先後関係を把握できなかった。また、SK021からは良好な遺物はみられず、若干の土師質土器・瓦質土器が出土しているのみで、出土物からも先後関係は明言できない。



第221図 III区SK019・SK020実測図 (1/30)



第222図 III区SK019出土遺物実測図(1/3)

SK022出土遺物(第227図)

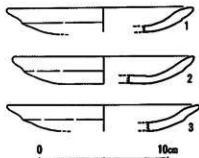
出土遺物は第227図に示した。第227図1・2は京都系土師器皿であり、塩地編年2期に属するものであろう。3は在地系土師質土器坏である。4は瓦質土器鉢であろうか。内外面に丁寧なナデ・ミガキがみえる。

SK023(第228図)

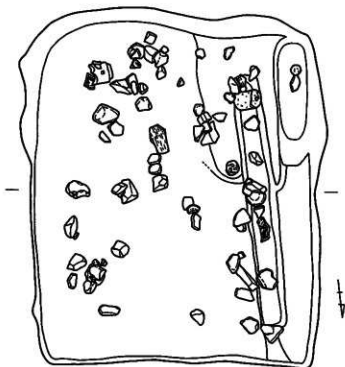
調査区中央のK・L-22・23区に位置する。南北に約190cm、最大幅135cm、最大深約25cmの楕円形土坑である。SD002・SD004と切り合い関係を持つが、両者とも埋土が炭や焼土粒を含む褐色土からなり、先後関係は確認しえなかった。埋土中には遺物とともに、被熱を受け、赤変した礫を含む拳大からやや大きな礫が多量に含まれていた。出土遺物は瓦や土師質土器・備前系統焼締陶器壺・中国産青花・白磁などが出土している。

SK023出土遺物（第229図）

出土遺物は第229図に示した。1は中国景徳鎮窯系青花碗であり、底部高台内に圈線を廻らし、「大明年造」の字款がみえる。2は中国産青磁皿である。3は2次焼成を受けた中国産白磁皿である。4は中国産白磁皿であり、高台内に「井」字状の記号を描いている。5は中国龍泉窯系青磁盤である。6～9は京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。10は京都系土師器坏であらうか。10は焼締陶器蓋であり、備前系の産であらうか。外面上半に回転ナデを、また、下半はヘラケズリ施し、口縁部は胴部から短く外反させている。12

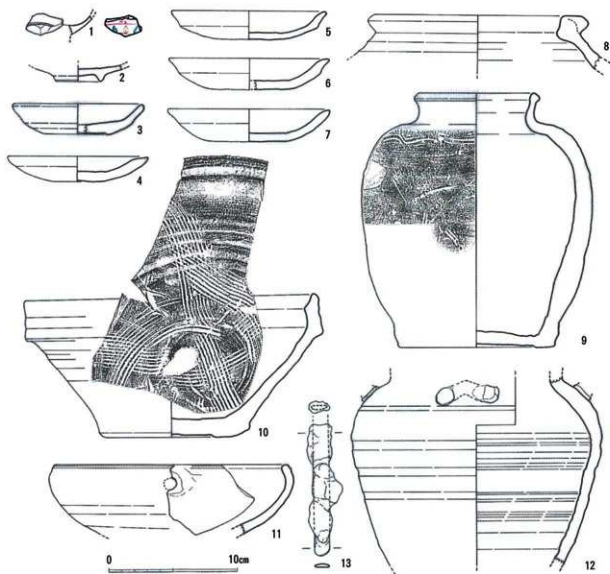


第229図 Ⅲ区SK020出土遺物実測図（1/3）



- 1 褐色土（小さい炭・焼土が少量含まれる）
- 2 褐色土（炭・焼土・灰・地山ブロックが多く含まれる）
- 3 におい黄褐色土

第224図 Ⅲ区SK021実測図（1/30）



第225図 III区SK021出土遺物実測図① (1/3)

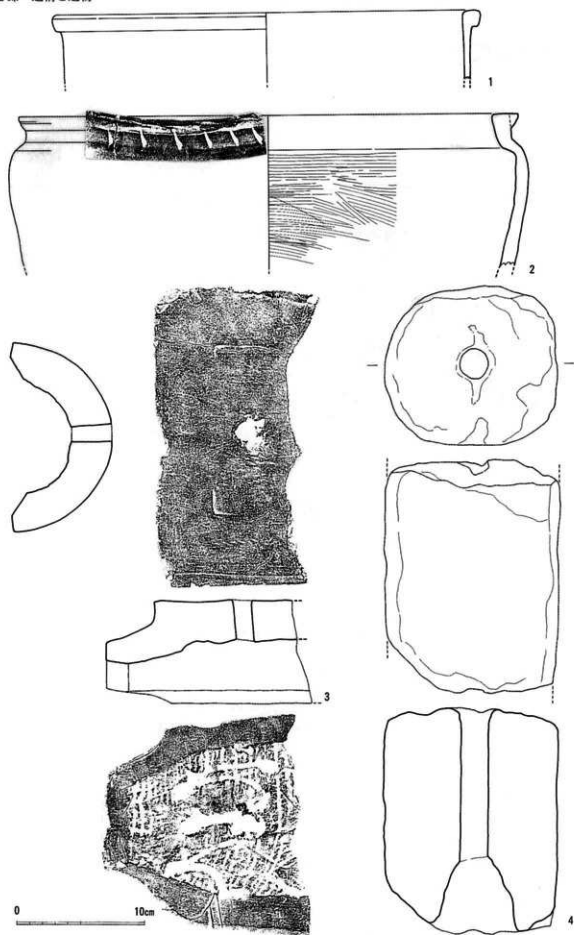
は瓦質土器鉢である。やや焼成が甘く、土師質を呈する。14は備前系焼締陶器の風炉状の器形をした特殊製品である。袋状の胴部に逆ハート形の大きな透かしを設けている。16は平瓦を円盤状に加工して再利用したものであるが、機能は明らかでない。しかし周縁部が磨滅しており、周縁で磨る行為に利用したものであることがわかる。13は薄く湾曲した青銅製品であるが、その用途は明らかでない。15は扁平な棒状鉄製品であるが、その用途は明らかでない。

SK024 (第230図)

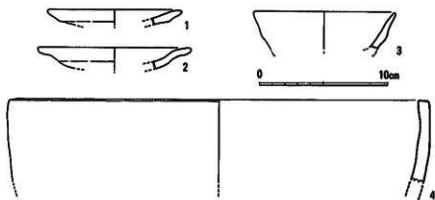
調査区中央東側のM22区に位置する。長径約150cm、最大幅70cm、最大深約25cmの長楕円形土坑である。埋土中には遺物とともに、拳大から人頭大の礫でほぼ埋め尽くされていた。

SK024出土遺物 (第231図)

出土遺物は第231図に示した。すべて京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。



第226圖 III区SK021出土遺物実測図② (1/3)



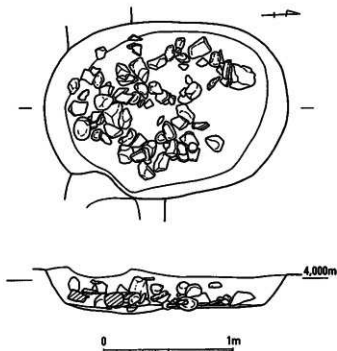
第227図 III区SK022出土遺物実測図 (1/3)

SK025 (第199図)

調査区中央東端のM22区に位置する。長軸約220cm、最大幅170cm、最大深約50cmの隅丸長方形である。SK025の東側ではSE032の掘方を切るため、SE032開設時より新しいことがわかる。

SK025出土遺物 (第232図)

出土遺物は第232図に示した。1は中国景德鎮窯系青花碗である。2・3は京都系土師器皿であり、埴地編年2～3期に属するものであろう。特に、3については口縁部外面を強くヨコナデし、外反させており、復元径22cmを測る大型のものである。



第228図 III区SK023実測図 (1/30)

SK026 (第233図)

調査区中央東端のM23区に位置する。長軸約140cm、最大幅約50cm、最大深約20cmの長楕円形である。SK024に隣接し、土坑の様相は似ているが、埋土中には遺物とともに、小石が多く含まれ、特に白色の玉石がみられることは、特徴的である。

SK026出土遺物 (第234図)

出土遺物は第234図に示した。すべて京都系土師器皿であり、埴地編年2～3期に属するものであろう。

SK027 (第235図)

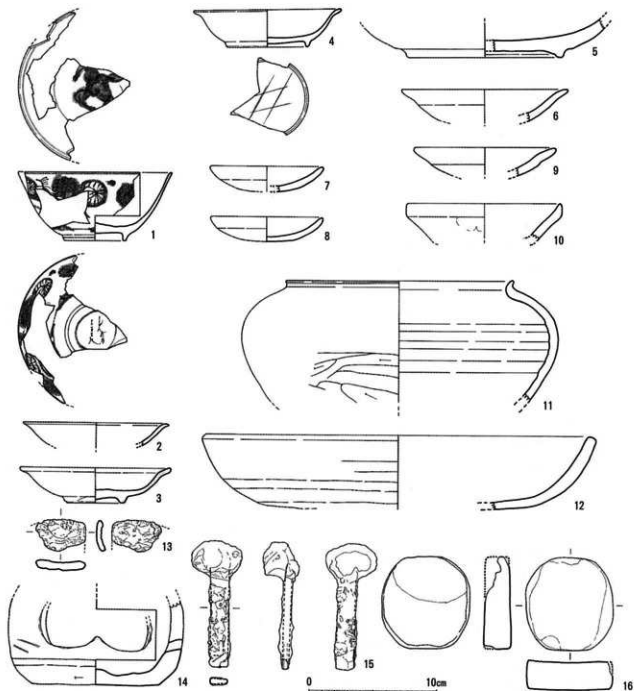
調査区南東部のL22区・L23区に位置する。地山が東側に落ちていく段落ち部分に焼成を受け赤変している円礫や土器が集中してみられる遺構である。明確に東側の遺構プランを確認できなかったものの、廃棄土坑である可能性がきわめて高いため、土坑として報告する。

SK027出土遺物 (第236図)

第236図1～5は京都系土師器皿であり、塩地編年1～3期に属するものであろう。6は土師質土器鉢であり、内外面に横方向のヘラミガキが施されている。11は瓦質火鉢である。

SK028 (第237図)

調査区南部のK23区に位置する。SX035上に挙大前後の礫が約100×40cmの範囲で集中して検出された。調査中、明確な平面プランは確認できなかったが、Ⅱ区とⅢ区の境界域の断面図において、土坑の落ち込みが確認できたため、土坑として把握した。



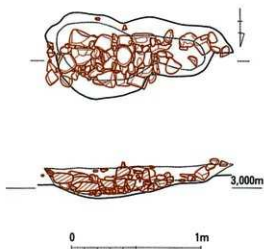
第229図 Ⅲ区SK023出土遺物実測図 (1/3)

SK028出土遺物 (第238図)

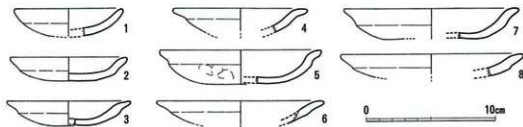
第238図1は小野分類B群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。2は瓦質土器火鉢である。

SK029 (第239図)

調査区中央南端のL23区に位置する。遺構の南側はⅡ区に延びるが、東西5m、南北4mの範囲において、混在する土坑群の集合体である。埋土の状態がほとんど同じであり、調査の過程でそれぞれの土坑プランを明確に把握できずに、巨大廃棄土坑SK029としたが、土層断面図をみても南北に長い不定形小土坑が重層的に切り合う様相が読み取れ、きわめて近接した時期に営まれ続けた廃棄土坑であると考えられよう。埋土中には炭を多く含むほか、拳～人頭大



第230図 Ⅲ区SK024実測図 (1/30)



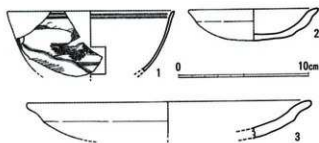
第231図 Ⅲ区SK024出土遺物実測図 (1/3)

の川原石が大量にみられ、中には焼成により赤変したものも存在し、まれに景石で使用したものと考えられる結晶片岩やさざれ石の礫もみられる。

SK029出土遺物 (第240～242図)

出土遺物は第240～242図に示した。第240図1は景德鎮窯系青花小壺である。2は小野分類E群に分類できる景德鎮窯系青花皿であり、見込み部にウサギと草花文、高台内には字款がみられる。3は小野分類B群に

分類できる中国漳州窯系青花皿であり、外面に唐草文がみえる。4は中国漳州窯系青花碗であり、内外面口縁付近に界線がみえる。5・8は中国竜泉窯系青磁碗である。8には外面に雷文帯から脱化した波状文がみられる。6は白磁碗であろうか。2次焼成を受けているため、胎土・釉薬とも変化しているが、見込み部は露胎のままである。7は備前系統締締陶器瓶であり、底部にへらによる「叶」の刻

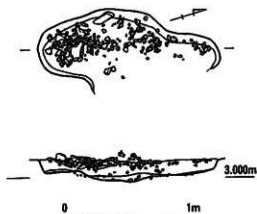


第232図 Ⅲ区SK025出土遺物実測図 (1/3)

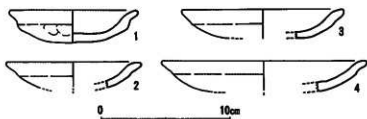
字がみられる。9は朝鮮王朝産焼締陶器瓶であり、舟徳利と呼ばれるものである。10は備前系統焼締陶器甕である。11~13は備前系統焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。14は瓦質土器火鉢である。

第241図1~3は大型の備前系統焼締陶器甕である。1の肩部外面にはへう記号がみられる。

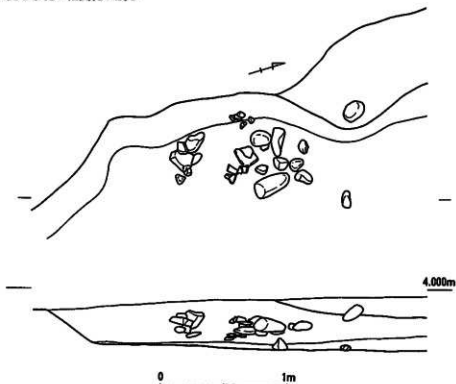
第242図1は土師質土器皿である。底部には回転糸切り痕および板状圧痕がみられる。2は瓦質土器火鉢である。3・4は京都系土師器坏である。5~11は京都系土師器皿であり、埴地編年2~3期に属するものであろう。6は灯明皿として使用したためか、口縁部に煤が付着する。12は軒平瓦であり、瓦当には均整唐草文がみえる。14は雁振瓦で凹面に布目およびコビキ痕がのこる。15は挽き手孔・軸受孔が残る



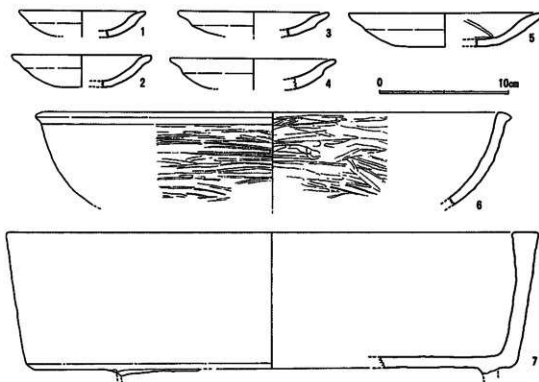
第233図 Ⅲ区SK026実測図 (1/30)



第234図 Ⅲ区SK026出土遺物実測図 (1/3)



第235図 Ⅲ区SK027実測図 (1/30)



第236図 III区SK027出土遺物実測図(1/3)

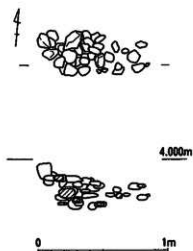
茶臼である。赤間石と呼ばれる輝緑凝灰岩を石材として
いる。分画数は8分画で副溝は9~10条存在していたも
のと考えられる。16は安山岩製石臼の下臼皿の破片であ
る。

SK030 (第243図)

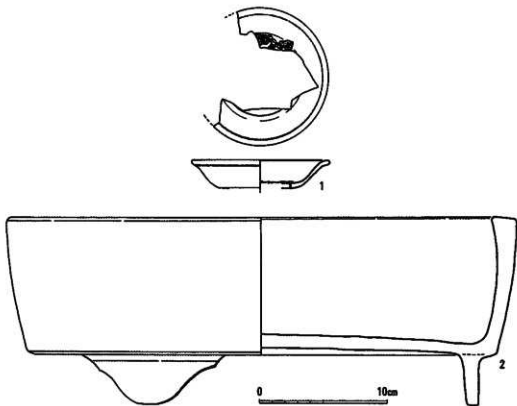
調査区西南端のK23区に位置する。径2mをこえる深
さ15cm程度の浅い不定形土坑であるが、この土坑床面
にさらに小さい円形土坑が確認できたため、複数基の遺
構が切り合っていた可能性も残るが、遺構埋土が識別で
きずに、プランとして確認できていない。埋土中には炭
や焼土粒を多く含むほか、拳~人頭大の川原石が大量に
みられ、中には焼成により赤変したものも存在し、火災
処理土坑として営まれたことがわかる。

SK030出土遺物(第244図)

出土遺物は第244図に示した。1は中国景徳鎮窯系青
花碗である。2は小野分類E群に分類できる中国景徳鎮
窯系青花皿である。3は中国漳州窯系青花皿であり、見込みに花文がみられ、この周囲の軸葉を輪状
に掻き取っている。4・5・6は白磁皿であり、口縁を波立たせ、内面に断面三角隆状の突線により、
花状の文様をあしらっている。同一個体の可能性も高いが、複数枚の資料が廃棄されたとも考えられ
る。7は白磁皿であり、口縁端反りの形態を持つ。8は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、内反り高台の
形態をもつ。9は大振りの青磁鉢であり、口縁端部を上方に引き上げる特徴をもつ。10は京都系土師



第237図 III区SK028実測図(1/30)



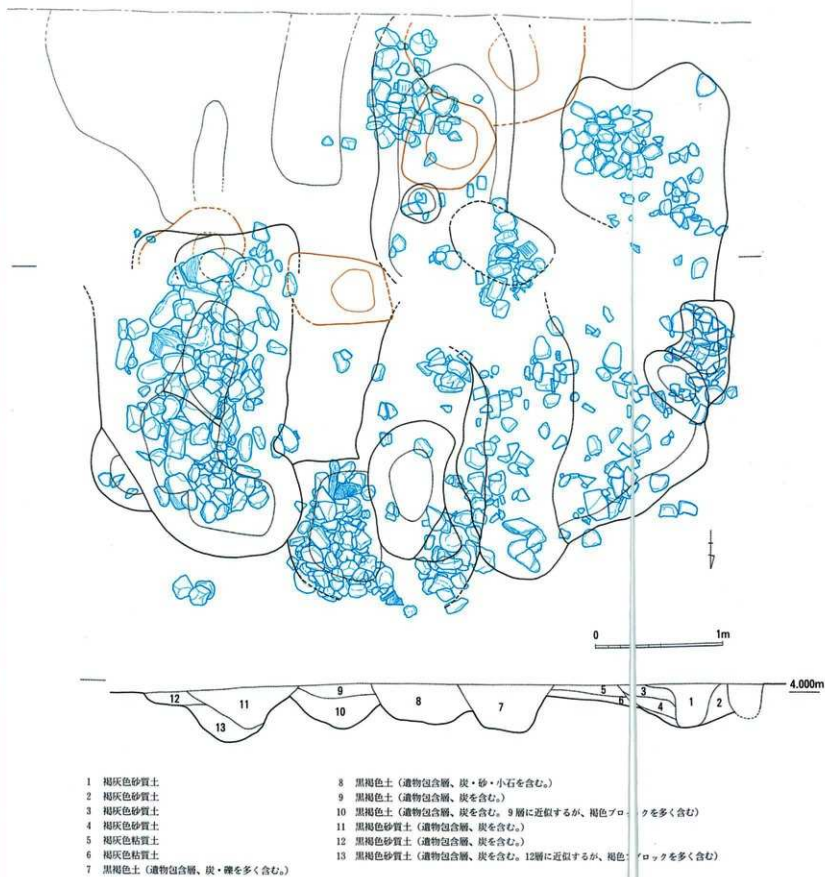
第238図 III区SK028出土遺物実測図(1/3)

器环である。11・12は京都系土師器皿であり、塩畑編年2～3期に属するものであろう。13は備前系焼締陶器鉢である。深手で体部を丸く膨らませたまま口縁にいたり、底部には何らかの印刻が認められるが、判断できない。14は備前系焼締陶器擂鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。15は方柱形の砂岩製砥石片であり、4面とも砥面として使用している。

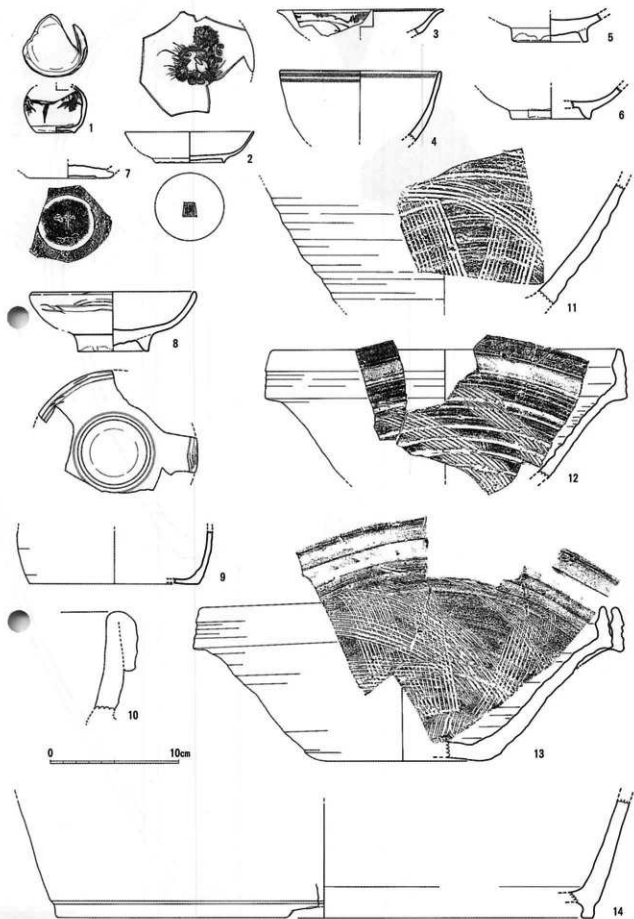
C. 井戸

SE031 (第246図)

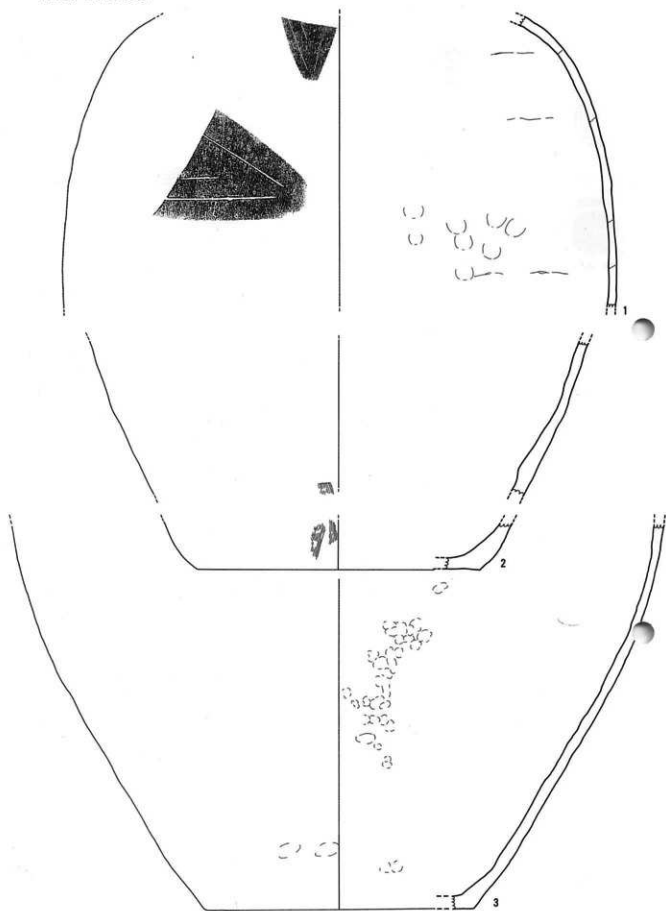
調査区中央北端のK21区・L21区に位置し、SE081の北側プランは22次調査区(SE201)に延びている。径3mをこえる円形掘方内に、一辺約90cmの方形の井戸枠をもつ井戸である。遺構の掘り下げは、検出面下2m程度まで行ったが、作業の安全性を考慮して、それ以下の掘り下げは行わず、井筒等の確認は行っていない。方形井戸枠は木質であり、腐食していたが、明確にその痕跡が残り、第246図の復元図のように角材と板材を組み合わせていたことが痕跡から窺い知れる。土層断面観察から井戸枠中央に径2cm程度の細い竹の痕跡が確認でき、井戸の埋め戻しの際に竹を通し祭祀を行っていたことがわかる。また、井戸枠内埋土の最上層である13層から単独で完形の土師質土器環(第247図3)が出土し、井戸埋め戻し完了時の祭祀に伴う遺物である可能性も考えられよう。出土遺物は乏しく、掘方内から土師質土器・瓦質土器が数点出土したのみであり、特に井戸枠内埋土からは完形の土師質土器環以外には遺物は1点も確認できなかった。



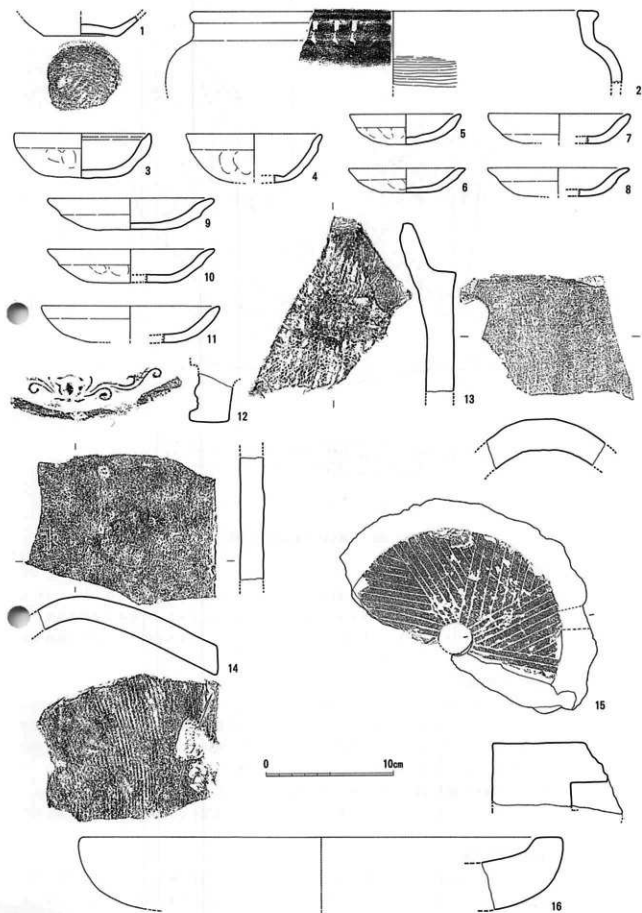
第239図 Ⅲ区SK029実測図 (1/30)



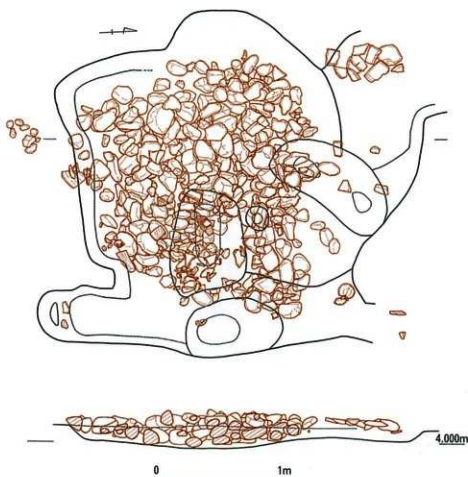
第240图 III区SK029出土遺物実測図① (1/3)



第241図 III区SK029出土遺物実測図②(1/6)



第242図 III区SK029出土遺物実測図③ (1/3)



第243図 III区SK030実測図 (1/30)

SE031出土遺物 (第247図)

出土遺物は第247図に示した。1は口禿の白磁皿である。2は緑陶陶器小壺である。3・6は在地系土師質土器環であり、6には糸切痕および板状圧痕がみられる。4・5は在地系土師質土器皿で、7は須恵器甕である。外面には格子目叩き痕が、内面には同心円文当具痕をナデ消した痕跡がみられる。亀山焼であろうか。8は土師質土器鍋である。

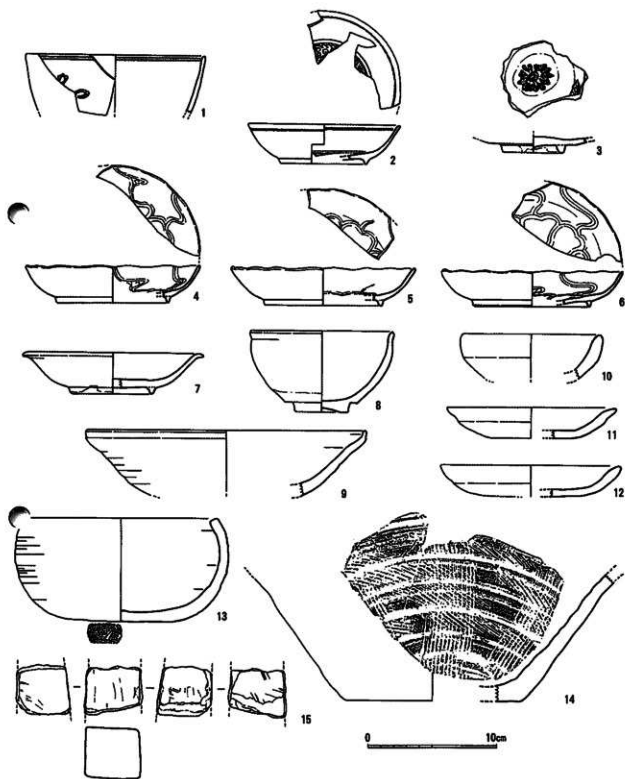
SE032 (第248図)

調査区中央東端のM22区に位置する。調査区東側の落ち込みが存在しているためか、掘方が40cm程度と浅い。井筒は径70cm程度であり、深さは55cmを測る。井筒最下面では結桶の板材の痕跡が確認でき、井筒内には拳大よりやや大きい礫が投げ込まれていた。遺物はいずれも細片のみであり、祭祀に伴う様相を持つ遺物はみられなかった。

SE032出土遺物 (第249図) 出土遺物は第249図に示した。1・2は在地系土師質土器環であり、3は在地系土師質土器皿である。4は瓦質土器播鉢である。口縁部をくの字に立ち上げ、5条1単位の播目がみられる。

SE033 (第252図)

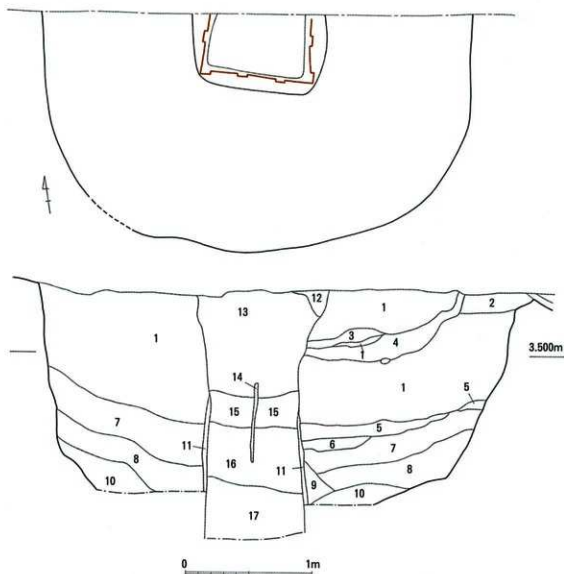
調査区南東部のL・M-23区に位置する。桶を埋設して井筒とした井戸跡である。井筒内埋土には比較的遺物は少なく、上部には礫が投げ込まれていた。円錐状に掘られた掘方上にあたる位置には、浅い彫り込みが設けられ、径3m以上の範囲に拳大～人頭大の大量の礫が敷かれていた。特に井筒部分



第244图 III区SK030出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

に接する箇所には小さな玉砂利が意識的に敷かれていた。この礎群の周囲を取り囲むように大量の京都系土師器の破片が敷き詰められていた。これらの礎群は井戸利用時の軟弱地盤を解消するための土木的な工夫であると考えられる。大量の京都系土師器の破片は総数4,400点にも及び、他所から大量に持ち込まれて敷かれたことがわかる。



- | | | |
|-----------------|--------------------|---------------------|
| 1 におい黄褐色土 | 7 明黄褐色土 | 13 褐色土 |
| 2 褐色土 | 8 におい黄褐色土 | 14 明褐色土 (径2cmの竹の痕跡) |
| 3 灰黄褐色土 (4層と近似) | 9 灰白色粘質土 | 15 におい褐色土 |
| 4 灰黄褐色土 (3層と近似) | 10 灰黄褐色土 | 16 灰白色土 |
| 5 明褐色土 | 11 明褐色粘質土 (井戸枠木質痕) | 17 褐色粘質土 |
| 6 明褐色土 | 12 褐色土 | |

第245図 Ⅲ区SE031実測図 (1/30)

SE033出土遺物（第250・251・253～255図）

出土遺物は第250・251・253～255図に示した。第250図は井筒内埋土中出土遺物であり、第251図は井戸堀方内埋土中出土遺物であり、第253～255図は井戸上出土遺物である。

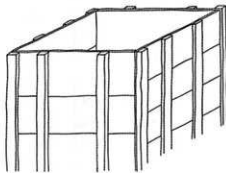
第250図1は中国漳州窯系青花碗である。2～7は京都系土師器皿であり、埴地編年2～3期に属するものであろう。8は備前系統埴陶器瓶である。10は京都系土師器環であり、埴地編年3期に属するものであろう。9は雁振瓦であり、内面に布目が残る。

第251図1は中国龍泉窯系青磁碗であり、見込部に花文のスタンプがみられる。2・3は京都系土師器小皿であり、4～11は京都系土師器皿である。埴地編年2期に属するものであろう。

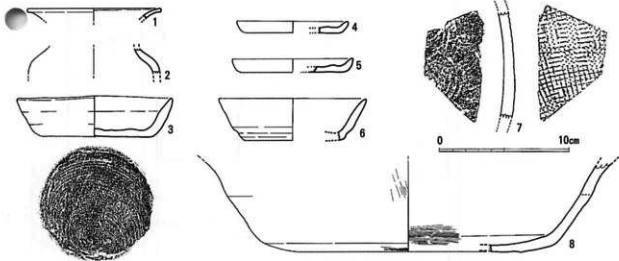
第253図1は小野分類B群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿であり、外面に唐草文がみえる。2は中国景德鎮窯系青花碗であり、見込に十字花文がみえる。3は中国景德鎮窯系青花碗であり、外面に唐草文、内面口縁付近に四方禪文がみえる。4は中国龍泉窯系青磁碗であり、口縁外面に波状文がみえる。5は口縁が端反りする白磁皿である。6・7・8は備前系統埴陶器擂鉢であり、6・7は放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に属するものである。8は放射状スリメのみであり、乗岡編年中世6期に属するものである。9は備前系統埴陶器茶入である。10・11は瓦質土器鉢である。

第254図1は瓦質火鉢である。2は安山岩製下臼であり、分面数は8分面で副溝は5条存在していたものと考えられる。3は雁振瓦であり、凹面に布目痕およびコビキ痕がみえる。4は丸瓦であり凹面に布目痕がみえる。

第255図はすべて京都系土師器皿であり、図化できる資料のごく一部のみ掲載した。1・2は煤が



第246図 III区SE031井戸枠復原図



第247図 III区SE031出土遺物実測図（1/3）

付着し、灯明皿として使用されたものであろうか。法量・形態とも多様であり、塩地層年1～3期のものが混在する様相をもつ。

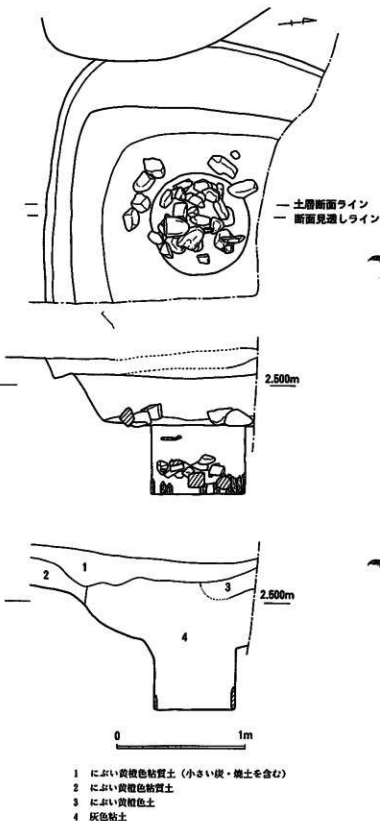
d. その他の遺構

SX034 (第256図)

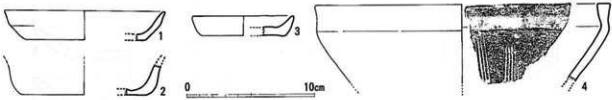
調査区中央東端のM22区に位置する。南北3.4mを測るヒョウタン形の平面形をもつ遺構の東側は調査区の東側に延びる。深さは30cm程度であり、SE032埋没後に低湿地状を呈していたと考えられ、堆積土は粘質土を呈する。埋土中には炭・焼土が非常に多く含まれ、拳大～人頭大の礫も多くみられる。出土遺物は第257図に示したが、固化したものも含めて、鞆羽口・取瓶などの醸造道具が多く確認できた。このほかにも鉄滓が比較的まとまって出土している。

SX034出土遺物 (第257図)

出土遺物は第257図に示した。1は景德鎮窯系青花皿である。丸く内湾する胴から口縁を外反させるツバをもつ小野分類F群のツバ皿であり、外面には鎮文がみられる。2は朝鮮王朝産陶器碗である。内外面に繪垣文がみられる「彫三島」と呼称される高麗茶碗の破片である。3は中国漳州窯系青花皿である。4・5は白磁皿であり、5には内面見込み部に軸葉を蛇の目状に掻き取った痕跡がみられる。6・7・10～14は京都系土師



第248図 M区SE032実測図 (1/30)

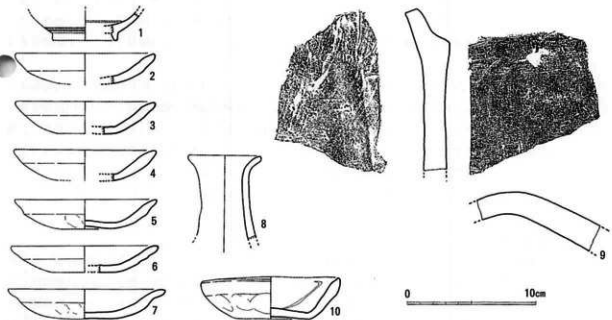


第249図 III区SE032出土遺物実測図(1/3)

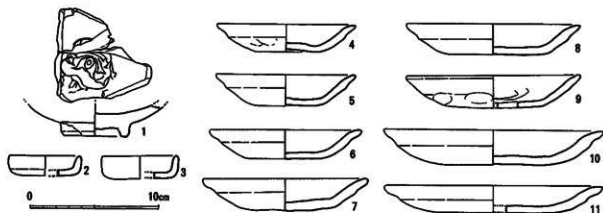
器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。9は京都系土師器環である。8は備前系焼締陶器甕の口縁片であり、玉縁外面に太めの凹線を巡らす。16は備前系焼締陶器擂鉢であり、放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。17は焼締陶器鉢であろうか。内面底部付近に指頭圧痕が連続してみられる。焼きは備前系焼締陶器と思われる。15は土師質土器鍋であろうか。外面上半部および内面に横ナデを施し、外面下半は指オサエにより成形している。18は瓦質土器鉢であり、外面に縦方向のハケ目が著しく残る。19は安山岩製石臼の下臼である。20～22は土製の取瓶であり、20は口径3.6cm、器高1.9cmと、特に小さい。23は輪羽口である。

SX035 (第197図)

調査区南東部のK・L-22・23区に位置し、南側はII区 SX030に続く。東西約4m、南北約5m、最深部約50cmを測る不定形の落ち込みであり、最下層である7～8層は砂質土であり、また、その上層の5～6層は粘質土であることから、SX035が掘られて以降、一時期、滞水状態であったことがわかる。これを埋める2・4層は地山のにぶい黄橙色粘土のブロックが非常に多く含まれる人工的な埋め戻しの堆積土の様相を示している。遺構西側肩部に京都系土師器が大量に廃棄されているほか、最上層である1層には比較的大量の土器が混じる。遺物は下層の滞水状態であった時期のものと、上層の埋め戻しに伴う時期のものに分けて取り上げたが、それぞれの土器型式に明確な時期差があらわ



第250図 III区SE033井筒内出土遺物実測図(1/3)



第261図 III区SE033掘方出土遺物実測図(1/3)

れず、近接した時期に埋め戻されたことが想定できる。

SX035出土遺物(第259～261図)

出土遺物は第259～261図に示した。第259図1～20、25～30は1・2層出土遺物であり、21～24は3・4層出土遺物である。また、第260図は5～8層出土遺物である。

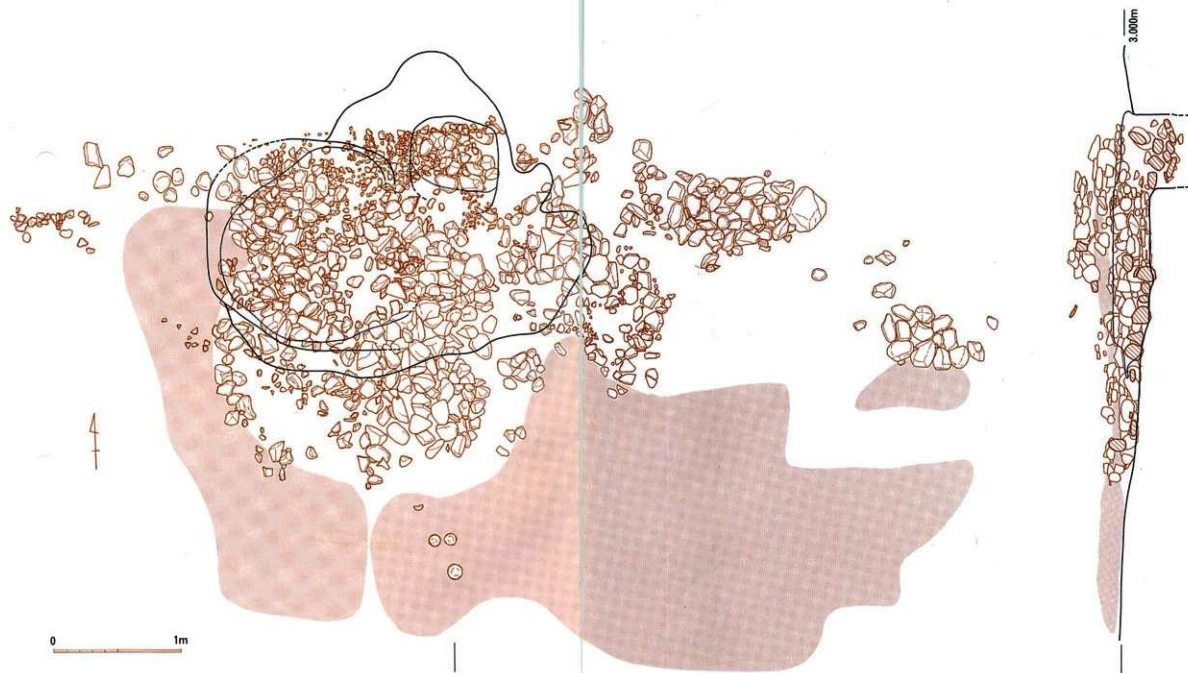
第259図1は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。2は中国龍泉窯系青磁碗であるが、2次焼成を受け、胎土・釉薬も変調がみられる。3は土師質土器小皿である。4・5・6・23は土師質土器皿・坏である。4・5・6は回転糸切り難しであり、4に関しては回転糸切り難し後に筵状圧痕がみえる。23はヘラ切り難し後に底部をナデ調整し、その後に板状圧痕がみえる。7～22、24は京都系土師器皿であり、埴地編年1期を主体に2期が若干含まれるものであろう。25・26は備前系統焼締陶器擂鉢である。25は口縁上角が突出し、放射状スリメがみえ、乗岡編年中世4期に帰属するものである。26は口縁帯を高くもち、放射状スリメがみえ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。口縁帯外面にナメ方向のへら記号がみえる。27は内外面にナデ調整を施した土師質土器甕である。28は備前系統焼締陶器瓶である。29は瓦質土器火鉢であり、内外面にハケム調整後、ナデが施されている。30は備前系統焼締陶器甕であり、口縁を丸く肥厚させた特徴から、乗岡編年中世3～4期に属することがわかる。

第260図1・2、4～6は京都系土師器皿であり、1の口縁内外面にススが付着する。埴地編年1期に属するものであろう。3は土師質土器皿である。7は備前系統焼締陶器擂鉢であり、口縁帯を高くもち、放射状スリメがみえ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。8は土師質土器鉢である。蓋の受け部を作り出し、内外面に丁寧なナデが施されている。9は軒平瓦であり、互当模様には唐草文がみえる。10は凝灰岩製の凹み石片であるが、用途は明らかでない。

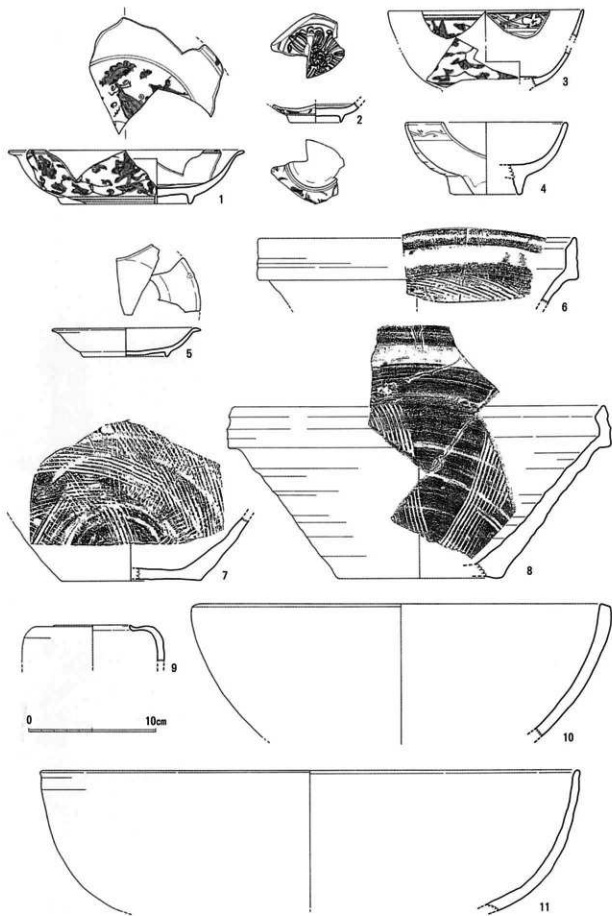
第261図は銅銭であるが、風化が著しく、銭種等は明らかでない。

e. ビット

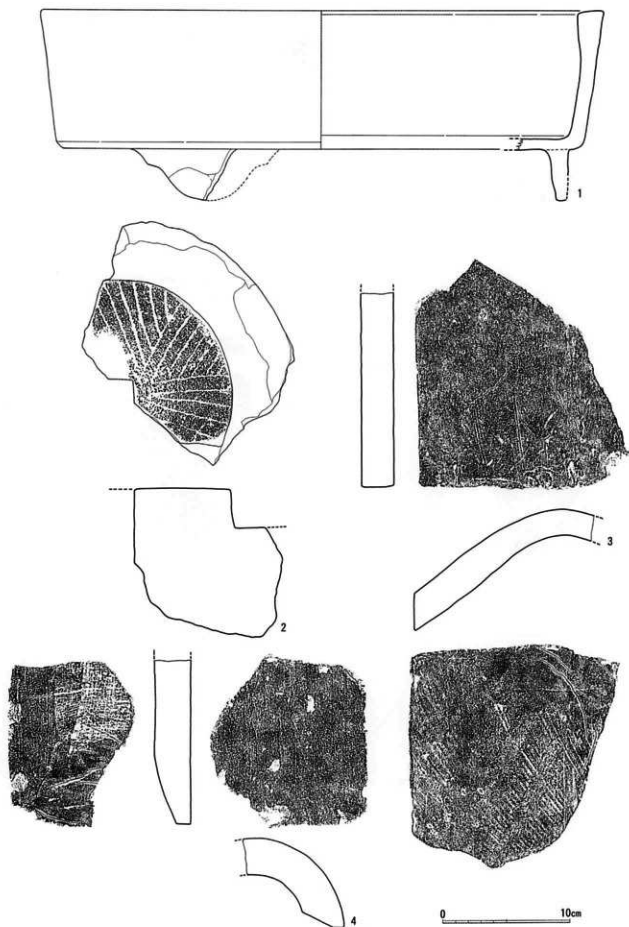
III区からは、300基に近いビット群が検出されている。これらのビット群の並びを検討した建物の復元は困難を極め、明確に掘方と柱根部が観察できるものも確認できたが、確実に掘立柱建物跡としての並びを復元できたものはない。埋土の特徴としては、大きく2様に分けられ、一般的な遺構埋土と、ビット上面に炭・焼土を大量に含む火災処理土が堆積していたものに分けられる。その分布は第199図に示したとおりであるが、この火災処理土を埋土とするビット群には、調査区西側において東西方向に3列に及び、柵列状に連続して並ぶものがみられる。北からビット列1、ビット列2、ビッ



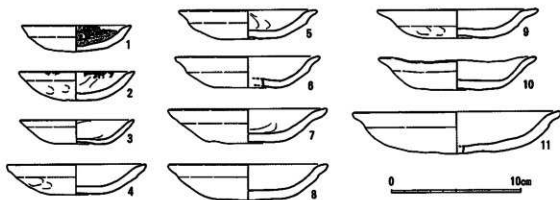
第252図 III区SE033実測図 (1/30)



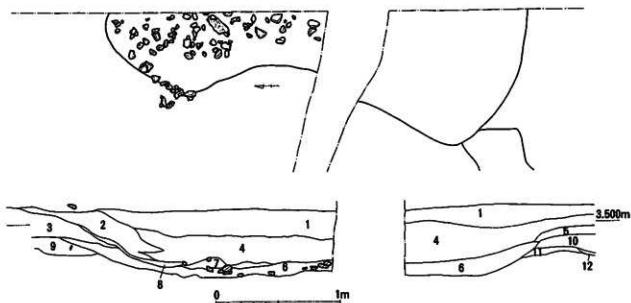
第253図 III区SE033出土遺物実測図① (1/3)



第254図 III区SE033出土遺物実測図② (1/3)



第256図 III区SE033出土遺物実測図③ (1/3)

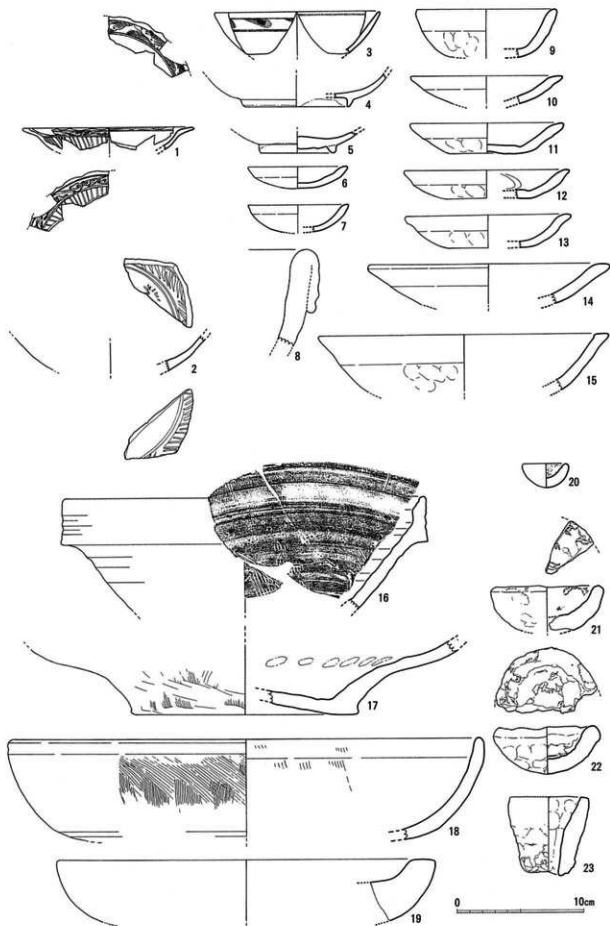


- | | |
|---|----------------|
| 1 におい黄褐色土（地山がブロック状態で混在しており、人工的な埋め戻し整地土） | 7 褐灰色土 |
| 2 におい黄褐色土（地山がブロック状態で混在しており、人工的な埋め戻し整地土） | 8 褐灰色土（7層と近似） |
| 3 におい黄褐色土（1層と同じ） | 9 黒褐色土 |
| 4 におい黄褐色土（地山がブロック状態で混在しており、人工的な埋め戻し整地土） | 10 黒褐色土（9層と同じ） |
| 5 におい黄褐色土（6層と近似） | 11 におい黄褐色粘質土 |
| 6 陶灰色粘質土（炭・焼土をひじょうに多く含み、浅い水溜まり状を呈していた） | 12 におい黄褐色粘質土 |

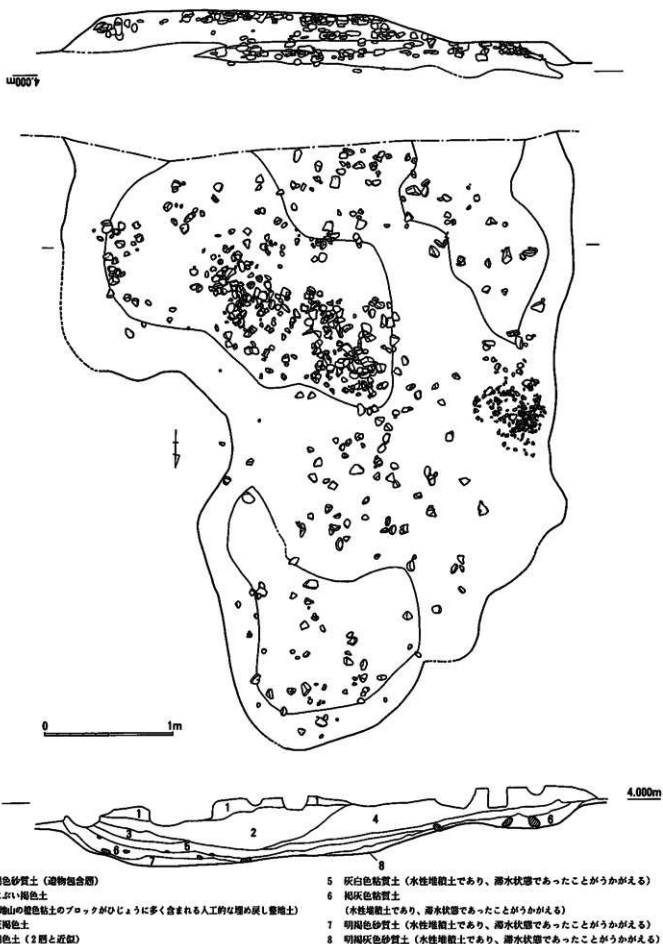
第257図 III区SX034実測図 (1/30)

ト列3と把握でき、ビット列1とビット列2との幅は3～5m、ビット列2とビット列3との幅は4.5～5.5mを測る。

ビットから出土した遺物は第262～264図に示した。各遺物の出土遺構は遺物観察表23・24に示したとおりであるが、そのほとんどが16世紀中葉から末葉におさまるものであり、当調査区で存在したかもしれない掘立柱建物群あるいは櫓列群は当該期のものであることがわかる。第262図1は白磁皿であり、口縁端には施釉がみられない。2は安山岩製石臼の下臼の皿の破片である。3は備前系陶器插鉢の口縁である。4は備前系陶器水屋壺の胴部片である。5は瓦質土器片であるが、焼成が軟質で黄褐色を呈する。6は雁振瓦であり、凹面にコビキ痕や布目痕が残る。7は瓦質土器火鉢であり、口縁

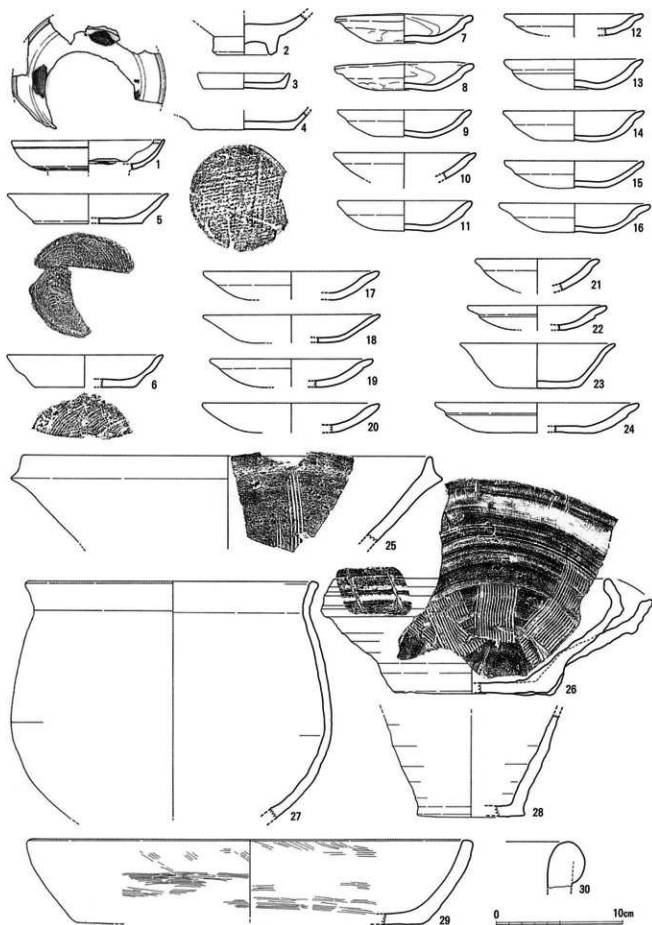


第257図 III区SX034出土遺物実測図(1/3)



第258図 III区SX035実測図 (1/60)

第2節 遺構と遺物



第259図 III区SX035出土遺物実測図 (1/3)

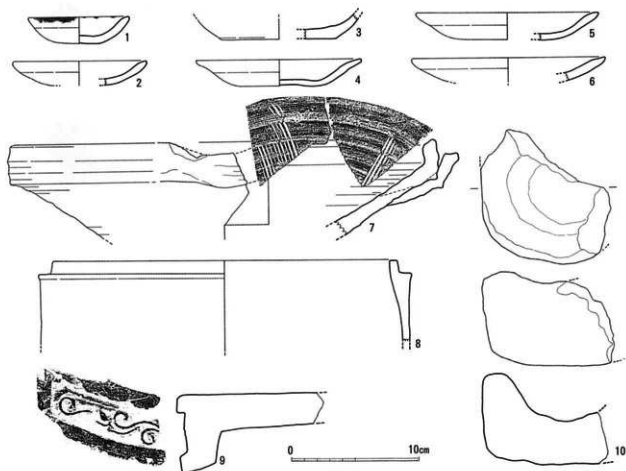
下外面に小さな2条の突帯をまわし、突帯間に雷文のスタンプがみえる。8は備前系陶器甕の胴部片である。

第263図には土師質土器・京都系土師器の皿・坏類を示した。ピット出土の多くの遺物は、京都系土師器皿であるが、そのほとんどが16世紀中葉から末葉におさまるものである。これらの資料は図化しえる大きさの遺物であり、細片であるが、図化できない遺物も多数存在するため、必ずしも遺構の層属時期の指標になりえないものも存在する。そのため、遺構の層属時期は出土遺物を主体にし、埋土も含めて検討して結論付けた。

第264図1は太鼓型の分銅である。片面には輪郭内をくぼませ「三」の字に似た文様を浮かび上がらせており、もう一面には楔状の刻印が二本一単位で2カ所にみられる。重量は16.02gを測る。2は歯型分銅であり、重量は69.35gを測る。側面には銅型に鉛を流し込んだ4～5mmの楕円形穴がみられる。

f. 包含層

包含層の出土遺物については、層位ごとの取り上げが可能であった遺物を第265～280図に示した。第265図は51層、第266図は48層、第267図は36～39層、第268図は34層、第269図は19～21層、第270～272図は25層、第273～274図は10～25層、第275図は7～25層、第276～277図は7層、第278～280図はⅢ区全域からそれぞれ出土した遺物である。



第260図 Ⅲ区SX035下層出土遺物実測図(1/3)

第265図1は褐色系の発色をもつ朝鮮王朝産陶器碗である。2は褐軸陶器壺であり、内外面に釉薬が施されて、底部は露胎のままである。中国南方産であろうか。

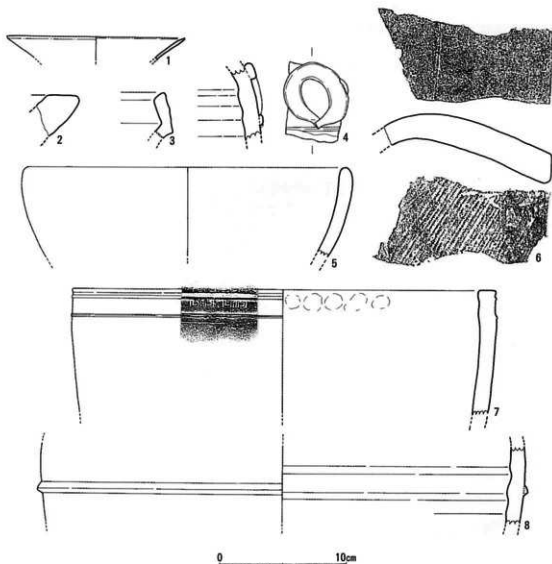
第266図1は体部が立ち上がる京都系土師器小皿であり、焼塩壺の蓋を転用したものである。2は瓦質土器鉢である。調整は丁寧で、内外面にハケ目と工具によるナデが認められる。

第267図1は中国景德鎮窯系青花水柱の注口部である。

2は、口縁部をくの字状に外反させた中国龍泉窯系青磁盤である。口縁端部を波打たせ、外面に鎊を施している。3は中国産磁器碗であり、茶色釉が施されている。4は口縁部をくの字状に外反させ小野分類F群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿である。口唇部に鉄軸を施す特徴をもつ。5は碁笥底タイプの中国漳州窯系青花皿であり、小野分類C群に分類できる。器壁がやや厚く、深い印象をもつ。6は小野分類B群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。7は中国景德鎮窯系青花碗である。2次



第261図 III区SX035出土銭貨(1/1)

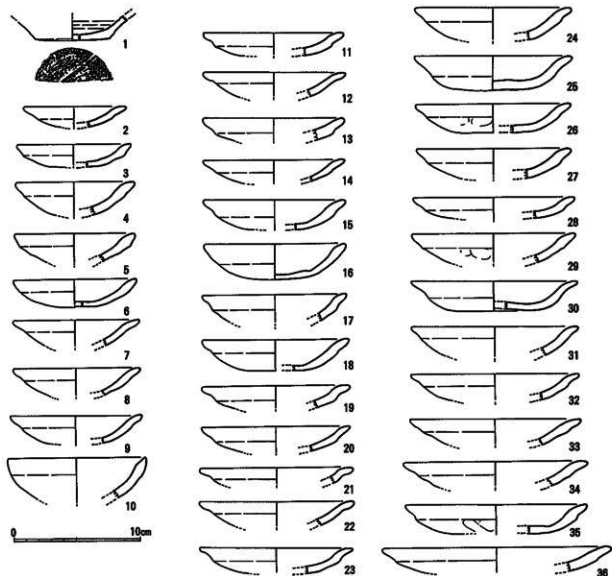


第262図 III区ビット出土遺物実測図①(1/3)

焼成を受けたためであろうか、青花および釉調がやや異なる。8は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。9は中国産磁単釉小皿である。10・13は備前系統焼締陶器擂鉢である。10は当時の一般的な擂鉢と異なり、小振りで器壁も薄い。口縁部はくの字状に折り曲げているのみで、内面には放射状の、また、見込み部には十字状のスリ目がみられる。13はナナメ方向のスリメがみえるため、乗阿彌年近世1期に帰属するものであろう。11は瓦質土器鉢である。口縁外面を大きく三角形に肥厚させており、高台を持つ。12は瓦質土器火鉢である。

第268図1は瀬戸美濃産陶器天目碗である。2は中国龍泉窯系青磁碗であり、外面に鎮翅弁を配するタイプである。

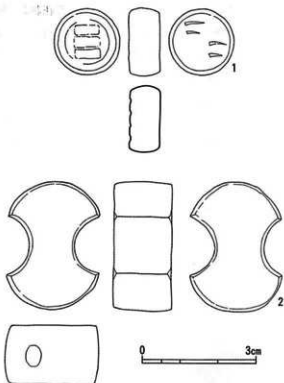
第269図1は中国漳州窯系青花盤であり、外面に鎮を施している。2は荇筒底タイプの中国漳州窯系青花皿であり、小野分類C群に分類できる。3は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。4は中国漳州窯系青花皿であり、口縁部をくの字状に外反させる小野分類F群に分類できる。外面に鎮を施している。5は中国景德鎮窯系青花皿であり、高台壘付以外には全面施釉されている。



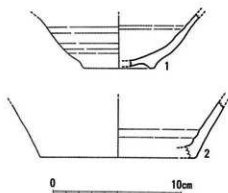
第263図 III区ピット出土遺物実測図② (1/3)

6は中国景徳鎮窯系青花香炉である。内面および底部は露胎である。7は中国産五彩碗の破片である。8は器壁の薄い焼締陶器鉢である。中国南部産であろうか。9は京都系土師器皿を再利用した取瓶である。10は備前系焼締陶器茶入であろう。11は瓦質土器羽釜である。12は軽石製の環状石製品である。径4cm、厚さ1.5cmの中央に、径1cmの円孔を穿つが、用途は明らかでない。13は頁岩製の砥石である。扁平な長方形を呈し、表裏面および片方の側面を砥面として利用している。

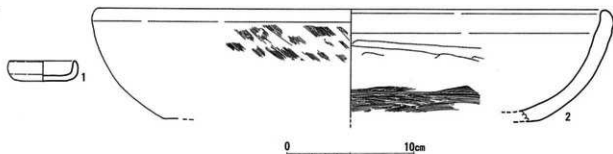
第270図1は小野分類B群に分類できる中国景徳鎮窯系青花皿である。2・3は小野分類E群に分類できる中国景徳鎮窯系青花皿である。4は中国漳州窯系青花碗である。5は中国漳州窯系青花であり、見込部に蛇目状の軸割ぎが行われている。筒形の形態をもつ碗であろうか。6は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。7・12は中国産翡翠軸碗であろうか。8は中国産磁器水注の注口部であり、外面に瑠璃釉が施軸されている。9は中国産翡翠軸菊皿である。10は碁筈底を呈する中国龍泉窯系青磁皿である。11は中国漳州窯系青花鉢である。13は内外面に象嵌技法の文様がみられる朝鮮王朝産陶器碗である。14は瀬戸美濃系天目碗の高台部を凹盤状に加工し再利用したものである。15は口縁が後花状に端反る白磁皿である。16~19は白磁皿であり、17・18・19はいずれも口縁がS字状に端反る。20は瀬戸美濃系陶器丸皿である。21は逆ハの字状に開く磁器皿である。口縁



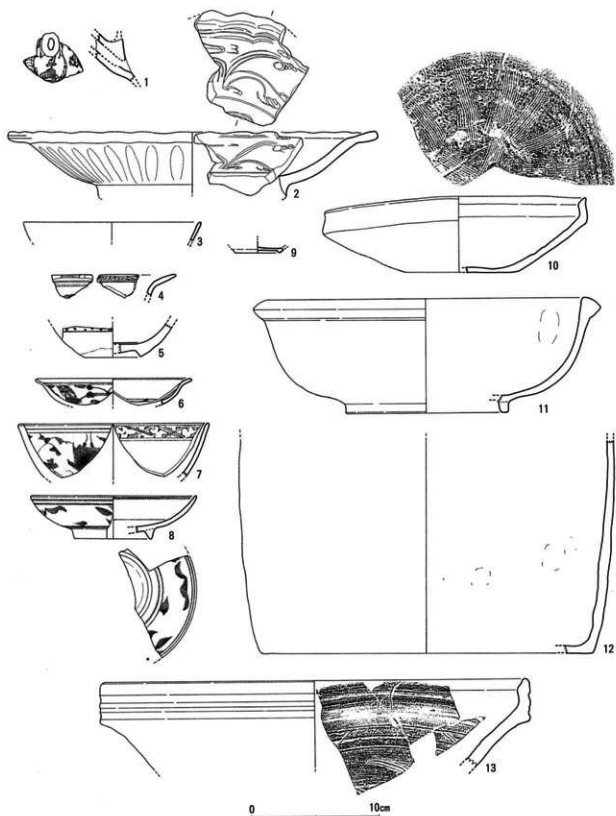
第264図 Ⅲ区SP044出土遺物実測図(1/1)



第265図 Ⅲ区51層出土遺物実測図(1/3)



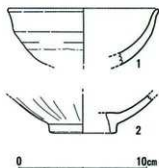
第266図 Ⅲ区48層出土遺物実測図(1/3)



第267図 III区36~39層出土遺物実測図(1/3)

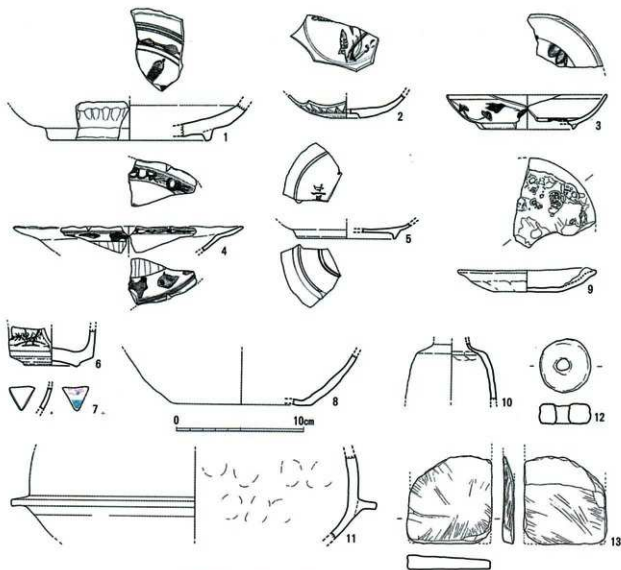
内面に沈線がみられ、口唇部は面をもつ。透明軸がかり、灰色の発色をもつものであるが、2次焼成を受けている。

第271図1は焼締陶器鉢であり、上面に凹線がめぐる罎状の口縁をもつ。中国南部産であろうか。2は土師質土器皿であるが、2次焼成を受けたためか、瓦質状に変化している。内面上半にはクルル状の付着物がみえる。3は京都系土師器皿であり、口縁内外面にススが付着し、灯明皿であったことがわかる。4・5は備前系焼締陶器插鉢である。6は褐釉陶器壺である。7は赤間石と呼ばれる輝緑凝灰岩製碗の陸部から海部にかけての破片である。8は長方形の結晶片岩製砥石であり、1面のみ砥面として利用している。9も長方形の結晶片岩製砥石であり、表裏面および側面1面のみ砥面として利用している。



第268図 Ⅲ区34層出土遺物実測図(1/3)

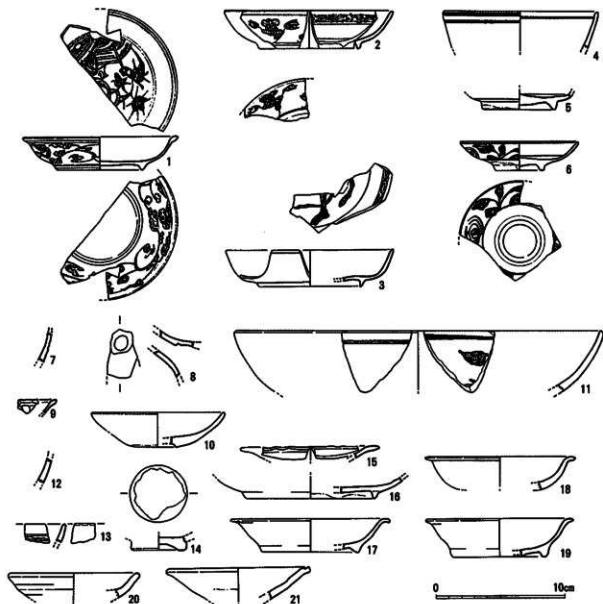
第272図1は扁平な隅丸長方形の一端にひもを通す円環を付けた鉛製品である。表裏面は平らで文様等は確認できない。メダイであろうか。2は鉛製鉄砲弾であり、径1.2cm、重さ11.9gを測る。3



第269図 Ⅲ区19~21層出土遺物実測図(1/3)

は側面に菊状の条溝をめぐらす銅製権である。上端の円環の一部が欠けているが、87.12gを測る。

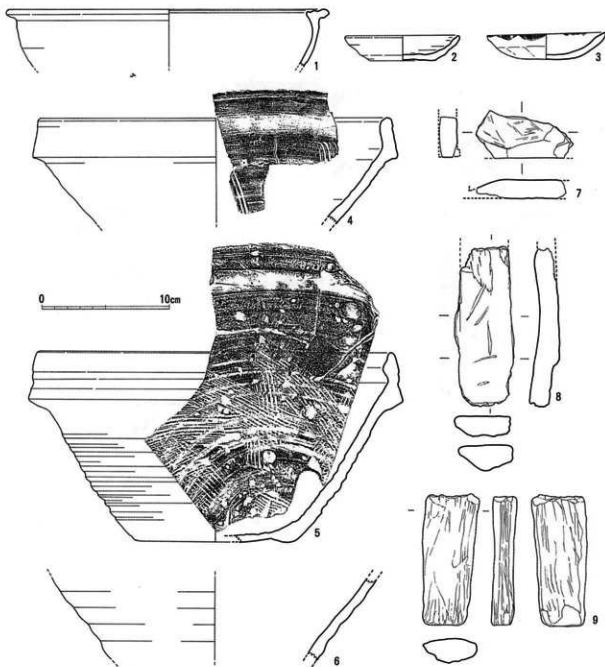
第273図1・2は中国景德鎮窯系青花碗であり、3は中国漳州窯系青花碗である。4・6は中国漳州窯系青花皿であり、6には見込み部に大きく「寿」の字を描く。5は中国景德鎮窯系青花皿である。内外面に茶釉を施し、高台内には2重圏線内に字款がみられる。7は肥前唐津系陶器溝線皿である。1600～1630年頃の所産か。8は中国漳州窯系青花碗であり、見込み部には花文がみられる。9は白磁碗であり、高台を含めて内外面全面に施釉され、見込部に重ね焼き痕がみえる。朝鮮王朝産か。10は中国龍泉窯系青磁碗の底部片であり、高台壘付けおよび高台内は露胎のままである。11は白磁碗であり、見込みおよび外面底部壘付けおよびその内部は露胎のままである。12は中国龍泉窯系青磁碗の底部片であり、内面および外面高台部にまで施釉されている。13・14は内外面に施釉された中国龍泉窯系青磁瓶であり、同一個体であるかもしれない。15・17・19は小野分類B群に分類できる中国漳州窯系青花皿であり、高台内面のみ露胎のままである。16・18は小野分類E群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿であり、内外面とも全面施釉されている。20は白磁椀花皿であり、見込みおよび外面底部付



第270図 III区25層出土遺物実測図①(1/3)

第2節 遺構と遺物

近は露胎のままである。21・23は口縁端反り形態の白磁皿である。22は花卉形の口縁形態をもつ白磁皿であり、見込みおよび外面底部付近は露胎のままである。24・25は緑軸陶器壺であり、内面・高台部および底部は露胎のままである。中国南部産。26・27は中国景德鎮窯系青花小杯である。28は中国南部産緑軸陶器瓶の破片であり、内面は露胎のままである。29は緑軸陶器壺の口縁片であり、内外面に施軸されている。中国南部産。30は中国産翡翠軸小皿である。31は瀬戸美濃系陶器天目碗である。32は碁笥底タイプの中国漳州窯系青花皿である。33は外面に觶をもつ白磁小杯である。初期伊万里であり、1630～1650年頃の産。34は中国漳州窯系青花小壺であり、内外面とも施軸されている。35は龍泉窯系青磁瓶であり、取手が付き、外面には施文されている。36は陶器壺であり、内面に施軸されている。外面は褐色に発色している。産地不明。



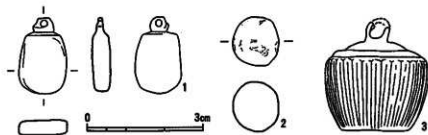
第271図 III区25層出土遺物実測図② (1/3)

第274図1は備前系焼締陶器壺である。肩が張る特徴をもち、外面に縦方向のへら記号がみえる。2は瀬戸美濃産陶器卮皿である。3は焼締陶器小壺である。薄手で赤褐色の発色をもつ。別の小壺が付属しているものであろう。中国南部産か。4は備前系焼締陶器徳利の底部片である。5・6は備前系焼締陶器甗鉢であり、放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。7は韓半島産焼締陶器舟徳利である。8は土師質土器取瓶であり、内面に金属滓が付着している。9は土製礮羽口の破片である。10は土甗である。11・12は磁石である。13は硯であり、海部が折損している。14は安山岩製茶臼の下臼の破片である。

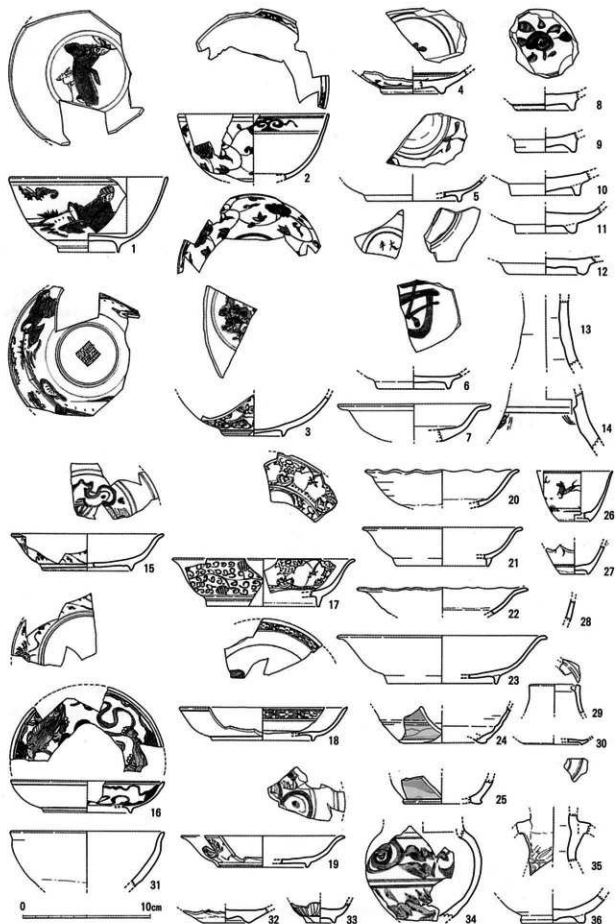
第275図1は青銅製品であり、上面を内側に折り込んだ円環状を呈し、擬宝珠の基部に嵌め込むような形態をもつ。2は緑色を呈し、小さな気泡を含むガラス製品の破片である。3は凝灰岩製の容器状製品である。方形の平面形をもち、四脚がつき、上面を方形にくぼませている。

第276図1は大型の中国漳州窯系青花皿であり、外面に鎊をもつ。2・11は小野分類E群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿であり、内外面とも全面施軸されている。2には底部高台内において2重圓線内に字款がみえる。3は中国漳州窯系青花皿である。4は小野分類F群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿であり、見込みには狐文がみえる。5は中国景德鎮窯系青花盤である。6は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。7は中国漳州窯系青花皿である。8は中国漳州窯系青花皿であり、見込み部を蛇の目状に軸剥ぎを行っている。9は小野分類B群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿である。10はまっすぐに体部が逆ハの字状に開く陶器皿である。瀬戸美濃産であろうか。12は中国龍泉窯系青磁茶皿である。13・14はまっすぐに体部が逆ハの字状に開く中国産白磁皿であり、見込み部および外面高台付近は露胎のままである。15は花卉形の口縁形態をもつ白磁皿であり、見込みおよび外面高台付近は露胎のままである。16は磁器小杯であり、灰色の発色をもつ。17は白磁水注の注口部の破片である。18は中国南部産翡翠軸小皿である。19は中国龍泉窯系青磁香炉の底部片であり、方柱状の器形をもつものである。20は磁器碗であり、内面に透明釉、外面の高台皿付け以外に茶軸がかかっている。21は中国景德鎮窯系青花小杯であり、底部高台内に字款がみえる。22は中国産白磁皿であり、内面に隆状に器面を隆起させ花文をあしらった型作りの文様がみえる。23は中国龍泉窯系青磁碗であり、外面口縁付近に雷文の退化した文様がみえる。24は肥前産磁器人形であり、顔の部分にのみ、褐釉がみられる。底面から背面下部に円孔が穿たれている。25は型作りの土製人形であり、両手で勺をもつ座像の神像を表したものである。26は中国龍泉窯系青磁茶皿であり、底部高台内の円環内に字款がみえる。

第277図1・2は唐津系陶器皿であり、見込み部に砂目がみられる。1600～1630の所産か。3は陶器壺の肩部片であり、外面に自然軸がみえる。4は上野高取系陶器角皿である。5は志野焼角皿である。6は瀬戸美濃系天目碗の底部片であり、円盤状に加工し再利用している。7は瀬戸美濃系陶器皿であり、見込み部に花文のスタンプがみえる。8は陶器片口鉢であり、口縁部以外には内外面に施軸



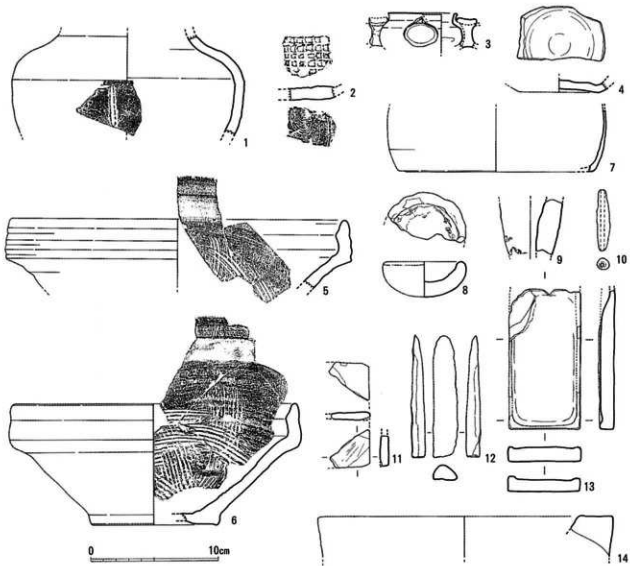
第272図 III区25層出土遺物実測図③ (1/1)



第273図 III区10~25層出土遺物実測図① (1/3)

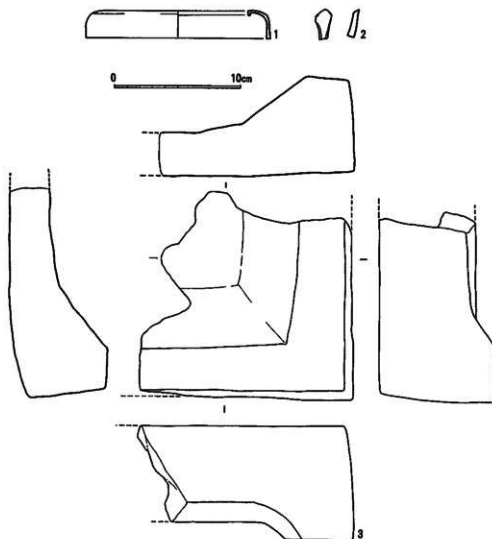
されている。9は肥前瑠璃輪香炉蓋である。文様は金銀彩の上絵付けであるが、剥落している。1650～1660年代の所産か。10は須恵器小壺の破片である。11は備前系統焼締陶器小壺である。丸く大きく膨らむ胴部と対照的に小さな頸部がつき、肩部には耳がつく。12は韓半島産陶器碗である。砂目痕がみられる。13は唐津系陶器茶入であろうか。14は陶器瓶である。外面上半に褐釉がかけられ、内面には同心円文の当て具痕がみえる。15は備前系統焼締陶器瓶である。16は備前系統焼締陶器の建水であろうか。17は土鍾である。18は備前系統焼締陶器小壺である。19は備前系統焼締陶器鉢である。20・23～25は備前系統焼締陶器播鉢である。21は備前系統焼締陶器鉢である。22は陶器瓶であり、肩部に灰釉がかけられている。近世の所産か。

第278図1は中国景德鎮窯系青花碗である。2は肥前産染付碗であり、近世の所産である。3は中国景德鎮窯系青花皿であり、高台内に字款がみられる。4は中国漳州窯系青花皿であり、小野分類B群に分類でき、5は中国漳州窯系青花皿であり、小野分類E群に分類できる。6～7は中国産五彩の口縁片である。内外面に絵付けがみられる。8～10は中国南部産翡翠釉菊皿である。11は磁器小壺で

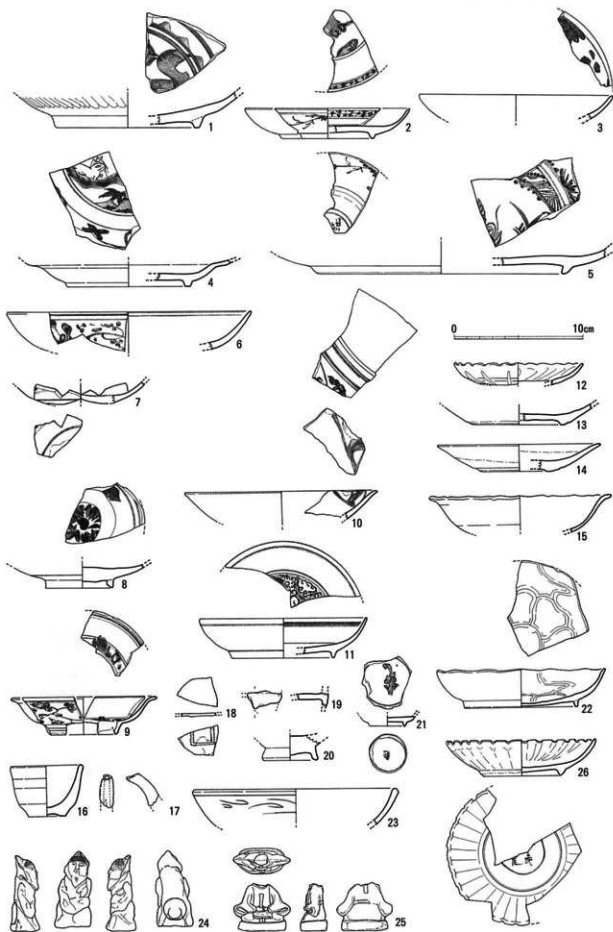


第274図 III区10～25層出土遺物実測図②(1/3)

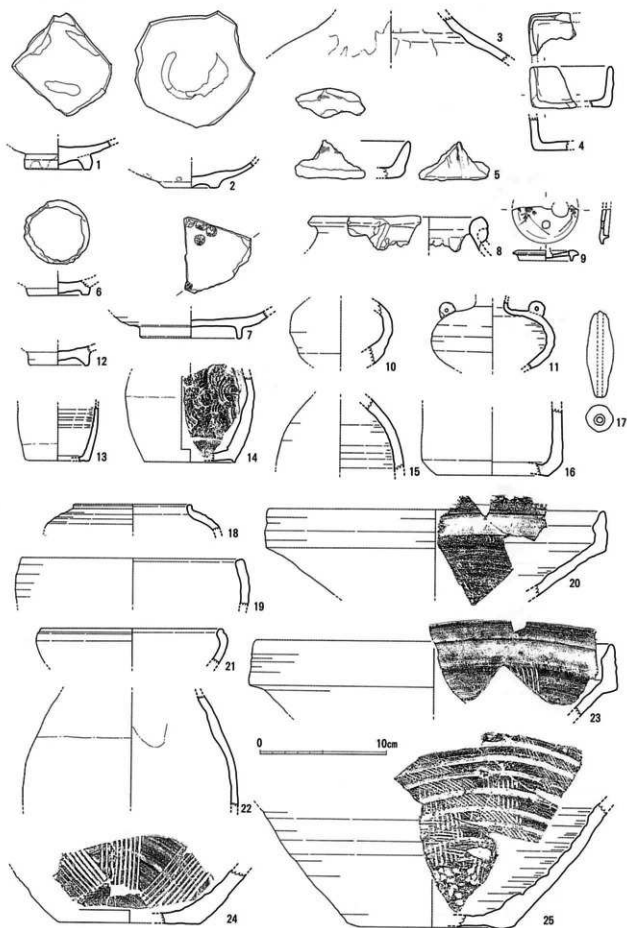
あるが、産地は明らかでない。12は小杯であり、外面の「寿」の染め付けを挟み、鑑がみられる。13は伊万里産染付小杯である。14は中国龍泉窯系青磁碗であり、高台置付けおよび内部は露胎のままである。15は中国龍泉窯系青磁香炉である。内外面に施釉され、三角形の脚がつく。16は志野産向付の破片である。17は中国景德鎮窯系青花器台である。方柱状のプローションに底面・側面に透かしをもち、上面には半球状のくぼみをもつ。18は龍泉窯系青磁器台の側面の透かしである。19は龍泉窯系青磁碗であり、外面に細弁蓮華文がつくタイプであろう。20・21は中国産白磁皿である、口縁がS字状に外反する形態をもつ。22は中国南部産白磁碗であり、見込み部および外面高台付近は露胎のままである。23・41は中国南部産褐釉陶器壺である。24は肥前唐津産陶器溝線皿であり、1600～1630年頃の所産である。25は陶器香炉であり、暗緑色に発色する釉薬が内外面に施釉されている。26は中国景德鎮窯系青花皿である。27は中国産磁器であるが、用途は明らかでない。外面には琉璃釉がみられる。28は瀬戸美濃系陶器折線皿であり、29は瀬戸美濃系陶器碗であろう。30は瀬戸美濃系陶器天目碗である。31は唐津系陶器碗であり、暗緑色の発色をもつ。1590～1610年の所産か。32・33は朝鮮王朝産陶器碗であり、暗オリーブ色の発色をもつ。34は唐津系陶器皿である。35は唐津系陶器碗であり、見込み部に胎土目痕がみえる。1590～1610年の所産か。36は備前系統焼締陶器瓶である。37は備前系統焼締陶器鉢であろうか。



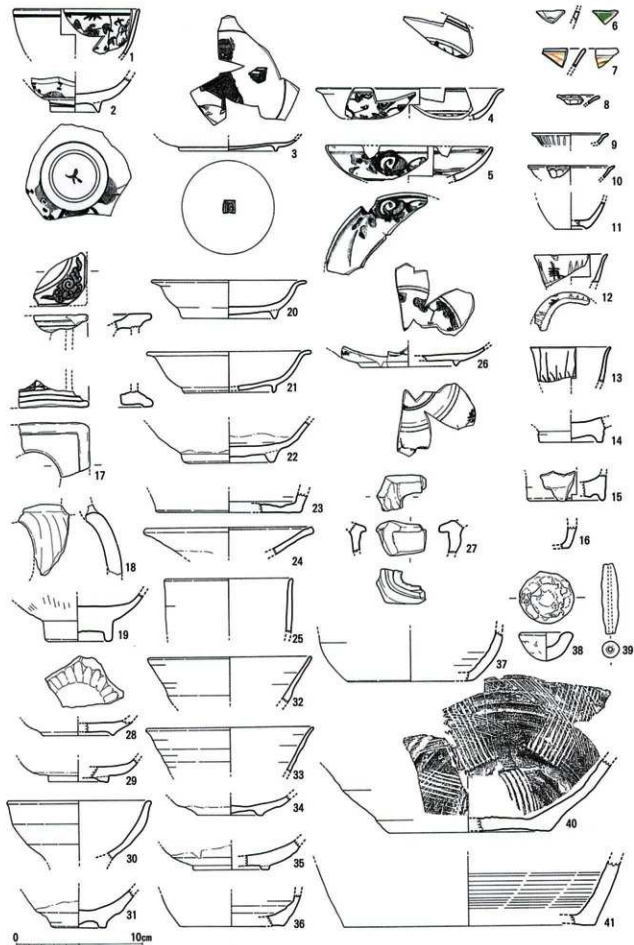
第276図 III区7～25層出土遺物実測図(1/3)



第276图 III区7層出土土遺物実測图① (1/3)



第277図 III区7層出土遺物実測図②(1/3)



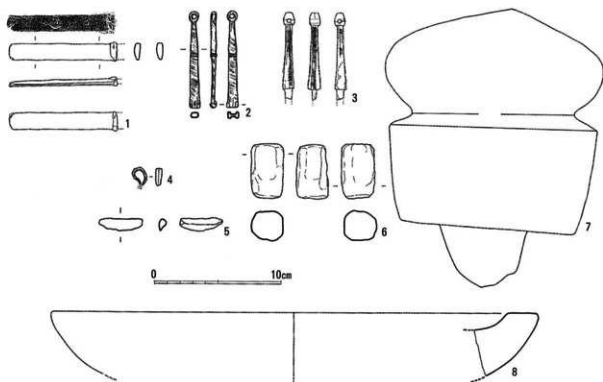
第278图 III区出土遺物実測図① (1/3)

第2節 遺構と遺物

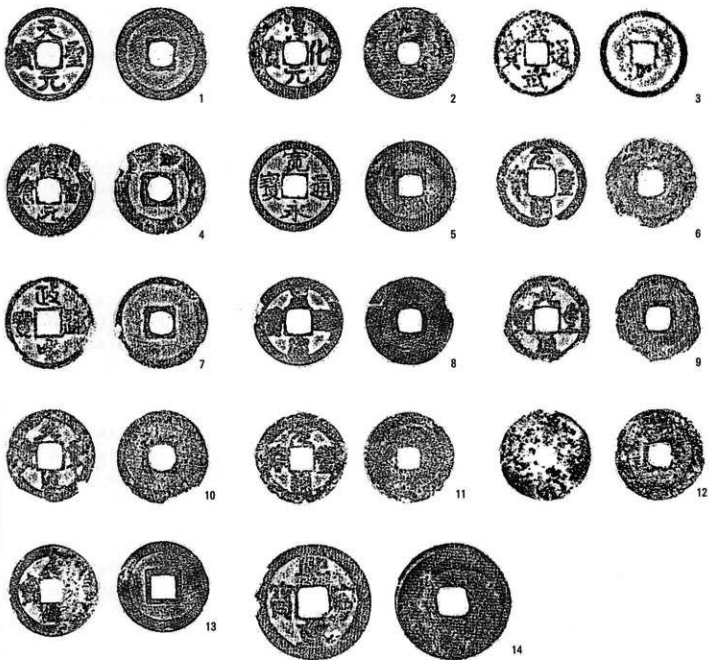
38は土師質土器取瓶であり、内面に付着物が多くみられる。39は土錘である。40は備前系焼締陶器播鉢である。

第279図1は青銅製小柄の柄である。2・3は青銅製鍵である。2の柄部は扁平な形態をもち、3の基部は断面多角面体の形態をもつ。4も青銅製品であるが、用途は明らかでない。5はガラス製品である。生きた面は球状を呈するが、形態は不明である。緑色を呈し、小さな気泡を含むガラス製品である。6は頁岩製筒形製品であるが、用途は明らかでない。7は凝灰岩製五輪塔の空風輪である。8は安山岩製石臼下臼の皿部片である。

第280図は銅銭である。1は「天聖元寶」(1023年初鑄)、2は「淳化元寶」(990年初鑄)、3は「洪武通寶」(1368年初鑄)、4は「紹聖元寶」(1094年初鑄)である。5は「寛永通寶」(1636年初鑄)であり、古寛永に属する。6・9～11は「元豊通寶」(1078年初鑄)、7は「政和通寶」(1111年初鑄)、8は「皇宋通寶？」(1038年初鑄)である。14は「熙寧重寶」(1071年初鑄)であり、折二銭である。12・13は風化が著しく、銭種は明らかでない。



第279図 III区出土遺物実測図② (1/3)



第280圖 III区出土銭貨 (1/1)

第3節 小結

本調査区は「府内古図」に照らし合わせれば、「大友御屋敷」東側に走る第2南北街路に接する「桜町」に比定されよう。本調査区の南に位置する9次調査区Ⅰ・Ⅳ区北端において、「御所小路」に想定できる道路遺構が検出できたため、第2南北街路と「御所小路」が接する地点の遺構群であることがわかる。それでは、各時期の遺構群の変遷を追ってみよう。

本調査区では、14世紀代に遺構群が形成され始める。まず、Ⅲ区においてSE031・SE032の井戸が形成され、このほかには土坑が1基確認できているのみであり、このほかには生活の痕跡は確認できない。

これに続き、15世紀末葉～16世紀前葉には、Ⅱ～Ⅲ区にわたる非常に大きな不定形の落ち込み（Ⅱ区SX030・Ⅲ区SX035）がみられる。落ち込みの様相から土採りのために生じた落ち込みであることが推測できる。この様相は9次調査区Ⅰ・Ⅳ区においても確認できるため、広く第2南北街路に面していた場所において土採りが行われ、生活空間ではなかったことがうかがえる。

これらの落ち込みが埋め戻される16世紀中葉になると、Ⅲ区においてわずかであるが土坑群が営まれはじめるが、明確な居住空間を構成するものではないように思える。また、Ⅱ区北東隅からⅢ区東側にかけて非常に大きな落ち込みがみられ、これは現在行われた調査区域からすれば、22次調査区まで達する。これを自然地形とするか、人為的な掘削跡による落ち込みとするかは、本調査区での発掘調査で解決しうる成果は得られていないが、当該期からの落ち込みに土坑（Ⅲ区SK012）が営まれているため、16世紀中葉までに形成された地形であることがうかがえる。

これに対して、16世紀後葉になると様相が一変する。Ⅱ・Ⅲ区ともきわめて多くの柱穴群・土坑群をはじめ井戸（Ⅱ区SE028・SE029・Ⅲ区SE033）、倉庫と考えられる竪穴状の方形土坑（Ⅲ区SK021）などが確認でき、この段階で一斉に町屋群が形成されたことがうかがえる。ピットのならばには、東西方向に密集して連続するピット列が3列におよび確認できているため、柵列によって区画された空間が第2南北街路に沿って存在していた可能性がある。この柵列間では建物が復元できる柱穴群は確認できていないが、Ⅲ区SD002・SD003付近に礎石とも思える人頭大より大きな石が据えられた状態を確認できたため、礎石建物が存在していた可能性も考えておくべきであろう。また、Ⅱ区の南端には東西方向に3段階の溝状遺構（Ⅱ区SD001-1・2・3）が走り、9次Ⅰ・Ⅳ区北端に確認された「御所小路」と考えられる遺構に関連する側溝と捉えるべきであろう。

当該期の特徴の一つとして、Ⅱ区SX033、Ⅲ区SK011、Ⅲ区SE033のようにきわめて大量の京都系土師器皿片が廃棄された遺構が検出できたことがあげられる。これらの京都系土師器皿片は前代に存在した落ち込み上や井戸上方に大量に埋められているため、軟弱地盤を克服するためのバラス的な役割を果たしていたことがわかるが、これらの京都系土師器皿は16世紀前葉から末葉までのものが混在して埋められているため、他所から新旧の京都系土師器皿が混在した状態のまま持ち込まれたことがわかり、付近に宴会・儀式等で大量に京都系土師器皿を必要とし、また、使用後に廃棄した施設が存在したことがうかがえよう。当該期には前述した調査区東側の大きな落ち込みは、依然として存在し、この落ち込み床面に遺構が営まれている。しかし、遺物上、型式差がほとんど現れない16世紀後葉～末葉にかけて、この落ち込みは埋められている。

落ち込みが埋没する時期と前後して、数多くの不定型な火災処理土坑が営まれている。このような16世紀後葉～末葉の遺構群の様相は「御所小路」南に位置する「御内町」に相当する9次Ⅰ・Ⅳ区、13次、21次調査区においても全く同様であり、第2南北街路に沿って存在した町屋はほぼ同様なものであったことがうかがえよう。

しかし、16世紀末葉以降、急速に町屋群が消滅し、それ以降の遺構はほとんど見られず、わずかに近世以降の水田に伴うと考えられる溝状遺構が存在するのみである。

第9章 自然科学的分析

中世大友府内町跡出土金属製品・ガラス玉の鉛同位体比分析

魯 磯彦・平尾良光
(別府大学文化財研究所)

1. はじめに

大分県大分市出土メダイ、メダイ様金属製品、鉛玉、鉛ガラスに関する自然科学調査の依頼があった。そこで、資料の化学組成、および鉛同位体比を測定することから、資料の材料に関する調査を行った。

2. 資 料

提供されたメダイなどは16世紀後半のキリスト教に関係した資料の一種と理解されている。7個のメダイ、メダイ様金属製品の大きさは縦長1.7cm～2.4cm、横長1.5cm～2.0cm、質量2.0g～11.2gであり、その表面は全体的に白色にサビ化している。1個の鉄砲玉は最大径1.3cm、質量10.2gである。2個のガラス玉は鉛ガラスでできており、白色のサビが少し発生しており、縦長1.1cm～1.3cm、横長1.5cm、質量3.6g～4.3gである。

資料から一部測定用のサビ試料を採取した。資料の記載は第6表で示した。

第6表 大分市中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの記載

番号	資料名	時代	出土地	出土区	測定番号
1	ベロニカメダイ	中世	中世大友府内町跡	第13次調査区(土坑)	BP1021
2	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第21次調査区(S087)	BP1025
3	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第13次調査区	BP1022
4	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第13次調査区(30K区)	BP1023
5	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第12次調査区(M-12区)	BP1020
6	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第18次調査区(包含層L-14区Ⅲ層)	BP1024
7	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第28次調査区(M-17区 No.5)	BP1026
8	鉄砲玉	中世	中世大友府内町跡	第28次調査区(M-17区 No.14)	BP1036
9	ガラス玉	中世	中世大友府内町跡	第48次調査区(S010 J区)	BP1032
10	ガラス玉	中世	中世大友府内町跡	第48次調査区(S019上層)	BP1033

3. 鉛同位体比の原理⁽¹⁾

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そしてこの時にすべての元素の同位体組成は地球上である値になっていて、それは地球のどこでも同じであったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しないが、例外的なくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛には²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた²³⁸Uは²⁰⁶Pbに、²³⁵Uは²⁰⁷Pbに、²³²Thは²⁰⁸Pbに変化する。UとThが減少した量だけ鉛の量は増えてくる。

各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量あるいは、岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによってそれぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない²⁰⁶Pb量と²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pb、²⁰⁶Pb量との比を調査し、世界の鉱山の鉛同位体比と比べることで鉛の産地がわかることになる。

4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5mlに希釈し、直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.3 μ gの鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上にのせた。準備したフィラメントを質量分析計（本学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計MAT 262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200 $^{\circ}$ Cで測定した。同一条件で標準鉛試料NBS-SRM981を測定し、規格化した。

5. 測定値の表し方⁽²⁾

鉛同位体比測定の結果を理解するために材料の同位体比を次のように示した。鉛には ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb の独立した4つの同位体があり、同位体比は $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ という12の方法で表現される。この方法の中で一番きれいな図で表現でき、4種類の同位体を含む $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ と $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ という2つの図（第281図と第282図）を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。中国の前漢時代、後漢時代、三国時代の銅鏡を分析してこれらの図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢、三国時代の銅鏡の材料がはっきり区分されて分布した。前漢時代の銅鏡が分布した領域を他の出土資料と比較して華北産材料の領域と表し、後漢時代、三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところわからないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域とした。

朝鮮半島の場合、朝鮮半島で製作されたと考えられる多細組文鏡を用い、それらが示す分布を朝鮮半島産材料の領域とした。

6. 化学組成

採取された一部試料に関して化学組成を蛍光X線分析法で測定した。測定器は本学に設置されている堀場製作所製のMESA500である。測定された蛍光X線スペクトルを付録として末尾に付し、その化学組成を表2でまとめた。

化学組成の結果から判断すると、試料No. 2とNo. 5を除き、ほとんどの資料には鉛が80%以上含まれ、鉛が主成分である鉛金属および鉛ガラスと考えられる。試料No. 2と試料No. 5はスズと鉛が約半ずつ含まれ、スズと鉛の合金と考えられる。

第7表 大分市の中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの化学組成

番号	資料名	Cu	Sn	Pb	As	Fe	測定番号
1	ペロニカメダイ	1.1	14	85	0.1	0.5	BP1021
2	メダイ様金属製品	1.1	43	46	8.6	0.7	BP1025
3	メダイ様金属製品	1.1	0.2	99	0.0	0.0	BP1022
4	メダイ様金属製品	1.3	0.4	98	0.0	0.8	BP1023
5	メダイ様金属製品	1.3	49	47	0.6	1.9	BP1020
6	メダイ様金属製品	19	7.4	66	5.1	2.5	BP1024
7	メダイ様金属製品	0.8	0.3	84	14	1.0	BP1026
8	鉄砲玉	1.4	0.3	98	0.0	0.0	BP1036
9	ガラス玉	2.2	0.6	97	0.0	0.5	BP1032
10	ガラス玉	1.4	0.5	97	0.0	0.7	BP1033

7. 結果

測定の結果、得られた鉛同位体比を表3に示した。測定した結果を第281図～第284図に図化した。図から判断すると資料番号1、2、3、4、7は今までに設定された中国、朝鮮半島、日本などの領域とは異なるところに分布した。資料5、6、9、10は中国の華南産材料の領域に分布しており、資料8は朝鮮半島産材料の領域に位置する。故に資料5、6、9、10は中国の華南産の材料で、資料8は朝鮮半島産の材料で作られた可能性を示している。ただし、資料1、2、3、4、7に関してはこれら資料は設定された領域内に分布していないため、今のところ材料の産地はわかっていない。

第8表 大分市の中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの鉛同位体比値

番号	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	測定番号
1	ヴェロニカメダイ	18.515	15.822	39.077	0.8546	2.1106	BP1021
2	メダイ様金属製品	18.342	15.750	38.668	0.8587	2.1082	BP1025
3	メダイ様金属製品	18.327	15.756	38.619	0.8597	2.1072	BP1022
4	メダイ様金属製品	18.254	15.753	38.516	0.8630	2.1100	BP1023
5	メダイ様金属製品	18.584	15.752	39.042	0.8476	2.1009	BP1020
6	メダイ様金属製品	18.462	15.739	38.870	0.8525	2.1053	BP1024
7	メダイ様金属製品	18.690	15.761	39.087	0.8433	2.0913	BP1026
8	鉄砲玉	18.310	15.632	38.865	0.8538	2.1227	BP1036
9	ガラス玉	18.462	15.725	38.968	0.8518	2.1107	BP1032
10	ガラス玉	18.545	15.748	39.078	0.8492	2.1072	BP1033
測定誤差		± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

8. 考察

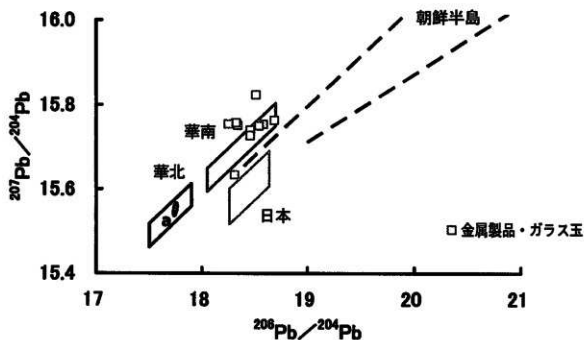
キリスト教と関係があるメダイに関する自然科学的な調査はこれまで研究があまり進んでいない。その意味で今回の化学組成調査および産地推定の研究は中世のキリスト教研究にとって意味があると思われる。大分市を中心に栄えた大友氏と関連する遺跡から出土したメダイの鉛同位体比分析の結果、資料5、6、9、10のメダイ様金属製品およびガラス玉は中国の華南産の材料で作られたと思われる。資料8の鉄砲玉は朝鮮半島産の材料を利用したとも考えられる。しかしながら、資料1、2、3、4、7は今のところ、どこの材料で作られたかわからない。ただし、資料2、3、4は同一の値ではないが、かなり近似していることから、未知の産地の類似材料で作られた可能性がある。

メダイは中世ヨーロッパの宣教師が日本へ持ってきて伝えたと理解されている。今回測定したメダイの特徴から考え、日本で鋳造されたのかもしれないが、材料となった鉛はヨーロッパあるいは南アジアのどこかで生産されたのかもしれない。

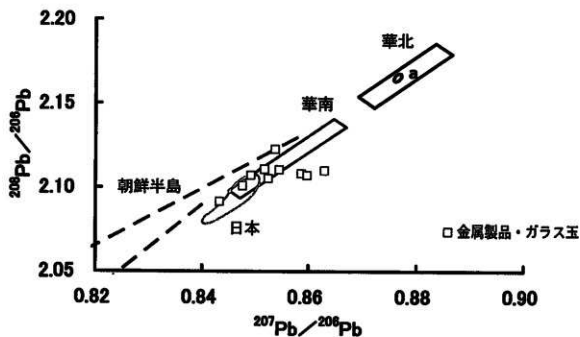
日本で出土したメダイだけではなく、ヨーロッパや南アジアのメダイあるいは鉛製品に関する研究が進むと大友の遺跡から出土したメダイの材料や流通経路がわかるとと思われる。

注 (1) 平尾良光編、『古代青銅の流通と鋳造』（鶴山堂1999年）31～33頁

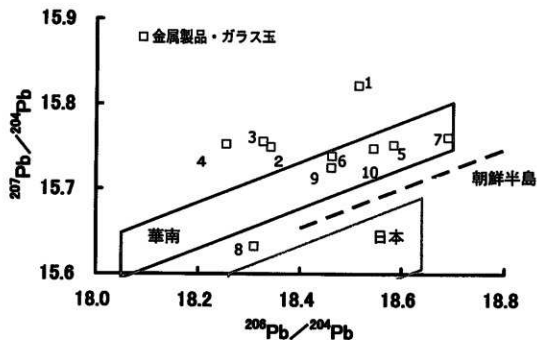
(2) 平尾良光編、『古代青銅の流通と鋳造』（鶴山堂1999年）35～39頁



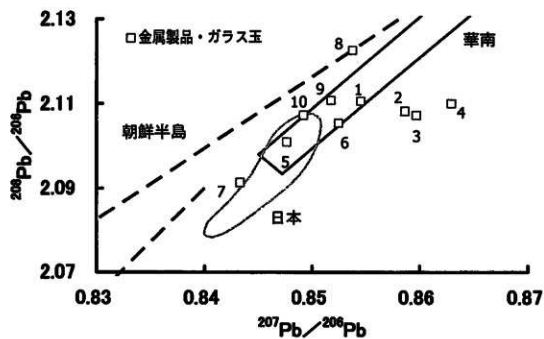
第281図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)



第282図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位体比 ($^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

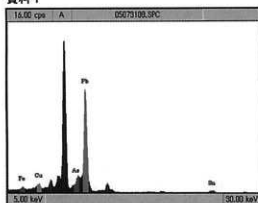


第283図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$) - 図1の拡大図



第284図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$) - 図2の拡大図

資料 1



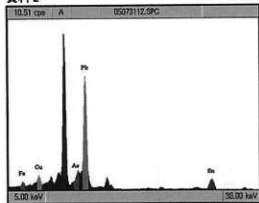
【結果】

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	15.873	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	2.974	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	153.189	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	8.626	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	26.702	11.46-11.98

【定量結果】

Cu	1.07(wt%)	5.859(±0.234) (cps)
Sn	13.86(wt%)	2.661(±0.101) (cps)
Pb	84.53(wt%)	145.184(±0.727) (cps)
As	0.09(wt%)	195.726(±0.846) (cps)
Fe	0.45(wt%)	1.419(±0.172) (cps)

資料 2



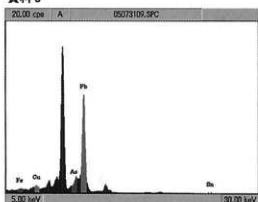
【結果】

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	16.268	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	13.383	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	108.831	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	8.273	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	19.843	11.46-11.98

【定量結果】

Cu	1.12(wt%)	7.445(±0.236) (cps)
Sn	43.20(wt%)	12.357(±0.214) (cps)
Pb	46.45(wt%)	101.842(±0.611) (cps)
As	8.57(wt%)	10.859(±0.261) (cps)
Fe	0.66(wt%)	2.536(±0.168) (cps)

資料 3



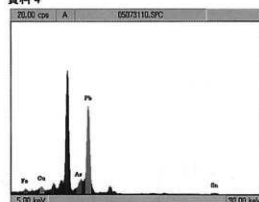
【結果】

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	17.252	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	0.441	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	180.044	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	8.318	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	30.678	11.46-11.98

【定量結果】

Cu	1.08(wt%)	6.355(±0.244) (cps)
Sn	0.18(wt%)	0.034(±0.039) (cps)
Pb	98.71(wt%)	170.784(±0.790) (cps)
As	0.00(wt%)	230.888(±0.921) (cps)
Fe	0.03(wt%)	0.099(±0.170) (cps)

資料 4



【結果】

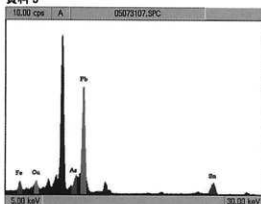
Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	16.240	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	0.897	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	160.582	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	8.925	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	27.369	11.46-11.98

【定量結果】

Cu	1.29(wt%)	6.821(±0.237) (cps)
Sn	0.38(wt%)	0.065(±0.056) (cps)
Pb	97.58(wt%)	152.055(±0.744) (cps)
As	0.00(wt%)	198.413(±0.853) (cps)
Fe	0.75(wt%)	2.276(±0.175) (cps)

第285図 蛍光X線スペクトルと化学組成①

資料 5



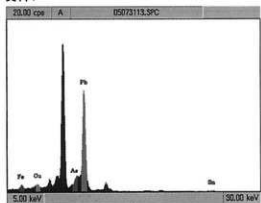
【結果】

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	14.233	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	12.848	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	98.021	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	10.915	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	17.396	11.46-11.98

【定量結果】

Cu	1.31(wt%)	6.776(\pm 0.221) (cps)
Sn	49.22(wt%)	11.850(\pm 0.210) (cps)
Pb	46.97(wt%)	92.278(\pm 0.579) (cps)
As	0.61(wt%)	123.443(\pm 0.672) (cps)
Fe	1.89(wt%)	5.698(\pm 0.193) (cps)

資料 7



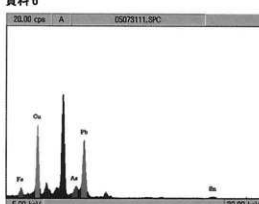
【結果】

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	17.896	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	0.524	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	183.093	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	13.125	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	31.619	11.46-11.98

【定量結果】

Cu	0.78(wt%)	6.424(\pm 0.249) (cps)
Sn	0.27(wt%)	0.069(\pm 0.043) (cps)
Pb	84.37(wt%)	173.445(\pm 0.797) (cps)
As	13.54(wt%)	18.494(\pm 0.331) (cps)
Fe	1.04(wt%)	4.872(\pm 0.213) (cps)

資料 6



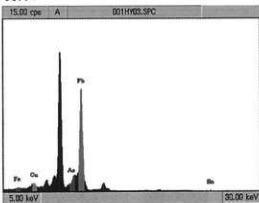
【結果】

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	115.817	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	2.006	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	105.686	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	16.774	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	23.322	11.46-11.98

【定量結果】

Cu	18.58(wt%)	105.031(\pm 0.632) (cps)
Sn	7.43(wt%)	1.507(\pm 0.083) (cps)
Pb	66.36(wt%)	98.705(\pm 0.604) (cps)
As	5.13(wt%)	165.650(\pm 0.781) (cps)
Fe	2.51(wt%)	9.194(\pm 0.241) (cps)

資料 8



【結果】

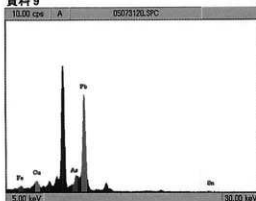
Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	14.918	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	0.294	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	140.601	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	5.952	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	22.644	11.46-11.98

【定量結果】

Cu	1.38(wt%)	6.370(\pm 0.226) (cps)
Sn	0.33(wt%)	0.050(\pm 0.032) (cps)
Pb	98.29(wt%)	133.523(\pm 0.695) (cps)
As	0.00(wt%)	168.566(\pm 0.784) (cps)
Fe	0.00(wt%)	0.010(\pm 0.143) (cps)

第286図 蛍光X線スペクトルと化学組成②

資料 9



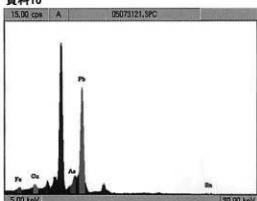
【結果】

Z	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	12.496 7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	0.206 24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	88.302 12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	5.710 6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	16.110 11.46-11.98

【定量結果】

Cu	2.15(wt%)	6.275(±0.206) (cps)
Sn	0.59(wt%)	0.055(±0.026) (cps)
Pb	96.78(wt%)	83.035(±0.548) (cps)
As	0.00(wt%)	101.633(±0.610) (cps)
Fe	0.48(wt%)	0.814(±0.139) (cps)

資料10



【結果】

Z	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	15.890 7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	0.436 24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	145.866 12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	9.080 6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	25.208 11.46-11.98

【定量結果】

Cu	1.36(wt%)	6.483(±0.234) (cps)
Sn	0.46(wt%)	0.071(±0.039) (cps)
Pb	97.45(wt%)	137.573(±0.709) (cps)
As	0.00(wt%)	180.430(±0.814) (cps)
Fe	0.74(wt%)	2.040(±0.177) (cps)

第287図 蛍光X線スペクトルと化学組成③

No. 1		メダイ (ヴェロニカメダイ) 中世大友府内町跡第13次調査区 長さ 2.0cm 幅 2.0cm 重さ 2.0g 材質 (主成分) 鉛	No. 6		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第18次調査区 長さ 2.0cm 幅 1.8cm 重さ 7.3g 材質 (主成分) 銅
No. 2		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第21次調査区 長さ 2.4cm 幅 1.8cm 重さ 5.0g 材質 (主成分) 鉛 備考 タガネ彫り文様あり	No. 7		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第28次調査区 長さ 2.3cm 幅 1.7cm 重さ 11.2g 材質 (主成分) 鉛 備考 M-17 No. 5
No. 3		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第13次調査区 長さ 1.9cm 幅 1.3cm 重さ 4.8g 材質 (主成分) 鉛	No. 8		鉄砲玉 中世大友府内町跡第28次調査区 最大径 1.3cm 重さ 10.2g 材質 (主成分) 鉛 備考 M-17 No. 14
No. 4		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第13次調査区 長さ 1.8cm 幅 1.8cm 重さ 6.7g 材質 (主成分) 鉛	No. 9		ガラス玉 中世大友府内町跡第48次調査区 S010 区 高さ 1.3cm 幅 1.5cm 重さ 4.3g 材質 (主成分) 鉛ガラス? 備考 キリシタン遺物(コンパ)の可能性大
No. 5		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第12次調査区 長さ 1.7cm 幅 1.5cm 重さ 3.4g 材質 (主成分) 鉛	No. 10		ガラス玉 中世大友府内町跡第48次調査区 S019 (上層) 長さ 1.1cm 幅 1.5cm 重さ 3.6g 材質 (主成分) 鉛ガラス? 備考 キリシタン遺物(コンパ)の可能性大

第288図 分析リスト

第10章 総 括

第1節 中世大友府内町跡出土のメダイ様金属製品及びガラス玉について

本年度報告の第12・18・22・28・48次調査区において、メダイ様金属製品、ガラス玉が出土した。同様の金属製品・ガラス玉については昨年度報告の第8・13・21次調査区でも確認されている。本稿ではそれらの遺物も含め、この金属製品・ガラス玉の性格について検証していきたい。なお、ガラス玉については様々な形態のものが出土しているが、ネリシタン遺物の可能性が考えられる第12・28・48次調査区出土の資料を扱うこととする。

1. メダイ様金属製品について

(1) 各調査区におけるメダイ様金属製品について

メダイ様金属製品とは

まずメダイ様金属製品とは、中世大友府内町跡を中心として出土する扁平な円盤状の金属製品で、その上部には紐か何かを通したと思われる穿孔を施す一群をさす。金属組成は鉛を主成分とするものが圧倒的に多く、若干銅を主成分とするものが含まれる。製品の表裏には何か判読不明な模様を施すものも見られ、特に平成14年度第21次調査区で出土した資料は、十字架のような模様と、何かをはめ込んでいたと考えられる窪みを有していた。この資料が出土したことにより、その形態の特徴や金属組成等を勘案して、中世大友府内町跡で出土する円盤状金属製品の一類は、メダイとしての位置づけが可能であることが示唆された⁽¹⁾。メダイ様金属製品という名称はここに由来する。

分布状況

今回報告の調査区において、メダイ様金属製品の資料数はさらにその量を増し、その分布状況等が把握できるようになってきた。本稿では、新たに検証された側面を中心に考察していきたい。

段を有して穿孔部

まず、今回新たに確認された資料(第289図1～9)を個々に見ていくことにする。1は長径1.5cm、短径1.2cm、厚さ0.3cm、重さ4.0gで円形部分の上部に段を有してその上に穿孔部を設ける。この穿孔部は紐か何かを通すためのものと考えられ、これから後はこの部分を「鈕」と呼称することとする。穿孔は面に平行して横方向に施される。金属組成は鉛を主成分とし、若干の銅が含まれる。2は長径2.0cm、短径1.6cm、厚さ0.4cm、重さ9.0gで、鈕は段を有してその上に横方向の穿孔部を設ける形態である。金属組成は鉛を主成分とする。3は長径1.7cm、短径1.5cm、厚さ0.4cm、重さ3.4gで、上部が欠損して穿孔の方向等は不明であるが、段を有していた痕跡は認められる。金属組成は鉛を主成分とする。4は長径2.0cm、短径1.8cm、厚さ0.3cm、重さ7.9gで、鈕はやはり段を有すが、その上の穿孔は認められない。金属組成は鉛を主成分とする。5は長径2.4cm、短径2.2cm、厚さ0.3cm、重さ9.7gで、鈕は段を有して穿孔部が設けられる。穿孔部が欠損しているが残存部分からみて、面に対して垂直方向に施されていたと考えられる。金属組成は銅を主成分とする。6は長径2.5cm、短径1.6cm、厚さ0.2cm、重さ4.7gである。近くに焼土層があることから被熱によって融解しているのか、あるいは製作途中段階によるものかは不明であるが、他の製品に比して輪郭線が明瞭でない。しかしながら鈕の部分をよく観察すると、先の1～5の段を有してその上に穿孔部分を施す鈕とは大きく異なった形態をなしていることが判明した。鈕は平面三角形を呈し、ベディメントを横しているような形状である。さらに傾斜部には刻みが施され、階段状をなして頂部に向かっている。穿孔部は認められないが、存在するとしたらこの三角形の頂部に施されていたものと考えられる⁽¹⁾。なお金属組成は鉛を主成分とするが、若干銅が含まれる。7は長径2.2cm、短径2.0cm、厚さ0.3cm、重さ9.6gで、鈕の部分が独立していない形態である。穿孔は頂部において、メダル面に向かって垂直方向に施される。

三角形の鈕

注(1) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内2 中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集)2005年

金属組成は鉛を主成分とする。

以上1～7までは第12次調査区出土資料で、次の8は第18次調査区、9は第28次調査区出土資料である。8は長径2.0cm、短径1.8cm、厚さ0.38cm、重さ7.3gで、段を付けずに直接鈕がとりつく形態である。残存状況が良くなく穿孔は確認できない。金属組成は銅が主成分である。9は長径2.3cm、短径1.7cm、厚さ0.56cm、重さ11.2gで鉛を主成分とする。鈕は段を付けず頂部に直接付される。

(2) メダイ様金属製品の形態分類

現在中世大友府内町跡においては、全部で24点のメダイ様金属製品が出土しているが、鈕の付き方により大きく4つの形態に分類されることが確認されている。その分類基準にしたがって本報告資料を位置づけると以下ようになる。

〔鈕の形態〕

- A類：段をつけてその上部に鈕が付く
- B類：段を付けずに直接鈕が付く
- C類：鈕部分が独立せずにメダル部分に直接穿孔が施される
- D類：ベディメント風の鈕で頂部に穿孔が施される

〔鈕の穿孔方向〕

- I：面に対して平行して横方向の穿孔
 - II：面に向かって垂直方向からの穿孔
- 1：A-I 2：A-II 3：A-? 4：A-? 5：A-II 6：D-(I) 7：C-II
8：B-? 9：B-II

A類が主流 この分類結果から見ると、メダイ様金属製品はA類が最も多いが、全24点の分類結果でもA類が11点と約半数近くを占めており、メダイ様金属製品ではA類の形態が主流であることが窺える。本報告資料で次に多いB類は、全24点の中でも7点を占めており、したがってB類もメダイ様金属製品の主な形態といえる。D類も含め、メダル部分に直接穿孔を施すのではなく、鈕は別に付随させるのがこの金属製品の主な形態であることが分かる。鈕の形態と穿孔の方向の相関関係については、まずC類のようにメダル面に直接穿孔を施すものについては、その技法の制約からII類の方法しかなしえないであろう。その他のA・B・D類のように鈕が別個に付随するものについては、技術的にI・II類いずれでも可能であろうが、I類の方が圧倒的に多いのが特徴である。ただII類とするものの中にメダイ様金属製品の金属組成としては亜流の銅製品が含まれていることから、金属の違いによる製作技法の差異（鋳型の差異等）が、穿孔方法に反映している可能性もある。この点についてはまだ資料不足の点もあり、今後の検証が必要である。

製作技法の
差異

(3) メダイ様金属製品の分布状況

現在までに出土しているメダイ様金属製品の分布状況を見ると、大友氏館東側を南北に走る第2南北街路線を中心に確認されていることがわかる（第290図参照）。そして全24点の内、その約4割近くにあたる9点が本報告調査区の所在する桜町界隈で出土している。昨年度報告の「豊後府内2」において、メダイ様金属製品の製作が府内で行われた可能性を示唆したが、この分布の集積域を見ても、一つの仮説としてその製作拠点が桜町界隈にあったということが考えられる。特に本報告の第12次調査区では鍛冶工房に伴うと考えられる緑青と取瓶の出土等が確認され、第18次調査区において

桜町界隈に
集中

緑青と取瓶

注(2) 平成16年に第41次調査区で同じ形態のメダイ様金属製品が出土した。この資料は残りが非常によく鈕の階段部分の段も明瞭に残っている。さらに三角形の鈕の頂部には、面に対して横方向の穿孔が施されていた。

は、分期の未成品が出土している。したがってこの桜町界隈で金属製品の製作が行われていた可能性は十分に考えられる。ただ、メダイ様金属製品の主体を占める鉛製品の製作を直接示す痕跡は認められていない。そこで昨年度報告の豊後府内2でも触れたように、分期などの青銅製品の製作を行った職能集団が、メダイ様金属製品をはじめとする鉛製品の製作にも関与したと考えるのが無難であろう。

2. ガラス玉について

各調査区においてガラス玉が複数点出土しているが、ここではキリシタン遺物の可能性が考えられる第12次調査区出土の小玉と第28・48次調査区出土の刻みのある一群について触れることとする。

まず、第12次調査区資料についてであるが(第1分冊 第154図)、全部で37点が集中して出土した。大きさはいずれも径0.4cm、厚さ0.2~0.3cmではほぼ同大、同形状であり、すべてが一連の遺物であることは明らかである。出土した整地層の時期から16世紀後半の所産と考えられる。これらの小玉は具体的な遺構を伴っていないということもあり、その性格についてはなかなか言及しがたいが、東京都千代田区において、同じ16世紀後半の出土遺物で興味深い類例があるので触れておきたい。東京駅八重洲北口前の開発事業に伴い実施された発掘調査で、キリシタン墓が10基確認された⁽¹⁾。その中の1基から、第12次調査区とはほぼ同大、同形状のガラス玉が49点出土しており、さらに同じ墓坑から木製ロザリオ玉2点と青銅製メダイが出土した。この出土状況は、49点のガラス小玉がコンタツ⁽²⁾であることを示している。そこで第12次調査区出土のガラス玉をもう一度みてみると、玉一つ一つが形態的にもほとんど同じであり、数こそは違いますが相当数まとめて出土している点も同じである。キリシタン大名で知られる大友宗麟の城下町で出土している点、ガラス玉の時期が16世紀後半で、府内で他のキリシタン遺物が出土している時期である点などを勘案すると、これらのガラス玉がコンタツである可能性は十分ありえる。

次に第12次調査区のすぐ北側に隣接する第48次調査区で、刻みの入ったガラス玉が2点出土した(第289図-10・11)。いずれも鉛ガラスで、10は刻みが8つ、11は刻みが7つ入る。同形態の鉛ガラス玉が第8次調査区でも出土しており⁽³⁾、それは5つの刻みを有する。このような刻みを入れる形態のガラス玉が長崎県でも確認されている。一つは原城跡で出土しており、5つの刻みを有する青色のガラス製コンタツが2点確認されている⁽⁴⁾。もう一つは興善町遺跡で出土しており、刻みは7つ入る⁽⁵⁾。長崎県出土の資料は共に十字架やメダイ等と共伴しており、キリシタン遺物のコンタツであることはほぼ間違いない。先のガラス小玉同様に、第48次調査区出土のものも形態的類似性からコンタツの可能性は十分考えうる。またコンタツの場合、指先で珠をくりながら祈りを唱えるのに使われるという性格上、珠の大きさに区別をつけることがある。第48次調査区のもの第12次調査区のもの出土地点はさほど離れていないことから、一連のもの可能性も考えられる。なお、第48次調査区出土ガラス珠と同じ形態を有する第28次調査区(第289図-12)のようなものも出土しているが、ガラスの組成は異なる

註(3) 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会『東京都市千代田区 東京駅八重洲北口遺跡』2003年

(4) コンタツとは「数える」に由来し、当時は、数珠の様に環状につないだものを、祈りを唱えながら、指先で数えていた。このことからキリスト教伝来の頃このような「珠」をコンタツと呼び、ロザリオとも証した。なお、「珠」一つを指すときはコンタツという。

(5) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1 中世大友府内町跡第5次・第8次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第1集)2005年

(6) 長崎県南有馬町教育委員会『原城跡』(南有馬町文化財調査報告書第2集)1996年

(7) 長崎市教育委員会『興善町遺跡-日本団体生命保険株式会社長崎ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』1998年

が、やはり同様の性格付けが可能であろう。

中原遺跡

ところで、これまで形態的・时期的類似性からキリシタン遺物の可能性を説いてきたが、同じような形態・時期を有す遺物で、明らかにキリシタン遺物ではないものがあることも事実である。例えば大分県竹田市久住町所在の中原遺跡⁽¹⁾では、座葬で葬られたと考えられる中世墓から117点の鉛ガラスの小玉が出土しているが、形態、大きさ・時期共に第12次調査区の小玉とはほぼ同じである。しかし、中原遺跡のガラス珠は、その出土状況から考えて数珠であると考えられる。また、山口県山口市所在の瑠璃光寺跡遺跡⁽⁹⁾で検出された中世墳墓の中で、第121号墓、第123号墓から第12次調査区出土の小玉とはほぼ同形態・同寸法の小玉が出土しており、第121号墓から43点、第123号墓からは40点確認されている。いずれの墓坑も円形を呈し、幼児を埋葬したとみられている。墓坑内からはガラス小玉の外に、土師器皿と銅銭が出土していることから、これらのガラス小玉は数珠と考えられる。また、同遺跡内の第10号墓からは7つの刻みを入れたガラス玉が出土している。大きさも1.2cm×1.0cmと第48次調査区出土のものに近く、さらにガラスの組成は不明だが、報告書の記述から乳白色を呈しているようで、鉛ガラスの可能性もある。したがって形態的に中世大友府内町跡で出土しているものにもかなり近いものであると思われる。このガラス玉が出土した墓坑は円形を呈し、中からは土師器皿と銅銭、さらに水晶の数珠玉が1点出土している。この出土状況を見る限り、このガラス玉もキリシタン遺物とは考えにくい。

瑠璃光寺跡遺跡

所持する人間

以上より、ガラス玉自身が持つ性格は、ガラス玉そのものの形態や素材等に既定されているものではなく、それを所持する人間によって決まってくるものであることが窺える。例えば40数個まとまって出土するガラス小玉も、東京駅八重洲北口遺跡のようなキリシタン墓から出土すればコンタであるし、中原遺跡や瑠璃光寺跡のような中世墓から出土すれば数珠と認定せざるを得ない。そうした側面からみると、中世大友府内町跡の第12・28・48次調査区出土のガラス玉は、いずれも包含層あるいは整地層からの出土であり、具体的な遺構に伴っていないため、その性格の位置づけは困難と言わざるを得ない。ただ、中世大友府内町跡で出土するガラス玉は、いずれも16世紀後半～末葉にかけてのもので、この時期府内はコレジオが設立されるなど、キリスト教の強い影響下にあったことが、当時の記録等からも窺える。特にコンタについては国内のキリシタンが非常に渴望したものの一つであり、当時府内のキリシタン達がコンタを所持していた可能性は高い⁽¹⁰⁾。さらに、コンタには十字架やメダイが大体付されるが、中世大友府内町跡ではそのメダイの出土も確認されている。これらを統合すると、中世大友府内町跡出土のガラス玉をコンタと認定しうる要素はあるといえる。

渴望されたコンタ

萬寿寺の遺骸

一方数珠としての可能性についてはどうであろうか。当時の府内の町の様子を描いた「府内古図」の中には、大友氏の菩提寺である萬寿寺を始めとして、いくつかの寺院が描かれている。特に萬寿寺は大友氏の菩提寺ということもあり、日本でも屈指の禪宗寺院であった。しかし、これらのガラス玉が出土する時期である16世紀後半～末葉にかけての段階は、その寺院の影響力よりも、キリシタンの影響力の方が強かったような歴史的背景が認められる。例えば長崎からイエズス会総長に宛てられた通信によれば、天正九年(1581年)に「豊後国中でもっとも豪華で大いなる伽藍をもつ主要な寺院が当市の最良の地にあった。この寺院は我がが臼杵の教会に礎石を据えた週の或る夜、火を發し、寺内より一物も持ち出せぬまま全焼した。…府内のかの寺院にはふたたび住む者がなかったので、国主フ

註(8) 久住町教育委員会・大分県教育委員会『小城原遺跡・中原遺跡』(県営担い手育成基盤整備事業部野西部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ) 2002年

(9) 山口市教育委員会『瑠璃光寺跡遺跡』1988年

(10) 五野井隆史「キリスト教布教とキリシタンの道具(一)」(『英和大学キリスト教文化研究所 紀要 第20巻 第1号』2005年)

ランシスコの助言により、この件は若い国王が同寺院の収入を武士たちに分け与え、その地所は二人のキリシタンの武士に与えるように処置された。」とある⁽¹¹⁾。ここにある「もっとも豪華で大いなる伽藍をもつ主要な寺院」とは萬寿寺を指す。さらに翌年、柴田礼能というキリシタン武将が大夫義統によって萬寿寺築地の内と萬寿寺西之屋敷を与えられ、萬寿寺町屋敷のすべてを預けられたという記録がある⁽¹²⁾。奇しくもこの天正九年（1581年）に、イエズス会巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーノによって府内にコレジオが設立されており、この頃かつて絶大な勢力を誇っていた萬寿寺の権威は消え、府内の町はキリスト教の強い影響下にあったことが窺える。

さらに、最近の発掘調査の成果によっても、16世紀後葉以降において萬寿寺権威の衰微が窺えるようになってきている。平成14年度～17年度にかけての調査で、萬寿寺が巨大な堀で囲まれていたことが判明したが⁽¹³⁾、いずれの調査区においてもその堀は16世紀後葉（1570年代）に埋まってしまい、その上に道路もしくは町屋が展開していくことが確認されている。特に萬寿寺西側の埋まった堀の上には、広範囲に亘る石敷きや礎石建物の跡が確認されており、前述の柴田礼能に預けられた萬寿寺西之屋敷との関連が考えられる。このように16世紀後葉以降において、萬寿寺が次第に衰微していく状況が発掘調査によっても検証されてきており、調査所見によれば、府内の町構造そのものもこの時期大きく変革していることが最近分りつつある。特に府内の町の姿を描いたとされる「府内古図」には、萬寿寺の堀は描かれておらず、府内の町の最後の姿を描いたものと考えられる。

このように、中世大友府内町跡で出土したガラス玉の背景には、仏教的要素よりもむしろキリスト教的要素が強いものが感じられる。そしてガラス玉は他で出土したキリシタン遺物同様、すべて町屋から発見されている点も注目される。例えばヴェロニカのメダイは御内町から出土しており、メダイ様金属製品は御内町、桜町等の町屋、あるいはキリシタン武将である柴田礼能が預かったとされる西之屋敷界隈等で発見されている。

以上より、中世大友府内町跡から出土するガラス玉は、確固たる位置づけはできないものの、キリシタン遺物であるコンタとしての可能性を指摘しておきたいと思う。

なお、第48次調査区出土の刻みの入る鉛ガラス玉2点については、鉛同位体比測定によって、華南産の素材が使われていることが判明した（第9章自然科学的分析の項参照）。また第8次調査区出土の鉛ガラスについても同様の産地同定がなされており、すべて一連のものである可能性が高い。この華南産の素材という点で、五野井隆史氏の興味深い指摘があるので触れておきたい⁽¹⁴⁾。当時国内ではコンタツの需要が非常に高く、フロイスが「尾張には折るためのコンタツのロザリオ rosario de contas を作る人がいないので、それらはポルトガル人の若者がマカオから売るために持ってきたものです」と述べていることに触れて、「マカオのポルトガル人達が、日本人の信心具に対する異常な関心に目ざとく反応して、それに商品価値を見出すにいたったことは当然なことであった。」としている。これは、コンタツがかなり華南の方から流入していることを示しており、鉛同位体比の測定結果と符合している興味深い。また、メダイ様金属製品については華南産でも日本産でも朝鮮産でもない鉛が使用されているという結果が出ており、キリシタン遺物、もしくはその素材は、南蛮あるいは西洋を含めて複数のルートを経て国内に入ってきた可能性がある。

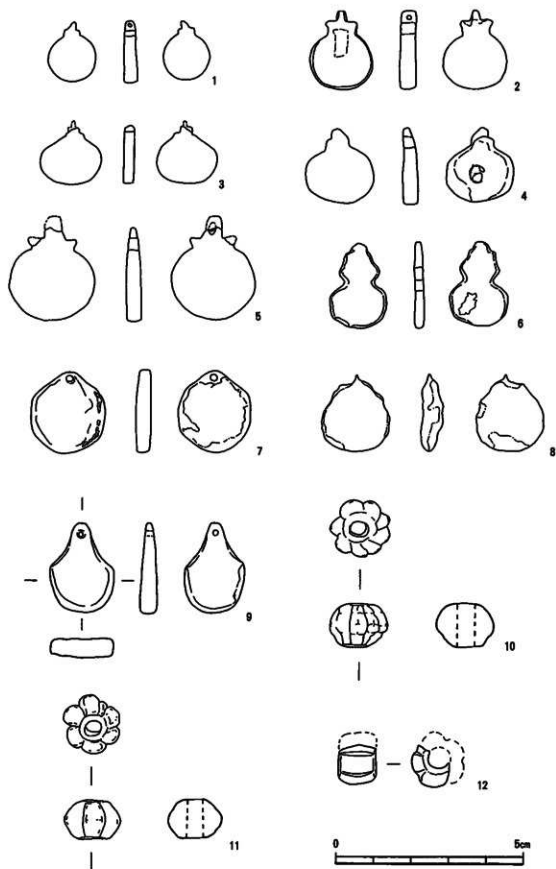
註 (11) 一五八二年二月十五日付、長崎発信、ガスバル・コエリユ師のイエズス会総長宛、一五八一年度、日本年報（松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第3期 第6巻』1991年）による

(12) 渡辺澄夫『増訂 豊後大友氏の研究』1982年

(13) 平成14年度に第20次C調査区で萬寿寺北側の堀、平成15～16年度にかけて第30次調査区及び第43次調査区で萬寿寺西側の堀、平成17年度に第51次調査区で萬寿寺北西側の屈曲部を検出した。

(14) 前掲註(10)に同じ

第1節 中世大友府内町跡出土のメダイ様金属製品及びガラス玉について



第289図 メダイ様金属製品・ガラス玉実測図 (1/1)

メダイ出土地点



第290図 メダイ様金属製品・出土分布図

第2節 豊後「府内」桜町の変遷

1. 豊後「府内」の桜町

「府内古図」によると、大友氏館の東側に接する街路の対面に桜町の名称が書き込まれている。第2南北街路と名付けたこの街路は、「府内」最北端の町屋である今在家町から南小路町一小笠原町一福荷町一唐人町一桜町一御内町一魚之店一後小路町一小物座町一千手堂町一三宝院町と続く「府内」最長の南北街路である。この間、「府内」の中核である大友氏館の東側、萬壽寺の西側を通る。この中で、桜町は大友氏館の東側正面に街路を挟み対峙する町屋と言える。

祇園社

地図上で復元された大友氏館は一辺約200mの方形をしており、最古と想定されている古絵図には東側に白壁の築地に南側から大・小の二つの門が描かれている。16世紀後葉のこの街路沿いの様子を表す文献として、大友義統が家臣の税所越中守に祇園社の神領として町屋敷の差配権を保証するため発給した文書に「府内屋敷 祇園御神領之義、其方可有格御候、然者東之築地至外通者、町人召移、以屋敷料、…」とある。この文献からは、第2南北街路沿いの大友氏館の東側には町屋が広がっており、間別銭などの賦課についての権限を大友家が握っていたことが理解できる。

伊勢参宮帳

また、天正14年(1586)に「府内」は島津氏の侵攻を受け、灰燼に帰してしまうが、その後いち早く復興した町のひとつに桜町がある。まず3年後の、天正17年の伊勢参宮帳には、「天正十七年三月廿二日 豊後府内櫻町 藤左衛門尉殿 同内符方 甚四郎殿」とあり3年後には参詣を果たしている。続く天正18年には「天正十八年卯月十二日 豊後府中櫻町之衆十六人つれ 了尚入道殿 宗久入道殿 同甚五郎殿 興三衛門殿 勘解由殿 新二郎殿 宗三郎殿 善一郎殿 彌三郎殿 紹意入道殿 同御小人 源三郎殿 興三郎殿 賀衛門殿 源十郎殿 おふくの代参り彌衛門殿」とさらに多くの人々が参詣しており、天正19年には「天正十九年卯月七日 豊後府中櫻町 同唐人町四人つれ 月山 櫻町吉田彌四郎 善周坊 渡邊彦四郎殿」と、北西に隣接する唐人町の住人と連れだって参詣している。その名前を見ると、名字のない人々に混じり、僧侶名称や武家名称が見られ、こうした人々をはじめ、様々な職種の人々が居住していたことが伺われる。

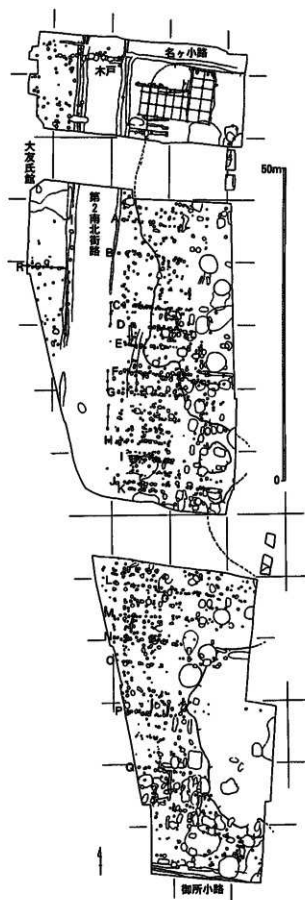
このように、大友氏館前の桜町は、国主の館の正門前と言う重要な位置にありながら、近隣の武家地となるわけではなく、「…町人召移、以屋敷料…」と屋敷料を納付するような人々が居住する町屋が形成される。

2. 第2南北街路整備以前の桜町

大友氏館の東を南北に通る第2南北街路は、平成13年度からの発掘調査や本書を作成するにあたっての分析で、16世紀第3四半期以降に整備されたことが判明した。すなわち、「府内古図」に描かれた世界は、それ以後の様子と言える。そこで、16世紀第3四半期以前の豊後大友氏館の東側の状況を見る。

まず、「府内古図」に大友館として描かれる部分については、大分市教育委員会の調査で15世紀後半から、盛土による嵩上げや企画性の強い大型の礎盤建物などが存在することが確認されている。さらに、16世紀前半から中葉にかけても土師質土器の大量廃棄跡が検出されており、大規模な儀礼が行われたものと推測できる。このように、「府内古図」に描かれた大友氏館の場所は、「府内」の中でも特別な場所として15世紀後半以来認識されていたことが推測される。このため、この部分の東側を区画する堀は、第18次西調査区で検出されたSD003は15世紀代、第18次西調査のSD004と第12次調査のSD08は同じ堀であるが、16世紀前半から中葉である。二つの堀は、時期や形状が異なるが方向は一致しており、その位置の継続性が理解できる。

一方、「府内古図」に描かれる大友氏館の東部の調査であるが、府内町跡第12次調査、第18次西調査では、第2南北街路を保存する計画があったため、街路を形成する部分を掘り下げるのが出来なかった。しかし、南に隣接する第28次調査では、第2南北街路を完全に除去した。その結果、街路敷



第291図 「府内」板町遺構配置図 (1/600)

設以前の遺構はほとんど検出されなかった。また、この街路に沿った第18・28・22・9次調査では、町屋部を完全に掘り下げた。しかし、古代の井戸が検出されたものの、16世紀前半から中頃にかけての遺構や遺物は全く検出されなかった。このような調査結果から、16世紀第3四半期以前の大友氏館の東側での生活の痕跡を認めることは出来ない。すなわち、第1南北街路沿いには市町が展開しているが、その後背地から大友氏館にかけては、空地地となっていた可能性が高い。

以上のことから、桜町成立以前は、大友氏館部分は堀で区画された中に建物などの施設が存在していたが、堀の東側から第1南北街路にかけては、空地地として広がっていたと想定される。

3. 桜町の成立と構造

(1) 桜町の成立

大友氏館前が大きく変貌するのは、先に述べたとおり、16世紀第3四半期と考える。出土遺物から判断すると、府内町跡第28次調査の街路面を剥ぎ取った地山直上から、第2分冊第200図7・9のような瀬戸・美濃焼の大窯3期(1560～1590年)と考えられる天目茶碗と京都系土師器2期が一緒に出土している。また、府内町跡第18次西調査では、第2南北街路を分析するトレンチの最下層から第2分冊第52図の蓮弁文のある漳州窯の碗と新しい傾向の京都系土師器が出土している。さらに、名ヶ小路の最下層からも第1分冊第178図2・3の新しい傾向の京都系土師器と漳州窯が出土している。このことから、街路の普請は16世紀第3四半期と考える。

次に第2南北街路の東側で検出された大規模な掘込み地業であるが、第291図のように、北は名ヶ小路から、南は御所小路あたる部分まで、南北約130mに及び、その形状は不定形で、西側は、第2南北街路面にあたる部分を避けて掘り込まれ、約70～80cmの法面を持ち、砂層まで達し、街路面からは約1.5m深くなっている。

この掘込みの掘削時期は、最下層から京都系土師器2期や漳州窯が出土しており、掘削直後に埋め立てられたとしたら、街路普請時とほぼ同時期と言える。また、府内町跡第18次東調査では、最初の段階に浅い掘込みで形成される第2南北街路を切って、大規模な掘込みが行われている。この切り合い関係から、この部分は、第2南北街路の基礎事業後に大規模な掘込みの順番であることが判る。また、名ヶ小路、御所小路は避けて掘削されている。すなわち、この大規模な掘込みは、北の名ヶ小路、南の御所小路、西の第2南北街路の位置を決定した後に掘削されたことになる。しかし、出土遺物からみると、その時期差はなく、ほぼ同時期の地業と考える。

また、埋め立て事業も、先に述べたように埋土の中から、街路最下層と同じ様相の遺物が出土することから、ほとんど同時期に行われたものと推測する。このことは、街路事業、大規模な掘込み事業、埋め立て事業が工程上の時間差はあるものの、ほぼ同時期に行われたと考える。

大友義統

こうした「府内」を大改変するような大規模な土木事業を行う時期は、遺物の編年から16世紀第3四半期と考えるが、この時期「府内」や大友家にとって、この事業の契機となる出来事として、天正元年(1573)の大友義統の家督継承がある。天正9年(1581)のポルトガル宣教師の報告に「この臼杵城から四レウグワの地に府内と称する豊後の主要な都市がある。この住民は八千名で、新国王が居住し、彼がこの首都を統治している。」⁽¹⁾と記述されている。家督継承に伴い、父大友義統と暮らした臼杵を離れ、府内に移住したものと考えられる。また文献でも、大友義統は家督を継いだ天正元年(1573)年12月2日に「府内」にある大友氏の施設に関わりと理解されている「土圀廻屏之義、至踏躰庄申付候、仍直入郷之内、…」の文書を家臣の田北大炊助に発給している。

こうして、1560年代初めに大友義統が政務拠点を「府内」から「臼杵」に移して以来、「府内」の

註(1) ヴァリニャーノ 松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社東洋文庫 平凡社1573年

都市整備が停滞していたが、大友義統の家督継承により、再整備が開始されたものとする。その一環として、第2南北街路や名ッ小路の整備、大友氏館東側の町屋の新設と整備が行われ、桜町が誕生したと思われる。

(2)桜町の構造

天正年間の初めに新しく整備された桜町は、大友氏館前を通る第2南北街路に沿いの、北は名ッ小路、南は御所小路に挟まれた西に面した町屋である。その規模は、名ッ小路の南側の側溝の中心から御所小路の北側の側溝の中心まで128.7mである。町屋の北端部の角地には、L字状に配置された6尺5寸単位の礎石建物が建つ。この建物はW・9°・Nの名ッ小路の方位と並行して建てられ、N・4°・Eの第2南北街路とは直交しない。また、この建物の中庭的な空間ではメダイ様金属製品や分銅等の青銅製品を製作した痕跡があり、府内の中でも特徴的な建物である。

その南側には第291図に図示したように、検出した柱穴を俯瞰すると、少なくとも17列の東西方向に密集して掘込まれた柱穴列を見ることができる。この柱穴列の評価については、東西方向に細長い掘立柱建物が建替えを繰り返した跡とも解釈できる。しかし、桜町の存続時間は約10年間で、天正14年(1586)に島津氏侵攻で焼失した後、一度復興し、10数年間継続したと想定される。その間に建替えが同じ場所でも繰り返されたとしても、柱穴数が多く、不規則である。さらに、掘立柱建物として、その配置を検討しても規則性を見出すことができなかった。このような状況から、この柱穴列は橋等の町屋を区画する施設と考える。

この17列確認できる区画の間隔は一定ではないが、方位はW・9°・Nで名ッ小路や御所小路と平行になる。この柱穴列を北からA～Q列とすると、確認できるその間隔は約3m～8mで、6尺5寸を1間とするならば、1間半～4間の間隔である。しかし、J列とK列の間隔は狭く、I列も2列の可能性もある。こうした間隔の極端に狭いものは、区割りの変更と考えると、15～16区画の短冊形に区切られる。柱穴間の建物は、掘立柱建物を見出すことが出来ず、一部に削平をまめがれた礎石が残ることから、礎石建物が考えられる。その他、木材を直接地面に置く、転ばせ根太なども考えられる。

建物の構造は間口が狭いため、妻入り構造の可能性もあるが、C列とD列、F列とG列、G列とH列の間の建物の第2南北街路に面した部分には、それぞれ3本単位の柱穴があり、軒を張出していたことがわかり、平入り構造と考える。

また、南端部の御所小路との角地には約15m(50尺)の大区画が認められる。北側の礎石建物の区画は不明であるが、同じ規模の可能性もある。

このように、第2南北街路に面した部分には、建物が建ち並び、その東側にあたる裏手には井戸が配置され、確認されただけでも12箇所があり、掘り直しを考えると、建物区画に比べると数が少なく共同井戸として使用していたものと想定される。

このような短冊形の地割りは市町である第1南北街路沿いの上市町で、16世紀中頃に区割りされた後が検出されている。そこには柱穴列もある。このことから、町割りのモデルとして、第1南北街路があり、その形態を大友氏館前の第2南北街路沿いに移したものと考える。

以上桜町の構造は、北端部の名ッ小路と南端部の御所小路の角地に大区画の屋敷地が配置されるが、その間は、約3m～8mの間隔で15～16区画に区切られる。建物構造は、掘立柱建物以外で、礎石建物は、転ばせ根太の建物などが考えられる。

(3)桜町の性格

発掘調査の結果、大友氏館の正門前にあたる桜町は、1570年代に新設された町屋である可能性が高いことが判った。そこで、この町屋の性格を考えると、北端部の角地の大区画の礎石建物は、中庭的な場所に青銅製品を鍛造したと考えられる遺構が検出され、周辺からは、分銅やメダイ様金属製品が出土している。特に、太鼓形分銅は、片面に大友家の定紋である三木紋が隔刻されており、大友家と

礎石建物

妻入り構造

平入り構造

太鼓形分銅

直接的な関係を見ることが出来る。また、この礎石建物周辺からは朝鮮産陶磁器・中国産陶磁器・黒楽茶碗などの輸入陶磁器や茶道具の優品が集中して出土している。このような状況から、この角地の礎石建物の所有者は、大友家と強い関係を持つ裕福な有力者と推定できる。

また、欄列などの痕跡と推測される柱穴列に短冊形に区画された部分には、伊勢参宮帳に見られる名字の無い人々が居住していたと思われる。その生業については、明確ではないが、表具師が使用する丸包丁が出土していることから、表具屋、町屋の後背地から増埒などの生産道具が出土していることから鍛冶職人、第2南北街路に張り出して3本1単位柱穴が3カ所確認されるのは、街路に面して庇を出し店舗を構えた姿と想定出来る。このように、短冊形区画の住民は、職人や商人であった可能性が高い。こうした人々が、祇園社を維持・管理するために「屋敷料」を納めていたものと考えられる。

そして、桜町南端部の御所小路との角地に認められる大区画の建物構造は不明であるが、御所小路の名称から推定されるように、大友氏館との関連の強さをうかがうことが出来る。また、この区画の内部や周辺からは、武家儀礼に使用されたと考えられる京都系土師器が破砕された状態で、大量に廃棄された跡が検出された。このような状況から、大友家直屬の武家が居住する区画と推定する。なお、御所小路の南側沿いを発掘調査した府内町跡第7次調査では、柱穴列によらない、溝による大区画が検出されており、武家地と考えられている。

武家地

このように、桜町は南端部と北端部の角地に大区画の敷地を配置し、そこには大友家と直接的な関係の強い人物を居住させる。この両区画の間は、短冊形の地割りを配置し、そこには職人・商人が居住する町屋を形成する。このように、桜町は、大友氏館の正門前の立地にもかかわらず、16世紀第4四半期以降は、大友家と直接結びつく武家や有力者、職人・町人が規則性をもって居住する計画的な町屋であったと考えられる。

4. 島津氏侵攻後の桜町とその周辺

桜町は町屋の完成から10数年後の天正14年(1586)12月、島津氏侵攻で焼失する。桜町の調査区全体で検出される焼土層は、出土遺物からこの時期のものと考えられる。しかし、島津氏は豊臣秀吉の九州進出を受け、天正15年(1587)2月には豊後から撤収する。桜町の復興はその後と推測されるが、その2年後の天正17年(1589)3月には、伊勢神宮に参詣を果たしている。

豊臣秀吉

発掘調査で、復興後の町屋の状況を確認することは出来なかったが、柱穴列を構成する幾つかは、復興後に属する可能性がある。また、焼失したと考えられる北の角地の礎石建物も、荒らされることなく存続している。そして、天正18年(1590)の伊勢参宮帳に記載されている大勢の様々な階層の人々の名前は、島津氏侵攻以前の桜町に居住する人々のイメージと一致する。

桜町は、その後、文禄2年(1593)に大友家が豊臣秀吉から除国された後も存在し、慶長7年(1602)に近世府内城下町に移転し、大友氏の「府内」は消滅する。その後、この地は、徐々に農地化すると思われる。そして、寛永11年(1634)に府内藩主となった日根野高明は、水田開発のため、大分川の上流から農業用水路である初瀬井路を開削し、それまでであった国井手をつなげ、大分川の下流域の水田化を試み、慶安3年(1650)に成功する。その結果、中世都市であった「府内」は水田・畑地と化してしまうと考える。しかし、第2南北街路や名々小路などの主要道路は、その後も規模を縮小しながら存続し、今日に至っており、名々小路は1mにも満たない道幅となって、今日も見ることが出来る。

日根野高明
初瀬井路

遺物觀察表

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類①)

棟号No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図版No.	
			口径	底径	器高				
第701	陶器	天目	中国	—	—	SF230			
第702	京都系土師器	皿	在地	—	(1.6)	SF230			
第703	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	2.1	SF230			
第704	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	(1.9)	SF230			
第705	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	2.2	SF230			
第706	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	(2.0)	SF230			
第707	陶器	漆鉢	備前	—	(4.3)	SF230			
第708	陶器	漆鉢	備前	—	(6.0)	SF230			
第709	陶器	漆鉢	備前	—	(5.5)	SF230	中世6期		
第710	陶器	漆鉢	備前	—	(5.9)	SF230	中世6期		
第711	陶器	鉢	備前	—	(4.2)	SF230			
第712	陶器	壺	備前	—	(2.6)	SF230			
第713	瓦質土器	鉢	在地	—	(6.1)	SF230			
第801	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	—	SD009	F群		
第802	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	—	SD009	E群		
第803	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	—	SD009	C群		
第804	陶器	碗	瀬戸美濃	—	(5.2)	SD009			
第805	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	—	SD009			
第806	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	—	SD009	細線薄弁文		
第807	褐釉陶器	壺	中国	—	—	SD009			
第808	京都系土師器	皿	在地	—	(2.5)	SD009			
第809	陶器	皿	備前	—	(5.5)	SD009			
第901	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	—	SD017	F群		
第902	青磁	皿	中国(龍泉窯)	—	—	SD017			
第903	白磁	皿	中国	—	—	SD017			
第904	陶器	天目	瀬戸美濃	—	—	SD017			
第905	陶器	天目	中国	—	—	SD017			
第906	京都系土師器	皿	在地	—	—	SD017			
第907	陶器	漆鉢	備前	—	—	SD017			
第908	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	SD017			
第909	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	SD017			
第1001	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	—	SD020			
第1002	青磁	棧花皿	中国(龍泉窯)	—	—	SD020			
第1003	陶器	皿	肥前(唐津)	—	—	SD020			
第1004	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	—	(3.1)	SD020			
第1005	瓦磁器	小杯	肥前	—	(2.4)	SD020	編文		
第1006	京都系土師器	皿	在地	—	—	SD020			
第1007	京都系土師器	皿	在地	—	—	SD020			
第1008	京都系土師器	皿	在地	—	—	SD020			
第1009	陶器	漆鉢	備前	—	—	SD020	中世4期		
第1010	陶器	漆鉢	備前	—	—	SD020	近世1期		
第1011	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	SD020			
第1101	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	—	SD019	E群		
第1102	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	(6.8)	SD019	E群		
第1103	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	—	SD019			
第1104	青花	盤	中国(漳州窯)	—	—	SD019			
第1105	京都系土師器	皿	在地	—	—	SD019	近世1期		
第1106	陶器	漆鉢	備前	—	—	SD019			
第1107	瓦質土器	火鉢	備前	—	—	SD019			
第1108	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	SD019			
第1501	五彩	碗	中国	—	—	SK008			
第1502	青花	碗	中国(漳州窯)	—	—	SK008			
第1503	雜釉陶器	碗	朝鮮王朝	(13.7)	—	SK008			
第1504	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	(6.6)	SK008	E群		
第1505	青花	皿	中国(景德鎮窯)	10.2	5.2	2.3	SK008	B1群	
第1506	青花	碗	中国(景德鎮窯)	(11.8)	(4.6)	6.4	SK008	F群	
第1507	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	(5.4)	—	SK008	F群	
第1508	青花	碗	中国(漳州窯)	—	(4.6)	—	SK008		
第1509	京都系土師器	皿	在地	—	—	SK008			
第1510	京都系土師器	皿	在地	—	—	SK008			
第1511	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	(2.3)	SK008			
第1512	陶器	漆鉢	備前	—	—	SK008	近世1期		
第1513	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	SK008			
第1901	京都系土師器	漆鉢	在地	—	—	SK013			
第2101	陶器	漆鉢	備前	—	—	SK016	近世1期		
第2301	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	—	SK018	C群		
第2302	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	—	SK018	C群		
第2303	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	—	SK018	C群		
第2304	青花	碗	中国(景德鎮窯)	(14.0)	—	—	SK018	E群	
第2305	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	5.0	—	SK018	E群	
第2306	青花	盤	中国(漳州窯)	(33.2)	—	—	SK018	F群	
第2307	青磁	碗	中国(龍泉窯)	(8.2)	(4.9)	2.9	SK018		
第2308	白磁	皿	中国	—	(6.1)	—	SK018		
第2309	黒釉陶器	瓶	中国南部	—	6.8	—	SK018		
第2310	陶器	壺	備前	—	—	SK018	中世6期		

遺物観察表 2 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類②)

採図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図取No.
			口径	底径	器高			
第23図11	陶器	甕	備前	-	-	SK018		
第23図12	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	SK018		
第23図13	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	SK018		
第23図14	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	SK018		
第23図15	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	SK018		
第23図16	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	SK018		
第23図17	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK018		
第23図18	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK018		
第23図19	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK018		
第23図20	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK018		
第23図21	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK018		
第23図22	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK018		
第23図23	京都系土師器	皿	在地	(8.4)	-	2.2	SK018	
第23図24	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	1.9	SK018	灯明皿
第23図25	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	-	2.2	SK018	
第23図26	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	-	2.3	SK018	
第23図27	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	-	2.6	SK018	
第23図28	京都系土師器	坏	在地	11.0	-	3.6	SK018	
第25図1	京都系土師器	皿	在地	12.4	-	2.3	SK022	
第25図2	陶器	播鉢	備前	26.0	-	7.2	SK022	近世1期 斜めスリ目
第27図	瓦質土器	火鉢	在地	34.3	-	22.9	SK024	
第29図	瓦質土器	香炉	在地	(12.2)	-	(3.7)	SK025	
第31図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK029	
第31図2	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	2.2	SK029	
第31図3	京都系土師器	皿	在地	(10.5)	-	2.3	SK029	
第33図1	陶器	鉢	備前	(18.7)	-	(5.6)	SK040	
第35図1	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	SK069	
第35図2	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SK069	
第35図3	陶器	壺	龜山?	-	-	-	SK069	
第35図4	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK069	
第35図5	瓦質土器	鍋	在地	-	-	-	SK069	
第35図6	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	-	(2.7)	SK069	
第37図1	白磁	皿	中国	-	(4.1)	-	SK078	E-4群 菊皿
第37図2	京都系土師器	皿	在地	(11.4)	-	(2.3)	SK078	
第37図3	瓦質土器	火鉢	在地	-	(30.0)	-	SK078	
第39図	陶器	壺	不明	-	-	-	SK101	
第41図1	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	-	2.3	SK109	
第41図2	陶器	瓶	備前	(4.8)	-	(8.7)	SK109	
第41図3	瓦質土器	播鉢	在地	(30.0)	-	(8.4)	SK109	防長系
第43図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK136	
第43図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK136	
第43図3	京都系土師器	皿	在地	(8.2)	-	(1.7)	SK136	
第43図4	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	-	(2.0)	SK136	
第43図5	土師質土器	皿	在地	-	-	-	SK136	
第43図6	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK136	
第45図	陶器	天目	瀬戸美濃	(13.1)	(6.4)	5.4	SK175	
第47図1	白磁	椀花皿	中国	-	-	-	SK200	
第47図2	青花	瓶	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK200	
第47図3	五彩	碗	中国	-	-	-	SK200	
第47図4	白磁	小杯	朝鮮土例	(7.1)	-	-	SK200	
第47図5	白磁	皿	中国	(13.5)	(7.0)	2.5	SK200	
第47図6	京都系土師器	皿	在地	(8.4)	-	(2.0)	SK200	灯明皿
第47図7	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	2.4	SK200	灯明皿
第47図8	京都系土師器	皿	在地	(10.6)	-	(2.1)	SK200	
第49図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK213	
第49図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK213	
第49図3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(11.4)	(6.6)	2.0	SK213	E群
第49図4	白磁	皿	中国	-	(6.8)	-	SK213	
第51図	陶器	播鉢	備前	-	-	-	SK214	近世1-6期 斜めスリ目
第53図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK243	B2群
第53図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243	
第53図3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243	
第53図4	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243	
第53図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243	
第53図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243	
第53図7	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243	
第53図8	京都系土師器	皿	在地	(8.2)	-	2.3	SK243	
第55図	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK244	
第65図1	青磁	碗	中国	-	-	-	SE007	
第65図2	黑輪陶器	壺	中国	-	-	-	SE007	
第65図3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007	
第65図4	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007	
第65図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007	
第65図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007	
第65図7	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007	

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類③)

種図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第6558 8	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE007		
第6558 9	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE007		
第6558 10	京都系土師器 甕	在地	(10.4)	-	(2.6)	SE007		
第6558 11	京都系土師器 甕	在地	(11.6)	-	(2.1)	SE007		
第6558 12	京都系土師器 甕	在地	(6.0)	-	2.0	SE007		
第6558 13	土師質土器 甕	在地	-	-	-	SE007		
第6558 14	土師質土器 小甕	在地	(5.4)	-	(1.9)	SE007		
第6558 15	土師質土器 耳甕	在地	-	-	-	SE007		
第6558 16	土師質土器 耳甕	在地	-	-	(2.2)	SE007		
第6558 18	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	SE007		
第6558 19	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	4.1	-	1.8	SE007		
第6558 20	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	(7.5)	-	-	SE007		
第6558 21	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	8.5	-	4.5	SE007		
第6558 22	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	8.6	-	4.8	SE007		
第6724 1	青花 甕	中国(景德鎮窯)	-	(7.8)	-	SE010	E群	
第6724 2	青花 碗	中国(涇州窯)	-	-	-	SE010		
第6724 3	陶器 甕	瀬戸美濃	10.9	5.6	2.2	SE010		
第6724 4	陶器 搥鉢	備前	-	-	-	SE010		
第6724 5	陶器 搥鉢	備前	-	-	-	SE010	近世1-6期 斜めスリ目	
第6724 6	陶器 鉢	備前	-	-	-	SE010		
第6724 7	陶器 鉢	備前	-	-	-	SE010		
第6724 8	陶器 鉢	備前	-	(10.0)	-	SE010		
第6724 9	陶器 鉢	備前	(16.4)	-	-	SE010		
第6724 10	瓦質土器 搥鉢	在地	-	-	-	SE010		
第6724 11	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第6724 12	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第6724 13	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第6724 14	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第6724 15	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第6724 16	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第6724 17	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第6824 1	瓦質土器 風炉	在地	(41.6)	(30.4)	9.4	SE010		
第6824 2	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE010		
第6824 3	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE010		
第6824 4	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE010		
第6824 5	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE010		
第6824 6	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE010	黒書	
第6824 7	京都系土師器 甕	在地	(12.2)	-	(2.2)	SE010		
第6824 8	京都系土師器 甕	在地	(13.2)	-	(2.4)	SE010		
第6824 9	京都系土師器 坏	在地	(10.2)	-	(3.3)	SE010		
第6824 10	京都系土師器 坏	在地	(10.0)	-	3.4	SE010		
第6824 11	京都系土師器 坏	在地	(10.6)	-	(3.8)	SE010		
第6824 12	京都系土師器 坏	在地	11.2	-	3.8	SE010		
第6824 13	土師質土器 甕	在地	(7.4)	(7.0)	(3.4)	SE010		
第6824 14	土師質土器 甕	在地	(8.4)	(6.3)	(1.2)	SE010		
第6824 15	土師質土器 甕	在地	-	(6.6)	-	SE010		
第6824 16	土師質土器 甕	在地	-	(7.0)	-	SE010		
第6824 17	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	SE010		
第6824 18	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	SE010		
第7224 1	青花 碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SE012	E群	
第7224 2	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE012		
第7224 3	京都系土師器 甕	在地	8.6	-	2.3	SE012		
第7224 4	京都系土師器 甕	在地	12.0	-	2.7	SE012		
第7224 5	京都系土師器 坏	在地	(10.4)	-	3.4	SE012		
第7224 6	陶器 搥鉢	備前	-	-	-	SE012		
第7224 7	陶器 搥鉢	備前	-	-	-	SE012		
第7224 8	陶器 鉢	備前	(15.0)	-	-	SE012		
第7224 9	土師質土器 坏	在地	(15.2)	(7.8)	5.5	SE012		
第7424 1	青花 甕	中国(涇州窯)	-	-	-	SE021		
第7424 2	白磁 甕	中国	-	-	-	SE021		
第7424 3	褐彩磁器 甕	中国	-	-	-	SE021		
第7424 4	褐釉陶器 壺	中国	-	-	-	SE021		
第7424 5	青花 甕	中国(景德鎮窯)	(10.9)	(4.4)	2.8	SE021	C群	
第7424 6	青花 碗	中国(景德鎮窯)	-	5.1	-	SE021	E群	
第7424 7	雜釉陶器 甕	朝鮮王朝	-	(5.2)	-	SE021		
第7424 8	青磁 甕	中国	-	-	-	SE021		
第7424 9	白磁 甕	中国	(10.7)	(4.8)	2.8	SE021		
第7424 10	白磁 甕	中国	-	(6.1)	-	SE021	口禿	
第7424 11	陶器 天目	瀬戸美濃	(11.6)	-	-	SE021		
第7424 12	陶器 碗	瀬戸美濃	(16.0)	-	-	SE021		
第7524 1	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE021		
第7524 2	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE021		
第7524 3	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE021		
第7524 4	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE021		
第7524 5	京都系土師器 甕	在地	-	-	-	SE021		

遺物観察表 4 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類④)

神田No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図説No.
			口径	底径	器高			
第75-86	京都系土師器	皿	在地	7.8	—	1.9	SE021	
第75-87	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	2.0	SE021	灯明皿
第75-88	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.0	SE021	
第75-89	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.8	SE021	
第75-810	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	2.0	SE021	
第75-811	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.2	SE021	
第75-812	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.5	SE021	
第75-813	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.1	SE021	
第75-814	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.2	SE021	
第75-815	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.1	SE021	
第75-816	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75-817	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75-818	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75-819	土師質土器	皿	在地	(8.2)	(7.0)	1.1	SE021	
第75-820	土師質土器	皿	在地	(8.2)	(5.6)	1.5	SE021	
第75-821	土師質土器	皿	在地	—	6.9	—	SE021	
第75-822	土師質土器	皿	在地	—	6.2	—	SE021	
第75-823	土師質土器	皿	在地	—	(8.4)	—	SE021	
第75-824	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75-825	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75-826	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	SE021	
第75-827	土師質土器	鍋	在地	—	—	—	SE021	
第75-828	土師質土器	鍋	在地	—	—	—	SE021	
第75-829	瓦質土器	甕?	東播磨系	—	—	—	SE021	
第75-830	瓦質土器	鍋	防長系	—	—	—	SE021	
第75-831	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75-832	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75-833	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75-834	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75-835	陶器	壺	備前	—	—	—	SE021	
第75-836	陶器	壺	備前	—	—	—	SE021	
第75-837	陶器	壺	備前	—	—	—	SE021	
第75-838	陶器	壺?	龜山?	—	—	—	SE021	
第75-839	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75-840	陶器	甕	備前	—	—	—	SE021	
第75-841	陶器	甕	備前	—	—	—	SE021	
第75-842	陶器	鉢	備前	21.4	—	(5.3)	SE021	
第79-8	須恵質土器	甕?	東播磨系	—	—	—	SE201	
第81-81	青花	皿	中国(景德鎮系)	—	—	—	SX041	
第81-82	青花	皿	中国(濠洲系)	—	—	—	SX041	
第81-83	青花	瓶	中国(景德鎮系)	—	—	—	SX041	
第81-84	青花	皿	中国(景德鎮系)	(12.2)	(6.8)	2.7	SX041	B1群
第81-85	青花	皿	中国(景德鎮系)	—	(5.2)	—	SX041	B2群
第81-86	青花	碗	中国(景德鎮系)	—	(5.7)	—	SX041	E群
第81-87	白磁	碗	中国	—	(4.5)	—	SX041	
第82-81	褐釉陶器	壺	中国	—	—	—	SX041	
第82-82	褐釉陶器	鉢	中国南部	19.5	9.6	11.2	SX041	B類
第82-83	陶器	舟徳利	朝鮮王朝	—	—	—	SX041	
第82-84	陶器	舟徳利	朝鮮王朝	—	13.2	—	SX041	
第83-81	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	—	2.1	SX041	灯明皿
第83-82	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.3	SX041	灯明皿
第83-83	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	—	2.1	SX041	
第83-84	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	—	2.3	SX041	
第83-85	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	1.9	SX041	
第83-86	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	2.0	SX041	灯明皿
第83-87	京都系土師器	皿	在地	(10.2)	—	2.1	SX041	
第83-88	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	(2.4)	SX041	
第83-89	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	2.3	SX041	
第83-810	京都系土師器	皿	在地	(10.7)	—	2.1	SX041	
第83-811	京都系土師器	皿	在地	(10.8)	—	2.3	SX041	
第83-812	京都系土師器	皿	在地	(10.9)	—	2.2	SX041	
第83-813	京都系土師器	皿	在地	(11.3)	—	2.2	SX041	
第83-814	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	—	(2.1)	SX041	
第83-815	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	—	2.6	SX041	
第83-816	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.5	SX041	灯明皿
第83-817	京都系土師器	皿	在地	(12.1)	—	2.1	SX041	
第83-818	京都系土師器	皿	在地	(12.1)	—	2.5	SX041	
第83-819	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	—	2.0	SX041	
第83-820	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	—	2.3	SX041	
第83-821	京都系土師器	皿	在地	(12.3)	—	2.6	SX041	
第83-822	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	1.6	SX041	
第83-823	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	2.1	SX041	
第83-824	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	2.2	SX041	
第83-825	京都系土師器	皿	在地	(12.5)	—	2.5	SX041	
第83-826	京都系土師器	皿	在地	(12.5)	—	2.7	SX041	

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑤)

種IDNo.	器種	生産地	法量(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			口径	器高			
第83R27	京都系土師器	皿	在地	(12.6) - 2.5	SX041		
第83R28	京都系土師器	皿	在地	(12.8) - (2.3)	SX041		
第83R29	京都系土師器	皿	在地	(12.8) - 2.8	SX041		
第83R30	京都系土師器	皿	在地	14.3 - 2.1	SX041		
第83R31	京都系土師器	皿	在地	(14.5) - 2.6	SX041		
第83R32	京都系土師器	皿	在地	(14.6) - 2.0	SX041		
第83R33	京都系土師器	皿	在地	(16.2) - (2.5)	SX041		
第83R34	京都系土師器	皿	在地	(16.6) - 2.4	SX041	灯明皿	
第83R35	京都系土師器	皿	在地	(16.6) - 2.6	SX041	灯明皿	
第83R36	京都系土師器	皿	在地	(18.3) - 3.1	SX041		
第83R37	京都系土師器	坏	在地	10.6 - 4.7	SX041		
第83R38	京都系土師器	坏	在地	(11.6) - (3.4)	SX041		
第83R39	京都系土師器	坏	在地	(11.6) - 4.1	SX041		
第83R40	京都系土師器	坏	在地	11.6 (6.0) 3.6	SX041		
第83R41	土師質土器	皿	在地	- 5.7 -	SX041		
第83R42	土師質土器	皿	在地?	- -	SX041		
第84R2	青花	皿	中国(景德鎮産)	- -	SX01	B群	
第84R3	青磁	碗	中国	- (6.3) -	SX01		
第84R4	白磁?	皿	中国	- (7.3) -	SX01		
第84R5	陶器	甕	常滑	- -	SX01		
第84R6	陶器	甕	常滑	- -	SX01		
第84R7	陶器	甕	備前	- -	SX01	中世6期	
第84R8	須恵質土器	押鉢	東播磨系	- -	SX01		
第84R9	陶器	押鉢	備前	- -	SX01		
第84R10	焼締陶器	鉢	不明(中国?)	- (8.4) -	SX01		
第84R11	瓦質土器	鉢?	在地	- -	SX01		
第84R12	瓦質土器	火鉢	在地	- -	SX01		
第84R13	瓦質土器	火鉢	在地	- -	SX01		
第84R14	須恵質土器	押鉢	東播磨系	- (15.6) -	SX01		
第85R1	京都系土師器	皿	在地	(9.4) - (2.0)	SX01		
第85R2	京都系土師器	皿	在地	(10.2) - 2.4	SX01		
第85R3	京都系土師器	皿	在地	(10.4) - 2.1	SX01		
第85R4	京都系土師器	皿	在地	(10.2) - 2.4	SX01		
第85R5	京都系土師器	皿	在地	(10.6) - (2.2)	SX01		
第85R6	京都系土師器	皿	在地	(10.6) - 2.2	SX01		
第85R7	京都系土師器	皿	在地	(10.8) - 2.1	SX01		
第85R8	京都系土師器	皿	在地	(10.8) - 2.2	SX01		
第85R9	京都系土師器	皿	在地	(11.0) - (2.0)	SX01		
第85R10	京都系土師器	皿	在地	(11.0) - 2.2	SX01		
第85R11	京都系土師器	皿	在地	(11.0) - (2.6)	SX01		
第85R12	京都系土師器	皿	在地	(11.2) - (1.9)	SX01		
第85R13	京都系土師器	皿	在地	(11.2) - 2.4	SX01		
第85R14	京都系土師器	皿	在地	(11.6) - 1.7	SX01		
第85R15	京都系土師器	皿	在地	(12.4) - (2.3)	SX01		
第85R16	京都系土師器	皿	在地	(12.4) - (2.5)	SX01	灯明皿	
第85R17	京都系土師器	皿	在地	(12.6) - 1.9	SX01		
第85R18	京都系土師器	皿	在地	(12.6) - 2.0	SX01		
第85R19	京都系土師器	皿	在地	(12.8) - 2.0	SX01		
第85R20	京都系土師器	皿	在地	(13.0) - (2.2)	SX01		
第85R21	京都系土師器	皿	在地	(13.0) - (2.2)	SX01		
第85R22	京都系土師器	皿	在地	(13.2) - 2.3	SX01		
第85R23	京都系土師器	皿	在地	(13.2) - 2.4	SX01		
第85R24	京都系土師器	皿	在地	(13.2) - (1.9)	SX01		
第85R25	京都系土師器	皿	在地	(13.2) - (2.5)	SX01		
第85R26	京都系土師器	皿	在地	(13.6) - 2.3	SX01		
第85R27	京都系土師器	皿	在地	(13.8) - (2.4)	SX01		
第85R28	京都系土師器	皿	在地	(14.1) - 2.1	SX01		
第85R29	京都系土師器	皿	在地	(14.2) - 2.0	SX01		
第85R30	京都系土師器	皿	在地	(15.4) - 2.0	SX01		
第85R31	京都系土師器	皿	在地	(14.4) - (2.2)	SX01		
第85R32	京都系土師器	皿	在地	(14.6) - 2.9	SX01		
第85R33	京都系土師器	皿	在地	(16.2) - 2.0	SX01		
第85R34	京都系土師器	皿	在地	(16.4) - (2.2)	SX01		
第86R1	土師質土器	皿	在地	(12.0) (8.2) 3.3	SX01		
第86R2	土師質土器	皿	在地	(12.2) (9.0) 3.7	SX01		
第86R3	土師質土器	皿	在地	(12.7) (9.1) (3.4)	SX01		
第86R4	土師質土器	皿	在地	(13.6) (10.4) 3.4	SX01		
第86R5	土師質土器	坏	在地	- 6.3 -	SX01		
第86R6	土師質土器	坏	在地	- 6.0 -	SX01		
第86R7	土師質土器	坏	在地	- (6.6) -	SX01		
第86R8	土師質土器	坏	在地	- (7.6) -	SX01		
第86R9	土師器	坏	在地	(12.1) - 3.5	SX01		
第86R10	土師器	坏	在地	(12.8) - (3.5)	SX01		
第86R11	土師器	坏	在地	(13.8) - (3.6)	SX01		
第86R12	土師器	坏	在地	(14.2) - -	SX01		

遺物観察表 6 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑤)

押図No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図例No.
			口径	底径	器高			
第867613	土師器	環	—	—	—	SX01		
第87781	京都系土師器	甕	在地	(14.8)	—	SX04		
第87782	京都系土師器	甕	在地	10.4	— 2.1	SX04		
第87783	京都系土師器	甕	在地	10.7	— 2.2	SX04		
第87784	京都系土師器	甕	在地	(11.6)	— 2.0	SX04		
第87785	京都系土師器	甕	在地	(16.2)	— 1.7	SX04		
第87786	土師質土器	蓋	在地	5.4	— 1.7	SX04		
第87787	土師質土器	蓋	在地	4.9	— 1.5	SX04		
第87788	土師質土器	耳皿	在地	—	—	SX04		
第87789	土師質土器	耳皿	在地	—	—	SX04		
第87790	土師質土器	甕	在地	(8.0)	(5.6) 1.6	SX04		
第87791	土師質土器	甕	在地	—	(7.2)	—	SX04	
第87792	土師質土器	甕	在地	—	(7.0)	—	SX04	
第87793	土師質土器	甕	在地	—	(7.2)	—	SX04	
第88801	京都系土師器	甕	在地	—	—	SX05		
第88802	京都系土師器	甕	在地	—	—	SX05		
第88803	京都系土師器	甕	在地	—	—	SX05		
第88804	京都系土師器	甕	在地	—	—	SX05		
第88805	京都系土師器	甕	在地	—	—	SX05		
第88806	京都系土師器	甕	在地	—	—	SX05		
第88807	京都系土師器	甕	在地	(10.8)	— 2.1	SX05		
第88808	京都系土師器	甕	在地	(10.8)	— 2.2	SX05		
第88809	京都系土師器	甕	在地	11.0	— 2.1	SX05		
第88810	京都系土師器	甕	在地	(11.8)	— 2.3	SX05		
第88811	京都系土師器	甕	在地	(13.4)	— 1.8	SX05		
第88901	京都系土師器	甕	在地	9.8	— 2.2	SX06		
第88902	京都系土師器	甕	在地	10.4	— 1.9	SX06		
第88903	京都系土師器	甕	在地	(10.4)	— 2.1	SX06		
第88904	京都系土師器	甕	在地	10.4	— 2.2	SX06		
第88905	京都系土師器	甕	在地	10.4	— 2.3	SX06		
第88906	京都系土師器	甕	在地	(10.4)	— 2.3	SX06		
第88907	京都系土師器	甕	在地	10.6	— 1.9	SX06		
第88908	京都系土師器	甕	在地	(10.6)	— 2.4	SX06		
第88909	京都系土師器	甕	在地	(10.6)	— 2.0	SX06		
第88910	京都系土師器	甕	在地	10.8	— 2.0	SX06		
第88911	京都系土師器	甕	在地	(10.8)	— 2.1	SX06		
第88912	京都系土師器	甕	在地	10.8	— 2.3	SX06		
第88913	京都系土師器	甕	在地	10.8	— 2.4	SX06		
第88914	京都系土師器	甕	在地	10.8	— 2.4	SX06		
第88915	京都系土師器	甕	在地	11.0	— 2.0	SX06		
第88916	京都系土師器	甕	在地	(11.2)	— 2.0	SX06		
第88917	京都系土師器	甕	在地	11.4	— 2.2	SX06		
第88918	京都系土師器	甕	在地	11.4	— 2.4	SX06		
第88919	京都系土師器	甕	在地	11.6	— 2.4	SX06		
第88920	京都系土師器	甕	在地	11.8	— 2.4	SX06		
第88921	京都系土師器	甕	在地	(12.0)	— 2.1	SX06		
第88922	京都系土師器	甕	在地	(12.4)	— 2.1	SX06		
第88923	京都系土師器	甕	在地	(12.8)	— 2.2	SX06		
第88924	京都系土師器	甕	在地	(12.6)	— 2.4	SX06		
第88925	京都系土師器	甕	在地	(12.6)	— 2.3	SX06		
第88926	京都系土師器	甕	在地	(12.6)	— 2.6	SX06		
第88927	京都系土師器	甕	在地	12.8	— 2.4	SX06		
第88928	京都系土師器	甕	在地	13.2	— 2.0	SX06		
第88929	京都系土師器	甕	在地	13.2	— 2.3	SX06		
第88930	京都系土師器	甕	在地	(13.4)	— 2.0	SX06		
第88931	京都系土師器	甕	在地	(13.4)	— 2.0	SX06		
第88932	京都系土師器	甕	在地	13.6	— 1.9	SX06		
第88933	京都系土師器	甕	在地	13.6	— 2.1	SX06		
第88934	京都系土師器	甕	在地	(13.6)	— 2.3	SX06		
第88935	京都系土師器	甕	在地	13.8	— 2.3	SX06		
第88936	京都系土師器	甕	在地	14.4	— 2.2	SX06		
第88937	京都系土師器	甕	在地	14.4	— 2.3	SX06		
第88938	京都系土師器	甕	在地	14.6	— 1.8	SX06		
第88939	京都系土師器	甕	在地	15.6	— 1.9	SX06		
第88940	京都系土師器	甕	在地	15.4	— 2.5	SX06		
第88941	京都系土師器	甕	在地	15.4	— 2.8	SX06		
第88942	京都系土師器	甕	在地	15.6	— 2.4	SX06		
第88943	京都系土師器	甕	在地	(16.2)	— 2.5	SX06		
第88944	京都系土師器	甕	在地	16.2	— 2.8	SX06		
第88945	土師質土器	蓋	在地	(4.6)	— 1.8	SX06		
第88946	土師質土器	蓋	在地	4.9	— 1.8	SX06		
第88947	土師質土器	蓋	在地	5.0	— 2.0	SX06		
第88948	土師質土器	蓋	在地	5.2	— 1.7	SX06		
第88949	土師質土器	蓋	在地	6.0	— 2.0	SX06		
第88950	土師質土器	耳皿	在地	—	—	SX06		
第88951	土師質土器	耳皿	在地	—	—	SX06		

第22次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑦)

探図No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図録No.	
			口径	底径	器高				
第89452	土師甗土器	环				SX006			
第10081	青花	皿	中国 (漳州窯)	-	-	包含層			
第10082	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	E 群		
第10083	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	E 群		
第10084	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	F 群		
第10085	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	F 群		
第10086	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	F 群		
第10087	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	F 群		
第10088	青花	皿	中国 (漳州窯)	-	-	包含層			
第10089	青花	皿	中国 (漳州窯)	-	-	包含層			
第100810	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	E 群		
第100811	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	E 群		
第100812	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	E 群		
第100813	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	E 群		
第100814	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(7.2)	-	包含層	E 群		
第100815	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(6.3)	-	包含層	E 群		
第100816	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(6.3)	-	包含層	E 群		
第100817	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(8.2)	-	包含層	E 群		
第100818	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(5.8)	-	包含層	E 群		
第100819	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(6.2)	-	包含層	E 群		
第100820	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(7.6)	-	包含層	E 群		
第100821	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(8.6)	-	包含層	E 群		
第100822	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(7.6)	-	包含層	E 群		
第100823	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(6.9)	-	包含層	E 群		
第100824	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(5.4)	-	包含層	C 群		
第100825	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(9.2)	(4.0)	2.0	包含層	C 群	
第10181	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(13.0)	(7.1)	3.2	包含層	E 群	
第10182	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(12.8)	(6.8)	3.2	包含層	E 群	
第10183	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10184	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10185	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10186	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10187	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10188	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10189	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第101810	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第101811	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第101812	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第101813	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第101814	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第101815	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第101816	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	C 群		
第101817	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	2.9	-	包含層	C 群		
第101818	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	C 群		
第101819	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	(4.6)	-	包含層	C 群		
第101820	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	E 群		
第101821	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	(4.1)	-	包含層	E 群		
第101822	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	(5.8)	-	包含層			
第101823	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	(4.9)	-	包含層			
第101824	青花	碗	中国 (漳州窯)	(4.0)	-	包含層			
第101825	青花	碗	中国 (漳州窯)	(4.9)	-	包含層			
第101826	青花	碗	中国 (漳州窯)	(5.0)	-	包含層			
第10281	褐彩磁器	皿	中国	-	-	包含層			
第10282	褐彩磁器	皿	中国	-	-	包含層			
第10283	褐彩磁器	皿	中国	(10.2)	-	包含層			
第10284	青花	小杯	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10285	青花	小杯	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10286	青花	小杯	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第10287	青花	小杯	中国 (景德鎮窯)	(3.0)	-	包含層			
第10288	青花	小杯	中国 (景德鎮窯)	2.9	-	包含層			
第10289	五彩	碗?	中国	-	-	包含層			
第102810	五彩	碗?	中国	-	-	包含層			
第102811	陶器	小皿	中国	-	-	包含層	翡翠軸		
第102812	青花	盤	中国 (漳州窯)	-	-	包含層			
第102813	青花	盤	中国 (漳州窯)	-	-	包含層			
第102814	青花	盤	中国 (漳州窯)	(13.3)	-	包含層			
第102815	青花	瓶	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第102816	青花	瓶	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層			
第102817	青花	瓶	中国 (景德鎮窯)	-	-	包含層	把手 「書卷図」		
第102818	青磁	輪花皿	中国 (龍泉窯)	-	-	包含層			
第102819	青磁	輪花皿	中国 (龍泉窯)	(10.2)	(4.1)	3.2	包含層		
第102820	青磁	香炉?	中国 (龍泉窯)	-	-	包含層			
第102821	青磁	碗?	中国 (龍泉窯)	-	-	包含層			
第102822	青磁	香炉	肥南	(5.5)	-	包含層			
第102823	白磁	碗	中国	-	-	包含層			

遺物観察表 8 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑧)

採回No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第103回2	白磁 碗	中国	—	(5.6)	—	包含層		
第103回3	白磁 碗	中国	—	(5.0)	—	包含層		
第103回4	白磁 碗	中国	—	(5.4)	—	包含層		
第103回5	白磁 碗	中国	—	(4.7)	—	包含層		
第103回6	白磁 碗	中国	—	—	—	包含層		
第103回7	白磁 碗	中国	—	—	3.0	包含層		
第103回8	白磁 碗	中国	(10.0)	—	2.7	包含層		
第103回9	白磁 碗	ベトナム	—	—	—	包含層		
第103回10	白磁 碗	朝鮮王朝	—	—	—	包含層		
第103回11	白磁 碗	朝鮮王朝	—	(4.6)	—	包含層		
第103回12	白磁 小杯	中国	(7.1)	(3.6)	3.3	包含層		
第103回13	白磁 小杯	中国	—	2.3	—	包含層		
第103回14	白磁 小杯	中国	—	(2.6)	—	包含層		
第103回15	白磁 小杯	中国	—	(3.0)	—	包含層		
第103回16	白磁 角杯	中国	—	(3.8)	—	包含層		
第103回17	褐釉陶器	志	—	—	—	包含層		
第103回18	褐釉陶器	志	—	—	—	包含層		
第103回19	華南三彩	不明	—	—	—	包含層		
第103回20	華南三彩	鶴形水注	—	—	—	包含層		
第103回21	華南三彩	水注?	—	—	—	包含層		
第103回22	華南三彩	水注	—	(5.2)	—	包含層		
第104回1	陶器	皿	瀬戸美濃	—	—	包含層	志野	
第104回2	陶器	皿	瀬戸美濃	—	—	包含層		
第104回3	陶器	小鉢	瀬戸美濃	—	—	包含層		
第104回4	陶器	折縁菊皿	瀬戸美濃	—	—	包含層		
第104回5	陶器	鉢	瀬戸美濃	—	—	包含層		
第104回6	陶器	小皿	瀬戸美濃	—	—	包含層		
第104回7	陶器	即皿	瀬戸美濃	—	—	包含層		
第104回8	陶器	皿	瀬戸美濃	—	(5.4)	包含層		
第104回9	陶器	丸皿	瀬戸美濃	(10.0)	(5.4)	2.4	包含層	
第104回10	陶器	皿	肥前(唐津)	—	—	包含層		
第104回11	陶器	皿	肥前(唐津)	—	—	包含層	絵唐津	
第104回12	陶器	皿	肥前(唐津)	—	—	包含層	絵唐津	
第104回13	陶器	皿	肥前(唐津)	—	—	包含層	絵唐津	
第104回14	陶器	小杯	肥前	(6.0)	—	包含層		
第104回15	陶器	搦鉢	肥前(唐津)	—	—	包含層		
第104回16	陶器	皿	肥前(唐津)	—	(4.5)	包含層		
第104回17	陶器	皿	肥前(唐津)	—	(4.3)	包含層	絵唐津	
第104回18	陶器	皿	肥前(唐津)	—	(4.6)	包含層	絵唐津	
第104回19	陶器	皿	肥前(唐津)	(11.5)	(13.8)	2.1	包含層	
第104回20	陶器	大皿	肥前	—	(8.7)	包含層		
第104回21	陶器	瓶	備前	4.8	—	包含層		
第104回22	陶器	瓶	備前	—	—	包含層		
第104回23	陶器	瓶	備前	—	—	包含層		
第105回1	陶器	小鉢	備前	—	—	包含層		
第105回2	陶器	鉢	備前	—	—	包含層		
第105回3	陶器	鉢	備前	—	—	5.1	包含層	
第105回4	陶器	鉢	備前	(12.8)	(8.0)	4.2	包含層	
第105回5	陶器	鉢	備前	(20.6)	—	5.1	包含層	
第105回6	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回7	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回8	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回9	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回10	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回11	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回12	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回13	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回14	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回15	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回16	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回17	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第105回18	陶器	搦鉢	備前	—	—	包含層	近世1期	
第106回1	陶器	甕	備前	—	—	包含層	近世1期	
第106回2	陶器	甕	備前	—	—	包含層		
第106回3	陶器	甕	備前	—	—	包含層		
第106回4	陶器	水屋甕	備前	(13.8)	—	包含層		
第106回5	陶器	水屋甕	備前	—	—	包含層		
第106回6	陶器	水屋甕	備前	—	—	包含層		
第106回7	陶器	水屋甕	備前	—	—	包含層		
第106回8	陶器	瓶or鉢	備前OR中国	(12.0)	—	包含層		
第106回9	陶器	甕	備前	—	—	包含層		
第106回10	陶器	甕	備前	—	—	包含層		
第106回11	陶器	甕	備前	—	—	包含層		
第106回12	陶器	不明	備前	—	—	包含層	把手	
第106回13	陶器	甕	備前or常滑	—	—	包含層		

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑨)

押収No.	器種	生産地	法量(単位cm)		遺構名	備考	図録No.
			口径	底径			
第106814	陶器	甍	備前	-	-	包含層	
第10781	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	包含層	
第10782	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	包含層	
第10783	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	包含層	
第10784	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	包含層	
第10785	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	包含層	
第10786	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	包含層	
第10787	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	包含層	
第10788	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	包含層	
第10789	陶器	天目	中国	-	-	包含層	
第107810	陶器	天目	中国	-	-	包含層	
第107811	陶器	天目	中国	-	-	包含層	
第107812	陶器	天目	中国	-	-	包含層	
第107813	陶器	天目	中国	-	(4.3)	包含層	
第107814	陶器	天目	中国	-	(4.2)	包含層	
第10881	京都系土師器	皿	在地	-	-	包含層	
第10882	京都系土師器	皿	在地	-	-	包含層	
第10883	京都系土師器	皿	在地	8.4	1.9	包含層	灯明皿
第10884	京都系土師器	皿	在地	(8.4)	2.0	包含層	
第10885	京都系土師器	皿	在地	(8.6)	1.6	包含層	灯明皿
第10886	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	(1.9)	包含層	
第10887	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	2.1	包含層	灯明皿
第10888	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	2.0	包含層	
第10889	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	1.8	包含層	
第108810	京都系土師器	皿	在地	9.1	2.2	包含層	灯明皿
第108811	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	1.8	包含層	
第108812	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	1.9	包含層	
第108813	京都系土師器	皿	在地	(9.2)	2.1	包含層	
第108814	京都系土師器	皿	在地	(10.5)	(2.3)	包含層	
第108815	京都系土師器	皿	在地	(11.2)	3.2	包含層	
第108816	京都系土師器	皿	在地	(11.9)	(2.4)	包含層	
第108817	京都系土師器	皿	在地	(11.9)	2.1	包含層	
第108818	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	2.3	包含層	
第108819	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	2.2	包含層	
第108820	京都系土師器	皿	在地	12.2	2.6	包含層	
第108821	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	2.5	包含層	
第108822	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	2.3	包含層	
第108823	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	(2.1)	包含層	
第108824	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	(2.6)	包含層	
第108825	京都系土師器	皿	在地	(13.0)	2.5	包含層	
第108826	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	2.1	包含層	
第108827	京都系土師器	皿	在地	(13.6)	2.5	包含層	
第108828	京都系土師器	皿	在地	(14.0)	(2.2)	包含層	
第108829	京都系土師器	皿	在地	(15.8)	2.1	包含層	
第108830	京都系土師器	皿	在地	(16.2)	(2.7)	包含層	
第108831	京都系土師器	环	在地	(10.0)	(3.5)	包含層	
第108832	京都系土師器	环	在地	(10.0)	3.0	包含層	
第108833	京都系土師器	环	在地	(11.2)	3.3	包含層	
第108834	土師質土器	蓋	在地	5.2	1.8	包含層	
第108835	土師質土器	蓋	在地	6.8	4.0	包含層	
第108836	土師質土器	燗台	在地	-	-	包含層	
第108837	土師質土器	燗台	在地	-	5.4	包含層	
第108838	土師質土器	耳皿	在地	-	-	包含層	
第108839	土師質土器	皿	在地	-	-	包含層	
第108840	土師質土器	皿	在地	-	-	包含層	
第108841	土師質土器	皿	在地	(7.8)	(1.9)	包含層	
第108842	土師質土器	皿	在地	(7.9)	2.0	包含層	
第108843	土師質土器	皿	在地	(9.4)	(1.9)	包含層	
第108844	土師質土器	皿	在地	(12.8)	3.0	包含層	
第108845	土師質土器	皿	在地	-	(8.0)	包含層	
第108846	土師質土器	皿	在地	-	(7.1)	包含層	
第108847	土師質土器	柄	在地	-	(8.0)	包含層	
第10981	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	包含層	
第10982	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	包含層	
第10983	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	包含層	
第10984	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	包含層	
第10985	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	包含層	
第10986	瓦質土器	不明	在地	-	-	包含層	
第10987	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	包含層	
第10988	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	包含層	
第10989	瓦質土器	鉢?	在地	-	-	包含層	
第109810	瓦質土器	鉢?	在地	-	-	包含層	
第109811	瓦質土器	鉢	在地	-	-	包含層	
第109812	瓦質土器	鉢	在地	-	-	包含層	
第109813	瓦質土器	鉢	在地	-	-	包含層	

遺物観察表10 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑧)

採回No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図録No.
			口径	底径	器高			
第1098014	瓦質土器	鉢	在地	-	-	包含層		
第1098015	瓦質土器	鉢	在地	(32.0)	-	包含層		
第1098016	瓦質土器	搗鉢	在地	-	-	包含層		
第1098017	瓦質土器	搗鉢	在地	-	-	包含層		
第1098018	瓦質土器	香炉	在地	(12.2)	-	包含層		
第1098019	瓦質土器	香炉	在地	-	6.8	包含層		
第110001	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第110002	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第110003	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第110004	京部系土師器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第110005	京部系土師器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第110006	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第110007	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第110008	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第110009	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第1100010	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第1100011	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第1100012	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	-	-	包含層		
第1100013	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	4.9	-	包含層		
第1100014	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	5.0	-	包含層		
第1100015	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	5.0	-	包含層		
第1100016	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	(5.6)	-	包含層		
第1100017	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	(6.2)	-	包含層		
第1100018	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	6.2	-	包含層		
第1100019	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	6.6	-	包含層		
第1100020	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	6.6	-	包含層		
第1100021	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	(6.9)	-	包含層		
第1100022	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	7.0	-	包含層		
第1100023	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	(6.8)	-	包含層		
第1100024	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	(7.1)	-	包含層		
第1100025	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	(7.2)	-	包含層		
第1100026	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	7.4	-	包含層		
第1100027	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	7.3	-	包含層		
第1100028	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	7.4	-	包含層		
第1100029	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	7.7	-	包含層		
第1100030	土師質土器	取瓶(厚埴)	在地	7.8	-	包含層		
第11201	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	SP043	L20区	
第11202	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	SP248	E群 K20区	
第11203	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	SP074	F群 K21区	
第11204	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	SP146		
第11205	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	SP251	K19区	
第11206	青花	不明	中国(景德鎮窯)	-	-	SP039	L20区	
第11207	白磁	小壺	中国	(2.7)	-	SP086	L20区	
第11208	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(10.9)	(6.6)	2.6	SP144	E群
第11209	白磁	皿	中国	(15.7)	(9.4)	3.1	SP144	E群
第112010	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(8.2)	-	SP145	
第112011	白磁	菊皿	中国	(7.0)	-	-	SP145	E群
第112012	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(19.9)	-	-	J20区北壁	F群
第112013	陶器	壺	常滑	-	-	-	SP152	L21区
第112014	焼締陶器	小壺	中国?	-	-	-	SP278	J19区
第112015	陶器	壺?	瀬戸美濃	-	-	-	SP141	K20区
第113016	京部系土師器	皿	在地	-	-	-	SP112	K20区
第113017	京部系土師器	皿	在地	-	-	-	SP241	K20区
第113018	京部系土師器	皿	在地	-	-	-	SP137	L21区
第113019	京部系土師器	皿	在地	-	-	-	SP240	K21区
第113020	京部系土師器	皿	在地	-	-	-	SP245	K20区
第113021	京部系土師器	皿	在地	-	-	-	SP271	K21区
第113022	京部系土師器	皿	在地	(11.4)	-	2.2	SP142	K20区
第113023	京部系土師器	皿	在地	(11.6)	-	2.2	SP141	K20区
第113024	京部系土師器	皿	在地	(11.8)	-	(2.6)	SP129	M20区
第113025	京部系土師器	皿	在地	(12.4)	-	1.8	SP284	K21区
第113026	京部系土師器	皿	在地	(12.4)	-	(2.0)	SP120	K20区
第113027	京部系土師器	皿	在地	(12.4)	-	2.6	SP110	K20区
第113028	京部系土師器	皿	在地	(12.0)	-	3.0	SP254	K20区
第113029	京部系土師器	皿	在地	(12.4)	-	(2.1)	SP154	K20区
第113030	陶器	備前	-	-	-	-	SP154	K20区
第113031	京部系土師器	皿	在地	-	-	-	SP146	
第113032	京部系土師器	皿	在地	-	-	-	SP146	
第113033	陶器	備前	-	-	-	-	SP146	
第113034	京部系土師器	皿	在地	(7.2)	-	(2.0)	SP199	K21区
第113035	京部系土師器	皿	在地	8.6	-	2.2	SP199	K21区
第113036	陶器	備前	-	-	-	-	SP199	近世1期 斜めスリ目 K21区
第113037	陶器	備前	-	-	-	-	SP247	K19区
第113038	陶器	備前	-	-	-	-	SP118	K20区
第113039	陶器	備前	-	-	-	-	SP290	K20区

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類①)

棟図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図取No.
			口径	底径	器高			
第1138340	陶器 壺	備前		(10.2)		SB04		
第1138341	陶器 壺	備前		(12.4)		SP121	K20<	
第1138342	陶器 壺	備前				SB07	へろ記号「大」	
第1138343	瓦質土器 揉鉢	在地				SP277	K19<	
第1138344	瓦質土器 鉢	在地				SP260	K21<	
第1138345	瓦質土器 火鉢	在地				SP113	K20<	
第1138346	瓦質土器 火鉢	在地				SP113	K20<	
第1138347	京都系土師器 皿	在地				SP258	K20<	
第1138348	瓦質土器 火鉢	在地				SP258	K20<	
第1143850	瓦質土器 火鉢	在地				SP181	K20<	
第1143851	京都系土師器 皿	在地	(10.8)		(2.2)	SP186	K・L21<	
第1143852	瓦質土器 揉鉢	在地	(34.2)	(16.0)	12.3	SP186	K・L21<	
第117831	弥生土器 甕	-	(13.2)			トレンチ		
第117832	弥生土器 壺	-	(14.8)			トレンチ	複合口径	

第22次調査区遺物観察表 (土製品)

棟図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図取No.
				長さ	幅	厚さ	孔径				
第98310	土罐	土師質	-	長さ 3.9	幅 1.8	厚さ 0.6	0.6	SD017			
第108212	土罐	土師質	-	長さ 3.6	幅 1.5	厚さ 0.3	0.3	SD020	上部欠損		
第1383	土玉	土	-	径 2.1	-	-	-	SD202	使途不明		
第1982	土罐	土師質	-	長さ 4.0	幅 0.9	厚さ 0.3	0.3	SK013	上部欠損		
第4789	土罐	土師質	-	長さ 3.6	幅 1.5	厚さ 0.6	0.6	SK200			
第65817	土罐	土師質	-	長さ 4.2	幅 2.1	厚さ 0.9	0.9	SE007			
第1108331	円盤状加工品	土師質	-	径 2.8	厚さ 0.4	-	-	包含層	京都系土師器の口縁部を加工		
第1108332	円盤状加工品	土師質	-	径 4.0	厚さ 0.8	-	-	包含層			
第1108333	円盤状加工品	土師質	-	径 6.6	厚さ 2.0	-	-	包含層			
第1108334	円盤状加工品	瓦質	-	径 2.2	厚さ 0.7	-	-	包含層			
第1108335	円盤状加工品	瓦質	-	径 3.0	厚さ 1.0	-	-	包含層			
第1108336	円盤状加工品	瓦質	-	径 3.8	厚さ 1.2	-	-	包含層			
第1108337	円盤状加工品	陶器	-	径 5.4	厚さ 1.4	-	-	包含層	備前系揉鉢を加工		
第1108338	犬形土製品	土師質	-	-	-	-	-	包含層	M20		
第115849	土鈴?	土師質	-	-	-	-	-	SP181			

第22次調査区遺物観察表 (石製品)

棟図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図取No.
				長さ	幅	厚さ	最大厚				
第88512	砥石	石	-	長さ 9.6	幅 4.4	厚さ 0.9	49.3	SD009			
第16832	砥石	石	-	長さ 8.6	幅 5.5	厚さ 4.2	327.8	SK008			
第41834	石罐	石	-	長さ 6.5	幅 3.3	厚さ 1.1	20.9	SK109			
第78310	石臼	石	フルギアナ	最大径 6.4	幅 6.2	最大厚 2.8	93.0	SE012			
第77832	石臼	安山岩	上臼	径 31.0	-	厚さ 7.7	220.0	SE021			
第1128327	硯	赤間石	-	長さ 4.0	最大幅 4.2	最大厚 0.9	14.9	包含層			
第1128328	砥石	-	-	長さ 5.5	最大幅 4.8	最大厚 1.4	42.5	包含層			
第1128329	石罐	-	-	最大径 8.5	最大幅 6.5	厚さ 1.4	143.6	包含層			
第1148353	輪	石	羽口	長さ 10.0	-	孔径 4.0	-	SP002			

遺物観察表12 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (金属製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	高さ	厚さ				
第7図14	銅製金具	銅	—	長さ 4.0	幅 1.4	—	—	3.0	SF230		
第7図15	銅製金具	銅	—	長さ 1.2	—	—	—	0.6	SF230		
第8図10	銅型分銅	銅	—	長さ 1.0	—	—	厚さ 0.4	0.8	SD009		
第8図11	太鼓型分銅	銅	—	長さ 0.9	—	—	厚さ 0.4	1.0	SD009		
第16図1	柄杓	青銅	柄	長さ 4.5	高さ 1.8	—	—	21.3	SK008		
第47図10	筒	銅	口縁部	最大長 3.8	—	—	—	—	SK200		
第68図19	銅製金具	銅	—	長さ 1.0	—	—	—	0.6	SE010		
第72図11	不明(インゴット)	銅?	—	最大幅 3.7	高さ 1.4	—	—	55.2	SE012		
第72図12	小柄	銅	—	長さ 15.8	—	—	—	44.3	SE012		
第91図	銅型分銅	銅	—	長さ 0.7	—	—	厚さ 0.3	0.4	SP160		
第111図1	銅板	銅	—	長さ 2.0	幅 1.6	—	厚さ 0.09	1.4	包含層		
第111図2	銅板	銅	—	長さ 2.2	幅 1.3	—	厚さ 0.06	1.7	包含層		
第111図3	銅板	銅	—	長さ 1.5	—	—	—	4.0	包含層		
第111図4	銅製金具	銅	—	径 1.6	高さ 1.1	—	—	1.9	包含層	ドーム状	
第111図5	銅製金具	銅	—	長さ 1.0	—	—	—	0.6	包含層	ピン?	
第111図6	釘	銅	—	長さ 1.6	—	—	—	0.9	包含層		
第111図7	銅製金具	銅	—	長さ 2.3	—	—	—	0.5	包含層		
第111図8	釘?	銅	—	長さ 4.5	—	—	—	3.2	包含層	ピン?	
第111図9	銅製金具	銅	—	長さ 4.1	—	—	—	1.5	包含層	ピン?	
第111図10	銅製金具	銅	—	長さ 3.9	—	—	—	4.6	包含層	留め金具?	
第111図11	銅製金具	銅	—	長さ 7.2	—	—	厚さ —	7.6	包含層	リ字状	
第111図12	銅製金具	銅	—	長さ 3.2	—	—	厚さ —	1.5	包含層	留め金具?	
第111図13	銅製金具	銅	—	—	—	—	—	2.0	包含層	引き手金具	
第111図14	銅製金具	銅	—	径 2.1	—	—	厚さ —	5.2	包含層	環状	
第111図15	銅製金具	銅	—	長さ 1.2	—	—	厚さ —	0.1	包含層		
第111図16	銅板	銅	—	長さ 2.0	—	—	厚さ —	0.5	包含層		
第111図17	銅板	銅	—	長さ —	—	—	厚さ —	0.4	包含層		
第111図18	銅製金具	銅	—	長さ —	幅 0.5	—	厚さ —	0.2	2.2	包含層	
第111図19	錠	銅	—	長さ 5.6	—	—	厚さ —	0.6	包含層		
第111図20	太鼓型分銅	銅	—	径 0.6	—	—	厚さ —	0.2	0.3	包含層	
第111図21	銅型分銅	銅	—	長さ 2.0	—	—	厚さ —	1.0	12.2	包含層	
第111図22	小柄	銅	—	長さ 8.5	幅 1.2	—	厚さ —	27.3	包含層	刻印有り	

第22次調査区遺物観察表 (瓦)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)				遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	高さ	厚さ			
第69図1	平瓦	—	—	長さ 20.5	幅 28.0	高さ 1.8	厚さ 1.8	SE010		
第69図2	平瓦	—	—	長さ 18.5	幅 27.5	高さ 1.8	厚さ 1.8	SE010		
第69図3	平瓦	—	—	長さ 20.0	幅 36.0	高さ 1.4	厚さ 1.4	SE010		
第69図4	平瓦	—	—	長さ 23.0	幅 29.0	高さ 1.9	厚さ 1.9	SE010		
第69図5	丸瓦	—	—	長さ 20.0	幅 36.0	高さ 1.6	厚さ 1.6	SE010		
第70図6	丸瓦	—	—	長さ 25.0	幅 41.0	高さ 1.6	厚さ 1.6	SE010		
第70図7	丸瓦	—	—	長さ 22.0	幅 34.0	高さ 2.5	厚さ 2.5	SE010		
第70図8	丸瓦	—	—	長さ 19.0	幅 33.5	高さ 1.8	厚さ 1.8	SE010		
第70図9	丸瓦	—	—	長さ 19.0	幅 31.0	高さ 1.8	厚さ 1.8	SE010		
第70図10	丸瓦	—	—	長さ 19.0	幅 34.0	高さ 1.8	厚さ 1.8	SE010		
第76図1	平瓦	—	—	長さ 17.0	幅 26.0	高さ 1.8	厚さ 1.8	SE021		
第76図2	平瓦	—	—	長さ 13.5	幅 33.0	高さ 1.8	厚さ 1.8	SE021		
第76図3	丸瓦	—	—	長さ 15.5	幅 30.0	高さ 1.9	厚さ 1.9	SE021		
第76図4	丸瓦	—	—	長さ 18.0	幅 31.5	高さ 1.1	厚さ 1.1	SE021		
第76図5	丸瓦	—	—	長さ 22.0	幅 28.0	高さ 1.8	厚さ 1.8	SE021		
第76図6	丸瓦	—	—	長さ 25.0	幅 37.0	高さ 1.6	厚さ 1.6	SE021		

第22次調査区遺物観察表 (その他)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	高さ	厚さ				
第33図2	紐?	布	—	長さ 8.7	幅 1.5	高さ 1.8	厚さ 8.8	SK040			
第33図3	紐?	布	—	長さ 6.6	幅 1.1	高さ 1.0	厚さ 2.9	SK040			
第77図1	ガラス	ガラス	—	長さ 2.3	幅 —	高さ 0.3	厚さ 1.3	SE021			
第89図353	油煙皿	—	—	長さ 3.2	幅 1.8	高さ 0.8	厚さ 3.0	SX006			
第112図233	小玉	ガラス	—	径 0.7	—	高さ 0.3	厚さ 0.2	包含層			
第112図24	ガラス	ガラス	—	長さ 1.7	—	高さ 0.3	厚さ 0.1	包含層			
第112図25	ガラス	ガラス	—	長さ 1.7	幅 0.3	高さ 0.6	厚さ 0.9	包含層			
第112図26	水晶	水晶	—	長さ 2.7	幅 1.2	高さ 1.3	厚さ 7.8	包含層			
第117図3	浮き?	不明	—	長さ 12.3	径 2.5	孔径 0.2	74.6	トレンチ			

第22次調査区遺物観察表 (銭貨)

押印No.	銭貨名	初铸造年	国・王朝名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	遺構名	備考	図版 No.
第7図17	不明	—	—	1.4	—	—	SF230		
第9図11	熙寧元寶	1068	北宋	1.5	24.0	篆書	SD017		
第47図11	元祐通寶	1086	北宋	1.8	24.0	篆書	SK200		
第68図20	不明	—	—	0.8	—	—	SE010	「洪」「武」判読	
第72図13	聖宋元寶	1101	北宋	2.9	23.6	行書	SE012		
第84図1	不明	—	—	3.0	24.7	—	SX01		
第115図1	不明	—	—	0.7	—	—	L20		
第115図2	不明	—	—	1.5	—	篆書	J20	「熙」「寧」判読	
第115図3	不明	—	—	1.0	—	行書	L20	「宋」「元」判読	
第115図4	不明	—	—	1.8	22.6	—	J20		
第115図5	不明	—	—	2.5	24.5	—	L20		
第115図6	至道元寶	995	北宋	1.9	23.9	真書	L21		
第115図7	景德元寶	1004	北宋	2.6	25.0	—	L21		
第115図8	祥符元寶	1009	北宋	1.4	—	—	M21		
第115図9	天聖元寶	1023	北宋	2.2	24.1	篆書	L21		
第115図10	皇宋通寶	1038	北宋	2.1	25.1	篆書	K21		
第115図11	皇宋通寶	1038	北宋	2.1	24.1	真書	L21		
第115図12	治平元寶	1064	北宋	3.5	24.5	篆書	K21		
第115図13	熙寧元寶	1068	北宋	1.8	23.4	真書	M21		
第115図14	熙寧元寶	1068	北宋	1.9	23.7	篆書	L20		
第115図15	熙寧元寶	1068	北宋	1.7	23.7	真書	K19		
第115図16	熙寧元寶	1068	北宋	2.1	24.3	篆書	L21		
第115図17	皇宋通寶	1038	北宋	1.9	24.4	篆書	L20		
第115図18	元豐通寶	1078	北宋	1.7	24.0	篆書	L20		
第115図19	元豐通寶	1078	北宋	2.1	24.9	篆書	L20		
第115図20	元豐通寶	1078	北宋	2.5	24.2	行書	L21		
第115図21	元祐通寶	1086	北宋	2.3	24.4	行書	M21		
第116図22	元祐通寶	1086	北宋	1.8	23.8	行書	L20		
第116図23	紹聖元寶	1094	北宋	2.0	23.8	篆書	L20		
第116図24	元符通寶	1098	北宋	1.5	24.1	篆書	L21		
第116図25	聖宋元寶	1101	北宋	2.3	23.8	行書	K21		
第116図26	洪武通寶	1368	明	1.3	21.9	—	L20		
第116図27	寛永通寶	—	江戸	1.0	—	—	L21	古寛永	
第116図28	嘉靖通寶	1527	明	1.9	24.6	—	SP150		
第116図29	祥符通寶	1009	北宋	2.8	23.9	—	SP219		

遺物観察表14 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(土器・陶磁器類①)

採得No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図録No.
			口径	底径	器高			
第12681	青花	碗	中国(漳州窯)	—	4.6	—	SD001-1-2	
第12682	青花	碗	中国(景德鎮窯)	13.2	—	—	SD001-1-2	
第12683	青花	碗	中国(景德鎮窯)	9.6	—	—	SD001-1-2	
第12684	白磁	皿	中国	11.2	6.0	2.6	SD001-1-2	
第12685	陶器	鉢	中国	7.8	—	—	SD001-1-2	複輪
第12686	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SD001-1-2	
第12687	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	1.8	SD001-1-2	
第12688	京都系土師器	坏	在地	11.4	—	3.1	SD001-1-2	
第12689	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.2	SD001-1-2	
第126810	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.4	SD001-1-2	
第126811	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.2	SD001-1-2	
第126812	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.2	SD001-1-2	
第126813	京都系土師器	皿	在地	15.4	—	2.7	SD001-1-2	
第12781	瓦質土器	羽釜	在地	15.0	—	—	SD001-3	
第12782	京都系土師器	皿	在地	11.3	—	2.2	SD001-3	
第12783	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.1	SD001-3	
第12784	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.1	SD001-3	
第12785	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.3	SD001-3	
第12786	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.5	SD001-3	
第12787	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	2.8	SD001-3	
第12981	青磁	小碗	中国(龍泉窯)	8.0	4.2	3.1	SD002	
第12982	白磁	皿	中国	17.2	9.2	3.1	SD002	
第12983	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	SD002	口縁内外面にスガが付着
第12984	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.0	SD002	口縁内外面にスガが付着
第12985	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SD002	取瓶として再利用されている
第12986	土師質土器	皿	在地	11.0	6.4	2.8	SD002	
第12987	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	SD002	
第12988	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	SD002	
第12989	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.1	SD002	
第129810	京都系土師器	坏	在地	11.8	—	—	SD002	
第129811	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SD002	取瓶として再利用されている
第129812	陶器	搦鉢	備前	—	15.0	—	SD002	
第129813	焼締陶器	鉢	中国南部	26.4	—	—	SD002	
第129814	瓦質土器	鉢	在地	35.0	—	—	SD002	
第129815	土師質土器	碗	在地	43.5	—	—	SD002	
第13281	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	—	SK003	
第13282	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SK003	
第13283	京都系土師器	皿	在地	13.5	—	—	SK003	
第13481	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	4.4	—	SK004	
第13482	青花	皿	中国	—	—	—	SK004	
第13483	青花	皿	中国	13.0	—	—	SK004	
第13484	白磁	小鉢	中国	—	3.4	—	SK004	
第13485	陶器	皿	備前	23.0	14.0	3.8	SK004	
第13486	土師質土器	香炉	在地	—	6.8	—	SK004	
第13487	京都系土師器	皿	在地	7.4	—	1.4	SK004	
第13488	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	1.9	SK004	
第13489	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	SK004	
第134810	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	—	SK004	
第134811	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	1.7	SK004	
第134812	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	2.0	SK004	
第134813	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.0	SK004	
第134814	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	SK004	
第134815	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	2.0	SK004	
第134816	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	—	SK004	
第134817	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.7	SK004	
第134818	土師質土器	取瓶	在地	10.6	—	—	SK004	
第134819	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	3.2	SK004	
第134820	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	3.5	SK004	
第13681	焼締陶器	甕	タイ(イナムノイ)	22.0	—	—	SK004	
第13682	陶器	水原瓿	備前	23.0	—	—	SK004	
第13881	青花	碗	中国(景德鎮窯)	11.6	—	—	SK005	
第13882	青花	碗	中国	17.8	—	—	SK005	
第13883	白磁	皿	中国	17.8	—	—	SK005	4と同一個体か
第13884	白磁	皿	中国	—	9.0	—	SK005	3と同一個体か
第13885	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.8	SK005	
第13886	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	—	SK005	
第13887	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	—	SK005	
第13888	焼締陶器	長射甕	ベトナム	13.0	14.0	33.0	SK005	
第13981	青花	碗	中国(漳州窯)	14.0	—	—	SK006	
第13982	白磁	皿	中国	11.0	6.0	2.4	SK006	
第13983	華南三彩	盤	中国	—	—	—	SK006	
第13984	華南三彩	盤	中国	—	—	—	SK006	
第13985	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	12.6	6.8	3.2	SK006	
第13986	京都系土師器	耳皿	在地	—	—	—	SK006	
第13987	京都系土師器	皿	在地	11.7	—	—	SK006	

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表 (土器・陶磁器類②)

押図No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図区No.
			口径	底径	器高			
第13948	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.6	SK006	
第13949	土師質土器	皿	在地	—	7.0	—	SK006	
第139410	土師質土器	内腹式器	在地	—	—	—	SK006	
第139411	磁器	菊花皿	中国南部	6.0	3.7	1.2	SK006	翡翠袖
第14142	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.2	SK007	
第14342	青花	皿	中国	13.4	—	—	SK008	
第14342	白磁	皿	中国	13.0	7.0	3.0	SK008	
第14343	陶器	大目	瀬戸美濃	11.6	4.0	6.1	SK008	
第14344	陶器	鉢	備前	23.0	—	—	SK008	
第14345	京都系土師器	皿	在地	9.8	—	—	SK008	
第14346	京都系土師器	皿	在地	10.7	—	2.1	SK008	
第14347	京都系土師器	皿	在地	10.7	—	2.0	SK008	
第14348	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.0	SK008	
第14349	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	—	SK008	
第143410	京都系土師器	皿	在地	17.4	—	—	SK008	
第14542	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	—	—	SK009	
第14542	京都系土師器	皿	在地	10.2	—	2.1	SK009	
第14742	青花	皿	中国	—	—	—	SK010	
第14742	燒締陶器	壺	不明	—	7.2	—	SK010	
第14743	陶器	壺	備前	19.0	—	—	SK010	
第14744	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SK010	
第14745	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	—	SK010	
第14746	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	—	SK010	
第14747	京都系土師器	皿	在地	11.0	1.8	—	SK010	
第14748	京都系土師器	皿	在地	8.4	1.7	—	SK010	
第14749	京都系土師器	皿	在地	12.8	2.4	—	SK010	
第147410	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SK010	
第147411	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SK010	
第147412	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	—	SK010	
第147413	土師質土器	碗?	在地	11.4	—	—	SK010	
第147414	京都系土師器	杯	在地	11.6	—	3.6	SK010	
第147415	土師質土器	杯	在地	—	6.0	—	SK010	
第147416	土師質土器	鉢	在地	36.0	—	—	SK010	
第147417	瓦質土器	鍋	在地	39.0	—	—	SK010	
第14941	白磁	碗	中国	—	4.3	—	SK011	
第14942	陶器	德利	備前	—	6.8	—	SK011	
第14943	白磁	皿	中国	16.7	3.7	9.0	SK011	
第14944	陶器	大目	瀬戸美濃	11.8	—	—	SK011	
第14945	陶器	大目	瀬戸美濃	12.0	—	—	SK011	
第14946	陶器	雙	備前	—	—	—	SK011	
第14947	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	SK011	
第14948	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SK011	
第14949	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SK011	
第149410	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.4	SK011	
第149411	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SK011	
第149412	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	2.1	SK011	
第149413	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SK011	
第149414	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SK011	
第15142	陶器	德利	備前	—	—	—	SK012	
第15341	白磁	香炉	中国	8.6	5.4	5.0	SK013	
第15342	燒締陶器	小壺	備前	4.8	—	—	SK013	
第15343	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	SK013	
第15344	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.3	SK013	
第15542	白磁	皿	中国	11.6	6.6	2.5	SK014	
第15641	陶器	小壺	備前	—	—	—	SK017	
第15642	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	—	SK017	
第15643	京都系土師器	皿	在地	14.6	—	2.2	SK017	
第15742	青花	皿	中国(漳州窯)	—	10.2	—	SK018	
第15841	瓦質土器	釜	在地	12.0	—	1.9	SK019	
第16042	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	—	SK022	
第16041	青花	皿	中国(景德鎮窯)	10.0	6.0	2.4	SK022	
第16042	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SK022	
第16043	瓦質土器	鍋	在地	30.0	—	—	SK022	
第16044	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	2.1	SK022	
第16141	白磁	皿	中国	—	7.0	—	SK023	
第16142	白磁	皿	中国	11.0	4.4	2.6	SK023	
第16143	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.2	SK023	
第16144	陶器	搦鉢	備前	29.0	—	—	SK023	
第16145	瓦質土器	鉢	在地	42.0	30.0	6.9	SK023	
第16441	瓦質土器	鉢	在地	—	28.0	—	SK024	
第16442	京都系土師器	皿	在地	8.2	—	2.0	SK024	
第16542	京都系土師器	皿	在地	16.0	—	2.3	SK025	
第16642	白磁	皿	中国	9.5	4.6	2.2	SK026	
第16842	瓦質土器	火鉢	在地	—	30.5	—	SK027	
第17041	青花	碗	中国(漳州窯)	—	6.0	—	SE028	

遺物観察表16 (第9次調査区)

第9次調査区II区遺物観察表(土器・陶磁器類③)

探出No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図録No.
			口径	底径	器高			
第17082	青磁	皿	中国(龍泉窯)	—	5.5	—	SE028	
第17083	白磁	皿	中国	6.4	—	—	SE028	
第17084	陶器	皿	不明	12.0	2.5	10.2	SE028	
第17085	陶器	壺	備前	10.0	—	—	SE028	
第17086	陶器	搥鉢	備前	22.5	—	—	SE028	
第17087	陶器	搥鉢	備前	—	11.0	—	SE028	
第17088	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.6	SE028	
第17089	京都系土師器	皿	在地	6.4	—	2.9	SE028	
第170810	京都系土師器	皿	在地	12.3	—	2.3	SE028	
第170811	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	—	SE028	
第170812	京都系土師器	皿	在地	13.5	—	—	SE028	
第170813	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SE028	
第170814	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SE028	
第170815	土師質土器	鍋	在地	37.0	—	—	SE028	
第17382	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	2.0	SE029	
第17481	青花	皿	在地	—	5.0	—	SX030	
第17482	青花	壺	中国(漳州窯)	—	8.6	—	SX030	17
第17483	青花	碗	中国	—	5.4	—	SX030	
第17484	磁器	碗	中国(景德鎮窯)	—	5.4	—	SX030	
第17485	陶器	不明	中国	—	—	—	SX030	17
第17486	陶器	大目	中国	—	4.0	—	SX030	
第17487	焼締陶器	蓋	瀬戸美濃	13.2	—	—	SX030	17
第17488	焼締陶器	注口	中国南部	—	—	—	SX030	
第17489	瓦質土器	焙烙	在地	—	—	—	SX030	柄の着装部
第174810	陶器	壺	備前	—	10.0	—	SX030	
第174811	陶器	皿	備前	23.5	15.0	3.8	SX030	
第174812	京都系土師器	皿	備前	12.0	—	1.9	SX030	取皿として再利用されている
第174813	土師質土器	取皿	在地	—	—	—	SX030	
第174814	京都系土師器	小皿	在地	5.5	—	1.7	SX030	
第174815	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SX030	
第174816	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SX030	
第174817	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.2	SX030	
第174818	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SX030	
第174819	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	SX030	
第174820	土師質土器	皿	在地	14.0	—	—	SX030	
第174821	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.1	SX030	
第174822	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.1	SX030	
第174823	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.1	SX030	
第174824	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SX030	
第174825	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.2	SX030	
第174826	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.3	SX030	
第174827	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.0	SX030	
第174828	京都系土師器	皿	在地	13.3	—	2.1	SX030	
第174829	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.3	SX030	
第174830	京都系土師器	皿	在地	16.4	—	—	SX030	
第17581	陶器	搥鉢	備前	—	15.0	—	SX030	
第17582	陶器	搥鉢	備前	—	15.0	—	SX030	
第17583	土師質土器	深鍋	在地	23.0	—	—	SX030	
第17584	土師質土器	深鍋	在地	26.0	—	—	SX030	
第17585	土師質土器	鍋	在地	41.0	—	—	SX030	
第17586	土師質土器	鍋	在地	42.0	—	—	SX030	
第17681	陶器	壺	備前	76.0	—	—	SX030	
第17682	陶器	壺	備前	80.0	—	—	SX030	
第17683	陶器	壺	備前	—	—	—	SX030	
第17881	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	5.8	—	SX031	
第17882	土師質土器	鉢	在地	—	6.0	—	SX031	
第17981	青花	碗	中国(漳州窯)	—	5.0	—	SX032	
第17982	白磁	皿	中国	11.3	—	—	SX032	
第17983	瓦質土器	風炉	在地	—	—	—	SX032	脚部
第17984	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SX032	
第17985	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	1.9	SX032	
第17986	京都系土師器	皿	在地	8.2	—	1.8	SX032	
第17987	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	1.8	SX032	
第17988	土師質土器	坏	在地	—	9.2	—	SX032	
第17989	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SX032	
第179810	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.4	SX032	
第179811	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.1	SX032	
第179812	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	—	SX032	
第18081	青花	皿	在地	8.4	—	—	SX032	
第18082	瓦質土器	壺	不明	—	16.0	—	SX032	
第18083	土製品	燗台	在地	—	7.0	—	SX032	
第18084	瓦質土器	鍋?	在地	—	—	—	SX032	
第18085	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.0	SX032	
第18086	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	1.9	SX032	
第18087	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.2	SX032	

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(土器・陶磁器類④)

押収No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図録No.
			口径	底径	器高			
第182回1	京部系土師器	小皿	在地	4.6	—	1.6	SX033	
第182回2	京部系土師器	小皿	在地	5.2	—	1.8	SX033	
第182回3	京部系土師器	小皿	在地	4.6	—	1.9	SX033	
第182回4	京部系土師器	小皿	在地	1.8	—	1.7	SX033	
第182回5	土師質土器	皿	在地	11.5	8.8	3.6	SX033	
第182回6	土師質土器	皿	在地	13.7	9.2	3.1	SX033	
第182回7	京部系土師器	皿	在地	10.2	—	2.0	SX033	
第182回8	京部系土師器	皿	在地	10.5	—	2.3	SX033	
第182回9	京部系土師器	皿	在地	10.6	—	1.9	SX033	
第182回10	京部系土師器	皿	在地	11.9	—	2.6	SX033	
第182回11	京部系土師器	皿	在地	11.9	—	2.5	SX033	
第182回12	京部系土師器	皿	在地	13.2	—	2.6	SX033	
第182回13	京部系土師器	皿	在地	13.2	—	2.5	SX033	
第182回14	京部系土師器	皿	在地	12.3	—	2.3	SX033	
第182回15	京部系土師器	皿	在地	12.3	—	—	SX033	
第182回16	京部系土師器	皿	在地	13.0	—	2.4	SX033	
第182回17	京部系土師器	皿	在地	15.8	—	—	SX033	
第182回18	京部系土師器	皿	在地	17.0	—	—	SX033	
第182回19	京部系土師器	皿	在地	19.8	—	2.9	SX033	
第185回1	土師質土器	皿	在地	—	10.4	—	SP058	
第185回2	京部系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SP035	
第185回3	京部系土師器	皿	在地	11.0	—	2.2	SP049	
第185回4	京部系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SP055	
第185回5	京部系土師器	皿	在地	12.6	—	2.7	SP047	
第185回6	京部系土師器	皿	在地	13.4	—	—	SP048	
第185回7	京部系土師器	皿	在地	13.4	—	—	SP044	
第185回8	京部系土師器	皿	在地	13.5	—	2.4	SP055	
第185回9	京部系土師器	皿	在地	14.0	—	2.1	SP035	
第185回10	京部系土師器	皿	在地	13.8	—	2.3	SP040	
第185回11	京部系土師器	皿	在地	16.0	—	2.1	SP049	
第186回2	瓦質土器	火鉢	在地	31.4	—	—	SP036	
第186回3	瓦質土器	火鉢	在地	44.0	—	—	SP056	
第186回4	陶器	甕	備前	—	44.6	—	SP056	
第187回1	青花	皿	中国(漳州窯)	—	4.0	—	47層	
第187回2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	6.4	—	47層	
第187回3	青花	皿	中国(漳州窯)	16.0	9.5	2.8	47層	
第187回4	陶器	皿	瀬戸美濃	—	8.6	—	47層	
第187回5	京部系土師器	皿	在地	10.8	—	2.2	47層	
第187回6	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	47層	
第188回1	青花	碗	中国	—	4.4	—	45層	
第188回2	青花	皿	中国(漳州窯)	24.0	—	—	45層	
第188回3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	12.2	—	—	45層	
第188回4	青花	皿	中国(漳州窯)	12.2	—	—	45層	
第188回5	青花	碗?	中国(漳州窯)	—	7.8	—	45層	
第188回6	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	4.4	—	45層	
第188回7	陶器	小壺	備前	—	5.6	—	45層	
第188回8	陶器	瓶	備前	5.6	—	—	45層	
第188回9	陶器	小壺	備前	5.0	—	—	45層	
第188回10	陶器	小壺	備前	—	—	—	45層	
第188回11	土師質土器	環	在地	11.0	7.8	3.0	45層	
第188回12	京部系土師器	皿	在地	8.8	—	2.0	45層	
第188回13	京部系土師器	皿	在地	8.8	—	2.1	45層	
第188回14	京部系土師器	皿	在地	10.6	—	2.2	45層	
第188回15	京部系土師器	皿	在地	11.5	—	2.3	45層	
第188回16	京部系土師器	皿	在地	12.5	—	2.8	45層	
第188回17	陶器	掃鉢	備前	30.0	—	—	45層	
第189回1	白磁	皿	中国	13.6	—	—	9・10・14・42層	
第189回2	白磁	皿	中国	—	9.7	—	9・10・14・42層	
第189回3	白磁	皿	中国	—	2.4	—	9・10・14・42層	
第189回4	陶器	瓶	備前	5.0	—	—	9・10・14・42層	
第189回5	陶器	天目	瀬戸美濃	12.6	—	—	9・10・14・42層	
第189回6	陶器	小壺	備前	—	6.4	—	9・10・14・42層	
第189回7	陶器	皿	備前	26.0	—	—	9・10・14・42層	
第189回8	陶器	掃鉢	備前	31.0	—	—	9・10・14・42層	
第190回	陶器	甕	備前	61.2	—	—	9・10・14・42層	
第191回2	白磁	小瓶	中国	3.6	—	—	7層	
第191回3	白磁	皿	中国	—	2.0	—	7層	
第191回4	染付	壺	肥前	—	—	—	7層	18世紀
第191回5	陶器	不明	中国	—	—	—	7層	瀬南三彩
第191回6	磁器	不明	中国	—	—	—	7層	五彩
第191回8	染付	杯	肥前	7.0	—	—	7層	17世紀後半
第191回9	青花	皿	中国(漳州窯)	—	—	—	7層	
第191回10	陶器	不明	不明	10.4	—	—	7層	
第191回11	青花	碗	中国?	8.4	—	—	7層	
第191回12	磁器	皿	不明	—	10.0	—	7層	

遺物観察表18 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(土器・陶磁器類⑤)

標図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図録No.
			口径	底径	器高			
第191813	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	9.0	—	7層	
第191814	青花	皿	中国(景德鎮窯)	14.6	—	—	7層	
第191815	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	8.0	—	7層	
第191816	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	8.0	—	7層	
第191817	白磁	皿	中国	12.0	7.0	3.0	7層	
第191818	白磁	皿	中国	—	6.4	—	7層	
第191819	陶器	皿	唐津	14.0	—	—	7層	
第191820	磁器	皿	肥前	14.0	—	—	7層	
第191821	白磁	皿	中国	16.0	8.5	3.4	7層	
第191822	陶器	皿	瀬戸美濃	10.0	5.4	2.0	7層	
第191823	陶器	皿	唐津	—	4.6	—	7層	
第191824	陶器	皿	瀬戸美濃	—	6.0	—	7層	
第191825	陶器	天目	瀬戸美濃	12.4	—	—	7層	
第191826	陶器	天目	瀬戸美濃	—	—	—	7層	
第191827	陶器	碗	肥前	—	5.0	—	7層	
第191828	陶器	碗	不明	—	6.0	—	7層	
第191829	青磁	皿	中国	—	4.5	—	7層	
第191830	陶器	碗	朝鮮王朝?	—	6.5	—	7層	
第191831	青磁	皿	中国	—	7.0	—	7層	
第191832	陶器	皿	唐津	—	3.6	—	7層	
第191833	陶器	碗	肥前	—	5.2	—	7層	
第191834	青磁	碗	中国	—	4.6	—	7層	
第191835	青花	皿	中国(漳州窯)	38.6	—	—	7層	
第19281	陶器	小壺	備前	—	4.4	—	7層	
第19282	陶器	小壺	備前	—	—	—	7層	
第19283	陶器	鉢	備前	17.0	—	—	7層	
第19284	陶器	甕	備前?	—	—	—	7層	
第19285	陶器	壺	備前	10.0	—	—	7層	
第19286	陶器	鉢	備前	27.0	—	—	7層	
第19287	陶器	蓋	不明	18.8	14.6	1.8	7層	
第19288	陶器	瓶	備前	5.4	—	—	7層	
第19289	焼締陶器	德利	朝鮮王朝	—	—	—	7層	
第192810	陶器	掃鉢	備前	34.5	—	—	7層	
第192811	陶器	壺	備前	8.0	—	—	7層	
第192812	陶器	掃鉢	備前	—	16.0	—	7層	
第192813	京都系土師器	小皿	在地	3.4	—	1.8	7層	
第192814	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	7層	
第192815	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	2.1	7層	
第192816	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	2.2	7層	
第192817	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.4	7層	
第192818	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.3	7層	
第192819	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	2.2	7層	
第192820	瓦質土器	火鉢	在地	38.0	—	—	7層	
第19381	磁器	猪口	肥前	—	2.6	—	Ⅱ区	
第19382	磁器	猪口	肥前	—	3.0	—	Ⅱ区	
第19383	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	7.4	2.9	Ⅱ区	18
第19384	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	7.4	—	Ⅱ区	
第19385	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	6.0	—	Ⅱ区	
第19386	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	4.4	—	Ⅱ区	
第19387	青花	皿	中国(漳州窯)	—	4.0	—	Ⅱ区	
第19388	青花	皿	中国(漳州窯)	14.0	—	—	Ⅱ区	
第19389	青花	蓋	中国(漳州窯)	—	—	—	Ⅱ区	
第193810	陶器	瓶子	瀬戸	—	—	—	Ⅱ区	
第193811	白磁	碗	中国(景德鎮窯)	—	4.0	—	Ⅱ区	古瀬戸 13~14世紀
第193812	陶器	皿	瀬戸美濃	—	6.0	—	Ⅱ区	
第193813	青花	皿	中国(漳州窯)	9.8	5.0	2.7	Ⅱ区	
第193814	陶器	皿	瀬戸美濃	12.0	—	—	Ⅱ区	
第193815	陶器	皿	瀬戸美濃	9.8	5.4	1.8	Ⅱ区	
第193816	白磁	瓶	中国	6.0	—	—	Ⅱ区	
第193817	陶器	碗	不明	13.4	6.2	4.4	Ⅱ区	
第193818	陶器	瓶	朝鮮王朝	—	—	—	Ⅱ区	
第193819	陶器	天目	瀬戸美濃	13.0	—	—	Ⅱ区	18
第193820	陶器	天目	瀬戸美濃	—	4.5	—	Ⅱ区	
第193821	青花	皿	中国(漳州窯)	23.5	—	—	Ⅱ区	
第19481	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.1	Ⅱ区	
第19482	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.0	Ⅱ区	
第19483	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.1	Ⅱ区	スズ付着
第19484	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.1	Ⅱ区	
第19485	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.1	Ⅱ区	
第19486	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	1.8	Ⅱ区	取瓶として再利用
第19487	陶器	德利	備前	—	4.2	—	Ⅱ区	
第19488	焼締陶器	德利?	朝鮮王朝?	—	—	—	Ⅱ区	
第19489	陶器	瓶	備前	5.0	—	—	Ⅱ区	
第194811	瓦質土器	釜	在地	—	—	—	Ⅱ区	
第194812	瓦質土器	鉢	在地	—	20.0	—	Ⅱ区	

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(土器・陶磁器類⑥)

押図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第194図13	陶器	漆鉢	備前	29.5	—	—	Ⅱ区	
第194図14	陶器	漆鉢	備前	30.5	—	—	Ⅱ区	
第194図15	瓦質土器	鉢	在地	32.0	—	—	Ⅱ区	
第194図16	瓦質土器	火鉢	在地	41.0	—	—	Ⅱ区	
第194図17	瓦質土器	火鉢	在地	41.6	—	—	Ⅱ区	
第194図18	瓦質土器	鍋	在地	44.0	—	—	Ⅱ区	

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(土製品)

押図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	穴径	0.8				
第139図10	円盤状土製品	土師質	—					SK006			
第187図7	土罐	土製	全体	長さ	4.8	幅	1.8	穴径	0.8	47層	
第191図1	人形	磁器	破片							7層	
第194図10	仏像	土製	破片							Ⅱ区	

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(石製品)

押図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	高さ	穴径				
第132図6	砥石	結晶片岩	破片	長さ	1.6	幅	5.6	長さ	18.5	217.0	SK003
第135図	石臼	安山岩	全体	径	31.0	高さ	11.5				SK004
第147図19	砥石	結晶片岩	破片	長さ	2.6	幅	6.6	長さ	19.5	224.0	SK010
第149図15	石臼	安山岩	破片	長さ	4.0	幅	7.5	長さ	16.6	665.0	SK011
第149図16	砥石	結晶片岩	破片	長さ	4.0	幅	7.5	長さ	16.6	665.0	SK011
第171図	無銘塔(中台)	凝灰岩	全体	高さ	18.8	幅	46.0				SE028
第191図7	甕	堆積岩	破片							7層	

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(金属製品)

押図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				縦	横	厚さ	穴径				
第177図	桶型滓	鉄	破片	縦	13.2	横	14.2	厚さ	6.2	1450	SX030
第187図8	不明	金属製	破片	長さ	6.5	幅	1.4	穴径	0.5		47層
第188図18	不明	銅製	全体	縦	1.5	横	1.5	長さ	2.2		45層
第192図21	不明	銅	全体	縦	1.5	横	1.45	長さ	2.2	16.0	7層

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(瓦)

押図No.	器種	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.
			長さ	幅	厚さ	穴径			
第132図4	磚	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	3.1	SK003
第132図5	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	2.6	SK003
第136図3	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	2.6	SK004
第147図18	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	1.8	SK010
第186図1	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	2.2	SP042

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(銭貨)

押図No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(mm)	書体	遺構名	備考	図版No.
第128図	熙寧元寶	1068	北宋	2.5	2.4	篆書	SD001-1+2		
第130図	皇宋通寶	1038	北宋	2.8	2.5	真書	SD002		
第162図	元豐通寶	1078	北宋	1.9	2.4	行書	SK023		
第172図1	原祐元寶	1034	北宋	2.5	2.5	真書	SE028		
第172図2	元豐通寶	1078	北宋	2.4	2.4	行書	SE028		
第172図3	皇宋通寶	1038	北宋	2.4	2.4	篆書	SE028		
第183図	皇宋通寶?	1038	北宋	2.1	2.4	真書	SX033		
第195図1	原祐元寶	1004	北宋	2.0	2.4	真書	14~67層		
第195図2	元豐通寶	1078	北宋	2.7	2.4	行書	7層		
第195図3	咸平元寶	998	北宋	2.0	2.4	真書	7層		
第195図4	治平元寶	1064	北宋	2.6	2.4	篆書	7層		
第195図5	至和元寶	1054	北宋	1.4	2.4	真書	7層		
第195図6	元祐通寶	1086	北宋	1.4	2.4	篆書	Ⅱ区		
第195図7	皇宋通寶	1038	北宋	1.9	2.4	篆書	Ⅱ区		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類①)

採回No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺物名	備考	図録No.
			口径	底径	器高			
第2024	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	SD001		
第2034-1	白磁	皿	中国	11.0	5.0	3.1	SD002	
第2034-2	陶器	搥鉢	備前	31.0	—	—	SD002	
第2054-1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	6.4	—	SD004	
第2054-2	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	SD004	
第2054-3	陶器	搥鉢	備前	24.0	—	—	SD004	
第2064-1	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SD005	
第2064-2	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SD005	
第2064-3	瓦質土器	鉢	在地	25.0	—	—	SD005	
第2074-1	京都系土師器	杯	在地	12.0	—	—	SD006	
第2084-1	土師質土器	小皿	在地	7.6	6.5	1.2	SK009	
第2084-2	土師質土器	小皿	在地	8.2	7.2	1.1	SK009	
第2084-3	土師質土器	小皿	在地	9.0	7.6	1.3	SK009	
第2094	陶器	壺	備前	—	10.0	—	SK010	
第2114-1	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.3	SK011	
第2114-2	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.2	SK011	
第2114-3	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.2	SK011	
第2114-4	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SK011	
第2114-5	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.2	SK011	
第2114-6	京都系土師器	皿	在地	10.9	—	2.2	SK011	
第2114-7	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.2	SK011	
第2114-8	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.5	SK011	
第2114-9	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.1	SK011	
第2114-10	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.5	SK011	
第2114-11	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.3	SK011	
第2114-12	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	2.3	SK011	
第2134-1	京都系土師器	皿	在地	11.5	—	2.3	SK012	
第2134-2	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	2.0	SK012	
第2134-3	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.3	SK012	
第2134-4	京都系土師器	皿	在地	16.0	—	2.0	SK012	
第2134-5	土師質土器	杯	在地	—	10.0	—	SK012	
第2154-1	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	2.6	SK013	
第2154-2	陶器	壺	備前	—	11.8	—	SK013	
第2164-1	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.6	SK014	
第2164-2	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.5	SK014	
第2164-3	京都系土師器	皿	在地	13.5	—	—	SK014	
第2164-4	陶器	徳利	備前	—	11.6	—	SK014	
第2164-5	陶器	搥鉢	備前	30.0	—	—	SK014	
第2164-6	陶器	壺	中国	—	—	—	SK014	
第2184-1	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	—	SK016	
第2184-2	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SK016	
第2194-1	白磁	皿	中国	16.0	9.4	3.4	SK017	
第2194-2	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.5	SK017	
第2194-3	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SK017	
第2194-4	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	SK017	
第2194-5	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.1	SK017	
第2194-6	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	—	SK017	
第2194-7	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	—	SK017	
第2204	瓦質土器	火鉢	在地	44.0	—	—	SK017	
第2224-1	瓦質土器	蓋	在地	11.0	—	4.0	SK019	
第2224-2	京都系土師器	杯	在地	10.0	5.0	3.7	SK019	
第2234-1	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SK020	
第2234-2	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.1	SK020	
第2234-3	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	2.1	SK020	
第2254-1	磁器	皿	中国	—	—	—	SK021	
第2254-2	白磁	皿	中国	—	3.6	—	SK021	
第2254-3	陶器	龍戸美濃	10.0	5.0	2.3	SK021		
第2254-4	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SK021	
第2254-5	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.3	SK021	
第2254-6	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.5	SK021	
第2254-7	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.5	SK021	
第2254-8	陶器	壺	中国?	16.0	—	—	SK021	
第2254-9	陶器	壺	備前	8.8	20.0	12.0	SK021	
第2254-10	陶器	搥鉢	備前	23.0	11.0	11.0	SK021	
第2254-11	陶器	鉢	備前	18.2	—	—	SK021	
第2254-12	陶器	壺	備前	—	—	—	SK021	
第2264-1	瓦質土器	火鉢	在地	33.0	—	—	SK021	
第2264-2	瓦質土器	火鉢	在地	39.0	—	—	SK021	
第2274-1	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	—	SK022	
第2274-2	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SK022	
第2274-3	土師質土器	皿	在地	11.0	—	—	SK022	
第2274-4	瓦質土器	火鉢?	在地	33.0	—	—	SK022	
第2294-1	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	12.0	4.8	5.4	SK023	
第2294-2	青磁	皿	中国	11.5	—	—	SK023	
第2294-3	白磁?	皿	中国	11.6	4.5	2.8	SK023	

第9次調査区Ⅲ区遺物觀察表(土器・陶磁器類②)

押図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第22904	白磁 皿	中国	11.6	6.5	2.9	SK023		
第22905	青磁 釜	中国	—	12.0	—	SK023		
第22906	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	—	SK023		
第22907	京都系土師器 皿	在地	9.0	—	2.0	SK023		
第22908	京都系土師器 皿	在地	9.0	—	1.9	SK023		
第22909	京都系土師器 皿	在地	11.0	—	—	SK023		
第22910	京都系土師器 坏?	在地	12.0	—	—	SK023		
第22911	陶器 釜	備前	18.0	—	—	SK023		
第22912	瓦質土器 鉢	在地	31.0	—	5.7	SK023		
第22914	陶器 不明	備前	—	10.0	—	SK023		
第23101	京都系土師器 皿	在地	8.5	—	—	SK024		
第23102	京都系土師器 皿	在地	9.0	—	1.9	SK024		
第23103	京都系土師器 皿	在地	9.6	—	1.9	SK024		
第23104	京都系土師器 皿	在地	10.5	—	—	SK024		
第23105	京都系土師器 皿	在地	12.5	—	2.7	SK024		
第23106	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	—	SK024		
第23107	京都系土師器 皿	在地	13.6	—	2.4	SK024		
第23108	京都系土師器 皿	在地	14.0	—	—	SK024		
第23201	青花 皿	中国(景德鎮窯)	13.0	—	—	SK025		
第23202	京都系土師器 皿	在地	10.0	—	2.5	SK025		
第23203	京都系土師器 皿	在地	22.0	—	—	SK025		
第23401	京都系土師器 皿	在地	10.0	—	2.5	SK026		
第23402	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	—	SK026		
第23403	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	—	SK026		
第23404	京都系土師器 皿	在地	16.0	—	—	SK026		
第23601	京都系土師器 皿	在地	10.0	—	2.0	SK027		
第23602	京都系土師器 皿	在地	11.0	—	2.5	SK027		
第23603	京都系土師器 皿	在地	11.8	—	—	SK027		
第23604	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	—	SK027		
第23605	京都系土師器 皿	在地	15.0	—	—	SK027		
第23606	土師質土器 鉢	在地	37.0	—	—	SK027		
第23607	瓦質土器 火鉢	在地	41.0	37.0	—	SK027		
第23801	青花 皿	中国(漳州窯)	10.8	—	—	SK028		
第23802	瓦質土器 火鉢	在地	40.0	36.8	14.5	SK028		
第24001	青花 小鉢	中国	—	3.0	—	SK029		19
第24002	青花 皿	中国(景德鎮窯)	10.0	5.4	2.4	SK029		
第24003	青花 皿	中国(漳州窯)	13.0	—	—	SK029		
第24004	青花 碗	中国(漳州窯)	12.6	—	—	SK029		
第24005	青磁 碗	中国(龍泉窯)	—	6.0	—	SK029		
第24006	白磁 碗?	中国	—	6.2	—	SK029		
第24007	陶器 瓶	備前	—	6.6	—	SK029		
第24008	青磁 碗	中国(龍泉窯)	13.0	5.6	4.7	SK029		19
第24009	燒結陶器 德利	朝鮮王朝	—	13.0	—	SK029		
第24010	陶器 甕	備前	—	—	—	SK029		
第24011	陶器 漆鉢	備前	—	—	—	SK029		
第24012	陶器 漆鉢	備前	14.0	—	—	SK029		
第24013	陶器 漆鉢	備前	32.0	13.0	12.0	SK029		
第24014	瓦質土器 火鉢	在地	—	41.6	—	SK029		
第24101	陶器 甕	備前	—	—	—	SK029		
第24102	陶器 甕	備前	—	44.0	—	SK029		
第24103	陶器 甕	備前	—	42.0	—	SK029		
第24201	土師質土器 皿	在地	—	6.0	—	SK029		
第24202	瓦質土器 火鉢	在地	32.0	—	—	SK029		
第24203	京都系土師器 坏	在地	10.6	6.0	3.5	SK029		
第24204	京都系土師器 坏	在地	10.5	—	—	SK029		
第24205	京都系土師器 皿	在地	8.8	—	2.4	SK029		
第24206	京都系土師器 皿	在地	9.0	—	2.0	SK029		
第24207	京都系土師器 皿	在地	11.0	—	2.4	SK029		
第24208	京都系土師器 皿	在地	11.0	—	2.5	SK029		
第24209	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	2.5	SK029		
第24210	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	2.6	SK029		
第24211	京都系土師器 皿	在地	14.0	—	3.0	SK029		
第24401	青花 碗	中国(景德鎮窯)	14.0	—	—	SK030		
第24402	青花 皿	中国(景德鎮窯)	12.0	6.8	3.1	SK030		
第24403	青花 皿	中国(漳州窯)	—	4.8	—	SK030		
第24404	白磁 皿	中国	14.0	9.0	2.9	SK030		
第24405	白磁 皿	中国	14.0	9.0	2.9	SK030		
第24406	白磁 皿	中国	14.0	9.0	2.9	SK030		
第24407	白磁 皿	中国	14.0	6.6	3.3	SK030		
第24408	陶器 天目	瀬戸美濃	11.2	4.2	6.4	SK030		
第24409	青磁 鉢	中国(龍泉窯)	22.0	—	—	SK030		
第24410	京都系土師器 坏	在地	11.0	—	—	SK030		
第24411	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	2.4	SK030		
第24412	京都系土師器 皿	在地	14.0	—	2.5	SK030		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類③)

棟号No.	器種	生産地	注量(単位cm)			遺構名	備考	図録No.
			口径	底径	器高			
第244回13	陶器	鉢	備前	15.0	—	8.2	SK030	
第244回14	陶器	搦鉢	備前	—	14.0	—	SK030	
第247回1	白磁	皿	中国	10.6	—	—	SE031	
第247回2	緑釉陶器	小盃	不明	—	—	—	SE031	
第247回3	土師質土器	坏	在地	12.0	8.0	3.2	SE031	
第247回4	土師質土器	小皿	在地	8.8	7.0	0.9	SE031	
第247回5	土師質土器	小皿	在地	9.5	8.0	1.1	SE031	
第247回6	土師質土器	坏	在地	11.6	8.0	3.3	SE031	
第247回7	須恵器	甕	龜山焼?	—	—	—	SE031	
第247回8	土師質土器	鉢	在地	—	20.0	—	SE031	
第249回1	土師質土器	坏	在地	12.6	9.0	2.3	SE032	
第249回2	土師質土器	坏	在地	—	10.0	—	SE032	
第249回3	土師質土器	小皿	在地	8.0	6.6	1.6	SE032	
第249回4	瓦質土器	搦鉢	在地	23.0	—	—	SE032	
第250回1	青花	碗	中国(漳州窯)	—	5.0	—	SE033	井筒内
第250回2	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SE033	井筒内
第250回3	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SE033	井筒内
第250回4	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	—	SE033	井筒内
第250回5	京都系土師器	皿	在地	11.0	2.4	—	SE033	井筒内
第250回6	京都系土師器	皿	在地	11.5	2.1	—	SE033	井筒内
第250回7	京都系土師器	皿	在地	12.0	2.4	2.4	SE033	井筒内
第250回8	陶器	鉢	備前	5.6	—	—	SE033	井筒内
第250回10	京都系土師器	坏	在地	11.0	6.0	3.5	SE033	井筒内
第251回1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	SE033	井筒内
第251回2	京都系土師器	小皿	在地	5.7	—	1.6	SE033	井筒内
第251回3	京都系土師器	小皿	在地	6.0	—	1.8	SE033	井筒内
第251回4	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.1	SE033	井筒内
第251回5	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.5	SE033	井筒内
第251回6	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.3	SE033	井筒内
第251回7	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.5	SE033	井筒内
第251回8	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	2.5	SE033	井筒内
第251回9	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	2.5	SE033	井筒内
第251回10	京都系土師器	皿	在地	17.0	—	2.8	SE033	井筒内
第251回11	京都系土師器	皿	在地	17.0	—	2.1	SE033	井筒内
第253回1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	18.6	10.0	4.1	SE033	
第253回2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	4.0	—	SE033	
第253回3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	15.0	—	—	SE033	
第253回4	青磁	碗	中国(龍泉窯)	12.6	5.6	5.6	SE033	
第253回5	白磁	皿	中国	11.5	6.6	2.2	SE033	
第253回6	陶器	搦鉢	備前	25.0	—	—	SE033	
第253回7	陶器	搦鉢	備前	—	11.0	—	SE033	
第253回8	陶器	搦鉢	備前	30.0	13.0	13.4	SE033	
第253回9	陶器	茶入	備前	6.0	—	—	SE033	
第253回10	瓦質土器	鉢	在地	33.0	—	—	SE033	
第253回11	瓦質土器	鉢	在地	42.0	—	—	SE033	
第254回1	瓦質土器	火鉢	在地	44.0	41.0	14.8	SE033	
第255回1	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	2.0	SE033	
第255回2	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.2	SE033	
第255回3	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	SE033	
第255回4	京都系土師器	皿	在地	10.9	—	2.3	SE033	
第255回5	京都系土師器	皿	在地	10.7	—	2.3	SE033	
第255回6	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.4	SE033	
第255回7	京都系土師器	皿	在地	12.3	—	2.6	SE033	
第255回8	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.8	SE033	
第255回9	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.2	SE033	
第255回10	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.5	SE033	
第255回11	京都系土師器	皿	在地	16.2	—	3.3	SE033	
第257回1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.3	—	—	SX034	19
第257回2	陶器	碗	朝鮮王朝	—	—	—	SX034	19
第257回3	青花	碗	中国(漳州窯)	13.0	—	—	SX034	
第257回4	白磁	皿	中国	—	8.5	—	SX034	
第257回5	白磁	皿	中国	—	6.0	—	SX034	
第257回6	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.2	SX034	
第257回7	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	—	SX034	
第257回8	陶器	甕	備前	—	—	—	SX034	
第257回9	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	3.8	SX034	
第257回10	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SX034	
第257回11	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	SX034	
第257回12	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.2	SX034	
第257回13	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.6	SX034	
第257回14	京都系土師器?	皿	在地	19.0	—	—	SX034	
第257回15	土師質土器	鉢	在地	23.0	—	—	SX034	
第257回16	陶器	搦鉢	備前	28.8	—	—	SX034	
第257回17	陶器	不明	備前?	—	18.0	—	SX034	
第257回18	瓦質土器	鉢	在地	37.0	—	—	SX034	

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類④)

標図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図取No.
			口径	底径	器高			
第2571220	土師質土器 取瓶	在地	3.6	-	1.9	SX034		
第2571221	土師質土器 取瓶	在地	8.5	-	-	SX034		
第2571222	土師質土器 取瓶	在地	8.0	-	3.7	SX034		
第259121	青花 皿	中国(漳州窯)	12.0	-	-	SX035		
第259122	青磁 碗	中国(龍泉窯)	-	5.0	-	SX035		
第259123	土師質土器 小皿	在地	7.3	6.5	1.3	SX035		
第259124	土師質土器 皿	在地	-	8.0	-	SX035		
第259125	土師質土器 皿	在地	12.6	8.6	2.3	SX035		
第259126	土師質土器 皿	在地	11.0	8.0	2.5	SX035		
第259127	京都系土師器 皿	在地	10.8	-	2.2	SX035		
第259128	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	2.0	SX035		
第259129	京都系土師器 皿	在地	10.5	-	2.1	SX035		
第259130	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	-	SX035		
第259131	京都系土師器 皿	在地	11.4	-	2.4	SX035		
第259132	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	-	SX035		
第259133	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	2.3	SX035		
第259134	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	2.3	SX035		
第259135	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	2.1	SX035		
第259136	京都系土師器 皿	在地	12.0	-	2.3	SX035		
第259137	京都系土師器 皿	在地	14.0	-	2.2	SX035		
第259138	京都系土師器 皿	在地	14.0	-	2.2	SX035		
第259139	京都系土師器 皿	在地	13.0	-	2.2	SX035		
第259140	京都系土師器 皿	在地	14.0	-	2.2	SX035		
第259141	京都系土師器 皿	在地	9.6	-	-	SX035	1層下層	
第259142	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	-	SX035	1層下層	
第259143	土師質土器 皿	在地	12.0	6.0	3.5	SX035	1層下層	
第259144	京都系土師器 皿	在地	16.0	-	2.3	SX035	1層下層	
第259145	陶器 掃鉢	備前	32.0	-	-	SX035		
第259146	陶器 掃鉢	備前	21.0	12.0	9.0	SX035		
第259147	土師質土器 甃	在地	23.0	-	-	SX035		
第259148	陶器 瓶	備前	-	-	4.0	SX035		
第259149	瓦質土器 火鉢	在地	35.0	27.0	6.5	SX035		
第259150	陶器 甃	備前	-	-	-	SX035		
第260121	京都系土師器 皿	在地	8.0	-	2.1	SX035	下層(2層)	
第260122	京都系土師器 皿	在地	10.6	-	-	SX035	下層(2層)	
第260123	土師質土器 皿	在地	-	9.0	-	SX035	下層(2層)	
第260124	京都系土師器 皿	在地	13.0	-	2.0	SX035	下層(2層)	
第260125	京都系土師器 皿	在地	14.0	-	2.1	SX035	下層(2層)	
第260126	京都系土師器 皿	在地	15.0	-	-	SX035	下層(2層)	
第260127	陶器 掃鉢	備前	33.0	-	-	SX035	下層(2層)	
第260128	土師質土器 鉢	在地	27.0	-	-	SX035	下層(2層)	
第262121	白磁 皿	中国	13.8	-	-	SP049	口裏	
第262122	陶器 掃鉢	備前	-	-	-	SP041		
第262123	陶器 水屋甃	備前	-	-	-	SP043		
第262124	瓦質土器 鉢	在地	25.0	-	-	SP079		
第262125	瓦質土器 水屋甃	在地	33.0	-	-	SP067		
第262126	陶器 水屋甃	備前	-	-	-	SP064		
第263121	土師質土器 皿	在地	-	6.0	-	SP074		
第263122	京都系土師器 皿	在地	8.0	-	-	SP040		
第263123	京都系土師器 皿	在地	9.0	-	-	SP067		
第263124	京都系土師器 皿	在地	9.4	-	-	SP054		
第263125	京都系土師器 皿	在地	9.5	-	-	SP054		
第263126	京都系土師器 皿	在地	9.5	-	2.1	SP063		
第263127	京都系土師器 皿	在地	10.0	-	-	SP078		
第263128	京都系土師器 皿	在地	10.0	-	-	SP078		
第263129	京都系土師器 皿	在地	10.4	-	-	SP084		
第263130	京都系土師器 坏	在地	11.0	-	-	SP078		
第263131	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	-	SP083		
第263132	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	-	SP071		
第263133	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	-	SP067		
第263134	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	-	SP067		
第263135	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	-	SP047		
第263136	京都系土師器 皿	在地	11.0	-	2.9	SP052		
第263137	京都系土師器 皿	在地	11.2	-	-	SP067		
第263138	京都系土師器 皿	在地	11.4	-	2.4	SP049		
第263139	京都系土師器 皿	在地	11.5	-	-	SP055		
第263140	京都系土師器 皿	在地	11.5	-	-	SP063		
第263141	京都系土師器 皿	在地	12.0	-	-	SP074		
第263142	京都系土師器 皿	在地	12.0	-	-	SP067		
第263143	京都系土師器 皿	在地	12.0	-	-	SP085		
第263144	京都系土師器 皿	在地	12.0	-	-	SP076		
第263145	京都系土師器 皿	在地	12.2	-	2.6	SP058		
第263146	京都系土師器 皿	在地	12.0	-	2.2	SP057		
第263147	京都系土師器 皿	在地	12.0	-	-	SP052		
第263148	京都系土師器 皿	在地	12.5	-	-	SP048		

遺物観察表24 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑤)

採出No.	器種	生産地	法量 (単位:cm)		遺構名	備考	図録No.	
			口径	底径				
第263229	京都系土師器	皿	在池	12.6	—	—	SP064	
第263230	京都系土師器	皿	在池	13.0	—	2.4	SP082	
第263231	京都系土師器	皿	在池	13.0	—	—	SP049	
第263232	京都系土師器	皿	在池	13.0	—	—	SP048	
第263233	京都系土師器	皿	在池	13.2	—	—	SP053	
第263234	京都系土師器	皿	在池	14.2	—	—	SP067	
第263235	京都系土師器	皿	在池	14.0	—	2.3	SP046	
第263236	京都系土師器	皿	在池	17.8	—	—	SP074	
第265221	陶器	碗	朝鮮王朝	—	5.6	—	51層	
第265222	陶器	盃	中国	—	12.0	—	51層	褐釉
第266221	京都系土師器	小皿	在池	5.2	—	1.6	48層	
第266222	瓦質土器	鉢	在池	40.0	—	—	48層	
第267221	青花	水注	中国(景德鎮窯)	—	—	—	36~39層	
第267222	青磁	盤	中国(龍泉窯)	29.0	14.6	—	36~39層	
第267223	磁器	碗	中国	14.0	—	—	36~39層	
第267224	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	—	—	36~39層	
第267225	青花	皿	中国(漳州窯)	—	4.4	—	36~39層	
第267226	青花	皿	中国(漳州窯)	12.2	—	—	36~39層	
第267227	青花	皿	中国(景德鎮窯)	15.0	—	—	36~39層	
第267228	青花	皿	中国(漳州窯)	13.0	6.0	3.4	36~39層	
第267229	磁器	皿	中国南部	—	3.5	—	36~39層	碧峯釉
第267230	磁器	搦鉢	備前	20.5	8.5	6.0	36~39層	
第267231	瓦質土器	鉢	在池	25.0	12.6	8.9	36~39層	
第267232	瓦質土器	火鉢	在池	—	26.0	—	36~39層	
第267233	陶器	搦鉢	備前	33.0	—	—	36~39層	
第268221	陶器	大目	瀬戸美濃	12.0	—	—	34層	
第268222	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	34層	
第269221	青花	盤	中国(漳州窯)	—	12.5	—	19~21層	
第269222	青花	皿	中国(漳州窯)	—	2.5	—	19~21層	
第269223	青花	皿	中国(漳州窯)	12.5	7.4	2.7	19~21層	
第269224	青花	皿	中国(漳州窯)	18.0	—	—	19~21層	
第269225	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	7.5	—	19~21層	
第269226	青花	香炉	中国(景德鎮窯)	—	4.4	—	19~21層	
第269227	磁器	碗	中国	—	—	—	19~21層	五彩
第269228	陶器	鉢	中国南部?	—	5.5	—	19~21層	
第269229	京都系土師器	皿	在池	10.8	—	1.7	19~21層	取瓶として再利用
第269230	陶器	茶入	備前	—	—	—	19~21層	
第269231	瓦質土器	羽釜	在池	—	—	—	19~21層	
第270221	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.0	6.8	2.6	25層	
第270222	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	8.0	3.0	25層	
第270223	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	8.0	2.8	25層	
第270224	青花	碗	中国(漳州窯)	12.0	—	—	25層	
第270225	青花	碗?	中国(漳州窯)	—	5.6	—	25層	
第270226	青花	皿	中国(漳州窯)	12.0	6.8	2.6	25層	
第270227	磁器	碗?	中国南部	—	—	—	25層	碧峯釉
第270228	磁器	水注	中国	—	—	—	25層	瑠璃釉
第270229	磁器	菊皿	中国南部	—	—	—	25層	碧峯釉
第270230	青磁	皿	中国(龍泉窯)	10.6	3.0	2.7	25層	
第270231	青花	鉢	中国(漳州窯)	28.6	—	—	25層	
第270232	磁器	鉢?	中国南部	—	—	—	25層	碧峯釉
第270233	陶器	鉢	朝鮮王朝	—	—	—	25層	
第270234	陶器	大目	瀬戸美濃	—	4.2	—	25層	象嵌技法
第270235	白磁	皿	中国	11.0	—	—	25層	
第270236	白磁	皿	中国	—	10.0	—	25層	
第270237	白磁	皿	中国	12.4	7.5	2.6	25層	
第270238	白磁	皿	中国	11.6	—	—	25層	
第270239	白磁	皿	中国	11.2	7.0	3.0	25層	
第270240	陶器	丸皿	瀬戸美濃	10.0	—	—	25層	
第270241	磁器	皿	不明	11.0	—	—	25層	
第271221	燒締陶器	鉢	中国南部	25.0	—	—	25層	
第271222	土師質土器	皿	在池	9.0	5.0	1.9	25層	
第271223	京都系土師器	皿	在池	9.2	—	1.9	25層	
第271224	陶器	搦鉢	備前	28.0	—	—	25層	灯明皿
第271225	陶器	搦鉢	備前	28.0	13.0	14.8	25層	
第271226	陶器	盃	中国南部	—	—	—	25層	褐釉
第273221	青花	碗	中国(景德鎮窯)	12.2	4.6	5.9	10~25層	
第273222	青花	碗	中国(景德鎮窯)	12.0	—	—	10~25層	
第273223	青花	碗	中国(漳州窯)	—	4.8	—	10~25層	
第273224	青花	皿	中国(漳州窯)	—	5.0	—	10~25層	
第273225	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	7.2	—	10~25層	
第273226	青花	皿	中国(漳州窯)	—	5.6	—	10~25層	
第273227	陶器	皿	肥前	12.0	—	—	10~25層	唐津系溝線皿、1600~1630年
第273228	青花	碗	中国(漳州窯)	—	4.6	—	10~25層	
第273229	白磁	碗	朝鮮王朝	—	4.6	—	10~25層	
第273230	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.5	—	10~25層	

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類⑥)

押図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第273811	白磁	碗	中国	—	4.6	—	10~25層	
第273812	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	6.0	—	10~25層	
第273813	青磁	瓶	中国(龍泉窯)	—	—	—	10~25層	
第273814	青磁	瓶	中国(龍泉窯)	—	—	—	10~25層	
第273815	青花	皿	中国(漳州窯)	12.0	7.0	2.9	10~25層	
第273816	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.0	6.8	2.5	10~25層	
第273817	青花	皿	中国(漳州窯)	14.4	9.0	3.8	10~25層	
第273818	青花	碗	中国(景德鎮窯)	13.2	8.0	2.6	10~25層	
第273819	青花	皿	中国(漳州窯)	13.0	7.0	2.5	10~25層	
第273820	白磁	皿	白磁	12.0	—	—	10~25層	
第273821	白磁	皿	白磁	12.4	7.0	3.0	10~25層	
第273822	白磁	皿	白磁	13.4	—	—	10~25層	
第273823	白磁	皿	白磁	16.4	8.5	3.8	10~25層	
第273824	陶器	瓶	中国南部	—	6.8	—	10~25層	緑釉
第273825	陶器	瓶	中国南部	—	6.0	—	10~25層	緑釉
第273826	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	6.0	2.4	3.9	10~25層	
第273827	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	—	2.2	—	10~25層	
第273828	陶器	瓶	中国南部	—	—	—	10~25層	緑釉
第273829	陶器	瓶	中国南部	4.2	—	—	10~25層	緑釉
第273830	磁器	小皿	中国南部	—	4.8	—	10~25層	翡翠釉
第273831	陶器	大目	瀬戸美濃	12.0	—	—	10~25層	
第273832	青花	皿	中国(漳州窯)	—	3.6	—	10~25層	
第273833	白磁	小杯	伊万里	—	2.4	—	10~25層	1650~1650年
第273834	青花	小志	中国(漳州窯)	—	—	—	10~25層	20
第273835	青磁	瓶	中国(龍泉窯)	—	—	—	10~25層	
第273836	陶器	壺	不明	—	5.0	—	10~25層	
第27481	陶器	壺	備前	—	—	—	10~25層	
第27482	陶器	卮皿	瀬戸美濃	—	—	—	10~25層	
第27483	焼締陶器	小志	中国?	5.2	—	—	10~25層	20
第27484	陶器	德利	備前	—	6.0	—	10~25層	
第27485	陶器	搦鉢	備前	26.0	—	—	10~25層	
第27486	陶器	搦鉢	備前	22.0	10.0	9.4	10~25層	
第27487	焼締陶器	德利	朝鮮王朝	—	15.0	—	10~25層	
第27488	土師貢土器	取皿	在地	6.0	—	2.8	10~25層	
第27681	青花	皿	中国(漳州窯)	—	11.1	—	7層	
第27682	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	7.0	2.3	7層	
第27683	青花	皿	中国(漳州窯)	15.0	—	—	7層	
第27684	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	9.6	—	7層	
第27685	青花	盤	中国(景德鎮窯)	—	19.0	—	7層	
第27686	青花	皿	中国(漳州窯)	19.0	—	—	7層	
第27687	青花	皿	中国(漳州窯)	—	—	—	7層	
第27688	青花	皿	中国(漳州窯)	—	5.8	—	7層	
第27689	青花	皿	中国(景德鎮窯)	11.4	5.2	3.0	7層	
第276810	陶器	皿	瀬戸美濃?	15.0	—	—	7層	
第276811	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	8.0	3.1	7層	
第276812	青磁	菊皿	中国(龍泉窯)	10.0	—	—	7層	
第276813	白磁	皿	中国	—	7.5	—	7層	
第276814	白磁	皿	中国	12.6	5.2	2.1	7層	
第276815	白磁	皿	中国	14.0	—	—	7層	
第276816	磁器	小杯	不明	5.8	3.0	4.0	7層	
第276817	白磁	水注	中国	—	—	—	7層	
第276818	磁器	小皿	中国南部	—	—	—	7層	翡翠釉
第276819	青磁	香炉	中国(龍泉窯)	—	—	—	7層	
第276820	磁器	碗	中国	—	4.0	—	7層	
第276821	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	—	2.8	—	7層	
第276822	白磁	皿	中国	13.0	8.8	3.0	7層	
第276823	青磁	碗	中国	16.0	—	—	7層	
第276826	青磁	皿	中国	11.5	6.0	2.8	7層	
第27781	陶器	皿	肥前(唐津)	—	5.2	—	7層	
第27782	陶器	皿	肥前(唐津)	—	4.2	—	7層	
第27783	陶器	壺	不明	—	—	—	7層	
第27784	陶器	角皿	上野高取	—	—	—	7層	
第27785	陶器	角皿	志野	—	—	—	7層	1590~1610年
第27786	陶器	大目	瀬戸美濃	—	4.8	—	7層	
第27787	陶器	皿	瀬戸美濃	—	8.0	—	7層	
第27788	陶器	鉢	不明	14.0	—	—	7層	
第27789	食付	壺	不明	4.2	—	—	7層	瑠璃釉 1650~1660年代
第277810	須臾器	壺	不明	—	—	—	7層	
第277811	陶器	小志	備前	—	—	—	7層	
第277812	陶器	碗	朝鮮王朝	—	4.6	—	7層	
第277813	陶器	茶入	肥前(唐津)?	—	5.0	—	7層	
第277814	陶器	瓶	不明	—	7.2	—	7層	
第277815	陶器	瓶	備前	—	—	—	7層	
第277816	陶器	建水?	備前	—	8.6	—	7層	
第277818	陶器	小志	備前	9.4	—	—	7層	

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類⑦)

押図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図取No.
			口径	底径	器高			
第277819	陶器 鉢	備前	17.0	—	—	7層		
第277820	陶器 搥鉢	備前	26.5	—	—	7層		
第277821	陶器 鉢	備前	14.0	—	—	7層		
第277822	陶器 瓶	不明	—	—	—	7層		
第277823	陶器 搥鉢	備前	28.0	—	—	7層		
第277824	陶器 搥鉢	備前	—	11.0	—	7層		
第277825	陶器 搥鉢	備前	—	12.0	—	7層		
第27881	青花 碗	中国(景德鎮窯)	10.0	—	—	Ⅲ区		
第27882	宋付 碗	肥前	—	4.0	—	Ⅲ区		
第27883	青花 皿	中国(景德鎮窯)	—	7.5	—	Ⅲ区		
第27884	青花 皿	中国(漳州窯)	14.6	—	—	Ⅲ区		
第27885	青花 皿	中国(漳州窯)	13.2	—	—	Ⅲ区		
第27886	磁器 皿	中国	—	—	—	Ⅲ区	五彩	21
第27887	磁器 皿	中国	—	—	—	Ⅲ区	五彩	21
第27888	磁器 菊皿	中国南部	—	—	—	Ⅲ区	翡翠軸	
第27889	磁器 菊皿	中国南部	6.0	—	—	Ⅲ区	翡翠軸	
第27890	磁器 菊皿	中国南部	6.6	—	—	Ⅲ区	翡翠軸	
第27891	磁器 小盃	不明	—	2.4	—	Ⅲ区		
第27892	磁器 小杯	不明	5.6	—	—	Ⅲ区		
第27893	宋付 小杯	伊万里	6.2	—	—	Ⅲ区		
第27894	青磁 碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	Ⅲ区		
第27895	青磁 香炉	中国(龍泉窯)	—	6.0	—	Ⅲ区		
第27896	陶器 向付	志野	—	—	—	Ⅲ区		
第27897	青花 器台	中国(景德鎮窯)	—	—	—	Ⅲ区		21
第27898	青磁 器台	中国(龍泉窯)	—	—	—	Ⅲ区		21
第27899	青磁 碗	中国(龍泉窯)	—	5.2	—	Ⅲ区		
第27900	白磁 皿	中国	12.0	7.0	3.0	Ⅲ区		
第27901	白磁 皿	中国	12.8	7.0	3.2	Ⅲ区		
第27902	白磁 碗	中国南部	—	7.0	—	Ⅲ区		
第27903	陶器 壺	中国南部	—	11.4	—	Ⅲ区		
第27904	陶器 皿	肥前(唐津)	13.0	—	—	Ⅲ区	褐軸	
第27905	陶器 香炉?	不明	5.0	—	—	Ⅲ区	清緑皿 1600~1630年	
第27906	青花 皿	中国(景德鎮窯)	—	7.2	—	Ⅲ区		
第27907	磁器 不明	中国	—	—	—	Ⅲ区		
第27908	陶器 皿	瀬戸美濃	—	5.6	—	Ⅲ区		
第27909	陶器 碗	瀬戸美濃	—	6.6	—	Ⅲ区		
第27910	陶器 天目	瀬戸美濃	11.2	—	—	Ⅲ区		
第27911	陶器 碗	肥前(唐津)	—	4.4	—	Ⅲ区		1590~1610年
第27912	陶器 碗	朝鮮王朝	12.6	—	—	Ⅲ区		
第27913	陶器 碗	朝鮮王朝	13.0	—	—	Ⅲ区		
第27914	陶器 皿	肥前(唐津)	—	5.0	—	Ⅲ区		
第27915	陶器 碗	肥前(唐津)	—	6.0	—	Ⅲ区		胎土目 1590~1610年
第27916	陶器 瓶	備前	—	8.0	—	Ⅲ区		
第27917	陶器 鉢	備前	—	9.6	—	Ⅲ区		
第27918	土師質土器 取瓶	在地	4.0	—	2.2	Ⅲ区		
第27919	陶器 搥鉢	備前	—	12.4	—	Ⅲ区		
第27920	陶器 壺	中国南部	—	19.6	—	Ⅲ区		褐軸

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土製品)

押図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図取No.
				口径	幅	長さ	高さ				
第257823	編羽口	土製	全体	3.5	6.0	長さ	5.8	—	SX034		
第274819	編羽口	土製	破片	4.8	4.2	長さ	—	—	10~25層		
第274820	土罐	土製	全体	1.0	4.8	長さ	—	—	10~25層		
第276824	人形	磁器	全体	高さ	6.0	幅	2.4	—	7層	20	
第276825	人形	土製品	破片	高さ	3.8	幅	4.4	—	7層		
第277817	土罐	土製品	全体	2.2	長さ	6.6	—	—	7層	20	
第278839	土罐	土製品	全体	1.2	長さ	5.5	—	—	Ⅲ区		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(石製品)

押図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.			
				厚さ	幅	長さ	径							
第21583	3	砥石	堆積岩	破片	厚さ	5.5	幅	5.5	長さ	8.7	—	SK013		
第21683	7	砥石	堆積岩	破片	厚さ	5.5	幅	3.8	長さ	7.5	—	SK014		
第21683	8	石臼	安山岩	破片	径	42.0					—	SK014		
第22683	4	鑿羽口		破片							—	SK021		
第24283	15	茶臼	輝緑岩	破片							—	SK029	赤間石	
第24283	16	石臼	安山岩	破片							—	SK029		
第24483	15	砥石	砂岩	破片	厚さ	4.0	幅	4.4	長さ	3.9	—	SK030		
第25483	2	石臼	安山岩	破片							—	SE033		
第25783	19	石臼	安山岩	破片	径	30.0					—	SX034		
第26083	10	凹み石	凝灰岩	破片							—	SX035		
第26283	2	石臼	安山岩	破片							—	SP054		
第26983	12	環状石	磐石	全体	径	4.2	厚さ	1.5			9.2	19-21層	用途不明	
第26983	13	砥石	頁岩	楕	楕	6.3	厚さ	0.8			—	19-21層		
第17183	7	硯	輝緑岩	破片	厚さ	1.4					—	25層	赤間石	
第17183	8	砥石	結晶片岩	破片	厚さ	1.9	幅	4.5	長さ	12.2	—	25層		
第19183	9	砥石	結晶片岩	破片	厚さ	1.8	幅	4.1	長さ	10.3	130.6	25層		
第27483	11	砥石	石製品	破片	幅	2.6	長さ	3.2			5.7	10-25層		
第27483	12	砥石	結晶片岩	破片	幅	1.9	長さ	9.4			29.7	10-25層		
第27483	13	硯	泥岩	破片	厚さ	1.1	幅	5.5	長さ	10.8	100.310	10-25層		
第27483	14	茶臼	安山岩	破片							—	10-25層		
第27583	3	不明	凝灰岩	破片	高さ	9.0					—	7-25層		
第27983	6	不明	頁岩	全体	長さ	4.3	径	2.5			—		Ⅲ区	
第27983	7	五輪埴	穿崖輪	凝灰岩	全体	高さ	21.5	径	17.0		—		Ⅲ区	
第27983	8	石臼	安山岩	破片	径	19.0					—		Ⅲ区	

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(金属製品)

押図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.			
				厚さ	幅	長さ	径							
第22583	13	不明	鉄製	破片	厚さ	0.3	幅	1.3	長さ	10.2	—	SK021		
第22983	13	不明	青銅製	破片	厚さ	0.5	幅	2.5	長さ	3.8	—	SK023		
第22983	15	不明	鉄製	破片	厚さ	0.5	幅	1.3	長さ	10.0	—	SK023		19
第26483	1	分銅	銅製	全体	高さ	0.8	径	1.6			16.02	SP044	太鼓型	19
第26483	2	分銅	銅製	全体	縦	3.3	横	2.4	厚さ	1.5	69.35	SP044	歯型	
第27283	1	メダイ?	銅製	全体	縦	1.9	横	1.2	厚さ	0.4	4.10	25層		
第27283	2	鉄砲弾	鉛製	全体	径	1.2					11.90	25層		
第27283	3	弾	銅製	全体	高さ	2.8	径	2.8			87.12	25層		20
第27583	1	不明	青銅製	全体	高さ	2.1	径	14.5			—	7-25層		
第27983	1	小柄	青銅製	柄のみ	長さ	8.4	幅	1.3	厚さ	0.4	—		Ⅲ区	21
第27983	2	鏡	青銅製	全体	長さ	7.5	幅	0.9	厚さ	0.5	—		Ⅲ区	21
第27983	3	鏡	青銅製	破片	長さ	6.6	幅	1.0	厚さ	0.9	—		Ⅲ区	21
第27983	4	不明	青銅製	破片							—		Ⅲ区	21

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(瓦)

押図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.		
				長さ	幅	厚さ	径					
第22283	3	雁形瓦	破片	長さ	28.5	幅	—	厚さ	1.6	SK019		
第22683	3	丸瓦	破片	長さ	16.5	幅	14.5	厚さ	3.0	SK021		
第22983	16	半瓦	完形	径	7.2	厚さ	2.2			SK023		門板状加工品
第24283	12	軒平瓦	破片							SK029		
第24283	13	丸瓦	破片	厚さ	2.1					SK029		
第24283	14	雁形瓦	破片	厚さ	2.0					SK029		
第25083	9	雁形瓦	破片	厚さ	2.1					SE033		
第25483	3	雁形瓦	破片	厚さ	2.5					SE033		
第25483	4	丸瓦	破片	厚さ	2.6					SE033		
第26083	9	軒平瓦	破片	厚さ	2.5					SX035		
第26283	6	雁形瓦	破片	厚さ	2.5					SP058		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(その他)

押図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.	
				長さ	幅	厚さ	径					
第27583	2	不明	ガラス	破片						7-25層		
第27983	5	不明	ガラス	破片						Ⅲ区		21

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(銭貨)

種図No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	遺構名	備考	図版 No.
第28000	不明	不明	不明			不明	SX035		
第280001	天聖元寶	1023	北宋			真書	7層		
第280002	淳化元寶	990	北宋	2.3	2.4	真書	7層		
第280003	洪武通寶	1368	明			真書	25層		
第280004	紹聖元寶	1094	北宋	1.9	2.4	行書	7層		
第280005	寬永通寶	1636	日本	2.4	2.4	真書	7層	古寛永	
第280006	元豐通寶	1078	北宋	2.1	2.4	篆書	Ⅲ区		
第280007	政和通寶	1111	北宋	2.8	2.4	篆書	7層		
第280008	皇宋通寶?	1038	北宋			篆書	51層		
第280009	元豐通寶	1078	北宋	2.1	2.4	篆書	Ⅲ区		
第280010	元豐通寶	1078	北宋	2.9	2.4	行書	Ⅲ区		
第280011	元豐通寶	1078	北宋		2.4	篆書	10~25層		
第280012	不明	不明	不明			不明	25層		
第280013	不明	不明	不明			不明	19層		
第280014	熙寧重寶	1071	北宋	5.8	3.1	真書	Ⅲ区	折二銭	

写 真 图 版



第22次調査区 北から



第22次調査区 東から



SD202



SD202土層



SK008



SK013



SK018



SK024



SK029



SK040



SK069



SK100



SK109



SK175



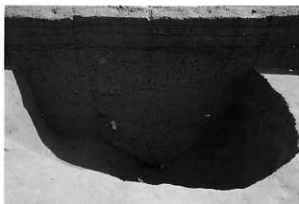
SK200



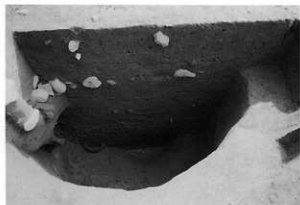
SK243



SE007 増埧 (取瓶) 出土状況



SE007



SE010



SE012



SE021・SE242



SE021・SE242



SE242 井筒



SE201



SE201



SP160



SX004



SX005



SX006



SX006



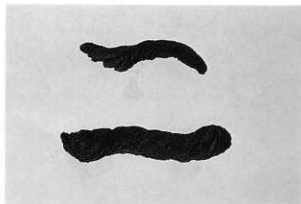
SX041



SX01



SK008 出土銅製柄杓 (第16図1参照)



SK040 出土布 (第33図2参照)



SE007 出土埴塼 (取瓶) (第65図参照)

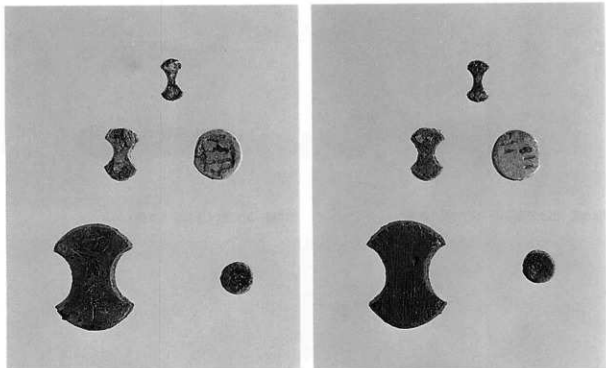


SE012 出土鉛製品 (第72図11参照)



SX006 出土油煙墨 (第89図53参照)

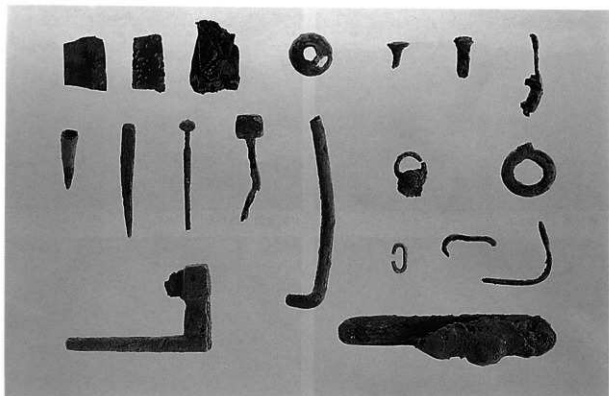




分銅 (上段 SP160 [第91図] 中段 SD009 [第8図10・11] 下段 包含層出土 [第111図20・21])



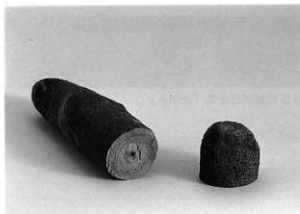
包含層出土埴塼 (取瓶) (第110図1~30参照)



包含層出土銅製品 (第111図 1～22参照)



包含層出土ガラス・水晶 (第111図23～26参照)



トレンチ出土遺物 (第117図 3 参照)



II区全景 (北から)



II区全景 (西から)



II区完掘状態全景 (東から)



II区完掘状態全景 (西から)



II区完掘状態全景 (北から)



II区SD001-3 (西から)



II区SD001-1 (西から)



II区SK003



II区SK003完掘状態



II区SK004



II区SK004完掘状態



II区SK005



II区SK005完掘状態



II区SK007



II区SK008



II区SK009



II区SK010



II区SK011



II区SK013・SK014



II区SK013



II区SK014



II区SK022



II区SK023



II区SK022・SK023完掘状態



II区SK024



II区SE028



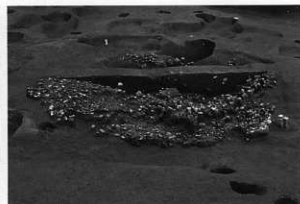
II区SE028



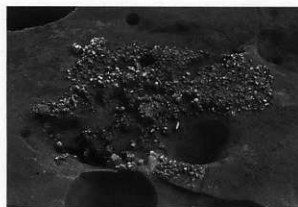
II区SE029



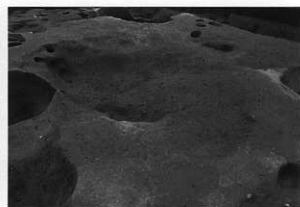
II区SX030



II区SX033



II区SX033



II区SX033完掘状態



III区全景 (東から)



III区完掘状態全景 (東から)



Ⅲ区完掘状態全景 (東から)



Ⅲ区SK011



Ⅲ区SK012



Ⅲ区SK013



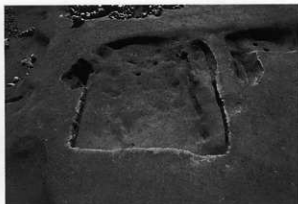
Ⅲ区SK015



Ⅲ区SK019・SK020



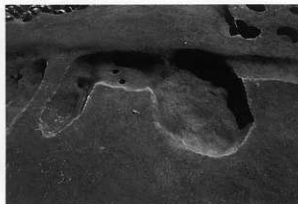
III区SK021



III区SK021完掘状態



III区SK023



III区SK023完掘状態



III区SK024



III区SK026



III区SK027



III区SK029 (北から)



Ⅲ区SK029 (西から)



Ⅲ区SK029完掘状態 (北から)



Ⅲ区SK030



Ⅲ区SE031



Ⅲ区SE032



Ⅲ区SE033集石検出状態 (北西から)



Ⅲ区SE033集石検出状態 (北から)



Ⅲ区SE033井筒内遺物出土状態



Ⅲ区SE033半載状態 (南から)



Ⅲ区SE033完掘状態 (北から)



Ⅲ区SX034



Ⅲ区SX035



Ⅱ区SD001-1・2出土遺物
(第126図参照)

126-5



Ⅱ区SD002出土遺物
(第129図参照)

129-13



Ⅱ区SK004出土遺物
(第134図参照)

134-6



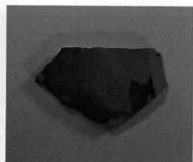
Ⅱ区SK005出土遺物 (第138図参照)

138-8



Ⅱ区SK006出土遺物 (第139図参照)

139-11

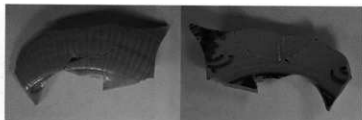


139-4



153-1

II区SK013出土遺物 (第153図参照)



157

II区SK018出土遺物 (第157図参照)

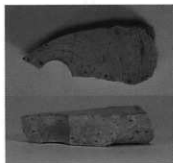


171

II区SE028出土遺物 (第171図参照)



174-2



174-5



174-7

II区SX030出土遺物 (第174図参照)



187-3

II区47層出土遺物 (第187図参照)



187-8

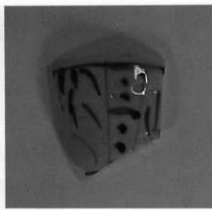


188-19

II区45層出土遺物
(第188図参照)



191-1



191-11

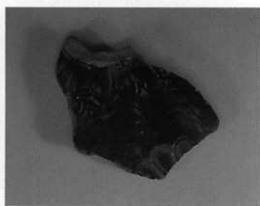


192-21

II区7層出土遺物 (第191・192図参照)



193-3



193-10

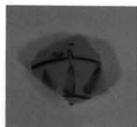


193-18



194-10

II区出土遺物 (第193・194図参照)



225-1



225-9

Ⅲ区SK021出土遺物 (第225図参照)



229-15

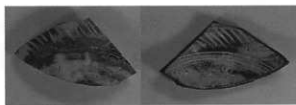
Ⅲ区SK023出土遺物 (第229図参照)



257-1



240-1



257-2

Ⅲ区SX034出土遺物 (第257図参照)



240-8

Ⅲ区SK029出土遺物 (第240図参照)



264-1

Ⅲ区SP044出土遺物
(第264図参照)



269-7



269-10

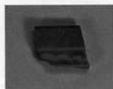
Ⅲ区19~21層出土遺物 (第269図参照)



270-1



270-6



270-13



272-3

Ⅲ区25層出土遺物 (第270・272図参照)



273-1



273-34



276-25



274-3

Ⅲ区10~25層出土遺物 (第273・274図参照)

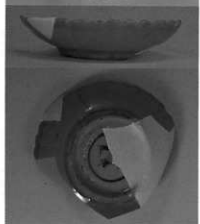


276-24

Ⅲ区7層出土遺物 (第276図参照)



276-26

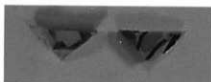


276-26

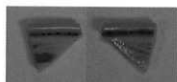


277-11

Ⅲ区7層出土遺物
(第276・277図参照)



278-6



278-7



278-18



279-1



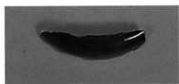
278-17



279-2



279-3



279-5

Ⅲ区出土遺物 (第278・279図参照)

報告書抄録

ふりがな	ぶんごふないちゅうせいおおともふないまちあとだいじゅうじ・だいじゅうじ・だいじゅうじ・だいじゅうじ・だいじゅうじ・だいじゅうじ・だいじゅうじ							
書名	豊後府内4-中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区-							
副書名	一般国道10号古国府広幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	(2)							
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	坂本嘉弘・友岡信彦・原田昭一・植島隆二・吉田寛・後藤晃一							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中世大友府内町跡第9次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 35"	131° 37' 17"	2000年4月～ 2001年10月	650	一般国道10号 古国府広幅事業
中世大友府内町跡第12次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 39"	131° 37' 17"	2001年5月～ 2002年3月	700	一般国道10号 古国府広幅事業
中世大友府内町跡第18次西調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 37"	131° 37' 17"	2001年11月～ 2002年3月	450	一般国道10号 古国府広幅事業
中世大友府内町跡第18次東調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 37"	131° 37' 17"	2002年5月～ 2003年3月	700	一般国道10号 古国府広幅事業
中世大友府内町跡第22次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 36"	131° 37' 17"	2002年7月～ 2003年3月	600	一般国道10号 古国府広幅事業
中世大友府内町跡第28次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 37"	131° 37' 17"	2003年5月～ 2003年12月	480	一般国道10号 古国府広幅事業
中世大友府内町跡第48次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 40"	131° 37' 17"	2004年12月～ 2006年3月	70	一般国道10号 古国府広幅事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中世大友府内町跡第9次調査区	包蔵地 ほか	中世	溝・土坑・井戸・柱穴	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・瓦・銅銭・分銅				
中世大友府内町跡第12次調査区	包蔵地 ほか	中世	礎石建物・井戸・柱穴 道路・側溝	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 銅銭・分銅・大型土製品				
中世大友府内町跡第18次西調査区	包蔵地 ほか	中世	溝・土坑・井戸・柱穴・ 道路	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・瓦・銅銭・分銅				
中世大友府内町跡第18次東調査区	包蔵地 ほか	中世	溝・土坑・井戸・柱穴	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・瓦・銅銭・分銅				
中世大友府内町跡第22次調査区	包蔵地 ほか	中世	土坑・井戸・柱穴・道路	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 油埴壺・砥石・取皿・銅銭・分銅				
中世大友府内町跡第28次調査区	包蔵地 ほか	中世	溝・土坑・井戸・柱穴・ 道路	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・取皿・銅銭・油埴壺・瓦				
中世大友府内町跡第48次調査区	包蔵地 ほか	中世	道路・側溝・井戸・土坑	コンテ・分銅・銅銭・陶磁器・土 師質土器・瓦質土器・石臼				
要約	14世紀以降の中世の都市遺跡の発掘調査を行った。特に、16世紀中葉～後葉以降に遺構・遺物が集中し、戦国時代の府内の景観をあらわした「府内古園」にみえる大友氏館正面の第2南北街路およびそれに面した「桜町」に相当する町屋群の様相が明らかにできた。鑑別と考えられるビット群をはじめ、土坑・側溝・溝・井戸などの遺構や、中国大陸からもたらされた陶磁器類、分銅・権・鍛冶関連遺物、ガラス製品など、当時の「桜町」周辺の生活の様子をうかがい知れる良好な遺物群が数多く確認できた。							

豊 後 府 内 4

中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区
一般国道10号古園府拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告第9集
(第3分冊)

平成18年3月31日

編集 大分県教育庁埋蔵文化財センター

〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
TEL (097) 597-5675

発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター

〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
TEL (097) 597-5675

印刷 大野印刷有限公司

〒874-0902 別府市青山町1-7
TEL (0977) 21-0505
